THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十一月號

第三十年第十二號　第三百廿四號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



成功の手は健腦の人に下る!!

一刻の猶豫もあるべからず!!

腦神經衰弱患者諸君!! 今直に

健腦丸

服用あれ

島村博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効

■腦充血■耳鳴
■腦膜炎■頭痛
■神經痛■眩暈
■逆上症■健忘
■卒中■便秘
■中風■癲癇

特長

少量宛持藥とせば逆上を引下げ便通をよくし恐るべき腦充血を治し中風卒中を未發に防ぎ氣憶力を増し常に爽快なり。

本舖 東京、大阪 丹平商會藥房

全國到る處の藥店に取次販賣す

藥價

五週分弐圓■三週分一圓廿五錢■二週分八十五錢■一週分四十五錢■三日分廿錢

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

世界論文集中の冠冕

慶應大學教授
戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

上卷（七版）目次
- ◎歷史論 ◎戀愛論 ◎大靈論
- ◎自恃論 ◎友情論 ◎圓環論
- ◎報償論 ◎細慮論 ◎智力論
- ◎靈法論 ◎勇壯論 ◎藝術論

下卷（三版）目次
- ◎詩人論 ◎作法論 ◎政治論
- ◎經驗論 ◎進物論 ◎名目論及實在論
- ◎人格論 ◎自然論 ◎改革論

總クロース

上卷 正價金壹圓四拾錢 郵稅金十四錢

下卷 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金十二錢

◎中外英字新聞評「簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり寸鐵殺人の警句は殆んど每行に盈つ…」

處世の經典 智慧の寶庫

十三版

ベーコン論說集

高橋五郎先生譯

四六判總洋布製・全一冊

正價壹圓卄錢・郵稅十二錢

◎東京日日新聞評「而も警句に富み用語の自在なる咳唾悉く珠玉なりと云ふも恐らく過褒ならず」。

東京市本鄉區西片町十番地 玄黃社 電話下谷一三九番 振替東京七九九五番

信用なき書店及び卑猥なる賣品の廣告は謝絕す

トルストイ著　相馬御風氏譯

ナポレオン露國遠征論

總洋布▼定價七拾五錢
極美本▼郵送料八錢

本書は人類の好戰的精神の最も戲曲的なる而して最も怖る可き表現なる**ナポレオン**の露西亞遠征を實例として、**トルストイ**が、**「戰爭そのものゝ生理」を曝露せんと企てたるもの**、實に雄篇「戰爭と平和」の姉妹篇にして、彼は那の戰爭の具體的描寫、これはそれの批判たりまた結論たるもの也。而して本書は又謂ふところの英雄豪傑なるものゝ近代的好典型とも云ふ可き**ナポレオン**を實例としての我が大**トルストイ**が英雄論にして、精神界第一の偉人たる**トルストイ**が、物質界第一の偉人たる**ナポレオン**を評せるもの、**實に世界文壇稀に見るの壯觀たり**、人間文字ありてよりこのかた、未だ斯くばかり光輝ある大文字を見ず。相馬御風氏**トルストイ**に私淑する事年あり、此書の夙に出づ可くして出でざりしを憾み、精練の譯筆を揮つて、こゝに之を公にせらる。今や**ゲルマニ**の英雄**カイゼル・ウイルヘルム**、百萬の兵を提げて露西亞の境上に侵入し、一擧**モスコオ**を突かんとしつゝあり、是れ密かに第二の**ナポレオン**を學んで、彼の一八一二年の壯擧を繰返さんとするに非る乎。**第二のナポレオンはあり第二のトルストイ畢に無し**。こゝに**トルストイ**を地下に起してその大獅々吼を聽かんとする所以也。

■精神界第一の偉人、物質界第一の偉人を痛論す

新潮社
東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

美人と美酒と藝術

情話新集

一冊定價參拾五錢　送料六錢

谷崎潤一郎氏作

第六編

おオと巳之介

豊麗絶倫の文字に、お才巳之介、戀の經緯を心ゆくまでに描いて、最も興味深き、最も讀み甲斐のある、近來無比のロオマンス。潤一郎氏苦心の大作也。

□新刊出來　□艶麗美本

第一編□舞鶴心中　近松秋江作
第二編□舞妓姿　長田幹彦作
第三編□小さん金五郎　田村俊子作
第四編□小夜ちどり　長田幹彦作
第五編□戀ごゝろ　田山花袋作

各編、竹久夢二氏装畫

長田幹彦作

鴨川情話

表紙　木版二十數度刷▼箱　木版極彩色――竹久夢二氏装畫

百頁の長篇「木屋町情話」、「竹生島」等の新作を始め、祇園情緒の濃かなる傑作を收めて此集成る。裝幀極めて艶美。

紙數四百十頁
定價七拾五錢
郵稅八錢

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

秋宵燈下の絶好讀物

榎本秋村先生譯

ルッソオ 瞑想錄

中版三百五十頁 美本全一冊 價壹圓貳拾錢 來十一月三十日限 特價壹圓 送料八錢

佛文原著 完譯

忽再版

天才の行く處魔神も之を遮るを得ず。不世出の偉大なる天才ジャンジャック、ルッソオが暗室漏屋より齎らせる不魔の心理は悉く收めて之の一卷に有り不安と動搖に無適從なる人性の底深く沈淪せる疲勞者に對し彼は墳墓の中より猶聲を大にして「自然に歸れ」と絶叫しつゝあるに非ずや、毀譽褒貶に苦しみ靈肉の葛藤に煩ふ者速かに超人が忌憚なく其の內面を告白せる此大教訓を讀め必らずやそこに崇高なる信條を求め春風駘蕩天來の靈光に浴するの感有るべし

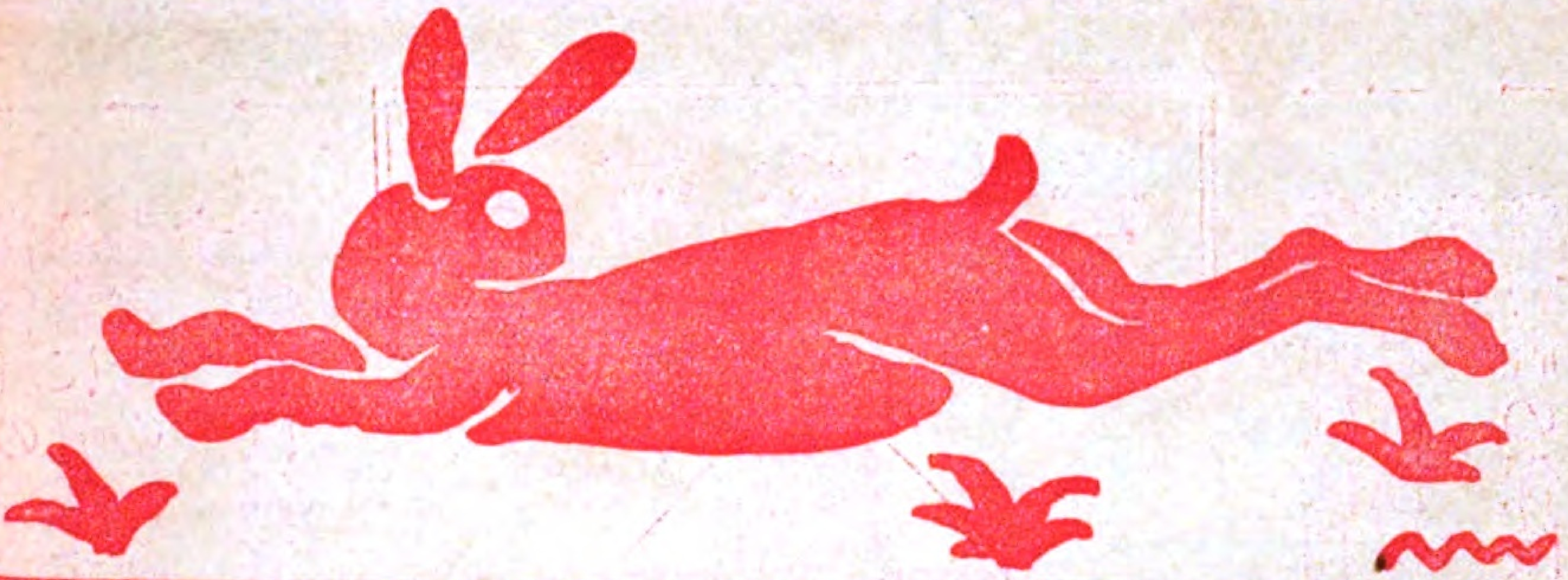
□本書に對する世評□

■萬朝報評（大正四年十月四日）老いて長かりし一生の行事を事細かに回顧すれば何人も無限の感なくんばあらざるべし況んやルッソーの如く偉大にしてルッソーの如く迫害を被れる人物に於いてをや『瞑想錄』は彼が既に死を眼前に控へて靜かに過去の精神生活を且思ひ且記せるもの言々句々涙に滿ちつゝも大悟に輝く靈の光は各行の間より洩る譯者能くこの絶體平和の氣分を傳へて、心の眞の慰樂を求むる者を喜ばしむ

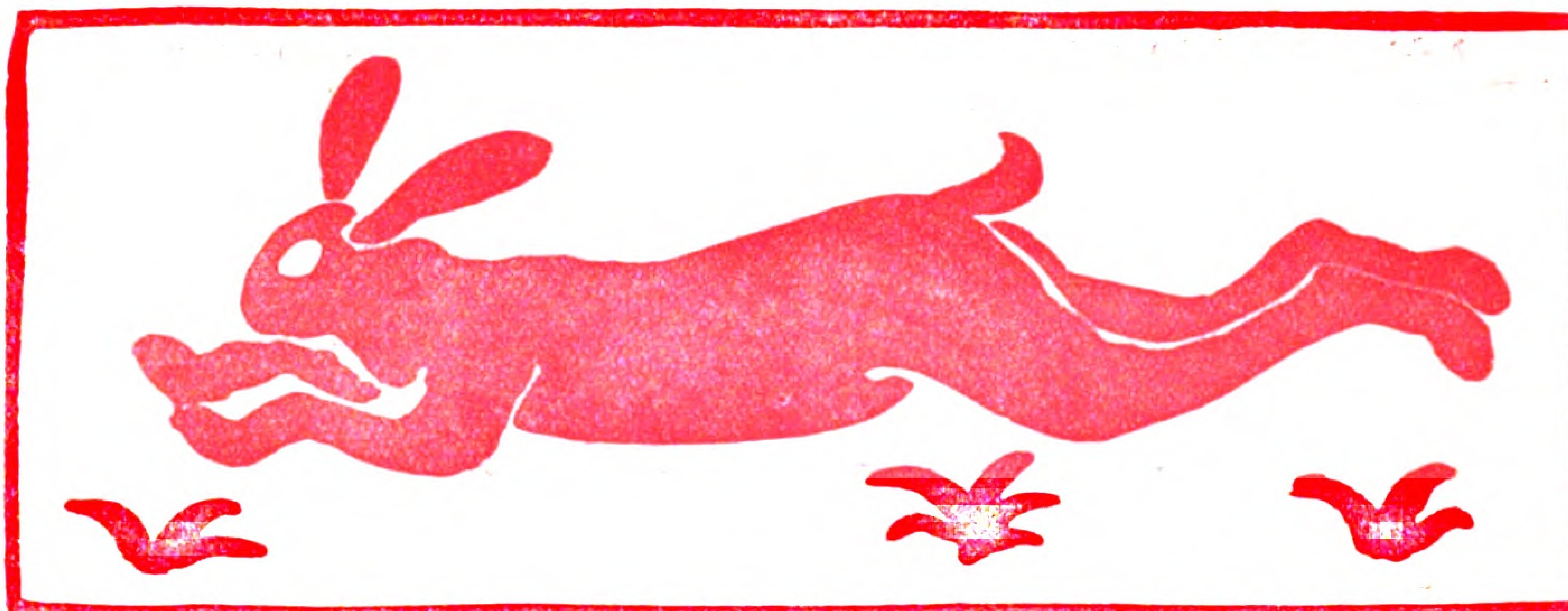
■日本及日本人評（大正四年十月壹日號）ルッソオの瞑想錄は彼が死前二ケ月迄に特筆したるものにして有名な懺悔錄の續篇として尊重され居れるものなり。懺悔錄は一生の經歷に對し自ら辯護したる觀あるが、此瞑想錄は一層赤裸々に記せりと傳へらる、又懺悔錄は經歷談にして經歷より得たる自覺を述べざるが瞑想錄は其自覺を述べて居るより重んぜらる、ルッソオの大思想に接せんには必ず瞑想錄を見ざる可からざるが此譯書は平易にして相當になされたり

（前付の六）

發行所 東京市本郷壹丁目大通 電話下谷四三六二 振替東京一二五五六 日東堂



中央公論第卅年十一月號目次



世界五大强國　戴冠式拜觀記

高田文相論

▲評論

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

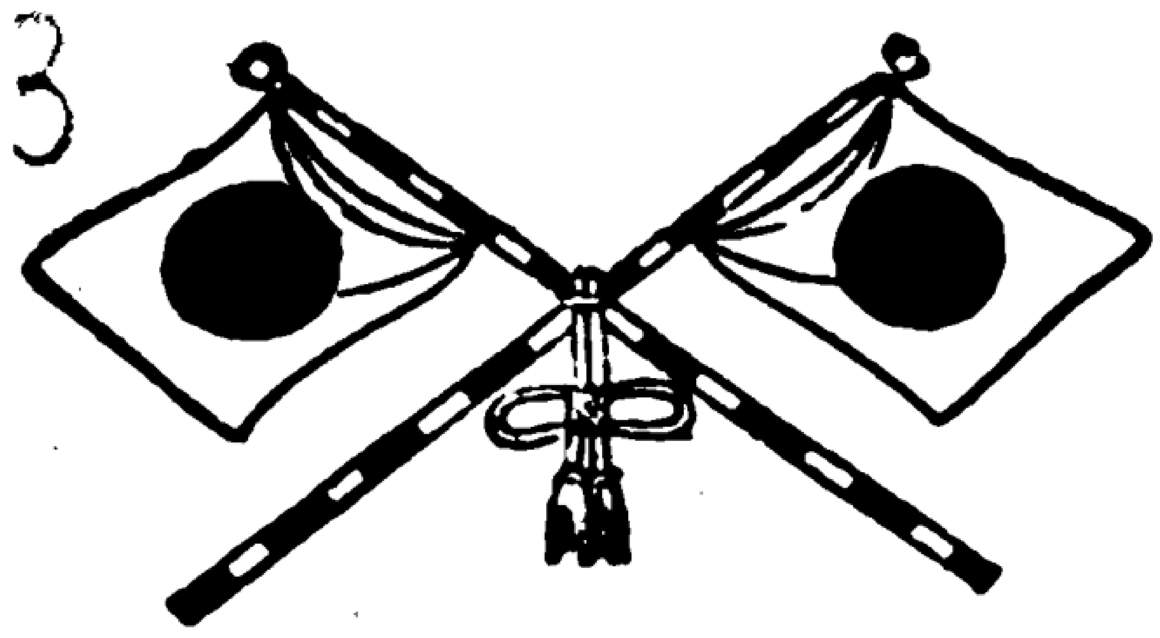


信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

BAYNON COPELAND



Goldfishes

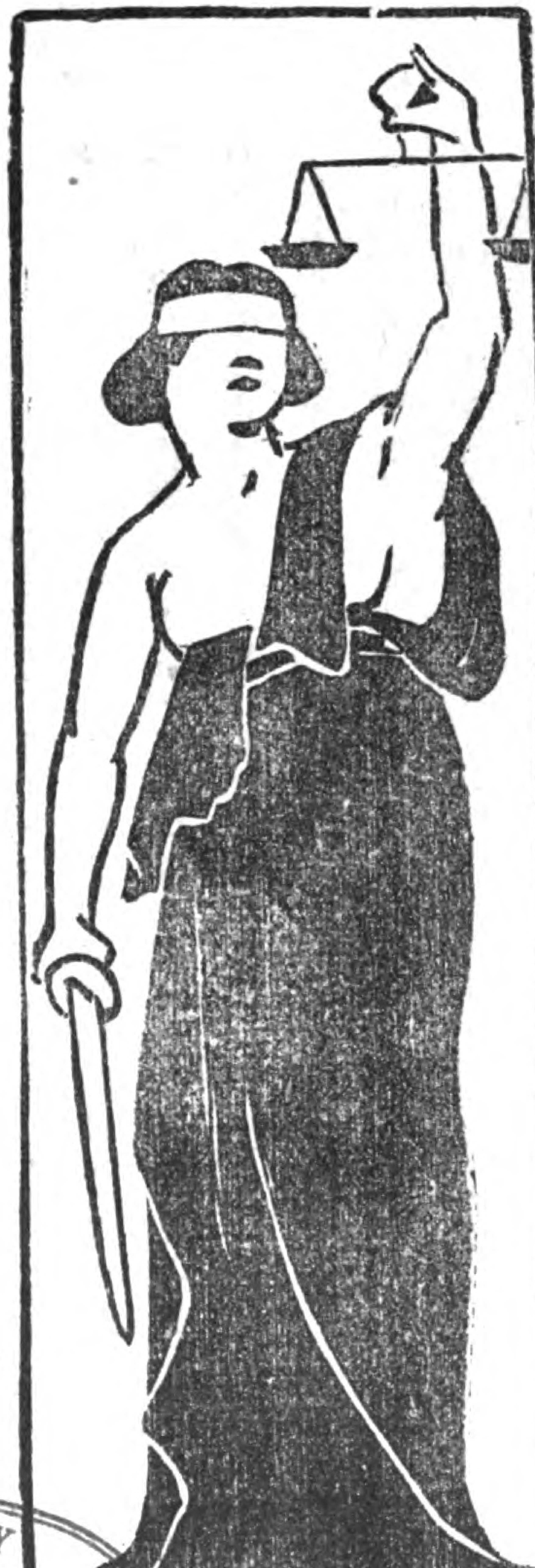


寶祚萬歲

萬世一系坤輿に比類なき芽出度皇統を受けさせ給へる我が聰明仁孝なる　今上陛下は人皇第百二十二代の帝として近く將に卽位の大禮を擧させられんとす、恭しく惟みるに神武大和橿原に於て帝位に卽き給ひてより玆に二千五百七十三年、此間大古一千年は漠として多く知る可らざるも神功皇后の三韓を征伐せらるゝあり、仁德帝の民の疾苦を察し三年の御調を止められ高き屋の御歌をよみて仁政の範を垂れ給へるあり、下りて奈良、平安朝に至れは大に大陸の文物を輸入せられ彼が僧侶、學者、工作者の歸化人を採用せられ、而して聖德太子の憲法制定、桓武帝の遷都、天智帝の大化新政等勳業最も顯著なり、此より以降政權多くは閥族に歸し、藤原氏の專橫時代を經て、鎌倉時代に入りて更に室町時代を過ぎて天正年間に至れば信長勤王を以て起り秀吉亦た朝廷を尊奉して天下の亂を鎭定せり、德川氏に至り儒學大に興り、殊に其中葉以後國學開けてより大義名分の說益々明なりしが明治天皇に至り維新の大業成り外、開國の國是を立て內、立憲政體の基を定められ、日淸日露の戰役に由り皇威を世界に輝かせ給へり、今帝陛下今この大統を繼ぎ世界歡呼の裡に大典を擧げさせられとす、吾等同人六千萬の同胞と共に謹んで寶祚の萬歲を祝し奉る。

世態人情は時に由りて異なり治亂和戰また常に一定せず、然れども吾人臣民は如何の場合にも我が皇室を擁護して國家に盡すことを忘れず、以て祖先の遺訓に背くなからんことを誓ふ。

中央公論



第三十年第十二號
十一月號
第三百二十四號

大正維新の理想奈何

《一》憲政擁護運動の失敗

大正維新なる新熟語の流行あり抑も大正維新とは何を意味する、大正に入りて以來已に四年果して維新とも稱すべき新事實の社會上又は政治上に出來せしものありや、若しも其事實なく徒らに新熟語の流行に過ぎずとせば空しく此美はしき思出多き題目を唱へて得々たる世間は知らず〳〵其心の浮薄輕佻を自白するものと謂ふべきに非ずや、想ふに此新語の初めて唱へられしは大正元年の秋に在り、當時政變の機大に動き憲政上革新を必要とするの聲頗る盛んなりしを以て察すれば大正維新とは疑もなく政界の

刷新を意味せしものなり、蓋し當時 今帝御踐祚の初年に屬し且つ諒闇の期中にもあれば政界の頭目輩は最も愼重の態度に出で、虛心辭讓し協心戮力し上下一心政道の圓滿を期すべかりしなり、然るに何事ぞ暴慢なる陸軍の增師主張より第二次西園寺內閣は端なく瓦解の運命に接し又た該內閣が計畫せる財政整理も實行に至らずして止めり、此時世間一般の觀る處に由れば財政整理は焦眉の急にして且つ陸軍は最も整理の餘地ありとせられ、增師と整理を相殺するの約束を得ざれば整理を行なはずと頑張れる軍閥は政黨內閣の暗殺者として乍ら天下淸議の焦點となれり、而して軍閥の大頭目たる桂公が內府に入りしより未だ三月にも及ばざるに乍ち詔勅を拜し出てゝ新內閣を組織するや、陸軍は掌を飜すが如く前日來の主張を撤回して增師の延期に同意せしかば軍閥の誠意は益世人に疑はるゝに至れり、之を桂公側より見れは、即ち乃公の信用手腕正に斯の如しと誇るに足りしならんも世間は拍手して之を迎へず寧ろ公が野心飽足らずして神聖なる內府を出て意氣揚々として第三次內閣を組織せるを少なからず慊焉たらず思へり、蓋し桂公の聲望手腕を以てせば西園寺內閣と陸軍との仲間に立ち相互の調和を謀るは容易のことに屬せしに關はらず遂に其勞を取らざりしより、公は兩者の衝突に由り內閣の瓦解せんとするを見て竊に快心の笑を漏せりと推斷せられしも强ゐて無理とのみ云ふ可らず、斯くて桂公は素より山縣公も寺內伯も直接間接もしくは間々接に政黨的內閣の破壞に關係ありと思惟せられたり、而して大正二年一月の休會期方さに過ぎんとし議會の形勢漸く桂內閣に不利ならんとするや、公は突如として新政黨組織の事を發表し以て超然內閣の譏を免れんとせり、玆に於て政友會及び國民黨の有志は憲政擁護會を組織して

之に應じ新政黨の成案發表せられて國民黨の大半相率ゐて公の旗下に奔るや憲政擁護會の活動益熾なり二月初旬に入り新政黨の頭數は甚だ振はず到底議會に多數を制すべき見込なく又た假令解散するも多數を得るの望み殆んと絕無なり、玆に於て桂首相は西園寺侯に對する勅語を奏請して愈々最後の手段に訴へたりしが、此時實に何人にも意外千萬の一事出來せり、其は他なし十年隱忍して機會を待ちし山本伯の出動にして、伯は政界の危機一髮の際突如として桂公を訪問し禍福を說きて辭職を勸告せり、此消息の一たび政友會に傳はりしが爲め同會の政府反對の態度は益々鞏固となり勅語を拜せし西園寺總裁亦如何とも爲能はず、流石の桂公も遂に辭職するの外なきに至れり、大正維新とは蓋し斯る政變の際に唱へられし新熟語にして當初より主として政治革新を帶び、超然主義を排し元老の干涉を斥け以て政黨內閣主義の確立を要望するに在り、論者曰く明治の元老も大正に入りては宜しく政界を退くべく、新時代の政治は新人物に由り經營せられざる可らずと、然るに實際の政機運轉如何と云ふに後繼內閣の組織者は議會の多數黨を率ゆる西園寺侯に非ず又松田原にも非ずして、勅命は却て政黨に緣故なき山本伯に下れり、斯くて新內閣の實質如何は別問題として、山本內閣を稱して政黨內閣と云はんには一種の物足らぬ心地なきこと能はず、政友會中の一派が之を辭柄として脫黨するに至れる亦た一理なしと云ふ可らず、然るに山本內閣は爾來着々行政財政の整理を行ひ以て能く其言質を償ひ大正二年末の帝國議會を迎ふるに際しては聲望隆々曩に非立憲を叫びしものも竟に閉息の態ありしが、誰か知らん大正三年休暇後の幕開きと共に議會は海軍瀆職事件に對する質問を以て紛擾を極むるに至らんとは、山本內閣は其閣員中一

人の瀆職罪に關係ある者なきに關はらず竟に未曾有の世間の攻撃裡に總辭職をなせり、大隈内閣の成立に對しても亦た憲政擁護もしくは大正維新の理想より觀れば大に非議すべきとあり、伯が當時政黨に關係を有せざりしことは形式の論にして、明治十四年以來常に閥族政府に反對して政黨の發達に努力し來りし歴史に顧み强ゐて議すべき限に非ずとするも、今次の内閣組織に際し各種の元老の注文を聽き若しくは其意に迎合し其保護の下に僅かに組織を全ふし、且つ爾來重要の政務に關して元老の指導干渉を甘受する未曾て大隈内閣の如く甚しき者なき事實の如き、首相及び閣僚は其多年の主張に鑑み蓋し心窃に忸怩たるものなかるべからず、而して最近大浦問題勃發して以來の事亦た實に言ふに忍びざるものあり、首相の責任を解せざる前外相の自家矛盾せる、法相の事理徹底せざる、且つ三者とも恬として恥を知らざる孰れも憲政の本義に背くこと甚だ大なりと謂はざるべからず、大凡そ大正の御代に入りて以來内閣の交迭頗る頻繁なるも大隈内閣は恐らく中に就き最劣惡の内閣と云はざるを得ず、若しも大正維新の理想は憲政擁護運動の結果として遂に現内閣の成立を見たりとせば、該の憲政擁護は寧ろ憲政を破壞せりと云ふべく、藪叢を衝きて蛇を出すの意外に終れるものなり、吾人は大典を祝せんとするに當り此不祥事を指摘するを甚だ心外とすると雖も事實は竟に奈何ともす可らず、寧ろ御大禮の盛儀を奉祝せんとする國民は啻に萬歳を千呼萬叫して止むべきに非ず、必ずや今の混濁せる政界を廓清し以て皇基を千秋に安定せんことを要す、其善後の策果して如何、

(二) 善後策如何

吾人を以て之を觀れば善後の第一步は現內閣の交迭に在りと思ふ。抑も政界の狀態險惡なること今日の如きに至りし由來を硏究すれば獨り大隈內閣を耳尤む可らざるは勿論なり、桂公及其一派に責あり、山本伯を擁し內閣を組織して憲政擁護運動の主旨を徹底し得ざりし政友會に責あり、海軍瀆職事件を奇貨として元老に訴へて陰密に其力を借りて大隈內閣を成立せしめし策士輩に責あり、然れども吾人は大隈伯の聲望閱歷、其政界廓淸を標榜して起ちし手前に對し伯を目して政界紊亂の首犯者と斷ずるに躊躇せず、吾人は伯が出廬に際し元老の庇蔭に依りしを强ゐて尤めず當時の勢此れまた止むを得ざればなり、吾人の大に伯に慊焉たらざるは伯が凡俗政爭の上一頭地を拔く底の見識なかりしことにして、若しも伯たるもの克く立憲の大義を解し昨秋の對獨開戰に臨み擧國一致の國論を作るに努め、總選擧の場合に選擧の公平を保障し、其結果如何を待ち斷然進退するの態度明白なりしならば決して今日の混亂紛擾を釀すに至らずして止みしならんとは蓋し何人も首肯する處なるべし、然るに何事ぞ大隈伯は年甲斐もなく其與黨の末輩よりも以上に黨派心熾烈にして公私の言論に、其行政の施設に、事每に反對黨の敵愾心を挑發し、竟に議員の大買收を行ひ更に總選擧に際して未曾有の大干涉を敢てしたり、今日の政界紊亂は總て此間に胚胎して出來れるものにして。大隈伯の責任を問ふて內閣の交迭を促がすは善後策の第一步として眞に止むを得ざるなり、大浦問題及び乃木事件等に對する大隈伯の德義上の責任實に輕からず之

に先だつ内閣居据の非立憲にして不臣の行爲たる亦た伯の責任を免る能はざる處たり。然れども此等は伯の粗慢なる心理作用の結果として外に現はれたるもの、其の歸する處は伯に高遠の理想なく大人物の宏量なく、内憂外患に際し國家を荷ひ立つの至誠なきに在り、是れ吾人が伯に向ひ速かに辭職すべきを勸告する所以にして、吾人は早稻田一派の學者中にも必ずや吾人と感を同ふするものあるべきを思ふ、蓋し常識を以て之を觀れば現内閣は須らく御大禮の後直に辭表を奉呈すべく、是れ内閣として善後策の最上なるものに非ざるも亦た以て最下策を避くるに足れり、然れども御大典後直に帝國議會の召集せられたるを以て察すれば大隈首相は幾多の失政問題を荷ひながら議會に臨まんと決心なるものゝ如し、其無謀なる蠻氣や眞に及ぶ可らざるなり、如何にも衆議院に於ては與黨多數の護衛あるべく貴族院亦た伯得意の懷柔效ありて多大の反抗を見ずして止むべしとするも、國論の沸騰は決して尋常事を以て止むべきに非ざるなり、事もし國是政策に關係するものならば國論の沸騰を犯して猛進する亦た政治家の痛快事ならずとせず、然れども現内閣が今世論の焦點となれる所以のもの其政策の如何と云はんより寧ろ大政奉行に對する其失態、罪惡即ち其責任に關するものなり、而して其事態の容易ならざる與黨と雖も亦た辯護辭に窮するに似たり、此種の失政問題を荷ふて世論の前に立つは其大膽及ぶ可らずとするも決して感服すべきことに非ず、是れ亦た首相及び閣僚の終を善くす所以ならざるのみならず、政界の紊亂を益々甚だしからしむるものにして、國家を賊するものと云ふも酷評に非ずと思ふ、若しも大隈首相にして速に其責任を自覺し任意に辭職することなくば四圍の事情は恐らく竟に之を强制する至るべきなり。

與黨一派に於ては此際首相の後繼者を得ること困難なるを辯柄として以て伯の謬付を辯護し居れるが如きも、吾人を以て之を觀れば大隈伯の責任問題と其後繼問題とは全然別問題に屬す、伯一たび辭職せば其後繼者を得ること決して困難ならず、吾人は玆に後繼內閣に關し聊か鄙見を述べんと欲す、

世人が曩に大隈伯の出廬を歡迎したるは政友會多年の妥協政治に厭果てたればなり、彼等は伯平生の壯言宏辭に對し必ずや雄大雍容の政策を行ひ以て天下の人心を一新すべきことを期待せり、然るに伯が全然この期待に背きしは世間の竟に現內閣に對し失望するに至れる所以なるを以て、後繼內閣は何よりも先きに現今の陰險極まる今の政界の空氣を一掃して穩正包括なる氣風を喚起せんことを要す、別語之を云へば今の我政治界は一種の亂世にして公德地を拂ふと云ふも酷評ならず、上は總理大臣より下政黨の陣笠に至るまで人各々名利の一念に驅られ殆んど國事を忘却するの觀なきこと能はず、所謂上下交も利を征して國危しとは蓋し今日の如きを云へるに非ざる乎、故に吾人は平生政黨內閣を主張し憲政の理想に忠ならんと欲するに關はらず今日の政情に鑑みて後繼內閣は必ずしも所謂政黨內閣たるを要せずと思ふ、若しも眞に高遠の理想を懷き公明正大の政治を行はんと欲して政黨を率ゐて內閣を組織すべき人あらば素より申分なきことなれども、不幸にして斯る理想的注文は容易に實現を望む可らざるに似たり、故に吾人は假令憲政の理想より見て形式の不足あらんも若しも至誠君國を憂へ公明の態度を以て政派に對し方さに大に緊張せる危險なる爭氣を緩和する者あらば時局を濟ふに於て蓋し効果多大なるべしと思ふ、是れ政爭の結果人心日に益々險惡ならんとする時局を救はんとする一點より立論せるものなり且つ

吾邦の今日は尋常太平の時と異なり、歐洲の戰局は容易に吾人が樂觀を許さず、假令最後の勝は聯合諸國に歸し獨逸は終に其發展上多大の挫斥を受くるに終るべしとするも、獨墺の關係は今後恐らく益々親密を加へ、墺は事毎に獨の指揮に從ふべく餘儀なくせらるゝに至るべきこと殆んど疑を容れず、故に獨墺は今次の大戰に敗者たらんとも前途の我邦の競爭者としては眞に侮り易からざるものあるべし、然れば歐洲戰局に對する措置經營に對しては擧國一致の協力を要すべく、吾人は今日の場合公平なる脚地に立つ處の內閣を希望する耳ならず亦實に有爲有能の內閣を要求せずんばあらず、殊に戰期の永びくに從ひ聯合諸國の我に對する請要益々多事ならんとするあり、平和談判に於ける我邦の方針最も愼重の考慮を要するあり、又た戰後列國の競爭に對し我敎育上の設備最も急を要するあり、斯の如き危急の場合に際して凡庸內閣にては到底其任に堪ゆべからず、然らば如何にして擧國の望を負ふに足るべき內閣の組織を見るべきやと云ふに、之を爲すの道只我邦政界の最有力者輩が今の內憂外患に對し各々一身の名利を犧牲にして奮起するの一事ある耳、元老の如き若しも憲法の制裁外に立ちて國政に容喙する程ならば須らく進んで責任の衝に立つべし、吾人は山縣公松方侯の中孰れか大命を拜して時局救濟の任に當らんには必ずしも反對すべき理由を見ず、但だ現に大隈內閣に見る如く一人の老人首相となり家子郞黨を閣員に列して國政を私すと云ふに至りては眞に見るに堪へざる醜態と云ふべし、之に反し元老の一人を首相とし閣員多くは閱歷材幹に富めるものを選み、國家的內閣の實現を見るが如きは時局の成行上止むを得ざる結果なるべきかとも思ふ、是れ畢竟憲政擁護運動の失敗と歐洲戰爭に對する時局の必要と

に鑑みたる計畫にして、一見憲政の退歩と評すべきも、國家發展の必要上亦た實に止むを得ざるべきか。

（三）憲政の發展必ずしも絶望ならず

大正元年末以後政黨內閣の實行を期して起りし憲政運動の全然失敗に歸せしは以上論ずる處の如し、桂公より大浦前內相に至るまで幾多の政界頭目は此の新しき應仁の亂の爲めに或は無殘の最後を遂げ或は重傷を負ひて政戰場を退けり、而して殘餘の人物中其名聲の一世に高きもの少なく、偶々之あるもの瘡痍未だ癒へずして內閣の首班に立つ可らざるものあり、又た政黨其者に於ても多數少數の意義極めて分明ならず、昨年の春山本內閣の斃るゝに當りてや政友會は議會に絶對多數を制したりき、然れども大隈伯は此多數は民意を表示せずと標榜して內閣組織の命を拜したりき、爾來今春の臨時總選擧ありて政友會其一半の數を減じ、同志會其他の與黨は一躍して絶對多數を占むるに至り大隈伯一派の見込は全然適中し民心は全く政友會を離れ大隈內閣に集れること證明せられしが如くなりき、然るに最近府縣會議員選擧の結果を見れば意外にも政友會、國民黨即ち在野黨系は依然として全國に優勝者たるの觀あり、此間の形勢を說きて臨時總選擧に際しては政府の干涉ありて與黨勝を制し、府縣會選擧に際しては大浦問題等大に與黨に累を成せりと云ふべきも、我邦政黨の基礎尙未だ甚だ薄弱にして、政黨內閣の制を樹立するまでには更に幾多努力の餘地を存すること察するに難からず、我邦政界の將來を觀れば政黨を以

て憲政運用の最大機關をなさゞる可らざるは今更辯を待たざる處にして、今日擧國一致の内閣を必要とするは偶々内外一時の變に應ぜんとするに由るのみ、此際に於ける危機を通過すれば是非とも憲政の常道に復し政黨内閣の形式に由らずんばあらず、否な此の非常の場合に特殊の内閣を要すと云ふは却て世間に陰險狡猾なる政界の空氣を一掃し穩正健實なる政黨政治の發展を期するに外ならず。

之に由て之を觀れば憲政擁護運動の失敗は必ずしも眞の失敗に非ず、其眞相を穿ちて察すれば所謂失敗の一段は寧ろ憲政發展の前提と見るを得べし、即ち明治晩年の政界に於ける幾多の情實、弊風等を打破し一掃し、來るべき政黨政治の開幕に向つて舞臺を清めんとする是れ寧ろ所謂失敗の眞相なりと云ふ可きか、天下の形勢は滔々として進んで止まず、僅かに殘骸を餘すに似たる元老も茲兩三年にして跡を收むべく、政黨の先輩も次第に舞臺を退くべく、有爲の新人物出でざらんとするも得べからず、政界の人士須らく目前の急に處する道と前途を開くの策とを講じ其着眼を遠大にして大に雄飛の覺悟なかるべからず。

學制改革を論ず

多年の宿題として歷代の文部大臣を惱ましたる學制問題も近頃稍解決に近づけるが如くなるは喜ぶべし、其果して現任文相に由り解決せらるべきや或は其後繼者を待たざる可らざるやは吾人の知る處に非

ずと雖も解決の曙光だけは正に之を認むるに足れり、何を以て曙光と云ふ、曰く大學卒業の年齢を一年もしくは二年短縮するを至當とすると、私立の大學に帝國大學と同一の特權を附與すること、大學院を改良して專門科研究の設備を完全にすること、高等教育に關聯し人格の修養に重きを置くこと、是等は各方面の論者中に於て殆んど異論なきものゝ如く只た其方法に於て目下論戰最中にあるのみ、故に主義として已に此等の要點に一般の同意を得たりとすれば其實行の方法に付ては假令多少の異論あらんも必ず何とか落付く處に落付くべきこと毫も疑ふべからず、此れ吾人が學制改革案解決の曙光已に現はれたりと云ふ所以なり。

然れども改革の細目に亘りては議論容易に一定せず、茲に吾人も亦た世論紛々の間に交はり聊か意見を述べんとするに、吾人は一派の提出案に對し首肯し能はざる各點に付き先づ一言すべし。

一、大學年限の事　中學卒業後四年間專門科を修むを以て大學と認むべしと云ふは年限餘りに短く到底十分の大學教育を施し得べからず、提案者の意は恐らく右四年の中一年を豫備教育に費し殘り三年を專門教育に宛てんとするに在らんなれども、現在早稻田大學は一年半の豫科を有し慶應は二年の豫科を有するを以て見れば高田文相等の標準とする大學は早稻田慶應よりも低級のものたり、斯くの如くして果して日新月歩の時勢の需用に應ずるを得べしと爲す乎、是れ吾人の與する能はざる處たり、年限の短縮甚だ可なりと雖も學力を低下しての年限短縮は國家の不幸ならずや今の帝國大學の程度は決して文明社會の需用に應ずる爲め高きに過ぎると云ふ可らざればなり、然らば如何と云ふに現在大學教育年限は中

學卒業後六年を標準とするに對し一年を短縮して五年と爲すを至當なりと思惟す、論者は米國などの例を引くこと多きも米人の高等教育を受くるもの多くはカレッヂの四年を修了して專門教育を受くるを常とす我邦の今の制度と年限に於て多く擇む處あらず、且つ我邦の初等、中等の教育は甚だ不完全にして教育の効果に付て英米の初等、中等教育に比せば頗る遜色あるに似たり、其改善亦た刻下の急務なれども事多くは教員の知識人格に繫がるか故に一朝一夕に多大の改良を期すべからず、故に一歩を讓り假令理論上四年大學制を至當とするも當分我邦に於ては之を實行すること殆んど不可能と云はざる可からず、

二、高等學校廢す可らず　大學豫備科の高等學校を廢し之を所謂學藝大學に變形すべしと云ふの說あるも吾人は此提案を贊成すると能はず、吾人の見る所にては今の帝國大學の教育に對し高等學校は一方に大學教育の豫備をなすと同時に其欠缺を補足するものたり、即ち大學は專門學の教授の外一切學生の個人修養を監督せず、宛も獨逸大學に於けるが如く放任して顧みず、故に中學を出でて大學の門に入るまでに高等學校の教育を受け豫備を修むるの外大に人格の修養を受くるの必要ありと思惟す、素より其課程等に付き改善の餘地多きは言ふまでもなけれど、高等學校在學中の年齡は青年の最も印象を受け易く最も自發自覺し易しき時機に屬するが故に此間一種特色ある教育を受けしむるは多大の利益あり、前途生涯の浮沈興亡多く此間に決すと云ふも過言ならず、然らば其年限は如何にと云ふに吾人は之を二年に短縮せずして依然三年制を維持せんことを希望す、何となれば二年にては高等學校の特色ある教育を受けしむるに足らざればなり、而かも之を三年として如何に大學年限を短縮するやと云ふに、秀才撰拔

法を採り中學四年修了のものは高等學校入學試驗に應ずることゝなさば容易に短縮の目的を達するを得べきなり、蓋し高等學校の學課には幾分變更を加へ、中學五年の或課目を加へ又た入學試驗の程度を低下するの必要あらん、然れども幾分入學程度を低下するも高等學校卒業生の學力を今日同等に維持する難事に非ずと思ふ、別語之を云へば我國の教育機關中にて米國のカレッヂ、英のボゾリック・スクール(イートン、ハルロウ、ラグビーの如き)、獨のギムナヂウム等と並べ稱すべきは獨り高等學校ある耳。其程度は互に高下あり同じからざるも青年の人格教育を主とする點に於て似たるものあり、吾人は學制改革論者が此點を看過し、多年の歷史慣習を輕視し慢然歐米を云々して空論を吹聽するを默せずんばあらず。

三、**大學院研究科設置の事**　研究科を各大學に置くの說ありと雖も吾人は寧ろ研究科は當分之を今の帝國大學内に置き、他の私立公立各大學の卒業者も自在に入學して研究するを得ることとなさんことを希望す、抑も研究科なるものは一科の專門を研究する場合と雖も必ず他の專門に關聯するものにして、例せば刑法學は裁判醫學と離る可らず、哲學、心理學亦た醫學に待つ處あり、故に之を單科大學若しくは私立大學に置くは不可能に非ずとするも大なる不便あらん、且つ大學院研究科は其數多きを要せず寧ろ少數なるも其設備の完全ならんことを要す、故に當分の所之を東京、京都兩大學に置き其設備を完全にし、其門戸を解放し官立私立の大學卒業生に入學を許し、又他の高等商業、工業、醫科專門學校の卒業生に對しても一定の試驗の上入學を許し、大に學術の蘊奥を極め又た應用上の發見を爲すの便宜を與ふ

べきなり。

要するに學制の改革は紙上に於ては如何の改正も甚だ容易なりと雖も既に數十年の歷史を有するものに至りては根本の變化は甚だ困難なり、明治十八、九年に於ける森文部大臣の場合の如き我邦の學制未だ定らず各學校の年所を經ることも亦た短かりしを以て彼が如くの思切つたる改正を斷行するを得たるも、今日の我敎育界は復た當日の如き幼稚のものに非ず、既に斯くまでに發達せるものを理論の標準に從ひ猥りに改造せんことは或は角を矯めて牛を殺すの恐れなき能はず、今後の敎育の改善は寧ろ其の生育發達に待つべく、變改の餘地甚だ多からず、帝國大學系統は依然今日の儘として一年間の短縮を行ひ私學系統に於て本科三年に加ふるに豫科二年を以てせしめ以て大學の資格を得るものと定むべきなり、若しも學藝學校を必要なりとせば試驗の意味にて新たに一校を起すも可ならんかなれども吾人は其失敗に了るべきを想像せざるを得ず、前年井上文相の時曾て高等學校を邦語專門校たらしめんとして失敗せしことは以て今の改革論者に取り殷鑑とするに足らん。

帝國大學の系統には豫科として三年の高等學校(中學四年修了者中より撰拔入校)を有し、私立大學の系統には二年の豫科(中學五年卒業後入校)を有することは兩者の間幾分の相異を生じ敎育の結果に付き多少の競爭を見るに至るべきは決して不利益に非ず寧ろ双方に取り一種の奬勵ともなるべし、殊に私立大學の方に於ては其入學生の多分は其自家系統に屬する中學校、若しくは小學校を經來れるものたるべきを以て校紀校風を維持する上に多大の便益あるべし、之に反し帝國大學に於て斯の如き便益はなきも

況く全國より秀才を撰拔し其門に集むるの便利を有し、且つ彼等は高等學校の特色ある修養鍛練を經過すべき利益あり、其利害得失の較量は今後の最も興味ある問題たらずんばあらず。

私立大學の認可に付ては文部省に十分の支配權を保留せんことを要す、是れ民間の教育事業に對する一種の干渉とも見ゆれど我邦目下の狀勢にては止むを得ぬことかと思ふ、吾人の所謂支配とは學科、教授の方法等微細の點まで立入り干渉すべしと云ふにはあらず、大學の特權を得るには三年の大學科二年の豫科を設備するを要する外、學科教授の方法等は各大學の理事者に一任するを可なりとすべきも、其經濟上には十分の監督を爲すを要す、目下我邦の一大弊風は一種の學校商賈とも云ふもの行なはれ猥りに在學者を多くして校の收入に資せんとするにあり、爲めに眞面目なる教育の目的を害すること多大なるは言を待たず、苟も帝國大學と同等の權利を得んとせば其條件として相當の基本財産なかる可らずして、其規定の果して實行され居るや否やは文部省の監視を怠る可らざるものたり、且つ吾人は國庫より私立大學に對し年々多少の補助を爲し以て其事業の完成を奬勵するを必要ならんと思ふ、此補助は私立大學の基本金制度を奬勵するの趣旨より資本利子に對する比例に由り金額を定むるも亦可ならんか、試みに二三の私立大學に對し各毎年三萬圓乃至五萬圓の國庫補助を爲すことゝ假定せんに、必ずや各學校は爲めに設備上多大の便益を得べく、國家は僅々の出費を以て完備せり大學の數を増加して大學の不足より來る教育界の大難問題を解決するを得可きなり。

之を要するに學制改革の文字は寧ろ語弊あり寧ろ學制整理と云ふを至當とせん、而して既成學校に對

しては餘り「イヂリ」立てせぬ方宜しからんと思ふ、帝國大學は我邦最高の學府なれば其程度を低下せんとするが如きは頗る聞へぬ議論なり、高等學校は最も特色ある教育機關なれば是非とも之を保存せざるべからず、但し大學、高等學校の教授の人物又は教授法を改良し以て教育の效果を多くせんとする必要あるは勿論なるも今之を論ぜず、現在教育界の一大難問は毎年高等學校の門に蝟集する入校者に四五倍する多數の學生は奈何に之を處分するかと云ふに在り、而して差當り私立大學の設備を完備し之に大學として十分の資格權利を與へなば必ずや毎年高等學校に對する學生の突進を大に緩和するを得べきなり我邦教育の局に當るもの須らく空論に驅られず實際出來得べき範圍内に於て教育制度の整理を行はば其勞少なくして其效大に見るべきものあらん、教育制度も亦た他の幾多の制度文物の如く作爲すべきに非ず發育すべきものなることを忘るべからず。

精治萬歲！

福本誠

吁此坤輿十億の人、今我　皇の新に即かせらる、天津日嗣之高御座を仰げ！　天祖御手に神器を執らし、頒して之を　皇孫に授け、乃ち詔し、乃ち勅し、扶けて以て即かせたまひしは、即ち此高御座なり。　神武の神武、大八洲を統一し、皇京を大和の橿原に定め、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さんことを思ほし、大業を恢弘したまひしも、即ち亦此高御座なり。爾りしより以來、繼々承々　列聖馭宇の初に當り、中臣・天神の壽詞を奏し、忌部・神璽の鏡劍を上り、三千載唯一日の如く、即きて以て皇徳を耀かしたまひしも、亦又此高御座なり。

此間、世運は如何にか推移せし。秦皇英略六國を併せ、身は始皇と稱して、自ら以爲へらく、子孫帝王萬世の業なりと。誰か圖らん、晏駕一たび甘泉に藏るれば、咸陽一炬、二世は屋せり。歷山英雄、百王に王たり、凱撒壯圖、羅馬の大帝國を基せしも、其人歿すれば、其業は忽焉たり。看て歐亞の南に到れ、大小の三尖塔は、今尚ほ古史を談ずるも、ファラオンの寒灰は蚯蚓に化し、ナイルの濁流に、空しく亡國の餘哀を留むるのみ。

幸甚至れる哉、我　皇の高御座、三千載唯一日の如く、日嗣の御子の知らす所。豈啻だ過去の三千載のみならんや。後の億萬春年に亙り、天壤無窮に亦我皇位を仰ぎ瞻奉らんのみ。是れ此天祐、何を修めて然く高御座の上に聚らせたまひしや。要は　皇祖　皇宗以來、民を視そなはすこと赤子の如く、其福祉を增進するを以て、「天津日嗣高御座之業」としたまふに由りてなり。是故に　列聖即位の詔に曰く。「此ノ食國天下ヲ齊ヘタマヒ、平ゲタマヒ、天下ノ公民ヲ惠ミタマヒ、撫デタマハムトナモ、惟神所思シメス」と。皇旨斯くの如く、皇業亦斯くの如し。寶祚の由りて來ることの、深く且つ遠きを佩す可きなり。

且つ夫れ　皇考、夙に維新の大業を恢弘し、馭宇の四十五年間に、此大日本帝國をして重きを列

强の上に加へしめ、之を我　皇陛下に遺させらる。伏して惟れば、我　皇聖明、洪度を　皇考に等くし、神武を　皇祖に匹し、今や新に大統を承け、茲に高御座に即かせらる。坤輿萬國十億の人と、是より應に　陛下の盛德・大業を其高御座の上に仰ぎ奉るべきなり。

昔は國家大典あれば、神京東西の文部・銀人・横刀を獻りて、天祐を寶祚の上に禱請せり。其辭に曰く、

謹請。皇天上帝。三極大君。日月星辰。八方諸神。司命司籍。左東王父。右西王母。五方五帝。四時四氣。捧以銀人。請除禍災。捧以金刀。請延帝祚。

呪曰

東至扶桑。西至虞淵。南至炎光。北至弱水。千城百國。精治萬歲。

之を中外の典籍に稽ふるに、東の扶桑は新大陸の兩米なり。西の虞淵は其處を知らざるも、亞細亞大陸の西に盡くる處、其れ紅海に當らん歟。南の炎光は熱帯の下。北の弱水は黒龍江なり。呪祝の期する所、終に空しからず。其績既に　先皇の御宇に發して、今上高御座に即かせらるゝの今日、御稜威は早く炎光に及べり。虞淵何ぞ遼かなりと謂はん。扶桑何ぞ遠しと謂はん。弱水は指呼の間に在り。皇德洪大、而うして皇猷を翼賛し奉るの任は、繫りて　陛下に忠貞なる我等六千萬の臣民に在り。臣等今や千載一遇の大典に遭逢す。誠敬を捧げて、

祝曰

東至扶桑。西至虞淵。南至炎光。北至弱水。千城百國。精治萬歲。

公論

京都近代學術史論

文學博士　新村出

一

文運東に移つてより東國の學術が京洛と對立し更にこれを凌駕するやうになつたのは、江戸時代の事で而も嚴密にいへば其中期にあるとせねばならぬが、その端緒は既に德川覇府以前室町時代に開けてゐたのである。尤も遠く遡るときは鎌倉に於ける源親行や僧仙覺の萬葉集研究の如きは當代の帝都の學界に見るを得なかつた新事業であつて、近代水戸における義公の萬葉訓釋の先驅をなしたと覩られぬでもないが、これのみを捉へて關東學壇の優越を主張することは失當である。その他吾妻鏡の修史といひ金澤の文庫といひ孰れも文運の新興をこそ示せ未だ學術上一歩京師を抽んでてゐた徵候にはならない。若し宗教を引來たるならば、禪宗の東西對立は姑く論ぜずとするも日蓮上人の新宗教こそ關西無比の響きであつた。その論その文共に優に都下同代の士に當るに足りる。然し吾等が今論ぜんとする東西學術の對比には寧ろ之を除外するを穩當とする。從つて吾等は本論に入るに先ちて豫め室町時代に於ける東方學問の京洛に比肩し或は卓越せる事實を指摘して德川時代江戸奎運の隆盛をそこまで淵源に遡つて一應探求しておけば十分であると信ずるのである。唯吾等の忘れてはならぬ他の一方は西邊における

同代學術の進境であつて、京都との交渉外國との連絡上、防長の文運や薩隅の新學は上國の壘を摩し、或は筑豐に或は東肥に儒學普及の勢を見たことは注目に價する。殊に僧桂菴が其頃西國に培養した宋學の根柢から一説によれば近世藤原惺窩の朱註が出たとも云はれるし、實際近代初期における土佐の南學は勿論、大阪の朱子學も遡れば、この一學僧即ち周防に生れて京都に學び入明研學後は豐筑を經て薩摩に留錫した桂庵禪師の力に歸する。然し其規模より考へ其權威より察して關東の學術は西國の上に出でゝ居り、而も九州の地からも遙々學徒の遊學を見た程であつた。

關東學術の地とは何處ぞ。言ふまでもなく足利學校である。吾等は今更こゝに足利學校の由來や沿革を説く必要はない。唯かの桂庵の先進東福寺の岐陽をして「日本總足利一處學校、學徒負笈之地也」と讃せしめ宗祇の高足連歌師宗長をして「諸國の學徒かうべを傾け日くらし居たる體」に感ぜしめた此學校は單に一地方の子弟僧俗を聚めて初學入門の道を講ずる鄕校ではなくて、上國の禪僧京洛の縉紳の間にも重きをなし、經學を以て五山叢林の徒に對峙し殊に易學を以て天下に聞こえて居た。經書の訓釋註解に於て或は清原家と見を異にし或は洛僧と確執する樣な事もあつた。應永以後慶長以前の約二百年間東西近畿の諸地方から俊秀を吸引し育成した功績は蓋し人の意想以上に出て居る。武田信玄が或る易者の經歴を質して「占は足利にて傳授か」と云つた話が傳はつてゐるが、この一言でも戰國時代いかに同校の占筮術が名高かつたか判るのである。天海僧正はもと會津人であつて壯時京都奈良邊に留學した後にすら尚足利で研鑽した。京の名醫曲直瀨正慶も、その先輩なる武藏河越人田代三喜も、孰れも洛の禪院に學んだ者であるが、明に遊んで醫術を究めるに先ちて足利に斯學を修めた。

上杉憲實の書物寄進によつて名高い足利學校の文庫は三百年後の享保年中徂徠門下の俊秀が七經孟子や古文孝經を爰に取つて後其書が清國に傳はつて以來、その名聲支那の學者にも喧傳されたことは、廣く人の知

る所であるが、學校が歐人來朝の初期に方つて夙に宣教師どもに注目され日本最高の大學(ユニヴァシチー)とか日本にて最宏大な最有名な學院(アカデミー)とか呼ばれ、其價値は頗る誇張されて報告されたが、とにかく意外に重きをおかれて居た事は邦人に見逃がされて居る。天文十八年の秋七月南蠻船で鹿兒島に着いて初めて日東の地を履んだフランシスコ・シャギエル上人は名刹福昌寺(曹洞)の忍室文勝禪師を訪ひて宗論を試み又薩南に於て京洛近畿の諸大學(ユニヴァシチー)と阪東の一大學院(アカデミー)との評判を聞いて先づ驚歎措く能はざるもの丶如く日本發の第一信中に之を印度ゴアなる協會に報告し、其後の通信にも之を反復し、且つ是等諸學府出身の學僧を說破するためには英邁なる布教師を送らざるべからず、且又阪東の嚴寒に堪ふるやうに南國ならぬ獨逸白耳義の出身者を擇ぶの要ありと述べて居る。近畿諸寺院の學寮も足利學校と共に聊か買被られ氣味であるが、以て天文年中足利學の名のいかに西邊に響いて居たかの反映とするに足りる。それも其筈である、といふのは學校の校長には代々九州人が多く赴任し現に天文十九年に就職して在校三十年の永きに亘つた經歷のある第七世の校長九華の如きは大隅伊集院氏の支族であり、次期の校長宗銀は日向人、その又次なる第九世の閑室は後年德川家康に仕へた最初には伏見に學校を設けた樣な閱歷もあるが、これも肥前小城人でやはり九州人であつた。關東人が足利の校長になつたのは次の代の寒松が最初ではないまでも中興の姿である。それまでは九州閥で固めたものである。シャギエル上人が宗論を鬪はした忍室は福昌寺の十五世であつたが三世の仲翁和尙といふのは島津家の嫡男であつて應永の初足利に遊學して儒を學んだこともある。かやうに薩隅と足利との因緣は深かつたので、遠西の碩學宣教師をして驚異せしめた由來は遠いのである。唯九州のみではない、永祿年中京都および堺に居て布教に從事した名高い二人の伴天連は堺滯在中阪東の學校に誘引されたといふ。其一人なるフロイス(南蠻寺興廢記にはヤリイスと訛稱す)といふ宣教師は足利學校を日本唯一の綜合大學だなどと過襃して居る。

かやうに内外人に評判の高かつた足利學校はとにかく或點に於て京都の學術よりも一歩拔出て居たことは確かである。即ちこれを以て關西京畿の人が文物を關東に仰いだ端緒と見做し得るのである。

二

室町及戰國時代に於ける足利學校の名聲は遂に天正の末東征した豐臣秀次をして校長閑室（三要）を京都に拉し來ると同時に同校の寶物珍籍をも若干運去つて洛中に持來らしめる原因をなした。この時家康も秀次と奥羽征伐を共にしたのであるから右の事件を知つてゐたわけである。それが緣となつて後年家康は三要を登用し、先づ後陽成天皇の勅版事業に奬勵されて彼を使つて慶長四年から續々伏見に於て有用なる書物を活字で印刷させ、又太閤の伏見學問所の遺圖を承けて慶長六年同地に圓光寺學校を建て丶三要を學頭に任じ育英の企圖を起した。尋いで江戸でも足利の現任校長寒松を擧げて新設の富士見文庫の整理を命じた樣なこともある。この時代關東から拔擢された三要や寒松は別に學問に於て優れてゐたのでなくて單に文教事務に熟して居るが爲に用ゐられたので、學校の經營とか圖書の出版とか圖書館の監理とかの適所に置かれた適材たるに過ぎぬ。かくて三要は伏見及京都で僅か十年未滿學術事業に當つただけで其成績の今日殘る所は數部の活字版の書物の外に存せざるは遺憾である。

後陽成帝の勅版は家康の官版に數年先んじては居るが、最初刊行になつた孝經と其後の神代卷との外は文學物であつて錦繡段や五妃曲などが印刷されてをる。之に對して德川氏の官版は家語や周易、六韜三略や七書、貞觀政要や群書治要といつた要に經書兵書政書が活刷された。文學的でなくて實用向であるのは對照が面白いと思ふ。德川氏の方の印刷事業が伏見から駿府に移つてから、大藏一覽と群書治要とを銅製活字で印行してをるのに比べると、後水尾帝の皇宋類苑の銅活版は今度は數年後れてゐる。即ち京都が少し關東に後れてしまつた。然し京都には別に角倉氏によつて創められた新しい嵯峨本の出版もあり且幕府に先んじて直

江氏が文選の銅活字版などを公刊した例もあれば全體の出版事業に於ては京都の方が優つてゐたことが勿論である。況んや駿府の銅活字も元は京都人の助力に外ならぬのである。

伏見學校は家康が將軍宣下の慶長八年後京都の相國寺に移され、其後家康の退隱に次いで學頭三要も駿府に遷つて程なく寂しう、幕府直接の保護を失つたから有名無實の姿で數十年は經たものの、遂に寛文五年相國寺から洛北一乘院に移り、纔に當年の木製活字を保存して名殘とするばかりであつた。豊太閤と東照公との伏見に於ける學校の計畫は失敗に終つた。其間文權は僧侶より俗界に轉じたから、京都に於ても松永氏の講習堂伊藤氏の古義堂などが堀川の涯に立ち、殊に前者の如く所司代の公認ともいふべき私學が興る時勢だから前時代の遺物にして而も基礎の危ふき舊式の寺院學校は自然絶滅すべき運命であつた。現にこれ以前財政家の後藤庄三郎が林道春と共に京都に學校を建てんことを幕府に請願して許可を受け、地をも相し學頭には惺窩を擬したこともあるのを見ても伏見の學校は遷移後慶長中既に廢されて仕舞つたことが推定される。然るにこの新計畫もいざ實行の曉になると、大阪陣が起り全く挫折した。これが京都における學校設立の第二回の失敗である。次には長崎から向井元升といふ儒醫が洛中に遷居し寛文年中學舍の創設を官に建議した所が、將に許可を見んとして中間沮止するものがあつて、これも頓挫した。これが京都における學校創始の第三回の失敗である。爾來元祿の盛時を經て享保に至るまで京都は諸派の儒學並び起り、新學說競ひ立つ有樣であつたにも拘はらず遂に一の官立乃至公認の學校の設置を見なかつた。官府の權力と平民の實力とのいづれをも備へなかつた帝都は慘ましいものであつた。人材なきにあらず天時と地利を得なかつたためである。

江戸にて林家の私学弘文院が湯島に移つて昌平校となつてから四十年近くにもなつて大阪に懷德書院が起つた。創立の首腦は京都より下つた三宅石庵であり、

東都で外部から助力した三輪執齋はやはり京都の人で共に純雜の差こそあれ陽明學を修めた學者であつた。いづれも下は大阪町民の富力を基礎とし上は八代將軍の好學雅量を竢つて初めて成立つた仕事である。この機運に乘じて京都にも又もや一箇別種の學校が計畫された。それは言ふまでもなく荷田春滿の創國學校啓にあらはれて居る本邦未曾有の企圖である。春滿は伏見稻荷の祠官の家に生れた人で元祿寶永の頃十數年間江戸に遊學し和漢の學に達し享保中三たび東下して幕府秘庫の典籍閲覽を許され書物奉行等の國學上の疑問にも應答し、恰も大阪の契冲が水戸の義公の下問に對した所を幕府の學者に述べる好機會を得た程の境遇であつた。彼は東西兩都の復古的儒學の隆盛と非古典的神道の勃興とを見ては皇道の廢弛國學の不振を嘆ぜざるを得なかつた。其處へ大阪には懷德書院の設立が發表された。春滿の國學校創置の建議は幕府に呈出されたのは其翌々年にあたる享保十三年である。單に京都としてのみならず日本空前の此計畫が若し幸に成就したならば而して大阪の懷德堂の如く繼續し得たならば、京都は或は新に國學を伊勢の宣長や東國の篤胤から指導されずに濟んだかも知れぬ。國學校建設が許可されて而も地を東山の麓今の本願寺大谷の墓地邊に相した所まで進捗したにも拘はらず春滿の病氣の爲に挫折し終つたのは千秋の恨事である。これが京都における學校設立の第四回の蹉跌である。

更に三十年程下つて寶曆時代に於ては靖獻遺言の著者の高足若林强齋の門に出た西依成齋が師の望楠書院を繼いで大に門戶を張り、是より先き竹内式部もこゝに學んで其結果寶曆中公卿衆があゝいふ輕擧を敢てするに至つたのであるが、其後その西依成齋に學校建設の事を相談した公卿もあつた。淸原家の名流伏原宣條の如きは式部の事件にも加はつて居たのであるが、其後明和年中になつて菅原家の高辻胤長は大阪から中井竹山の弟履軒を聘して一年程學を聽いて居た。闇齋派とこそ違へ履軒の方は兄とは違つた性格を有つた奇物だから公卿を刺戟したに相違ない。とにかく履軒の刺

載も加はつて遂に高辻氏は京都に學校建設の計畫を起し、天明の初に至つて懐徳堂の竹山に建學の相談をし、竹山も之に應じて有名なる建學私議を上書した。吾等は竹山の建學私議と春滿の創國學啓とを以て近世京都中における學術經營に關する二大論文とする。後者が古文辭の妙を極めたる漢文を以て國學の理想を說くこと切なるに對して、前者が京紳興學の大綱より細目に渉りて懇切を盡して居るのは頗る實際的で、流石は浪華市學の學頭と思はしめる。高辻公に師聘された弟履軒の警告もあつたので竹山は寧ろ伊物兩氏の古學派の學者は擧げても闇齋派の學者は遠ざける方が安全だと公に注意を與へて居る。これは大阪より中井兄弟を聘せんといふ内意に對して固辭し其代りに斯く斯くの類の人を詮衡せよといふ案を提示したのである。高辻氏の計畫には伏原氏も贊成し、機から在京中の高山彥九郎も京阪の間に奔走したこともあつたが、遂に天明の大火に皇居の炎上などもあり、江戶では丁度同年に是迄二十年近くの間京都に帷を下して居た柴野栗山を登用して玆に寬政の異學禁令となり昌平校の振興となつた樣な景況であるのに、京都では又もや第五回の挫折を見るの不運に立至つた。

皆川淇園が弘道館といふ學問所を起したのは晩年の事で享和の末に企て、三年後即ち歿する一年前の文化三年に落成したのであるが、彼が興學の發起は二三十年來の事で遠く明和安永の交にあるとも云はれる。恐くは高辻氏の計畫に先んじてゐたのであらうと思ふ。教授には江村北海の兄弟にあたる伊藤錦里と淸田儋叟とを擬しておいた程である。然し機熟せずして晩年に至り漸う弘道館の設立を見たが、基礎固まらざるうちに歿したから遂に發展せずにしまつたのである。これが京都における學校設立第六回の不成功である。

斯くの如く京都には二百年間種々の方面から搢紳や將軍より幕府の官僚や學者自身に至るまでも儒學又は國學の庠舍を起さうと企てた者が續出したのであるが、其度每に挫折して仕舞つた。殊に八代の享保の盛期を逸したのは遺憾であつた。次には光格帝登位の初

期なる天明の好機をも捉へ損じた。寛政以後になつては最初時運は益々非なるばかりである。

獨り醫學に至つては京都は終始誇るべき人材を有つて居たから、醫學教育の機關はやはり天明の初に御醫畑柳安によつて洛西に設けられ醫學院と稱せられた。それも江戸における多紀安元の躋壽館設立の明和二年よりも十七八年後れて居る。多紀氏の私學は寛政になつて官立に昇格したが、畑氏の醫學院はさうは出來なかつた樣である。これも京地における學校難のうちに數へられよう。因みに附加へておくのは寛永年中名醫古林見宜が惺窩門下の儒醫堀杏庵と共に嵯峨に學舍を起して教育に從事して一時從遊する者が多かつたといふが、これも一時の事であつたらしい。

京都に學習院の出來たのは弘化年中であつて、其頃は士氣の昂がつた時代ではあるが學問の衰頽期であつて天明寛政時代とは大に趣を異にする。天明以前の山崎派の學風は衰へたが、其代りに大鹽の後であるから陽明學は京洛にも振興し、漸く堂上にも浸染する勢があつた。學習所創設の議は天保の末にあらはれ弘化中に成つたが、猪飼敬所が儒者の班に列するに過ぎなかつた。抑も設立その事は勿論維持も發展も衰滅期の幕府を相手であるから容易に運ぶことは出來なかつた。あんな時勢に皇立の學問所が健全に發達するものではない。從つて設立後十七年の文久二年には學習院が國事會議所となり、翌年には平野國臣が自著の國體辨を院に献ずるとか又院の監事になるとかいふ時勢となつた。幕府の昌平校が官僚的であり、大阪の懷德堂が平民的であつたのに對して京都の學習院が勤王的であるのは自然の數であるが、元祿享保の盛時に化育した官立民立の前二校と、嘉永安政期に漸く發育したばかりの皇立の京校とは勿論比肩すべきものではなかつた。

三

近世學術史上顯著なる事績は初章に述べた如き京洛に對する東國の比肩乃至優越が其一であるが、それと同時に貴族から學問が士庶に移り寺院から文權が俗界に歸した事柄が特筆される。學術を圓頂より俗手に回

復したのには惺窩道春の實力によつて別段葛藤なく落着したが、貴族名門は新進學者に對して最初は多少の抵抗力を有し、歌道や國學のがはては後年までも殊に凡俗蒙昧の者からは尊崇信憑を受け又自ら進んで新智識を取入るゝことが儒學の場合よりも遙に後れざるを得なかつた。然しそれとても二者の確執といふほどの事々しい沙汰は聞えなかつた。例へば惺窩の新註講義に對する淸原秀賢の反抗とか、契冲の歌道革新の意氣に對する淸水谷實業の難詰とか、東涯の唐官鈔出版に對する近衞家の抗議とか云ふやうな逸事は多少傳はつて居るけれども、要するに新舊思潮の衝突に過ぎないので到底新銳の學徒に對抗するだけの力は搢紳家にはなかつたのである。然のみならず慶長初年を下ること半世紀餘にして後光明帝が朝山意林庵を召して初めて朱子の新註を聽講し給ふたことを始めとし、中期以降淸家菅家の名流にして或は闇齋派の學說に感化され或は竹山兄弟を大阪に擧用し、更に公卿にて國學の智識を本居平田の兩泰斗に得る者も輩出するに至つたのも自然の勢である。中程には淸原氏より出でて幕府儒員の末に列したものさへあつたのも是亦怪むに及ばぬ。

斯くの如く觀察し來ると、寺院對俗界また貴族對士庶の問題よりも京都對江戶の問題の方が遙に吾等に興味を喚起すべきである。吾等は前章に於て京都の建學難を數へたてたが、公立官立學校の設立はなくとも、學者の箇人的力量を以て能く東方に拮抗し、併せて天下を指導することの出來たのは京儒の誇りだと言はねばならぬ。

京都が權力富力を離れて學者の淵叢となり得たのは何はともあれ歷史的潛勢力の發現に違ひないが、好學の君主が歷代輩出し給ふたことは申すまでもなく、而して空しく先賢の遺業を株守する公卿搢紳や最早學問の樞軸を形作らざる大寺舊祠なども京都における學問發達の空氣を養成し學徒吸引の威望を保持した點に於ては考慮に加へねばならぬ。權力富力のがはからの助勢としては、所司代等の奬學と豪家の聲援とをも算へ擧げる價値があらうが、京都住民の學術趣味も全く度

外視することは出來まい。

所司代では板倉勝重・重宗・重矩の三世父子叔姪殆ど相承け慶長より寛文に至る間凡六十年訴訟判決に名高きばかりでなく學事に關しても傳ふる事蹟がないではない。當時幕府が有用の材を江戸に拔擢した場合に板倉氏の戮力は忘れてはならぬが、重宗が洛儒三宅寄齋を崇信し又堀川に松永昌三の講習堂を建てしめたる結果幾多の俊才を輩出せしめた功績の如きは重矩が父重昌が嘗て備前に薦めた熊澤蕃山を召して新學を講ぜしめた樣な英斷と相俟ちて特筆すべき價値があらう。元祿に至つては所司代松平信庸が伊藤仁齋を招いて古學を聽いたのは、明和年間大番頭堀田正邦が二條在番中に大阪から中井竹山をして毎月一回出講させた事と共に史上に遺却してはならぬ。かゝる學問振興事業は京職の管掌が管掌だけに、板倉氏斷訟の令名が稗史野乘に嘖々たるやうに顯著であるわけにいかぬ。八代將軍治下の江戸に於て町奉行大岡忠相がひとり名判官としての譽れのみでなく各種の學者を登用するに努め其功勞の大なるのと、京都所司代等の奬學とは一つには見做されぬ。將軍の膝下と輦轂の下とは幕府の有司には全く別物であつた。

近代の初期にかけて洛西に興つた角倉一家の學事に關しては史上に傳聞する所が多々ある。古くは天文年中嵯峨天龍寺の僧策彦に從つて入明し醫術本草學を修めて歸つた吉田宗桂が居る。長子了以が河川開鑿の土木事業と安南通商の貿易事業とにおけるは、次子宗恂が父の學問を受けて醫學博物に通じて著書多く又惺窩と交り家康に仕へ、道春を惺窩に紹介して幕府文運の基を肇めるのに力を添へたことと共に、兄の實業弟の學問相反しつゝも幕初における京都文化の盛を示すものである。了以の子素庵はいはゆる嵯峨本の出版に不朽であり系圖の編纂は江戸に對して先鞭を着けた名譽を擔ひ、宗恂の子宗達は幕府に仕へて醫學本草に父祖の名を辱めず其著書を以て當代の學術史に鳴る。近世算術の始祖たる毛利重能の高足三家の一人吉田光由も亦角倉家に縁故があるといふではないか。享保以後の

京都文壇を飾る宇野士新士朗兄弟の如きが角倉氏の手代の家に生れ、文化文政度の京儒若槻幾齋が同じく角倉家の吏員であつた様な學者の出所經歷を探ると、洛西豪家の京都文運に關する寄與の獨り幕初に止まらざるを首肯せしむる。

斯くの如く京都の文運を釀成する幾多の要素は備はつて居たが、時勢はこの求心力の外に遠心力をして更に强からしめた。江戸學術の生育時代に方つては、相尋いで俊秀の學者が東方に簡拔され、其一時たると永久たるとを問はず京洛より出でゝ幕府に仕へ四方の大藩に聘せらるゝもの甚多く、慶長より元祿に至る初期凡百年間に京都が學者の生產地であり輸出地であつたのは、多年の蘊蓄の時勢の要求に應じて一時に發したものであつて當然な話である。而も英才は一時に盡きず京都をして此百年間學者の養成地聚散地である名譽を荷はしめたばかりでなく、新學說の發源地として權威ある位置を占めしめたのは京都の誇りである。出でゝ幕府及び紀尾水の三親藩をはじめ加州藝州さては會津熊本等の大藩に仕へた京都學界の俊傑が各其出身なる帝都の名を發揚したのみならず、其爲に帝都は精英を拔盡されたといふ憾はなく、種切れになるなどいふ掛念はなかつた。吾等は外に活動した人材が學術の普及發展の爲に盡した功績の花やかなるに對して、洛に留まりて內に育英の任に當り新學の源泉を作つた鴻儒どもが名利に戀々たらず却て京都學術界をして永く東國に又關西に重きをなさしめた其迹を偲んで尊敬の念を强くせざるを得ない。

學者が東西兩都の往來また京阪間の出入さては京洛と諸藩との一去一來は相當に頻繁であつて、爲に帝都をして寂寥たらしめずに濟んだのであるが、それが德川時代の前期と中期と後期とで頗る違ふ。東國及び諸藩の文物草創の時期に於ては割合に京都と江戸などとの間に學者の往返は盛んであつた。名醫が禁庭と柳營との間に東西で引張凧となつた樣な話は往々起つた醫史上の事件であつた。非凡の醫家が東西掛持で年々交替又は春秋輪番に勤めた例も屢々ある。林道春が一家

を擧つて東住したのは寛永十一年五十二歳の時で、それまでは東西に往返してゐたのである。惺窩門下の四天王の中、道春はさておき那波活所は中頃紀州侯（南龍公）に仕へ後江戸に出でて道春の管する寛永系圖の編輯に當つたが、遂に京に歸つて終つた。活所の高足鵜飼石齋は江戸人で京都邊に活動した。子孫に至るまで永く越前侯に仕へた伊藤坦菴も、父に專齋を有し弟の孫として北海を得た江村剛齋も共に活所の高弟であつた。惺窩門四天王の第三は堀正意であつて、初め藝州尾州（敬公）に仕へ、後江戸に出でゝ、那波氏と同じく道春の寛永系圖の編纂に加はつて遂に江戸に歿した。系圖編纂は幕府修史の手始であるが、道春は同門の逸足那波菅の二氏を拔いた上に、やはり藤門なる菅玄同の教を受けた人見卜幽さては自已の薫陶した京人辻某などを用ゐたのである。惺窩門四傑の第四には松永昌三がある。彼は羅山と共に京都人であつて、一頃加賀侯に仕へたこともあつたが、永く洛中の人となつて仕へず、所司代板倉氏の知遇を受け講習堂を開いて門下に木下順庵を出し、周防の宇野宮由的筑後の安藤省庵を育成したるが如く、大小の差こそあれ後世の影響計り知るべからざるものがある。京都に於て松永堀那波三氏の子孫及び門弟は概觀すれば江戸の林家の後裔及び其徒に比して、漢學上の功績は遜色がないと云はれようが、事業上に於ては背後に幕府を控へた丈江戸の方が勝味があらう。寶暦時代の堀景山や那波魯堂は同代の林家の學を超ゆること數等、また明和安永時代の伊藤江村清田三兄弟の詩文の如きは特に稱する程のものでもないが、猶那波門流の名を辱めない。江戸では寛政の初他家から入つて中興した述齋までといふものは林家は昌平校と共に衰頽してゐたのである。

吾等は以上惺窩門の四天王が東西における功業の跡を一瞥した。東における林家の盛運の必ずしも謳歌すべからずして洛に殘る惺窩門流の感化の偉大なることを一顧した。松永門下の木下順庵は師と同じく京人であり、萬治中師に次いで一時加州に用ゐられたが、江戸に徵さるゝまでの前半生は京洛の碩儒であつた。芳

州や白石や南海や觀瀾や南山が貞享以後東都における木門の名流であるに對して柳川向井兩氏は勿論紀藩に仕へた榊原篁洲、加賀と江戸とに召された室鳩巣も元來順庵が在京時代の門人である。篁洲は律學を以て優れ遂に紀洲より享保の治を導き、兼ねて拆衷學の淵源を作るを以て學術史上の位置は決して輕くない。鳩巣が松永木下の二代を承けて前田侯に仕へて遂に八代將軍に登用されたのと共に京都儒學史上に其名を留めておきたいと思ふ。木門最故參の老輩柳川震澤は師の東下以後は其名塾を督した。同門の後輩にして彼の養子たる向井滄洲は、京に在つて俊髦宇野士新と逸足石川麟洲とをして最初その門下に遊ばしめた。宇石二氏が京阪に於ける反徂徠派として名高きは言ふに及ばず麟洲が京に生れ浪華に下つて阪地木門の始祖と稱せられたのは、順庵の遺教の上國に及ぼした名殘りである。

四

徳川時代儒學諸派の新潮流はその源を京都に發した。惺窩の宋學を薩摩に於て文之の所傳に得たといふ一説の當否は儒學史上の難問であるから之を論ぜず、吾等は姑く近代朱子學の源流を惺窩以降に探るにとゞめておいた。朱子新註の祖述は而も洛中に前述の如く聊か淸原家の反抗に遭うた。搢紳家と共に古註の墨守者であつた眞言宗の洛僧恭畏は西遊して大隅に於て僧文之の新點に反對し、互に論難して前者の破收義後者の砭愚論などが著はされた。文之は是より先き入洛して東福寺に講じ更に禁廷に進講せんとして公卿の反抗を招いたやうなこともあつた。これらは慶長年間に前後相繼起した事件であつて、新學問の興るときに何時でも經過する路である。然し惺窩及び其徒の努力で慶長以來迅速に朱子學は京都に江戸に根柢を据ゑてしまつて、惺窩歿後三十五年の承應二年に後光明帝が朝山意林庵を召して經を講ぜしめられた頃には、もはや新に王學も唱へられ宋學の別派も起つたといふ始末で、程なく仁齋の古義說が洛に發表され、素行の程朱反對論が東に迫害されるやうに時勢が推移した。

寛文の昔東方に一鬨した山鹿素行の新說は十分發揮

されずにしまつたから之を論外に措くときは、江戸の新學說は正德享保の交における徂徠の復古學の成立と寶曆明和の際における金莪の折衷學の勃興とを特產とする。而も享保以後五十年間にわたる古文辭の反動に基く折衷學の新興は、爾來更に三十年を隔つる寬政年代より文政天保にかけて盛運であつた考證學なるものと共に、之を宋學諸派および陽明學派や伊物兩氏の古學派なんどの異學に對して一新學派と立てるには躊躇される。從つて上國に於て寬永末期陽明學を創唱した藤樹、土佐の南學を承けて承應前後に朱子學を國民的に發展させた闇齋、はた寬文の初年古義を唱道して復古の大潮流を漲らした仁齋、この三家に對しては、東國の一徂徠あるばかりである。況してや物氏の古文辭學の伊氏を俟つて始めて發するを得たのを想ひ、而も伊氏の創說以後五十年伊氏の歿後約十年にして京の新學說の漸く東に發揚されたのを見るに、洛の經學の潛勢力の頗る强大なるに思至らざるを得ない。

元祿以前の京都儒學は、前に惺窩及び其高足三四家が相起ちて宋學を固定したのと、後に諸流派競ひ興つて新說を主張し舊說を或は擴充し或は駁擊したのと、之を前後二期に區劃することが出來よう。後期に屬する新機運は承應より明曆萬治を經て寬文に亘る凡二十年を極盛とするやうである。明曆には其三年に惺窩門下の東西二傑たる道春と尺五とが歿して白石が東に生れ、前々年京都に帷を下した闇齋が東下するかと思へば、蕃山が次年には京に退隱する、本年筑前から貝原益軒が上京して修業をするかと思ふと、次年には長崎から向井靈蘭が一家を連れて移住して來るといふ始末で學界頗る多事である。仁齋が古學を唱へたのも其後數年のことである。この時分には順庵は四十年代で、寬文の末には京で少年の鳩巢を弟子に入れた。陽明學派では鵝學問の稱を得た懷德堂の創立者石菴や藤樹先生の再來と崇められ東西二都に去來した執齋なども寬文期の京都生れである。

京都が養成した遠來の儒者ではひとりこの期間といはず近世全期にかけて益軒を最大とする。彼の入洛は

青年期の明曆より晩年なる元祿まで前後二十四回と云はれるが、寛文に至るまでの十數年間の大半は京に費され、主として順庵に聽講し、松永氏と山崎氏とに接したのは僅かの時日であつた。一頃陸王にもかぶれたが、再び程朱に歸した。嘗て松永門に一遊した筑後の安藤省庵は後に朱舜水に學んで學統少し外れたが、益軒は全く寛文期の京都學界が育成したものと云はれよう。京に於て彼と親密であつた先輩の向井靈蘭は一方に於ては益軒と共に本草學者であつたが、丁度この頃には青年期の稻葉若水が仁齋の門下に遊び他日の名を成す素地を作りつゝあつた。

寛文の十年に古學を紹述した東涯が堀川に生れた頃から延寶にかけては、闇齋も京に在つて佐藤直方や淺見絅齋や三宅尙齋が入門した。直方は後東下し、江戶に門戶を張つて彼地に終つたが、尙齋は元祿寶永間東遊して教授し、後歸京してより以來門下に從遊する者多く搢紳列侯もその中に見えた。崎門三傑の中で他派からも、比較的穩健と見做された樣である。靖獻遺言の著者は初め彼に學んだ三宅觀瀾が水戶に仕へたのをも絕交したばかりでなく、皇室の御召をも固辭し師匠が神道に入つたので之に背くといふ風に狹量ではあつたが極めて眞面目であつた。終始京に居つて門下を養ふことは甚だ峻嚴で其結果高弟に若林强齋を出し强齋門下更に西依成齋を作つた。而して絅尙兩齋の流派の繁榮は延いて寶曆明和の事件を生んだのである。

闇齋學派の師承の嚴正明瞭なるに對して陽明學徒の起信は必ずも相承によらず常に獨發自得に出づるが如き觀がある。藤樹の起る所、蕃山の遺す所、執齋の受授する所の系統の――江西京洛における場合のみならず、大阪に於ても古くは石菴中ごろは竹山さては西遊下阪の一齋に至るまで乃至近くは後素などの王學の源流を見るに突發的にして又潛伏的なる狀を呈するは如何なるものであらう。幕末に於ける京都の陽明學派もさういふ風に見える。闇齋派が安永天明以後帝都にすら振はざるに反し、又異學禁令以後に於けるにも拘はらず三都に王學者の輩出して、前に教義派の試みて失

敗した所を獲得して大業の成功に資したのも、一つは彼等に經綸か伴ふが爲であると共に時勢の變動が然らしめたのではあるまいか。

京都第一の誇りは仁齋である。東西に復古の機運を作つた功は百世に朽ちない。國學界における復古主義は彼が古義說唱道以後に起つたものと認められる。浪華の契沖の古學がこれと關係するか如何、伏見の春滿の皇學が仁齋徂徠の復古學と連絡するか如何、又關連するとせば關連の仕方は如何等の問題には今は觸れないで進むが、ともかく國學もこの同じ機運に育まれたといふことは言へようと思ふ。仁齋が大にしては本邦の經學に小にしては京都の儒學に與へた功績はこゝに架說するを須ゐぬが、何はともあれ終身仕へず僅に公卿や所司代に講說した位なもので絕えず四方より聚り來る學徒を堀川の涯に引附けた學德は當代無比であつた。元祿太平記の如き書に、同時代の名儒中村惕齋と相比して兄たり難く弟たり難しと云つたのは、俗間一部の評で、益軒をして評して俗儒と毀らしめたのも恐らくは同樣な點を捉へたものかと思ふ。古義發揚の功に至つては、惕齋や益軒の如き純敎育家の共に談ずべき所ではない。物門の偉才春臺は嘗て仁齋の晩年に京都に流浪して居たこともあり仁齋を見たこともあるが、伊氏が學師傳によらず終身仕へず子に東涯あることの三點を算へて、物氏亦豪傑の士ながら伊氏に後れてあらはれ而もこの三點に於て到底及ばないことを認容して居る。仁齋の五子の中、東涯以下の四子は諸藩に仕へたけれども東涯のみは父と同じく終生古義堂を出なかつた。仁齋の門人は全國に擴がり數量に於て非常の數を占めたが、並川天民と長子東涯との外には、木門物門の如く俊傑天才に富まなかつた。大石良雄の如き赤穗義士とか堀田閣老を刺した少老稻葉正休とか聽講者中の異彩もあるかはりに傑出した人材はその門からは多くあらはれなかつた。仁齋歿後多數の門人は半ばは父の古學を紹いで溫厚なる東涯に從ひ半ばは師說に異を立てた天民の學風を仰いだといふ程で、その東涯も亦幾多の英才を育成し、東の徂徠と天下に拮抗

したのであるから堀川の流派は新學界における一大勢力であつた。

東涯は經學に於て父の衣鉢を傳へただけで獨創の新說を以て赫々の名を成したことはなかつたかはりに學識に於ては遙に父を凌駕し制度經濟の攻究より名物の彙集はた朝鮮の研究に至るまで其著述の種類分量頗る豐富である。物門の俊傑もさすがは東涯に敬服して居た。從つて徂徠直門の學者で東より來つて東涯に從遊した者もあつた位である。篠崎東海が同門の麒麟兒山田麟嶼と共に上京した有名な話も傳はる。麟嶼に與へる送別の詩を、徂徠も書き春臺も作つたのであるが、徂徠の詩の悠々不迫に反して春臺の詩の頗る東涯に當附けた所があるのは興味がある。春臺は中々元氣ぢやと東涯が見て苦笑したといふ佳話も殘る。東涯の門人にも奧田三角とか原田東岳とか澤村琴所とかいふ英才は出たが、物門の如き天才は輩出しない。唯東都から青木昆陽、大阪から僧慈雲の如き異彩ある門人をも出したのは特筆に價する。但し梵學者慈雲の少時東涯に學んだのは僅かな年月のことで別段の感化もなかつたらうが、洋學の開肇者昆陽の遊學は、意想外に重要であつた。昆陽は古義を奉ずる經學者ではなく堀川系統の中には異色ではあるが、東涯の學問の一面は確に昆陽に反映して居る。制度歷史經濟等にわたつて博洽であつて、彼の雜談漫錄を讀んで見ると、洵に東涯を偲ばしむるものがある。林家林門で固め木門及び其流派で占めた幕府の儒員の中に、僅に堀川派の一人を見出すことの出來たのは、有德公の包容力の大なるを示す。昆陽の東涯におけるが如く、仁齋の門に遊んだ本草の稻生若水醫學の香川修庵は昆陽の如く新學術の興隆に與かつたのであるから、堀川學の感化の及ぶ所甚廣大といはねばならぬ。

古義學の京都より東流して江戸に入つた形跡は纔に東涯の弟で蘭嵎の兄なる竹里が久留米侯に仕へて江戸の藩邸に永住したのと、彼を侯に薦めた仁齋門下の京人湯河東軒の東移したのとによつて、享保年間以降多少の感化が江戸に及ばなかつたのではない。仁齋門下

の並河誠所の地誌歴史を以て幕府に仕へ、東涯門下の青木昆陽が評定所儒者に擧げられ遂に書物奉行に登つた樣な傍系の活動はあつたが、古義說直系の影響は微弱であつた樣に見える。且つ篠崎山田二氏の西遊は時日頗る短く或は何等深く得る所があつたか如何と疑はれる。況んや麟嶼は東歸後程なく世を去つたのである。

（次號完結）

親鸞聖人談餘

文學博士
醫學博士　富士川游

天

余が本誌に掲げたる『親鸞聖人』に對して、諸家の批評を得たのは、余の光榮とする所である。諸家批評の要旨はこれを三段に分けて見ることが出來る。

第一　晩近の一元論は、要するに唯物論に外ならぬものである。畢竟、自然科學者の獨斷的、固陋的なる偏見を、遺憾なく暴露したものであると駁擊せらるゝこと。

第二　親鸞聖人の眞宗の教は一元論的のものでは無いと駁擊せらるゝこと。

第三　一元論は科學的の方法（メトーデ）なるに、これに宗教的の色彩を附するは不可なりと攻擊せらるゝこと。

まづ、第一の攻擊の内にて、一元論は唯物論に外ならぬといふ攻擊に就て、余は少しく言ひたいことがある。

第一に晩近の一元論と、唯物論との差異に就きては、一元論（Monismus）の本元たるオストワルド博士の論を引用するのが、余のために都合がよい。オストワル

ド博士は嘗て『基督教は一元論の前階級のものなり』(Das Christentumals Vorstufe Zum Monismus)と題して、演説せられた。所がこの演説は基督教專門の大家から烈しい駁撃を受けた。しかし、その基督教專門の大家達の言はれる一元論は、希臘の自然哲學者、殊にタ−レス一派の一元論であつて、輓近、オストワルド博士等が唱道するところの一元論ではなかつた。それでオストワルド博士は更に、『眞實の一元論と、虚假の一元論』と題する講演をして、反對の説を辯駁して居られる。(その講演の筆記はオストワルド博士日曜講演集第四冊 Monistische Sonntagspredigten von Wilhelm Ostwald. Leipzig. 1914. に載せてある。)

オストワルド博士の主張に處ると『唯物論者或は器械論者は、全宇宙をば活動せる物質に歸し、唯心論者或は觀念論者は、全宇宙をば精神の流出なりと説く。これは兩方共に同一の方法上の誤謬に陷て居る。即ち、この兩者の場合に於て、いづれも、單一から多般を發展せしめんとし、事實上に現存せる多般の因子を明にすることを忽にして居る。輓近の一元論は、何か唯一の原理を求めて、これから全宇宙が發展し來たりたることを假定するものでなく、寧ろ輓近の一元論者は、まづ宇宙を以て無限の多般なる渾沌(Chaos)なりと實觀し、それより、人の精神力が、科學に一致して、漸次にこの渾沌の中に秩序をつけ、或はこの渾沌より一の齊和(Kosmos)を得べしと説くのである。故に、輓近一元論者にありては、單一が思考の最初をなすものにあらず、却て人の思考の結末として單一が現はれる次第である。』これによりて、輓近の一元論と、タ−レス一派の一元論及び唯物論など丶、その外觀が一寸似て、内容の全然相異して居ることが明瞭である。

實に、輓近の一元論は、普通の哲學ではない、哲學的説といふことは妨ないが、形而上のものと混淆せらる丶憂があるので、これを科學的の方法(Methode)と言ふべきである。科學の歴史を見るに、多般から單一を求むることが、終局の目的であることは疑もなきこ

とであるが、この目的は、空想的又は形而上學的の論說に本づかぬものである。却て、實際はこれに反して、今日の科學は、すべて、多般(マンニヒファルチヒカイト)と單一とを同時に增加しつつあるのである。しかし一方では、多般の增加があると同時に、一方では單一の增加がある。この單一(アインハイト)を增加するのが、即ち眞實の一元論で、これ實に科學の責務(アウフガーベ)とする所である。

オストワルド博士はエネルギー論(Energetik)の創唱者で、その主張は、前に擧げた要旨の通であるが、世間の哲學者からは、常に誤解せられて居る。この事に就てオストワルド博士は次の如く辯明して居られる。『世の哲學者は、余の主張を誤解して、余がエネルギー原理を、彼のターレスが水の概念を以てせると同樣に、多般(マンニヒファルチヒカイト)の根本概念とすることに努め居るかの如くに言ふて居る。しかし、余はエネルギー原理から宇宙及ひ精神の多般が發展したものとは決して說かないのである。余は發育史上、このエネルギー概念を以て、科學上の說明の根柢とすべしと信ずるのである。』それから、オストワルド博士は、更に說を進めて、『從來の一元論は Monismus a priori で、輓近の一元論は Monismus a posteriori ある。』と言つて、大分詳細に一元論と、唯物論との相異を說いて居られる(Monismus und Materialismus von Wilhelm Ostwald. 1912.)。一元論の主張者が、明かに相異して居るといふのに、反對の諸家は、これを同一と論ぜられるのは不思議のことである。

それから、一元論が、廣い智識論の考察を缺ぎて居るために、唯物論的又は實證的偏見に陷つて居るといふ非難は、常に哲學の方面から受る所の非難である。自然科學は客觀的の經驗を本とし、經驗に據りて、客觀的の論を立つるものであるから、內省的思索を缺いで居るのは無論のことである。但し、これを辯解することは、新宇宙觀雜誌(Neue Weltanschauung. 一九〇八年以來)、一元論的世紀雜誌(Das monistische Jahrhundert. 一九一三年以來)等に載せられたる一元論者諸家の所論を反覆するに過ぎざるのみならず、主觀を主

としたる說と、客觀を主としたる說と、その立脚地を異にしたる議論を、事新しく喋々するにも及ばぬことと考ふ。故に、余は、この點に就ては、何事をも言はぬ積である。

地

第二に、眞宗の敎を一元論に結びつけることが間違つて居るか否かといふ議論に就ても、余はオストワルド博士の所說を引用せんと欲するのである。全體、余が『親鸞聖人』と題する一小篇を草したのは全くオストワルド博士の論說を本尊としたので、全くその請賣に過ぎぬのである。オストワルド博士が、自家の一元論の見地から基督敎を以て一元論の前階級なりと言はれたるに對して、基督敎よりは佛敎、就中、眞宗が一元論的であると說いたのである。それも別に一種の目的、即ち自然科學者の間に、宗敎を蔑視するの傾向があるを憂ひて、敢てこの一小篇を公にした譯である。それに、記述がよろしく無いために、余が意見の徹底せぬ點もあつたことと信ずるが、しかし、已に前段にも言つた通り、一元論の主張者たる、オストワルド博士が基督敎を以て一元論の前階級なりと唱道したのを受けて、佛敎殊に親鸞聖人の眞宗は、基督敎よりも一層、一元論的なりと言つたのであるから、余がオストワルド博士の論說を誤解して居らぬ限は、一元論の見地から、此の如く言つても差支ないことと、余は今日、諸家の批評を聽た後でも、確信して疑はないのである。此の如きことは獨り余のみではない。獨逸ボン大學敎授コックス氏(醫學士)も、『カントは一元論者なり』(Kant eni Monist ! Von Prof. Dr med. Jos. Kocks. Neue Weltanschauung. 1914. Heft I.)と題して、カントの所見を一元論的なりと論じて居る。余も同樣の考を持て居る。兎角同じ學問の徑路をたどるものは同じやうな所見に傾くものであると思はれる。

親鸞聖人其人のことに就ては、三井學士、大住嘯風、金子大榮等諸家から種種の點に就て批評を受けたが、これを只管、感謝するのみである。三井學士は親鸞聖人の研究者で、已に幾多の著述もあり、造詣の深

いことは推定せられる。余は固より親鸞聖人を研究するものではない。ただ青年の頃から、親鸞聖人の教を奉じ來りて、さて三十年の長日月を回顧して、今日余が智識の程度に於て、親鸞聖人の教が、ヘッケル、オストワルド一流の一元論に結びつけらるることを信じて居るのである。親鸞聖人の方から言へば、或は余の説は誤解の點もあるべく、又難有迷惑に感ぜらるゝ點もあるべしと信ずれども、しかしながら、數百年の後に出た吾人がその知識の程度に應じて、その教を體得することは、寧ろ親鸞聖人の本意であらうと思ふ。これ、余が前日一小篇を世に公にした本意である。

人

一元論は科學的宇宙觀であるのに、これに宗教的色彩をつけて、佛を作るといふことは不都合であるとの攻擊あれども、余はこれを不合理とは信ぜぬのである。人の知識に限界があるばかりでなく、日常の生活にありても、知力以外に、感情の要素も必要で、獨斷(Dogma)もこの點から見て、吾人の生活の上に必須のものであるから、科學的宇宙觀の上から、獨斷(ドグマ)を造ることは不條理でないと自から信じて居る。

余が卑文に對して、諸家が批評せられた要旨は、大要此の如く、余が擧げたる一元論的宇宙觀が『固陋なる獨斷であり、安價なる樂天的態度であり、それから來る無理解である』と論ぜられるのである。(本誌に載せられたる中澤學士の批評)。或は『ヘッケルの哲學は蒸返し哲學で、ヘッケルのウエルトレートゼルのやうなものは通俗的の露店緣日式の哲學である』といふやうな論法で、輓近の一元論を痛罵せらるるのである(日本及び日本人に載せられたる三井學士の批評)。その他、諸家の批評を一讀するに、多くは、哲學的思索の上から一元論を非難せらるるもので、兩者の間には氷炭相容れざるところの意見の差異がある。

近頃、米國オマハのプロフエッソール ヘンリー、オレリヒが、『哲學の二派』と題せる自著の論文(Neue Weltanschauung. Januar 1914.)に、今日の哲學に截然、區劃せられたる二派あることをいひ、その相爭ふ

主要點は心理學的にして、人の精神の起原及び機能に就て、意見を異にするものである、一派はヘッケル、ダルウイン學派と稱すべきものにして、精神は神經の機能にして、身體の有機的組織、生理的機能、及び外界の刺戟に關係するものなると說く、この派に屬するものはヘッケル、シエーフアー、スペンサー、ミユンステルベルグ、ヴント、ハックスレイ、ビユフネル、エンジエル、チンダール等諸家にして、自然科學者、殊に生物學者、心理學者等がこの派に屬する。他の一派は、ロッヂ、ベルクソン學派とも稱すべきもので、精神は神我的の本態(Ens)で、時には物質と結合して存するも、時には獨立して存すると說く、この學派に屬するものはロッヂ、ベルグソン、ラッセル、ワラース、ステッド、フラムマリオン、オイケン等の諸家であると言つて、詳細に兩派の所說を批評して居る。余はこの兩派の內では、甲の派の說を奉ずるものであるから、ロッヂ、ベルグソン學派の人の說とは、氷炭相容れざることを承知して居る。しかし、余は、反對諸家の說を傾聽し、これを他山の石として、難有拜受するものである。

過去に於ける日本畫の二大潮流

文學博士 瀧精一

日本の繪畫は文展や其他の展覽會で見ても判る通り、現在に於ては種々雜多の樣式があつて決して一定して居らぬ。併ながら大部分は何等かの點に於て過去の日本畫に關係がある。所謂舊派は勿論の事、新派と名の附くものでも實は何處かに過去の技術との關係は有して居る。夫故に現代の畫を觀るに就ても過去の日

本畫、即ち現代の畫の背景となる所以のものを熟知して居れば、一層深い興味を持つ事が出來るのである。そこでいま予は過去の日本畫に於ける重要なる事項として、それに二つの大なる潮流のあつた事を聊か說述して見やうと思ふのである。

(一) 二流の概要

二つの潮流とは何であるかと云ふに、その第一は甚だ古き時代より傳はり來るものであつて、之を假りに上代的の流れと云つて差支なからうと思ふ。第二は即ち中世以來に生じたもので、是は中世的の流れと稱し得る。西洋の文藝美術に於ても古代主義と中世主義なるものゝ存在はあるが、日本の藝術に於けるものもそれと相類したものである。但し彼と我とはおのづから歷史を異にするから、その內容に至つて相同じからざるもののあるは當然である。

第一の古代的なる流れの畫から始めて說明すると、先づそれは重もに宗敎的なるもの即ち佛敎的なるものに始まる。日本には佛敎の渡來以前に於ても固より工藝の術はあつたのである。けれどもそれは幼稚にして未だ美術として稱許される程のものではなかつた。眞に美術としての技藝の發育を見たのは佛敎が傳はつてから後の事であつて、從つて上代の我美術は佛敎美術を以て始まると云つて然るべきである。先づ佛敎的なるものが始めをなして、それに次いで更に宗敎的ならざるものが發達したやうな次第である。而していま上代的なる美術の性質を概括して攷へて見ると、それは眞面目で又莊嚴の性質を有して居る。その性質は建築にも彫刻にも繪畫にも共通である。特に繪畫に於ては佛像人物を畫くものが主位に在つて、佛像畫は殊更謹直で五彩燦爛、精巧を極めたものが多い。人物に至つては肖像を畫くもの亦古くより行はれて居るが、平安時代よりしてその技殊に發達をなし、早くは河成、金岡などの名手あり後には隆信、信實の如き上手があつた。此肖像畫の部類に於ても技巧上の特色は佛畫に於けると同樣なるものが多い。併ながら上代の我人物畫の長所とする所は肖像畫に在るよりも寧ろ歷史畫に在

る。歴史畫と云つてもそれは成るべく廣い意味に解したいと思ふのであつて、それには戰爭畫もあり、個人の傳說を畫いたものもあり、小說的物語を畫いたものもあり、又神佛の靈驗、神社佛閣の緣起を畫いたものもある。それ等の畫は大抵卷物である。筆者の著明なるものは鳥羽僧正、光長、信實、慶忍、隆兼、長隆等を始めとして、隨分澤山にある。所で此歷史的の畫は是れ亦眞面目で精密で彩法に於て苦心を見るものが尠なからぬ。又此類の畫は頗る寫實に長じて人物の形狀何れも眞を穿つものがあり、布局の上に於ても巧妙を極めたものがある。佛畫に於てはその雄大なる理想の表現を見るものが多いのであるが、繪卷物の歷史畫には奔放自在の結構を有して、而かも世間の實相を寫し驚歎措く能はざらしむるものが多い。

凡て過去に於ける日本の藝術に於ては外國感化の如何を攷ふる事は甚だ必要である。今ま上代的の繪畫に於ては即ち最初の間は朝鮮藝術の影響が甚大である。寧ろそれが日本の佛教藝術の基礎を作らしめたものと云つて差支ない。但し朝鮮藝術と云つてもその實は支那の藝術を傳へたものである。次に日本は支那と交通をなすに至つて、直接に支那の藝術を取つて手本となした。奈良時代、平安時代の繪畫は實に支那唐朝の繪畫に學んだものである。支那唐朝の繪畫は元來宗教畫と人物畫とに秀でゝ、その技巧たる頗る工妍の態を有する。それが直ちに我國へ傳はり來つて、我國でも矢張り同樣の樣式を發展せしめたのである。夫故に我上代の繪畫は之を稱して唐朝式なりと云ふも差支ない。平安時代の末より鎌倉時代に至れば、大いに自國的の發達も見られるのであるけれどもその基く所を以て之を云へば唐朝式なるに相違ない。

次に第二の中世的の流れと云ふは、既に鎌倉時代に萌芽したるものであるが、その大成されて上代的なる流れと對立するに至つたのは足利時代に於てゞある。足利時代に於ける此流の名畫家は例へば明兆、如拙、周文、雪舟、正信、元信、啓書記、雪村等である。要するに中世的の繪畫は精密に物の形を作るよりも寧ろ

磊落にして筆意を現はす事に力を用ひ、且つ彩色よりも墨の用法に意を凝らすことを特色とする。上代の流れに屬する畫に於ても筆法に力を示す事は全くない事はない。婦女を畫いてその長く垂れたる黑髮を描くに用ふる筆の如きは頗る鋭利の趣を示したものがある。又戰爭畫などを畫くものには筆力の見るべきものがある。けれども上代畫に於ては强ゐて筆の力を現はさうとはしない。然るに中世的の畫に於ては線に對して特別の意味を持たしめんとしつゝ其運筆に大なる力を示さうとする。又上代畫に於ても墨繪(すみゑ)と稱する態はあるのであるが、それは所謂著色畫以下のものとして扱はれて居るに過ぎない。之に反して中世畫に於ては著色畫よりも寧ろ水墨畫が主位を占むるやうな狀態である。又畫題に至つても兩者は徑庭がある。上代畫に在つては宗教畫と人物畫就中歷史畫が長所である所が、中世畫には道釋人物の畫もない事はないが、それよりも山水畫が得意である。山水を畫くに次いで又動植物の畫が得意である。此中世畫は要するに支那宋元兩朝の技藝の感化を蒙つて出來したものである。前の上代的なるものが唐朝式であると異つて、是は宋元式である。宋元の支那畫なるものは即ち山水畫に長じて用筆用墨を喧ましく云ふ。それが日本へ傳はり來つて是の如き中世畫の樣式をなしたに過ぎぬ。

又之を宗教の方面から觀察するに上代畫は天台宗眞言宗、若くは淨土宗と關係がある、就中眞言宗は尤も關係が深いが、中世畫に關係あるものは禪宗である。その點から考へても兩者の畫の區別は大凡想像し得られる。眞言宗の方から見れば、寺院内の裝飾はすべて濃厚にして莊重なるものを必要とするから、繪畫も自然莊重となる譯であるが、禪宗は之に反して淡雅なものを好む宗旨であつて之に適當するものは實に水墨畫である。殊に禪宗は宗教でありながらその美術には宗教的ならざる性質のものを奬勵する傾向を有する。是に至つては他の宗旨とは全く趣を異にする。さう云ふ次第であるからして中世畫は宗教に關係がありながら、寧ろ宗教を離れて發展するやうになつたのである。

以上予が二つの流れを上代的中世的と名けた所以は、畢竟その各々の起つた時代が、一は上代に在り一は中世に在るからの事である。然るに此二者に對しては古人は特別の名稱を設けて居る。即ち上代的なるものは之を倭畫と稱し、中世的なるものは之を漢畫と稱する。蓋し此名稱は足利時代以來設けられたものであつて、つまりその時代に新なる宋元式の畫が發達して、之を漢畫と名くるに依つて、それに對して從來存在する古代的の畫の流れを倭畫と稱したのである。倭繪と云つても眞に日本的なるものゝみではない、唐朝藝術の感化は甚大であるが、足利時代に至るまでには既に日本的に發達したるもの多く、又それは新なる宋元式のものに對しては國風なるを失はぬから、乃ち之を倭畫と名くるのである。但し普通に倭畫と云ふ時は宗教畫を除外して非宗教的なるものに於てのみ之を稱ふる事もないではない。或は從來畫家間にて云ふ倭繪はそれである方が多いやうにも見える。けれどもその非宗教的なるものゝ淵源をなすものは矢張宗教畫に在るから、兩者を兼ねて之を倭畫と云ふに差支はない筈である。

（二）　二流の實例（幻燈使用）

日本畫の二つの大なる流れに就ての大略の說明は右の通であるとして、是より更にその各々に屬する實例を示すの必要があるであらう。然るにその實例は若し玆に多數を出すを許され得るならば、却つて困難を感じないのであるが、然らずして少數なる代表品を選定するの要ありと云ふに至つては決して容易でない。とにかく予は今試に四個の例を出して之に就て說明をなして、以て上來述べた事柄の理解を充分ならしむるの料に供したいと思ふ。

先づ上代的の流れに屬する作例を二個出すであらうが、その一は宗教的題材の畫で、山越阿彌陀圖と名くるものゝ一例である。其圖樣は兩山の後方に阿彌陀如來とその眷屬なる觀音勢至以下の諸菩薩が白雲に乘じて現はるゝ形であつて、如來は說法の印を結び、勢至は合掌し、觀音は金蓮臺を捧げ、他の菩薩は伎樂を奏

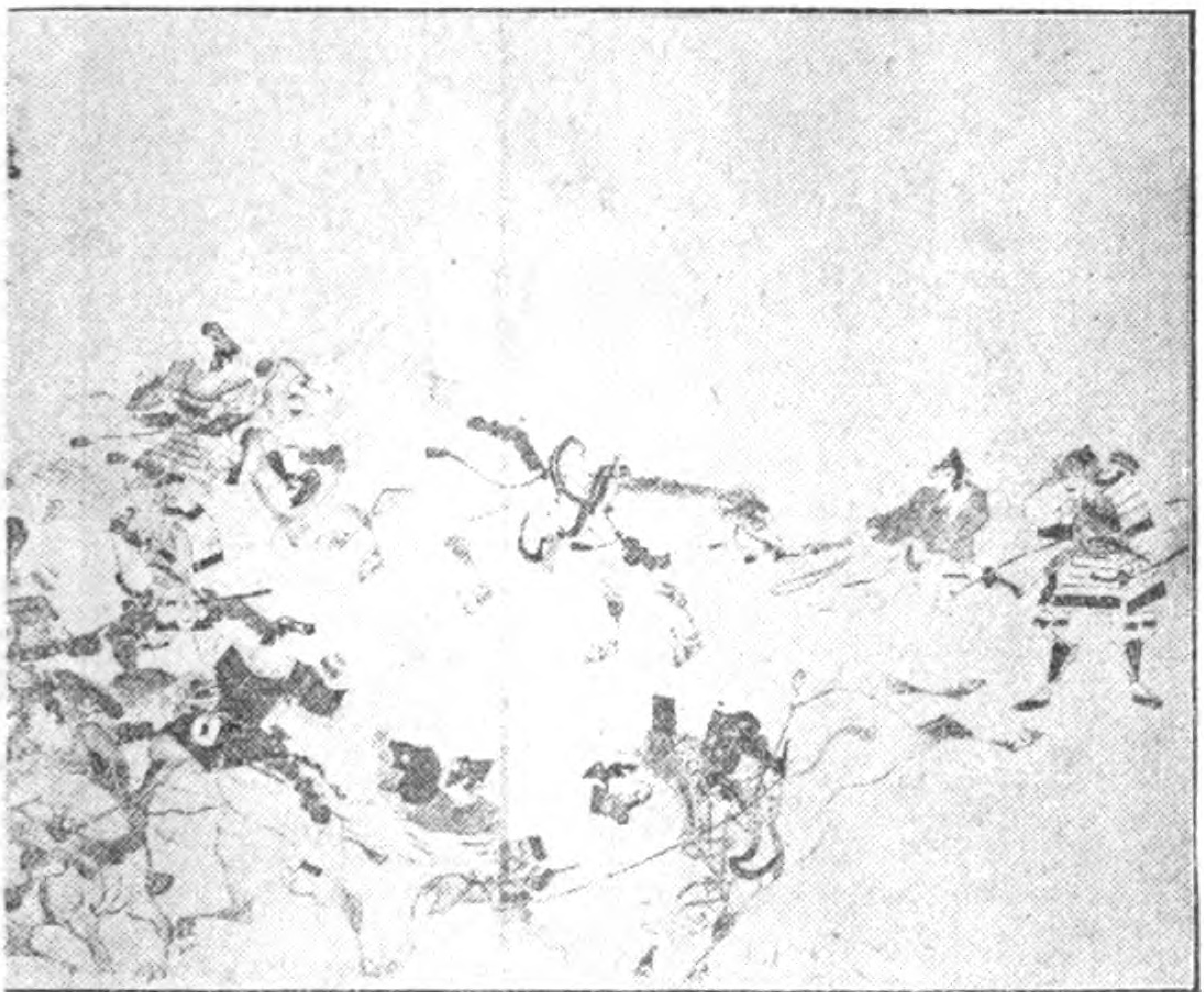
して居る。觀音の金蓮臺を捧ぐるは即ち阿彌陀を信念する所の往生者を引接する義であつて、その點に於て此圖は來迎圖の一種であることが判明する。著色に至つては前面の山は靑綠を施し、佛菩薩はすべて黃金色で肉髻、脣、樂器等に少量の朱色を點じ、背後の天空は深き紺靑色を以て塗られて居る。その配色たるや誠に溫麗にして且つ莊嚴を極めて居る。



上野理一氏藏山越阿彌陀圖

そも此山越阿彌陀圖なるもの丶起源に就ては佛家の側に一つの傳說がある。傳說に依ると此圖は惠心僧都の創意する所であると云ふ。惠心僧都は平安時代の中頃に出でた天台の高僧であつて、夙に淨土の敎を弘布するに盡

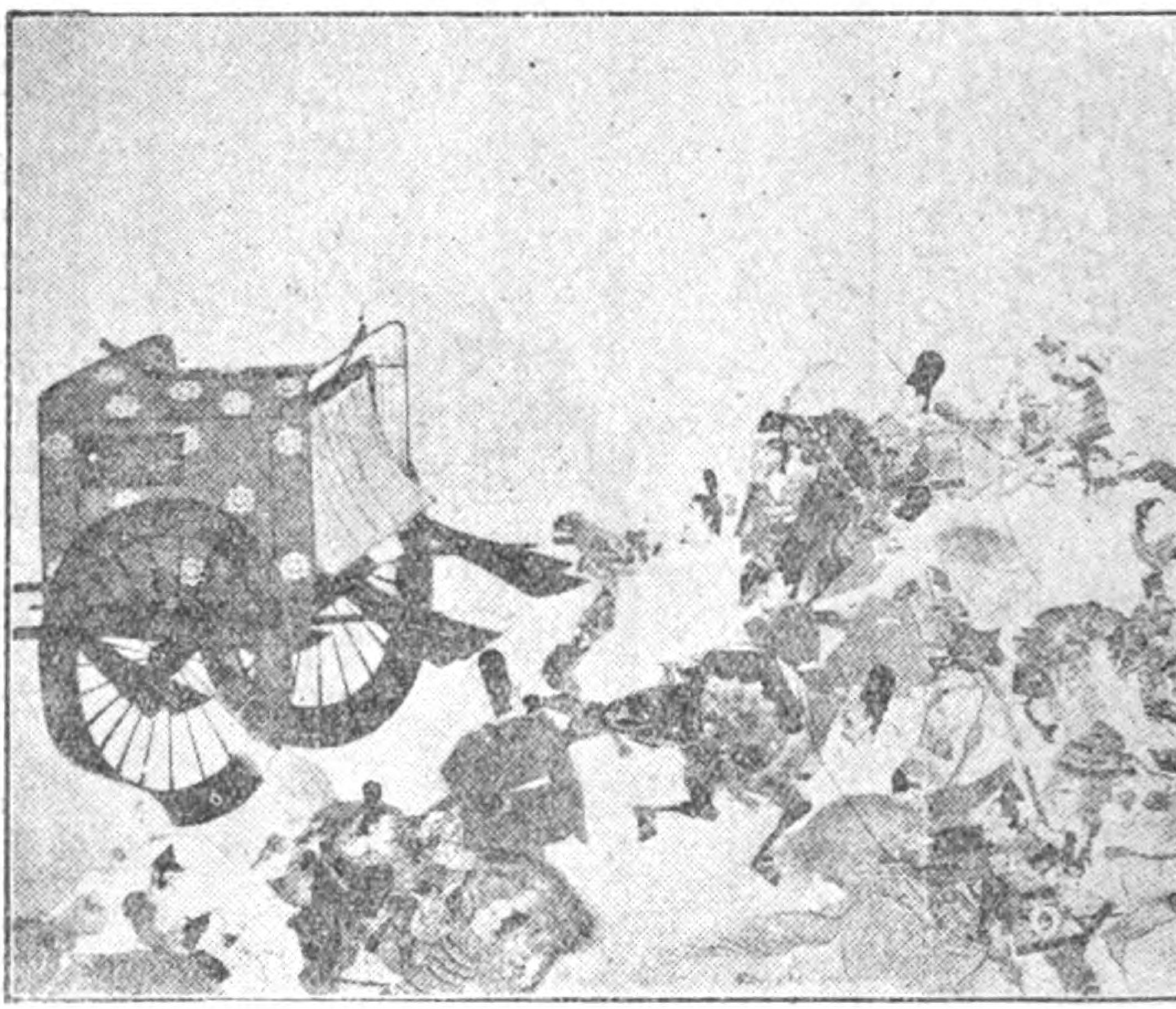
力して、特に彌陀を信念する行人の爲めの來迎と云ふ事を鼓吹した人である。僧都は來迎の事を信ずるの餘りにや、或時叡山横川の山中に於て彌陀來迎の姿を目擊したと云ふ。その天啓的幻像を畫に現はしたものが即ち山越阿彌陀圖である。今ま此に示す作例は惠心時代のものではない、それよりも少しく後の時代のものであるが、此種の畫圖中の大なる傑作である。いま右の如き惠心の傳説を聞いて更に此畫に對すると吾人は一層の興味を持たざるを得ない。如何にも此畫は自然の偉大なる力を理想化して作られたる一種の宗教畫たる感がある。その畫の心は恰も春の彼岸の頃に於て叡山の上に現はれたる日輪がその温き光を山上に映射するのを、遙かに琵琶湖を隔てゝ望む如き感がある。詳しく詮議すれば此山越阿彌陀圖なるものゝ始めをなすものは支那畫の中にあるやも知れぬ。併ながらそれに拘らず此畫の如きは惠心の傳説を徒爾なる妄語に終らしめずして、大いに意味あるものたらしむるものである。予は此畫の如きものを以て日本古代の宗教畫中最大傑作の一となすを憚からぬ。若し之を西洋の繪畫に比せんか、ラフエールの如きは未だ以て言ふに足らぬ。フラアンジエリコの純實敦厚なる態度は誠に能く



松平伯爵藏 平治

似たものはあるが、氣品に於て此畫の方恐らく彼れ以上ではあるまいか。

尙ほ此畫を細部に就て觀察すれば、その佛體を作る規矩の正しさ、自然描寫の精妙等多々驚くべきものがある。佛體に施されたる切金（金箔を細かく切りて以て紋様を作るもの）の用法の精微を極めたるは殊に注目を値すべきである。切金の法も本來は支那に發源して居る。けれども又その用法の發達は日本に於て始めて見られるもので、平安朝の末から鎌倉の初期にかけて我畫人がその法に於て世界無比の巧妙を致せしものある事は此畫が能く之を證明する。



物語畫卷之一段

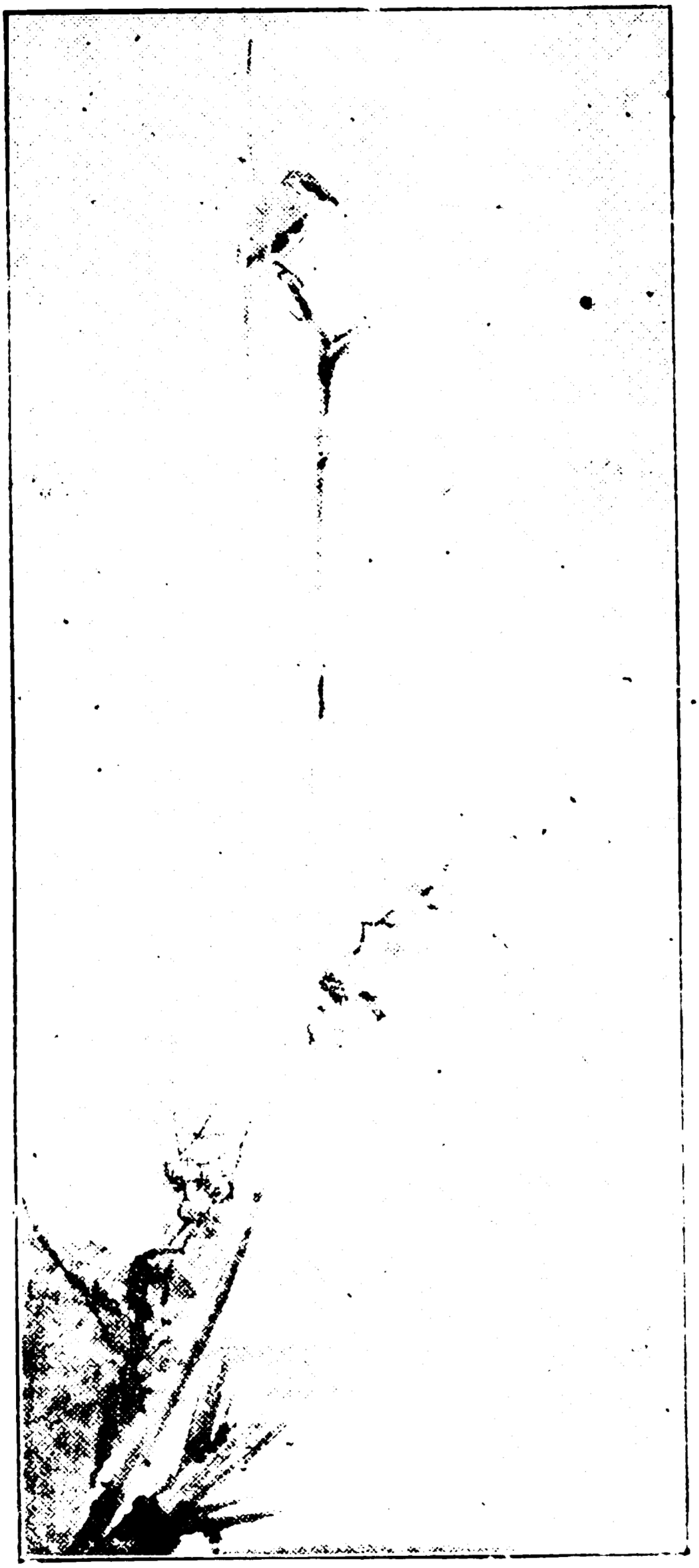
次に矢張り上代畫の例證として擧ぐるものは、歷史畫の部類に屬するもので、即ち保元平治の合戰を寫したる卷物の一部分である。此繪卷の筆者は何人なるか不明であるがとにかく鎌倉初期の戰爭畫の代表品と目し得らる。此一段は平治物語の中六波羅行幸の光景で、今や主上が六波羅へ行幸にならんとして經宗惟方以下多くの將士が乘輿を護り行く所である。俄かの行幸とて人馬皆奔躍して非常の混雜を極めて居る。是畫も矢張り著色は精美であり、又一般に眞面目なる態度を有する。固より前の山越阿彌陀圖の如き理想畫ではないけれども、亦一種言

外の興趣を有するもので、殊に人馬の活動を寫すに至つて絶妙なるものがある。凡そ寫實の法は靜かなる物體に於てするは容易であるが、動けるものに於ては困難多きを常とする。然るに我上代の歴史畫に於ては集團せる人物の活躍せる狀を寫して眞致を穿つものが多い。此畫卷の如きは正さしくその適例である。

次に中世的の流れなる漢畫の實例としては先づ始めに周文の水墨山水畫を出すであらう。是は三益齋の圖と稱して周文が應永二十五年に東福寺の中和上人の爲に畫いたもので、中和上人は松竹梅を愛して齋居を三益齋と號したに依て、いま上人の依賴に應じて此圖を畫いたとある。畫の上には當時有名の禪僧數人が賛を書して居る。周文自身も相國寺の禪僧であつて、足利時代に畫を善くせる者の中に在つては修禪最第一と稱せられた人である。故に其畫に殊更禪的の氣分の溢れて、幽邃にして淸楚 趣あるは怪しむに足らぬ。此畫


岩崎男爵藏周文筆三益齋圖

は先づその圖様から見て倭畫の流とは異る。周文は日本國内の景色を寫した積であるかも知れないが、その景致たるや甚だしく支那的である。宋元の水墨山水がその藍本となつて居るとは爭ひがたい。その用筆の大膽なる又墨を惜氣もなく用ひたるなど皆な宋元畫の様式であつて、周文は此畫に於て宋の馬遠あたりに法を求めたことが歴々として認められる。此一例を以てしても我足利時代の漢畫の特性は過半了解せらるゝ事と信ずる。



内田蘇作氏藏宮本武藏筆枯木鳴鵙圖

然れども尚ほその了解を充分ならしむる爲には玆に動植物畫の一例を示すを要する。此畫は枯木枝上に一羽の鵙の止まりし所を寫したもので、製作年代は足利期より少しく降つて江戸時代の初期に當る。然れども漢畫の直系に屬するものたるや論がない。圖様甚だ單調にして且つ水墨で、固より上代の倭繪には類を見ることなきものである。然るに是れ亦非常の名畫である。要するに是は唯枯木と鳥とを表はすに終るもの

としては見られ能はぬ。試に吾人の此畫に於ける感想を語らんに、先づその直立する一本の枯枝は之を畫くに大なる力ある筆を以てして、而かも殆んど一筆にて之を寫了して居る。是は固より凡庸畫家のなし能ふ所でない。此一筆の鋭き枯木の描寫に依て先づ此畫には雄壯の感が與へられる。而して之に添ふて餘に沒したる小枝には若干の葉ありて、其微動する狀は秋氣肅殺の想を生ぜしむる。かくて鵙鳥の其頂に在つて下界を瞰下するや、眞に崇高の感に堪へざるものがある。さて此畫は何人の作かと見れば畫中に「武藏」の印ありて、かの劒道の達人として又兵法家として隱れなき二天宮本武藏の作たるを知るのである。元來宮本武藏は種々の技藝に長じた人であつて、金工にも携つた。刀劒の鍔、緣、頭、目貫等の作例も往々之を見る。然れども畫は殊に上手で、學ぶ所は狩野派の一支流たる海北派であつたらしく、その眞蹟は間々世に存在する。今ま此畫が武藏の作たるを知るに至つては何人も之に對して更に感慨を深くせざるを得ない。或はその筆力の雄邁なるは劒法の手練を直ちに應用し來つたものであるなどゝ云ふ說も起るであらう。但し劒法と畫道とは同一ではない。彼を以て直ちに是に應用すると云ふ事の出來るや否やは疑問である。歷史家は兎角に事實と事との間に連絡を附けたがるもので、武藏の場合などには殊に彼の武と文とを關係附けたく思ふのは無理もない。けれどもその間に强ゐて關係を求めんとするは却つて危險ではあるまいか。併ながらそれにしても此畫がその筆と云はず墨と云はず、その全體に於て恰も歌を讀んで感ずる如くに戰國武士の高邁なる見識の表明せられたるを感ずるは事實であつて、その點に於て此畫が宮本二天本來の面目を躍如たらしめて居ると云ふは差支ない事と思ふ。二天の畫蹟尠からずと雖も此一品は殊に傑出して居る。又此畫は漢畫に屬して能くその特色を現はしたるものであるが、之を前の周文の山水などに比べると、更に日本的となつて居る事を認める。蓋し漢畫もその初期のものは宋元の直寫たる如き感があつたが、後には漸く日本的となつたもの

で、是れ亦實にその流の進步と云はざるを得ない。

（三） 近世に於ける二流の混融

先づ以上の諸作例に依て倭畫と漢畫との區別は大凡了解せらるゝ事と思ふが、さてその二つの流れは中世以來如何に相關係して存在したかと云ふ事を少しく述べる必要があらうと思ふ。二つの流れは足利時代以來近世に至るまで併存したのである。足利時代に於ては倭繪の方は漢畫に壓伏せられて、その存在はあつたけれども甚だ振はない。降つて江戸時代に至つては此處にも亦兩者相俱に存續する。尤も江戸時代には種々なる新らしい性質の繪畫が開けて、流派の如きも、その多き事前代未曾有である。浮世繪派は全く現世の風俗を寫して新らしき嗜好に投ぜんとする。圓山派は古き傳統に從ふよりも先づ自然に反照して寫生を努めんとする。文人畫は全く新らたに來つた支那畫の影響に依つて生じたもので、漢畫の一支流と認められざるにあらざるも、足利時代以來の漢畫とはおのづから別種である。是の如き新なる流義は開けたのであるが、それにも拘らず江戸時代の繪畫はその一面に於て正さしく倭畫と漢畫との二つの流れの關係を保持して居る。つまり江戸時代には二つの流れが相融和して種々なる流派の中に現はれて居るのである。その結果又舊時代に見られなかつた妙趣をも發揮するものがある。

二つの流れが相融和して諸派の畫に存在するとは何を以て之を知るかとならば、先づ狩野派の如きは本來漢畫の直系に屬するものでありながら、江戸時代の初期に於けるその派の畫家には、人物畫に於て倭畫の復興を企圖して以て之れを自家に折衷したものゝあるを見る。山樂の如きその點に於て尤も成功したものであり、探幽も亦同樣の試をなした。但し狩野派は江戸時代の中期以後に至つてはすべて形式的となつて見るに足らぬ。それから浮世繪の一派も仔細に見來ると、その畫法は倭畫より出で、或は狩野より出でゝ、二流の混合にあらざるものはない。岩佐又兵衛の如き自身光信の流たるを稱する位であるから倭畫を學びしは勿論であるが、別に又海北派あたりの漢畫系のものを學ん

だ形跡が歴然として居る。次に光悦宗達光琳の一派であるが、（是の一派は近頃之を光琳派と呼ぶ習慣になつて居るが、實は光悦派と呼ぶべきである）是にも兩流の混融を認める。要するに此一派は大いに倭畫而かも足利以前に屬する倭畫の名作に鑑みて復興を行つたものであつて、その上に又漢畫をも交へて居る。圓山四條と雖も之をその開祖たる應擧の畫に就て見ると、自然を寫生する以外に又古の倭畫と漢畫とを折衷して居る所を見る。さう云ふ次第であるから江戸時代に於ても二つの流れが畫界に漲つて居る事は事實とせざるを得ない。

然るに明治時代より現今に至つては如何であるかと云ふに是處にも矢張り古の二つの流れは其響を傳へて居る。然れどもそれが果して正しき善良なる方法を以て響を傳へて居るか如何かと云ふと疑問とせざるを得ない場合がある。明治の世となつては先づ漢畫の流れは江戸時代中期以來の狩野派の系統のものと、並に文人畫とに依つて代表者を得て居るのであるが、其實江戸中期以來の狩野家の畫の如きは漢畫の堕落したものである。文人畫と雖も未だ以て漢畫の眞髓を傳ふるには足らぬ。彼等に於ては所詮周文や二天の畫に見た如き卓越の趣致を覓むる事は難い。轉じて倭畫の方を顧みると、是は江戸時代に於て既に變化があつて、當時倭畫を自ら標榜する畫家即ち土佐家住吉家の如きものは實は喜ぶべからざる典型に捉はれて、眞に上代畫の趣致を傳へたものとは認められ能はぬ。江戸時代に於ては倭畫の特長は寧ろ自ら倭畫を名乘らざる他派の畫家に依て了得せられたる場合が多い。土佐住吉は江戸時代に於て既に右の如きものであるのに、今日に於ても猶ほ倭畫と云へば二家の畫に限つて見られるやうに考へるのは大なる間違である。然るに畫家も批評家も二家を以て倭畫を代表せしめんとするの風は今も猶ほ行はれて居る。是れ蓋し眞實なる上代畫を詳知せざるが爲めに然るのである。眞實なる上代畫の妙味を會得せざるものは、遂に又日本繪畫の妙は專ら漢畫の方にのみ存在するものと考ふるに至るのである。日本畫は

狩野家や文人畫に見るやうな筆墨を主とする磊落態のものでなければならぬ。それが西洋畫と異つて長所を有する所以のものであると云ふ說は屢々耳にする所である。如何にも漢畫にも長所はある。漢畫は日本畫に於ける一面の長所を代表して居る。けれどもそればかりでは決して充分とは云へぬ。日本には漢畫の外に、又上代的の流れなる倭畫と云ふものゝあるを忘るゝことは出來ない。過去に於ては兩者の流れが相並び行はれて、互に相競ひ、又相融和したのが尊いのである。然るにいま漢畫の一方のみを偏重する、漢畫と云つても實は江戸時代の狩野家や文人畫などを見て、それを偏重して日本畫の一般を論ぜんとする如きは決して當を得たるものでない。

要するに予は過去の日本畫に二つの大な潮流の存するを認めて、將來に於ても亦その二つの流れが健全なる狀態を保持して相並び存し、又相調和して進むことを望むものである。（學術講演會講演筆記）

新大學令案を論ず

法學博士　吉野作造

▽新大學令案

九月初め以來、矢釜しかつた高田新文相の學制改革案の細目は、九月廿一日大學令案として敎育調査會員に頒布せられた。全體十六ケ條より成つて居るが、其眼目は次の四點にあると思ふ。

(一)官立大學の外に公私の大學を認むること。

大學令案は、官公私立の各種の大學を認むるけれども、此等

の大學を平等に取扱ふか否かの問題は、明白に定めて居ない。從來唱へられた學制改革の聲は、一つには官私大學の平等待遇といふ根據に基いて居つた。然るに高田案は、此點に觸るゝことを何故か避けて居る。此大學令は、官私兩大學に通ずる所謂通則なりといふけれども、修學年限、學課目及び其程度については、官立大學の爲めの特別規定の存在を認め、暗に之と公私立大學とを區別せんとするの意味を、第十一項にあらはして居る。加之、今日官私兩大學をして、同類視する能はざらしむる所以の根本要素たる官立大學の特權については、何等言及して居ない。只僅かに言及して居ることは、官立も私立も同じく大學といふ名稱を冠することと、學士博士の稱號を與ふるを得ることの二點に限る。其外の事については、兩者を同等に待遇するのか否か、甚だ不明瞭である。此點に於て新大學令案は、徹底したる、又從來の世間の輿論に應ずるところの案とは言ひ難きが如く見える。

(二)修學年限を四ケ年以上とすると。　大學には中學卒業生を直ぐに入れて、從來は高等學校に於ける豫備教育と合せて、六ケ年又は七ケ年であつたのを、四ケ年以上といふ事にするといふのである。之れ丈けで觀れば、中學卒業生に四ケ年以上の教育を施すものを、一般に大學といふのであつて、四ケ年以上といふから一方には四年の大學もあれば、他の一方には從來の通り六年、七年の大學の存在するをも妨げない。然るに學制改革といふ問題の起つた最も重大な原因は、年限短縮、殊に帝國大學の年限短縮といふことである。帝國大學が今の儘で存在することを得とすれば、新大學令案は何等輿論の要求に應ふるものではない。此點に於いて、此案は現に隨分世間の物議を醸したやうである。尤も當局者は、之は只通則である、帝國大學の處分は、通則成立の後に、別に之を定むると言つて、暗に他日帝國大學の年限短縮に着手すべきの意を仄めかしては居るが、然らば帝國大學の修業年限を、どの位まで短縮する當局者の考であるか。此點に關して高田文相が、他の機會に於て述べた演說等に依つて觀ると、

甚だ明確な意見を持つて居ないやうに見える。マサカ官立大學を四年に引下げやうといふ意味ではあるまい。然しこゝに、四年以上の教育を授くる所を皆大學といふことに決めれば、四年の大學といふもの發生を拒む譯けには行かない。然らば此新制度の下に於ては、四年の大學と、五年若くば六年七年の大學と、所謂高低二種の大學が生ずる譯になる。新大學令は果して斯くの如き程度を異にする各種の大學の存在を是認するものなりや否や。此點は實際問題として最も明白ならしむることを必要とする。そはいろ〳〵の種類の學校を設けて之に大學といふ同じ名稱を付けるといふことは、其事自身には何も差支はなからうが、只之に關聯するいろ〳〵の制度の上に、例へば此等學校の卒業生及び教師、若くは教師の資格に關し、又同じく官公立の學校ならば其教師の官等・俸給等に關する規定を、同一の法律で決めることを得るや否や。低い學校の卒業生や教師のことを、高い學校の卒業生や教師のことと、一所に規定することが出來ないといふやうな實際上の不便があつて、爲めに別々の法律を作らねばならぬといふやうな事があるならば、何も此異つた學校を、同一の大學令といふもので規律せねばならぬといふ必要はあるまい。此等の點に關して、新大學令案の定むるところは、極めて曖昧である。

(三)女子の大學入學を認めたること。 女子に公然、男子と同等の高等教育を受ける機會を與へたることは、新大學令案の著しき特色である。之には世間に多少の議論もあらう。又之を實行するについては、いろ〳〵細目の研究を要する點もあらう。然し此等の細かい點を別として、抽象的に此女子の入學を認めるといふ事は、確かに進歩せる思想を抱ける者の賛成を買ひ得る點であると思ふ。

(四)博士學士を稱號となし、之が授與權を各大學に認めたること。 從來は、學士は稱號であり、博士は學位となつて居り、而して博士號の授與權は、文部大臣に專屬して居つた。然るに新大學令案は、兩方を共に稱號となし、而して之が授與權は、官私大學平等に之を

有することにした。此案に依れば、程度の低い學校の出身者も、程度の高い學校の出身者も、同じ稱號を冠するといふ事になる。大學の程度を總て略ぼ均一にするならば、各大學等しく平等の授與權を有するも差支へないが、程度の異るものに、同じ稱號を與へるといふのが可笑しいと思ふ。若し學士博士の稱號を、程度の高い學校のみで獨占するのが不都合だといふならば、初めから斯かる稱號を全廢した方がよい。世間では學士博士の稱號は、何處の國でも大學が與へる。大學と此等の稱號とは附き物であるといふ。併し此前提から出發して、滅茶苦茶に程度の低い學校を作り、之に大學といふ名を冠して、之が大學だから稱號授與權を持たしめねばならぬと言ふのは、些か亂暴の議論と言はざるを得ない。學士博士の稱號を存する以上は、其稱號の授受の標準としては凡そ一定の目盛りがある。その目盛りに合する丈けの稱號を與へ得る程度のものでなければ、大學とは言はれない。只大學といふ名があるから稱號を與へ得るといふ譯のものではない。大學たるの實質を具備するといふ約束の上に初めて稱號授與權は認めらるべきものであると思ふ。

之を要するに新大學令案が、明白に宣明して居る特色は、女子入學の件と、官私平等の稱號授與權とである。而して學制改革問題を發生せしめた根本の點、而して世人の最も聞かんと欲する官私兩大學待遇の點と、官立大學の年限短縮の點に關しては、やゝ顧みて他を言ふの嫌ひがあるやうに見える。尤も世間では、一歩立ち入つて、文部當局者の意向を忖度し、多分こんな風に此二點は解決する積りであらうといふ見當をつけて、いろ／＼議論して居るやうである。それ等の議論の中で、私の觀るところでは、官立大學の特權を廢して官私兩大學の待遇を平等にするといふ點については、多くの人の說が略ぼ一致して居るやうである。只官立大學の修學年限を更らに大いに短縮すべきや否やについては、文部當局者は之を以て世間一般の要求なりと言ふけれども、之には案外反對說も少からずあるやうだ。此點は未だ世論一に歸せりと見るべき根據

がない。從つて學制改革問題を論ずるには、今なほ此の年限短縮の可否論から出發して行かねばならぬ。學制問題の起つた沿革から云つても、年限短縮論が議論の根本であるのである。

▽學制改革問題の沿革

今日學制改革問題の世間に矢釜しく唱へらるゝ原因は、實は決して單純ではない。一つには官立大學に對する反感も表にはいはないけれども、確かに裏面には存して居ると思ふ。官立大學が現に直接間接國家の厚き保護に浴して居る點を思へば之も無理はない。早い話しが年少子弟の欽羨の的となつて居る卒業生に對する銀時計の恩賜といふ如きも、獨り官立大學にあつて私學にはない事だ。獨り優等生ばかりではない、一般普通の卒業生でも官學出身は幾多の便宜を各種の方面に得て居る。之等の事情を綜合して考へれば、官學以外の人が不平を抱き、一轉して反感を抱くに至るのは、強ち無理とは云へないと思ふ。次には官立大學の内容改善を要求するといふ考もあるやうだ。帝大卒業生が餘りに常識を缺いて居るとか、實際に使つて見て、役に立たないとかいふやうな議論は、暗に内容改善を要求する聲である。然し此等の點に優つて、最も切に感じられて居る考は、疑もなく年限の短縮といふことである。もう少し早く大學の修業を終らせたいといふところから主として此問題は起つたのである。斯くして學制改革問題は、大學制度の改善といふことを中心として、こゝ數年間、朝野人士の間に論究せられ、又歷代の文部當局者の懸案となつて居つた。

今此問題の最近の沿革を言へば、去年の春、時の文部大臣奥田義人氏は學校關係者以外の意見を廣く徵せんとして、普く政治家・實業家方面から委員を擧げて、教育調査會といふものを作つた。而して此調査會に、奥田文相自ら年限短縮の目的を有する一改正案を提出したのである。同氏の案は、帝國大學及び大學校の二者を認め、前者は綜合制にして官立、後者は單科制にして官公私立とし、而して兩者共に二年の準備教育を

必要とするといふ事にした。即ち高等學校に於て、一年を短縮せんとする案である。尤も同案は、高等學校の入學期を四月に繰上げ、大學の學期も從つて四月を以て初める事にせんとしたから、實際に於ては、一年三ヶ月の短縮になる。此案も當時隨分議論の的となつた事は、今尚我々の記憶に新なるところである。次で現內閣となり、所謂一木案なるものが現はれた。これより特別委員案、又は最後に菊池案が現はれた事は人の知る所である。菊池案に依れば、大學の程度をずつと下げて、中學卒業後四年とし、之に修養を主とする所謂學藝大學、專門敎育を主とする專門大學との二種とし、前者は普通學三年、專門學一年。後者は普通學一年、專門學三年を修むる事とするのである。現在の帝國大學は、大學院といふ名稱の下に、更に學術の蘊奧を極めんとする者に對する設備とするといふ案であつた。而して敎育調査會の多數は之に贊成したのであるが、これ皆之に依つて、大學敎育の年限を短縮することが出來ると考へたからである。

斯ういふ沿革があるのであるから、學制改革を論ずに當つては、年限短縮といふことを度外視することは出來ない。されば新大學令案は官立大學の年限短縮問題を巧みに避けては居るけれども、然し世間では常に年限短縮論を問題の中心として、學制改革を論じて居るのである。

▽年限短縮論の根據

年限短縮論が假令世間の輿論であつても、我々は漫然之に贊成する譯けには行かぬ。何が故に年限を短縮せねばならぬか。又どの點まで年限を短縮すべきものであるか。といふ理論上の根據を聞かなければ納得は出來ないのである。然るに世間の議論の調子を見ると、只漫然大學の修業年限が長過ぎると言ふに止る。尤も近頃のやうに、帝國大學卒業生の平均年齡が、多い年には滿廿八に達し、最近數年間の平均を見るも滿廿六年六ヶ月である。平均が之れであるから、中に三十を超へて卒業する者の少からざるべきは、之を想像する

に難くない。數へ年廿七八から三十以上になつて、やつと大學を卒業するといふのでは、別に矢釜しい理屈を言はなくとも、無論余りに長過ぎるといはざるを得ぬ。然し之は修學年限を一二年短縮したからと言つて、解決が出來る問題であらうか。一體制度の上から申して、學生が順當に即ち停滯せずに課程を修了するものとすれば、滿廿三歳若くは廿四歳で立派に卒業が出來る筈である。然るに廿六七や三十になつてやつと卒業するといふ現象を見て居るのは、之は實は在學中時々落第するといふ事もあるが、主としては高等學校の入學試驗といふやうな關門があることが主たる原因ではあるまいか。斯く考へて見ると、所謂漠然長過ぎるといふ批難は、修學年限の法律上の定め方が長いといふ事よりも、他の方面の制度に缺點があるからではあるまいか。若し然らば、論者の漠然と難ずるところの不滿は、所謂年限短縮といふことでなく、他の制度の改革に依つて之を解決することが出來るものではあるまいか。他の方面に十分の改革を加へれば、落第せぬ限り、滿廿三若くは廿四で立派に卒業が出來るのである。二十三、二十四でもなほ長過ぎるといふならば、こゝに初めて制度の上で更に年限を短縮するの必要が起るのである。然らば問題は、こゝに一轉して滿廿三、廿四にして尚長しといふや否やといふことに歸する。

此問題に對して、所謂長過ぎるといふ議論の根據に、二つの説明があるやうに見える。第一は教育調査會に於ける早川千吉郎氏などの説くところで、今日の大學卒業生は使つて見て役に立たぬ。事に當つて更に調査立案の能力(新聞の報導による)がない。之れ修學年限徒らに長ければなりと言ふのである。然しながら此説は恐らく誤解ではあるまいか。私の考では、第一に學校出の者をば使つて直ぐ役に立つと思ふのが誤りである。學校出の者を實際の仕事に役に立つやうにするには、更に相當の練習を與ふるを要する。相當の練習を加へても、物にならぬといふならば一應の理由がある。只イキナリ、役に立たぬと無能呼はりをするのは甚だ無理である。且予は現在の帝國大學卒業生は、平均し

たところ、訓練を與へても駄目だといふ程に無能であるとは思はない。尤も中には最高學府の出身者としては、頗る無能の者もないではない。而して此等の無能者は槪して年の若い者よりは年の老つた者に多い。然し之とても單に年をとつたから無能だといふ譯ではなくして、本來能力に於て稍々劣等なものであり、爲めに屢々試驗にも失敗して意氣銷沈し、それに大學の敎育の方法がまた詰込主義で、自修自發の機會を與へないといふところから、益々無能になつたものであらう。然らば之は制度と內容との改善に關する問題であつて、必ずしも年限短縮と直接の關係ある問題ではないと思ふ。第二には現在の社會は、今日の大學卒業程度の人物を必要としない、もつと程度の低い且若々しい人物を要求するといふ點から、年限短縮論を說く者がある。併し社會の要求する學力の程度といふものは、決して一つに極まつたものではない。社會は判任官も要すればまた高等官も需要する。而して今日の大學の供給する人才の學力は、果して社會の高い方の要求に比して著しく優れて居るだらうか。私は寧ろ其反對でないかと思ふ。若し夫れ社會の低い方の需要に應ずる平凡の人物を供給することは、是れ固より大學の目的ではない。此等の者は普通の專門學校の任務とするところである。世間の需要は、數に於ては固より高い所よりも低い所に多い。官吏で言へば判任官程度、學校で言へば、小中學敎員の程度を多く要求するからといつて、それよりも高い程度の人間を作る設備は、之を廢して仕舞ひ、而して低い一般の需要に應ずる人間を造るものに、大學といふ名前をつけて遣らうといふのは單に名稱の問題なら何でもない事であるが、一國の敎育制度の問題としては果して適當であらうか。去れば此議論は最高等の敎育の必要を認めず、大學といふもの丶本來の性質を認めない暴論である。世間で廣く需要する底の人物の養成は、他の學校に任かして可なり。其上に尙高い敎育を施す機關を必要なりとして、國家は大學の設備に金をかけて居るのである。從つて大學の修學年限が多少延長するのは已むを得ないのである。

斯く論ずると、年限短縮論には餘り明確な根據はないことになる。そこでいろ／＼考へて見るに、若しもこゝに年限短縮論の主張に向つて、明白な根據を與ふる理論ありとするならば、それは凡そ人間は何歲頃を以て敎育を受くる時期と、活動に入るべき時期との境目とすべきかといふ醫學心理學乃至敎育學上より來る

所の原則でなければならぬと思ふ。私の考では、單純な議論としては教育は出來る丈け高い方がよい。大學の程度も出來る丈け高くし、即ち出來る丈長い間、出來る丈け高尚な事を教へたり研究さしたりすることが、國家の發達の爲めに必要であると信ずる。只て、に「出來る丈け」といふのは、即ち人間として最も適當なる時機に於いて活社會に入らしむることを妨げざる範圍といふ意味である。そこで問題は凡そ人間は、何歲位までに教育を受け終らしむべきものであるかといふ議論に歸する。尤も此問題について、私自身には答案がない。けれども之は教育者、心理學者、醫學者等それぞれの專門家の說を聞けば凡そ見當はつくことと思ふ。此等の專門家の說によつて、年齡の最高限を定め、其範圍内で、出來る丈け高尚な實質のある學問を授けるといふのが、大學制度を論ずるの根本であらねばならぬと思ふ。年限短縮論も此標準から出て來なければ畢竟沙上の樓閣たるを免れぬ。現在の制度による卒業年限が、此標準年限より高いといふ時に、初めて短縮論は合理的の根據を得る。然るに我國の當局者及び教育家は、此根本問題をば全然閑却して、只徒らに薄弱なる根據の上に立つて年限短縮を叫んで居る。恰かも暗中に物を探ぐるが如く、更に明確なる論點に觸れないのは、怪むに足らないのである。

▽現在の制度に改革の餘地ありや

そこで現在の制度に年限短縮の餘地ありや否やの問題は、右述べた標準年限に基いて決せらるべき問題である。而して此標準年限は、各專門家の說に聞かなければ明かでないが、西洋各國では大抵廿一二歲を以て修學の終了期として居るから、大抵此年配が標準となるものと見て差支へなからう。そこで此假定の下に、暫らく議論を進むるならば、現在の制度は一二年長過ぎるといふ結論に達する。尤も我が國は後進國であり、一方には漢文といふ國語學修上の難關があり、他方には外國語修得といふ難關もあるから、西洋人と同じ年限では、同じ程度の教育を得ることは出來ぬかも知れない。從つて程度の低下を憂ふる限り、西洋よりも幾分が高く年限を定むるの已むを得ざる事情がある。而して一二年の年限短縮は必ずや程度の低下を來すべきは致方がない。然し若し一二年短縮せねばならぬといふことに決まれば、出來得べくんば成る丈け程度を下げぬやうにして、短縮の目的を達したいものである。

之には短縮と同時に學科目の配置を改め、其他いろいろ内容の改善を加ふることを必要とする。今此趣意により大學及び高等學校の制度の上に、何等か改革の餘地はあるまいかといふに、之について予は大體次の樣な意見を有つて居る。

第一、大學については、學力を低下することなく年限を短縮することは不可能であると思ふ。今日の大學の程度を以て、之を高きに過ぐると觀る者は殆んどない。適〻卒業生が實際的の常識を缺くといふやうな批難はあるが、之は決して學科課程が高過ぎるためでは無い。他に原因がある。予の考ふる所に依れば、右樣の批難を避くる爲めには、大に現在の學科課程などにも整理するの餘地はあらうと思ふ。予は他の科の事は知らないが、法科大學丈けについて之を言へば、學科目が現在非常に煩瑣を極めて居るといふことは事實である。之は大いに整理する餘地ある點と思ふ。但し之を整理するについては、何故に學科目が斯く煩瑣になつたかといふ歴史的理由を先づ究めなければならぬ。

私の考ふるところによれば、法科大學の學科目が斯くも煩瑣になつたのは、帝國大學に賦與せられたる特權の結果ではあるまいかと思ふ。例へば、帝大法科の卒業生は無試験で判検事、辯護士になれるといふがある。さうすれば、法科大學としては、其の卒業生をば、卒業して直ちに判検事や辯護士の職務が執れるやうに養成して出して遣らねばならぬ。そこで訴訟法とか其他の細密な手續法のことまでも、教へなければならぬことになる。勿論判検事、辯護士たらんとする者に取つては、之等の手續法の研究は大に必要である。併し法科の學生の中には、將來此等の職業を執らず、只自分の修養の爲めに法學を學ぶといふ者もある。然らざるも、將來新聞記者になるとか、議員になるとかといふ樣な者も、近來は段々多くなつて來て居る。さういふ種類の者は、憲法、民法、刑法といふやうな基礎的法學の研究は大に必要であるけれども、訴訟法だとか其他の手續法の類は、不必要とは言はないが、夫れ程骨を折つて研究するを要せぬのである。そこで本來ならば學生に大いに選擇の自由を與へ、共通の必修課目をもつと少くすべきであつたと思ふのである。けれども、奈何せん、特權あるが故に、之に拘束されて、現制の下に於ける學生は、云はゞ比較的無用の課目にも忙殺されて居る有樣である。而して今日では煩瑣なる學科目の配置は、殆んど大學教育の一原則のやうに

なつて仕舞つて、特權と關係のない方面までが非常に細かく科目の配當を定めて居るやうに見ゆる。そこで私の考では、先づ特權を廢したい。而して次に毫も之に拘束せられずして課目の配當を整理したいと思ふ。

特權は成程昔は必要であつたらう。今より二十年も前には、日本は萬事西洋流の制度に倣ひ、此新制度を運用すべき新人物を多數需要した。而して此種の人物は一朝一夕にして出來るものではない。從つて一方には舊時の敎育を受けた者の中より比較的に新しい事物の解る者を變則ながら採用し、他方には大急ぎに新人才を養成せねばならなかつた。當時斯くの如き新人物を養成する場所としては外にはない。帝國大學は實に其唯一の機關であつた。されば其頃帝國大學といふものは、直ぐに辯護士になれる人、直ぐに裁判官になれる人、直ぐに役人になれる人を、絕えず供給するといふ國家的必要に迫られて居つたものといつてよい。これ帝國大學が、嘗て永く官吏養成所といはれた所以である。大學が特權を得ることになつたのもつまりは玆處に原因する。併し乍ら新制度の運用に當る新人物の甚だしく缺乏して居つた昔は、成程此制度の必要はあつた。が今日は昔と其狀態を一變して居る。即ち社會の各方面に亙りて新人物は今や一ぱいになつて居る。社會の需要は疾くに充されてしまつた。年々大學が送り出す卒業生の如きは、今や社會の需要と比しては、生產過剩の傾ありと云ふべき程である。所謂就職難の聲は、此現象を明かに說明して居るのではないか。然らば大學は、今や差當り間に合ふ人物を作るといふ從來の方針は之を改めねばならぬ狀態に在ることになつた。尤も今日でも、父兄初め、當の學生自身も、此時勢の變に心附かず、今なほ大學さへ卒業すれば何かの役人になれると夢想して、ドン〳〵帝國大學に集つて來る、從つて學生側自身は今尙職業的敎育を求めて居るのであるけれども、然し大學としては最早や依然として裁判官や官吏を養成するを以て其本旨とすべきではない、實に高等の專門的敎養ある人物を出すのが其本來の目的であるといふことに、其主義を換へて來ねばならぬ時勢となつたのである。こう云ふ事に主義が變つて來べき場合になつて居れば、昔の通りの職業本位の課目の配置では適當でない。

第一に今日の制度では餘りに受驗課目が多過ぎる。爲めに學生に自修の時間がない。新聞を讀まぬ者すら、非常に多い樣に思はれる。我々試みに大學の學生を捉

へて、英國の總理大臣は何といふ、佛國の大統領は何といふ、甚だしきは日本の陸軍大臣は何といふとやうな、新聞を多少注意して讀んで居れば解るやうなことを質問するなら、之に滿足に答へ得る者の案外に少いのに驚くだらう。而かも債權者の權利がどうの執達吏の權限はどうの、責任支出はどうのといふやうな問題になると馬鹿に委しい。斯くては專門的法律技師にはなれるが、一人前の人間として立派なものといふことは出來ない。こんな風では人物が伸びやうがない。これ近頃の大學卒業生に兎角實用的常識を缺くの難ある所以であらう。そこで私の考では、大學本來の課程としては、例へば法科ならば、憲法、民法、政治學、經濟學とかいふ根本のものを、共通の必修科目とし、而かも極く樂に學修が出來るやうにし、更に辯護士なり行政官なり、特定の職業に就かんと欲するものは、別に選擇科又は隨意科として、訴訟法とか其他の細かい手續法上の規則をも學ぶことにした方がよくはないかと思ふ。此爲めに特に一年半年年限を增しても差支はあるまい。そして大學としては、一切特權がないといふことにし、役人とか辯護士とかになるものは、其大學に於て學んだる實力を以て、大學以外に於て所謂「政府の試驗」(スターフエキザーミン)を受くるといふことにした方がよからうと思ふ。斯く特權を廢するといふことにすれば、役人にでもならうといふものは、大學以外で特別に試驗を受けねばならぬから、學問を本當に勉强する。學校に特權があると、ノートばかりを勉强して本當に學問を勉强しないといふ弊がある。私共が口述試驗などをする際に、普通有り觸れたことを聞いて見ると、一つも滿足な答を得ない癖に『先生のノートにあることならばよく知つて居ます』などといふ者に遭遇することがある。これ本當の學問を勉强して居ない證據である。次に又特權を廢した結果、必修課目の數が少くなれば役人やなんどに望みのない者は、根本の課目丈けを學べは足り、他に大に自習の餘裕が出來るから、其間に、自然に品格學識を研く機會を作ることが出來る。今日のやうに課目が多くては、忙しくつて先輩教師を訪問することとすら出來ない。學生教師一堂に會するやうな機會があつても、所謂勉强家の優等生は餘り出て來ない。此等の弊は特權廢止と伴つて、學課目の整理改善せらるゝ結果、段々消滅するであらうと思ふ。且つ又官立大學の特權を廢止して、所謂官私平等になれば、天下の學生は今日の如く無暗に官立に集らないだら

う。斯くして私學の繁榮を見るに至るだらう。私學の繁榮は、高等學校の入學試驗に苦しむといふやうな者を少くし、學生界の生氣を衰へしめざるの利益なると共に、又官立大學を刺戟し、官私兩大學相待ち相競ふて、大に學界の進步を期し得る所以ともなるといふ大利益もある。

右述ぶるが如く大學については、年限短縮の餘地はないと思ふ。けれども、其內容を改善し又整理して、之に依つて年限短縮論と關聯して加へらるゝところの批難を免れしむることが出來ると思ふ。

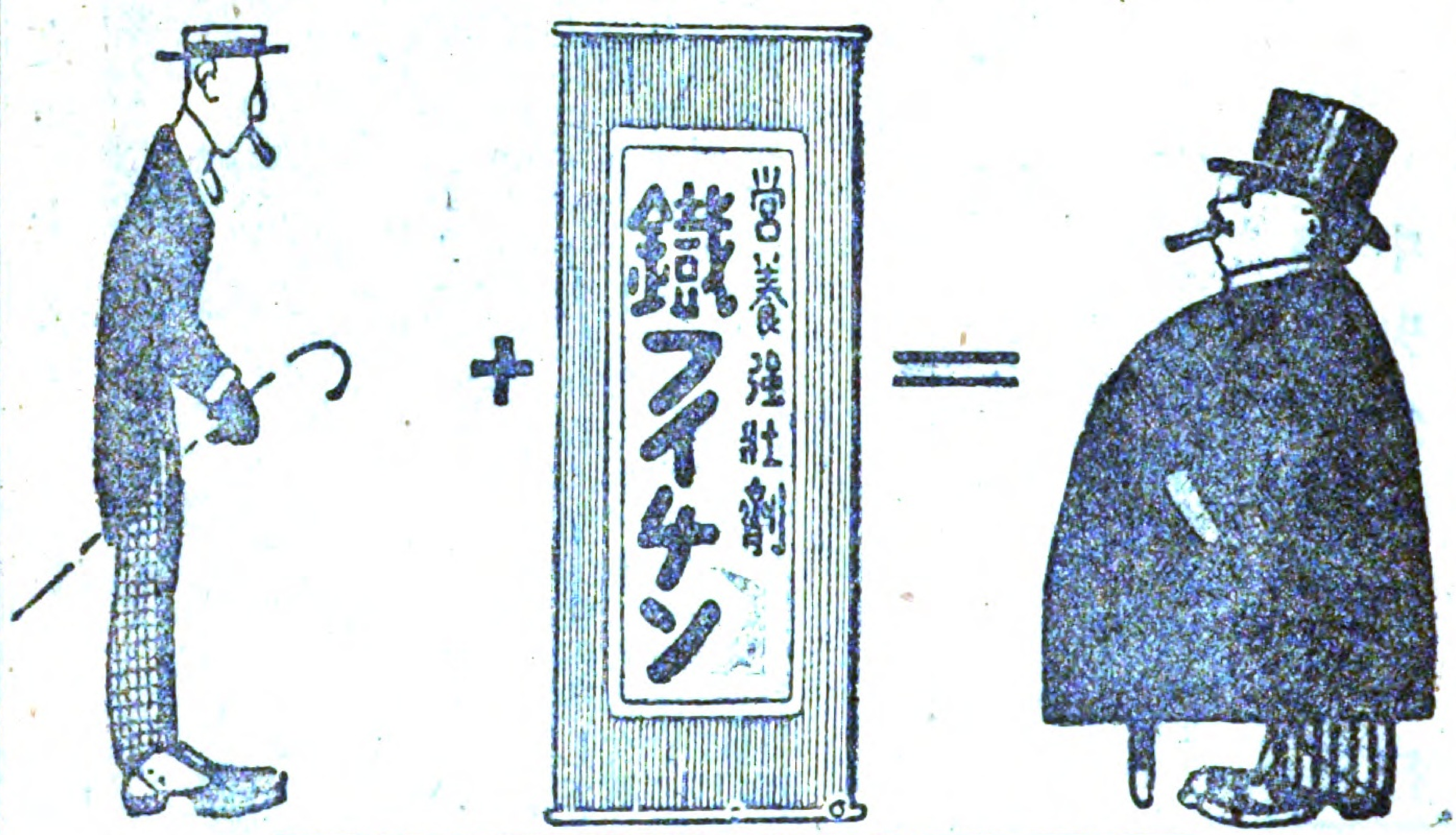
第二に、高等學校について短縮又は改善の餘地ありやといふに、之を論ずるには、先づ高等學校の必要不必要といふ議論から定めて行かねばならぬ。一部の人は大學の豫備教育の不必要を唱ふる。中學を卒業した者をして直ぐ大學の專門教育を受けしむべしと論ずる。然し乍ら斯くして供給せらるゝ者は所謂社會の低い需要に應ずる普通の人物であつて、斯かる人物を供給するは、實は低度の實用專門學校の任務とするところ、之を大學と稱すべからざることは先にも述べた通りである。大學其物を不必要なりとするならば、格別、苟くも之を必要なりとする以上は、中學卒業丈けの教育程度では大學教育を受くるに斷じて不足である。この事は我々の中學卒業生を收容して法律政治を講授する各私立大學に於て、學生の理解力の著しく劣等なるに鑑みて、常に感じて居る所である。玆に於て我々は兩者の間に若干年の準備教育期といふものを置くの必要を認むるものである。これ即ち今日高等學校を設けたる所以である。

然るに今日の高等學校教育は、大學の準備教育として、我々の經驗上滿足すべき狀況にありやといふに、實は甚だ十分ならざるの憾がある。然し不十分だからと言つて、今日以上に年限を延ばすことも、事實不可能であるから、出來るならば、年限は今日のまゝとして、制度內容の改善によつて、より以上の効果を收むる方法を工夫したいものと考へて居る。我々は直接に高等學校教育に當つて居ないから、確信を以て斷定することは出來ないけれども、高等學校の教育には猶多くの改善を施すべき餘地はあるやうに思ふ。そこで若し是非共年限を一年乃至二年短縮せねばならぬといふ必要がありとすれば、私は現在の程度を低下せずといふ前提の下に、或は高等學校の課程に於て、此短縮は可能であるまいかと想像するのである。先づ第一に

は、入學期を四月にし、中學卒業後直ちに入れるとすれば（大學も同樣にすることと勿論也）、こゝに三ヶ月の短縮が出來る。之は去年已に奥田案の着眼したところである。只之が實行について當時いろ〳〵困難があるといふことであつたが、併し學制に大改革を加へようといふ場合には、これ位の困難は無理にも推し通さなければなるまい。第二に、高等學校では語學に最も重きを置き、更らに高等の普通教育を授けて居るのであるが、私の考では、例へば、一部に於て、已に中學校で一通り學んで來た歴史、地理學等の類は、之を外國語を以て、又は外國語教科書を以て教ふる事にしたならば、之と普通の外國語との時間の上で、全體で一年位の短縮は出來さうに思ふ。即ち現在の語學の程度、又は現在の歴史地理學の程度を下ぐることなくして、一年位の短縮は出來るだらうと思ふ。尤も之は地理歴史のみではない。其外の課目についても出來る丈け外國語による方針をとるのである。斯くすれば外國語を只一つにするといふ迄の必要はなからうと思ふ。外國語一つ丈けでは、大學の教育を受くることは出來ない。第三に、再び昔の制度に復つて、高等學校には中學四年よりも入り得ることにすれば如何かと思ふ。昔は高等學校入學受驗の資格に、中學卒業といふ制限がなかつた。優等なる學生は四年生を修了した許りで、甚だしきは三年生を修了した許りで、高等學校入學試驗に應じて首尾よく入つた者がある。恰度今日大學を卒業せないで、文官試驗や外交官試驗を受け得ると同樣である。優等生に躍進の機會を與ふるといふとは、何も弊害はない。現今の如く、平凡な者を目標とする劃一主義の教育制度の下にあつては、天才に躍進の機會を與ふることは、寧ろ必要であると思ふ。斯くすれば、こゝに頭のよいものは更に一年早く世の中に出得ることになる。

以上三つを通じて少くとも一年三ヶ月、中には二年三ヶ月の短縮が出來る。之れ丈けの短縮は、現在の學校系統を著しく動かさずしてなし得る短縮である。更に進んで學制の系統全般に亘つて、更に綿密なる研究を遂げ、一層根本的なる改革を加ふるならば、尚一層の短縮を見る餘地があるかも知れないが、今そこまでは論じない。予は只新大學令の發布に際し、其案の下に於て現在の制度の如何なる部分に如何なる程度の改善、若くは短縮を加へ得るやを論じたるに過ぎない。教育制度の根本に關する立論に至つては、之を説くに自ら他に其人があらう。（十月十八日）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



腦力及體力を増加せんと欲せば鐵フイチンを服すべし

神經衰弱
身體衰弱
生殖器衰弱
特効新薬

鐵フイチン

鐵フイチンは食欲を進め身體の榮養を佳良となし體重を増加し殊に神經系の疾患及生殖器衰弱を治癒し服用後短時日にして著しく身體全般の健康を増加す

定價一罐（百五十瓦入）十七日乃至廿五日分　金貳圓四拾錢

說明書は神戶市江戶町百四番地瑞西バーゼル化學工業會社日本學術部より無代進呈す

發賣元

東京日本橋區岩附町　友田商店

大阪市東區道修町　武田長兵衛

全國の有名藥店に販賣す萬一品切の節は直接發賣元宛御注文を乞ふ

（中付 一の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

▲編纂主任 文學士 幸田成友

大阪市編纂

大阪市史

▲本書は編纂主任以下が十有四年專心努力を傾注して得たる大著にして引證該博論斷精核卓拔、前人未發の創見に富む德川時代に詳密にして同時代に於て日本文明の中心たりし大阪を各方面より記述して餘蘊なし○本書は一面に於て日本經濟史、商業史、文藝史、風俗史、市政史等の重要なる一部を成すものと謂ふも過言に非ず今般全部完成したるを以て部數を限り印刷實費金貳拾圓（送料共）を以て希望者に頒つ見本は申越次第送附

大阪市役所

總クロース背金文字入
全七冊 總索引付
外ニ地圖一帙
菊版七千八百五十七頁
挿畫 寫眞コロタイプ刷二十九枚 石版其他四枚

（中付一の二）

史學研究者必携

空文年表

全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

東京本郷區西片町十番地
中央公論社發行

●正誤 本誌前號廣告前付の六 圖書刊行會とあるは國書刊行會の誤に付き茲に正誤す。

御大典紀念出版

文部大臣 文學博士 高田早苗氏序

（内容見本往復葉書にて申込次第進呈）

セルバンテス著

島村抱月 片上伸 共譯

ドン・キホーテ

上下二卷　大形菊版二千頁　箱入極美裝幀　挿繪六十葉入

定價　各卷參圓貳拾錢　郵税十六錢

特價　各卷貳圓七拾錢　郵税十六錢　（十二月廿日限）

文部省文藝委員會選定

高田文相序―歷史の推移は神の篩である。瑣末無價値のものは、不斷に篩ひ落され獨り永遠性を孕めるもの丶みが常に赫奕たる光を放つて行く。優れたる古典は、取も直さず此種の極めて小數なる藝術に外ならない。而して『ドン、キホーテ』の如きは方しくその一である。（中略）嘗て文藝委員會が世界に於ける代表的古典の飜譯を企てたる際に先づ本書を共一に撰定したのは、恐らく此故であつたらう。文藝委員會はその後廢止せられたが當時本書の飜譯を擔當せられた島村抱月及片上伸の兩君は、その事業を繼續してこゝにその出版を見るに至つたのは、誠に我が讀書界の爲に喜ぶべきである。恰も來春四月二十三日は作者セルバンテスの死後三百年に當つてゐる。

この際本邦に於て初めて本書完譯の完成を見るのは殊に慶賀に堪えぬ次第である。余は何人に取つても面白くして且つ意味深きこの一書を敢て一般讀書子に薦める。

發行所　東京麹町區三番町八十四　振替東京一二九五三　植竹書院

（中付一の三）

松崎天民著

人間世間

三國久裝幀

■中判總クロース美裝　三百八十餘頁　函入　正價金九拾錢　小包送料八錢

天民式の觀察と文章に、一新生面を開けるものは、正に此の「人間世間」なり。著者の生活を背景とし、様々の「人間」を眺め著者の生活を根底として現代の「世間」を觀たるもの。感想に、叙情に、批評に、日記に、大膽なる告白と忌憚なき評論と、赤裸々の叙事と、相錯綜して興味淺からず。議會に、劇場に、カフエーに、待合に、街上に、旅中に、書齋に、最も強き生活味と、最も激しき情熱の流露せるは、此の書の特色とする處なり。

忽再版

文學士　坂元雪鳥著

謠稽古の心得

再版

口繪　觀世寶生喜多眞行草構挿入

▼中判三百頁大和綴美裝▲正價七拾錢送料六錢

初心者には懇切叮嚀な師範老巧者の伴侶

奥野他見男著

大學出の兵隊さん

犬丸嶺夫裝幀口繪

出版界稀有の掘出物

其の筆致の輕妙、想の奇抜は詢に天下一品！

某博士額を叩いて『いやア恐れ入つた』

▼菊半截美裝二百八十頁　口繪六葉挿入　正價金參十五錢　郵税六錢

東京朝日新聞記者　岡本一平著　並畫

漫畫と文　マッチの棒

▼中判二百六十餘頁　美裝　正價金六十五錢　郵税金八錢

發行所　東京日本橋鐵砲町　振替壹五〇五六番　磯部甲陽堂

(中付一の四)



祇園と島原

——御大典に際して入洛する人々へ——

長田幹彦

御大典も愈目睫の間に迫つて來た。鶴駕西に幸して、舊都の御所で　聖上親ら國家的最大儀禮をあげさせられるので、參列の榮を得る人々も、亦それを拜觀する人々も日に日に京都を指して集まつてゆく。それでなくてさへ毎年秋のおとづれが聞えそめる頃になると、京洛の風光を愛づる客が續々と入込んで來るので、今年は又格段の殷賑を呈してゐることであらうと思はれる。祇園町には毎年の例を破ぶつて秋の溫習會のかはりに都踊りが始まる。岡崎には御大典を記念する博覽會が開設される。そのほかにも外來の客に對する種々樣々な設備やら興行物やらが出來上つて、昨今はもうさぞかし市況が引立つてゐることであらう。かうして考へても、四條通りを押返してゆく人波が眼に見えるやうである。

御大典に際して入洛する人々の中には無論急用を前に控へて慌たゞしい旅をする人もあるであらうが、併し又折角京都まで來てといふので悠々と見物に日を費す客も夥しい數に上るであらう。さう云ふ人々に對して優雅な、閑寂な舊都はさまざま意味で滿足を與へなければならぬ。或は京都でなければ見られぬ大きな寺

々を觀て歩くのもよからう。所謂名所舊跡を尋ねて歩くのもよからう。或は又ずつと郊外へ出て、嵯峨、嵐山、宇治、石山、などの秋光を探るのも妙である。三尾の紅葉、琵琶湖の周遊、時間さへあれば事實に於て遊びどころの數は盡きないのである。

若しまた人事の交渉をのみ愛づる人々があるならば、その人々の前には京都でなければ見られぬ祇園があり、島原がある。このふたつは京都の色どころの粹であつて、其處では他土地でみられぬ色街の風俗や、遊びの形式がみられる。京都といふ言葉が直ちに鴨川を聯想させると同時に、我々の頭では京都と祇園とは離れ難いものになつてゐる。身一度京洛の地を踏んで、東山のなだらかな頂線を仰ぎ、鴨川の靜かな瀬の音を聞く時、その道の趣味を解するものならば必ず何をおいても「女の京都」を想ひ起すべきである。昔からも云つてゐるやうに、京女に何にとやら、京都へ入つて都市經營や勞働問題がどうのかうのと鹿爪らしいことを云爲する氣になれぬのは敢へて我々のみに限らないであらう。事實、京都の地から各宗派の本山と、帝國大學と、西陣と、この祇園とを除いたら跡には果たして何が殘るであらうか。こんなことを云つたら或は京都土着の人々からは「阿呆」の一喝を喰はせられるかも知れないが、併し何を云つても現代的都市の代表たるあの壯んな大阪を鼻のさきに置いてゐるので、いくら電車を蜘蛛手に敷き廻はさうが、電燈を煌々と輝かさうが舊都は依然として舊都なのである。そして私は飽くまでもその舊都たる京都を熱愛し、日に日に惡文明のためにそれが破壞され、亡滅されてゆくのを衷心から悲しむものゝ一人なのである。

私が茲で祇園と島原なる題名を掲げて書かうとするのは、即ちその舊都の情調を辛うじて保持してゐる都市生活の一部として、その二つの廓のことを説いてみたいのである。一度でもそこに遊んだ人々には兎に角、今度の御大典に際して初めてその廓をみる人にとつてこの一片の記事が多少でも參考になるやうなことがあつたら、それで私は滿足するのである。

無論私とても京都で育つた譯ではなし、數度の滯洛をのべの日數につもつたとて、漸う二箇年ばかりの期間に過ぎない間の智識なのであるから、誤解してゐることもあらうし、又誤信してゐることもあらう。未熟な筆で島涕がましくも京都を描くが故に、一廉の京都通とされては寧ろ慚愧に耐えない次第なのである。

併しほかの土地でもさうであるが、旅人の見た京都と云ふものも或意味で捨て難いものだらうと思はれる。殊にその土地を熱愛するもの丶熾烈な好奇心と、感激とをもつてみた觀察には必ず何等かの發見なり、意味なりがあると信ずる。土着の人にはつまらないことでも、外來者には非常に興味のある場合がある。私はさうした信念をもつて今祇園と島原とを說かうと思ふのである。

祇園で中心になる可きもの、即ち外來者に最も興味を與へるものは矢張り舞妓であらう。特異な京風の髷に結つて、花櫛をさして、染模樣の美しい友禪の振袖に、だらりの帶を引摺つてゐるその婉麗な容姿はたしかに祇園の誇りである。「好かんひと。」「いけずやなあ。」など丶云ふ滑らかな美しい言葉もその容姿にふさはしく、東山を背にしてみる場合にはどうしてもなくてはならぬ姿である。ほんのりと匂ふやうな紙燭の灯影で、紅の濃い唇をきつと引結んで、金扇を飜しながら楚々として舞ふその姿態は或場合京都的な、柔らかな美しさの極限を示すと云つてもい丶のである。老妓もい丶、若い藝妓もい丶。併しすべてを通じてこの舞妓ほど祇園の情調を代表的に體現してゐるものはないのである。

私は往々にして自分の作品の中にこの舞妓を主材にとる。そして多くの場合批評家諸賢から、「過度に美化された」とか「例の絢爛な」とか云ふ言葉で手酷しいお叱りを頂戴する。無論何等の情味をも憧憬をも持たずに、唯あるがま丶の姿を淨玻璃の鏡にかけてみるやうな見方をすれば、彼等舞妓とても飯を喰つて生きてゐる人間である限り、繪書や音樂のごとき絕對な美を示現する筈がない。鴨川にしろ、又祇園に數多く存在す

る茶屋にしろすべて醜い現實の破綻を示すにきまつてゐる。併し、見方、味はひ方に今少し趣致といふハンデイキャップをつけて、少くとも或樣式のなかに當て篏めてこれを眺め樂しむ場合には決してさう醜い幻滅ばかりが來るものではないと思ふ。遊び樂しむと云ふ上から云つたら、いかに世智辛い今の世とはいへ、美といふことを今少し廣い範圍に擴げて云はして貰い度いのである。その點から云へば此頃になつてひどく破壞されてしまつた祇園や島原をみる場合に、見る人の方で自分の心に叶ふ「樣式」をもつていかなければならぬことになるのである。

祇園で遊ぶ人にとつて最も不便なことはいづれの茶屋でも一現をしない、即ち馴染のない人は客にしないといふことである。これは私などには非常にいゝ風だと思はれるが、それと同時に又京都にまるで馴染みのない人にとつてはこれほど不便な形式はない。何處の土地へいつても、金さへ持つてゐればふらりとそこの料理屋なり妓樓なりへ上つて充分に風趣を味はうことが出來るが、祇園ではその自由がきかない。あたら心の氷を懐に抱いて、封も切れずに色街をぶらついて歩かなければならぬほど自烈つ度いものはない。

京都で茶屋を知つてゐる人があればその人に紹介して貰ふのが一番いゝが、併しさもない場合には宿屋からいゝ茶屋へ案内させるが最も便利である。万亭なり、大嘉なり、富美代なりへ紹介して貰つて、そこで氣置きなくゆつくり遊ぶのが旅人にとつては最も賢い方法である。

祇園でいゝ茶屋といへばどんな津々浦々の人でも忠臣藏でお馴染の万亭(一力)を筆頭として、大嘉、富美代、大和屋、吉松、美濃外などであらう。此等の家は赤前垂の仲居のゐる處であつて、赤前垂は仲居の位をしめし、又その茶屋の格を高くするのである。これ等の家では望みの妓も見れるし、遊びも極めて大がゝりで充分祇園の情調を味はうことが出來る。

元來京都(大阪などでもさうだが)の茶屋の形式は東京などゝ違つて極めて古風なのである。所謂揚屋のや

うなものであつて、東京で云つたら一寸云ひ憎いが、料理場のない料理屋で、そこへ娼妓も入れるといつたやうな風なのである。つまり東京の料理屋の内容をもつてゐて、それに待合、娼樓の職能を加味したものなのである。だから茶屋では一寸とした向附けをした小さなお膳で酒を飲んで、藝妓、舞妓、幇間、太夫、娼妓いづれなりを呼んで遊ぶだけなのである（妓で斷はつて置かなければならないのは太夫である。太夫は娼妓の最も高等なもので、その下に白人、平らの娼妓といふ階級がある。）もし何か食べる場合には仕出屋から取らせるなり、又は食べものを專門とする京都での所謂料理屋へ食べにいくなりしなければならない。そして京都では茶屋で矢鱈と食べものを取つて食ふのは野暮としてある。

妓で假りに澤文なり柊家なりへ宿をとつてゐる客が祇園で遊び度いといふ場合を例にとつて、その宿屋で紹介した茶屋を万亭として筋道をたてゝみると、先づざつとこんな順序になる。車でなり、徒歩でなり鴨川を渡つて祇園町へ入り、花見小路の角から一寸南へ入つて丸に万を染めぬいた淺暖簾のかゝつたあの大がゝりな万亭の玄關へたつ。と、紅殼塗りの壁のつゞく奥から眉を落して水々しい丸髷に結つた仲居達が赤前垂をした色つぽい姿で出て來て、

「お越しやす。」と云つて、叮嚀に出迎へる。電話で紹介してあるので、長い廊下を幾曲りかした奥の大座敷には、客の數に應じた座布團が大床の前にちんと敷き並べてあつて、明るい電燈が寺院の大座敷のやうな四邊をしんみりと照らしてゐる。つい四五年前までは此家もあの懷かしい燭臺を用ゐてゐたのだが、此頃では例の半可な文明の毒が廻つて巴の紋のついた電燈の笠で先づ我々に反感を覺えさせる。（尤も今年いつてみると黒骨に絹張りの笠に變つてゐたが、）眞に祇園の情趣を味はうとするものにはこの電燈が禁物なのである。此處でも客の好みによつていつでも燭臺を出すことになつてゐるから、何處でども見られる電燈は消して貰つて、燭臺を五臺も六臺も並べて貰ふに如くはない。

全く此の家などは燭臺のほの暗い光があつて初めてその眞價を發輝するやうな構造になつてゐるのに、何故古昔の又と得難い格式を擲つて、安價な電燈などの便宜に倣ふのかと、私達には却つてそれが不思議に思はれてならないのである。

座が定まると、やがて持番の仲居が出て來る。客の數に應じて仲居の數にも增減があるが、兎に角ほの暗い紙燭の灯影に、赤前垂でちんと座つた形は万亭ならでは得られぬ一種の古典的な風趣がある。彼等は物靜かな樣子をして、苧姆（おちよぼ）達が運んで來る巴の定紋のついた黑塗りの大平臺を引寄せて、そのうへに載せてある小膳の支度をする。向ふ附けには混布に時折々の果物ぐらゐがついて各自の客の前に据ゑられる。そして「どうどす、ひとつお上りやしたら。」と、いふやうなことから酒になる。

酒間に古びた衝立の陰から

「おほきに。」と云ひながら招ばれ舞妓や藝妓が次々と現はれて來る。二人三人の客なら妓の數も大方六七人は出て來るであらう。そして各自客と客との間へ入れて貰つて、それでまづ座敷の形がつくのである。

妓の數が六人七人になるとそれを緊めくゝる老妓が必ず一人は混じる。つまりその老妓の一擧一動によつて暗々裡に妓達は動され、指揮されるのである。それ故舞妓や若い藝妓などは我儘氣儘が云へないので自然窮屈がつてどちらかと云ふと餘り万亭の座敷を好かない傾きがあると云ふ。併し外來者にとつては万亭の片苦しいおかげで京都らしい靜かな遊びの氣持ちを味はふことが出來るのである。

東京で云ふお座附なるものは即ち舞妓の舞ひに當る。老妓が折を見て座敷まで持ち込んである三味線箱を引寄せて棹をつぎ出すと、舞妓達は次の間へ下つて舞ひの支度をする。だらりの前のところへさした錦の扇袋から舞扇をだしたり、帶をなほしたりして、再び座敷へ現はれて來る時には、もう既に舞ひ構へになつて、古書で飾られた紙襖の前に蹲まるその姿はどう見ても濃彩な繪である。

舞ひは大方「石橋」といつたやうなものをひとつ舞つて、次に東京なら三下りでわつとするところを「私が在所」かなにかで受ける。紙燭の光の覺束なげにさゆらぐなかで、だらりに縫つた金糸の綾をほのめかせながら徐かに舞ふ(踊るのではない)舞妓の姿はさうした座敷で得られる美しさの粋であらう。

それが濟むと、老妓は今度は客の方へ三味線を向けて、

「なんぞお云ひやすな。」と云ひながら客に唄をせがむ。その道の達人はその機會を利用して清元なり常盤津なり、歌澤なり、又ぐつと澁いところで一中といつたやうなもので、万亭の靜かな空氣に粋と張りを見せ、京女をあつと云はせるのも妙であらう。しかし江戸で仕込だ藝はともするとのんびりした三味線の手に乘り兼ねるのだけは用心してかゝらなければならぬ。私などは唄ひとつ唄へぬ不調法者であるから、さうした場合には先方の唄ふのを聞いて大いに情趣を味はう工面ばかりしてゐるのである。若し先方に唄はせて聞くのだつたら、京都特有の地唄を注文することを忘れてはならない。

それからもうひとつ特に注意しなければならないのは藝妓のなかに義太夫のみを専門とする階級のあることである。此等の妓が三味線箱のなかゝら五行本を取出して酒屋なり柳なり寺子屋なりを語るさまは全く京阪でなければ見られぬ一種の情趣をもつてゐる。

それからさきはいづれの土地も同じことで、盃が廻つたり、唄が廻つたりするには格別特異な様式もないのである。

夜更けてもし万亭へ泊る場合にはそれに應じて二つの様式がある。ひとつは藝妓達を歸して別に太夫を招んで寢るか、もうひとつは藝妓や舞妓達とそのまゝ雜魚寐をするのである。雜魚寐とは讀んで字のごとく、大座敷へずつと夜具を敷き並べて皆一緒に枕を並べて寐るのである。舞妓達は疋田の模様を浮かせた緋縮緬の長襦袢になつて、

「あんた向ふのお客さんとお寐やす。私こゝで寐ます

さかい。」

「好かんこと。いけずやなあ。私もこゝへ寐さしとくれやはい。」などゝ云ひながら各自客の夜着のなかへ入つて、まるで人形のやうな無邪氣な格好をして寐る。そんな場合、美しいものを愛する嫖妓達のことゝて、中でも溫なしくて奇麗な客に人氣が集まるのは無論のことである。今日此頃のしつとりと夜寒の迫る夜更に、遠くの小路をゆく燒栗賣りの聲をきゝながらさうした多愛のない夢に明かす雜魚寐は私にとつて忘れ難いもののゝひとつである。吉原で新内の流しを聞きながら眠るのとは又別種の懷かしさがある。寺々の夜半の鐘もさうした晩には一種の情味を含んで聞かれるのである。

太夫もつい五六年前までは芝居の舞臺へ出て來る揚卷や夕霧のやうな姿をして茶屋入りをしたものであつたが、今では風規取締の上から祇園町では全然その風はなくなつてゐる。(唯都踊りの點茶席へ出る時ばかりは矢張りあゝした姿を見せる)それ故太夫としての古典的な形の美しさはまるでなくなつて、今では不見轉藝妓か、高等淫賣のやうな劣惡な感じばかりして、私などは到底それを招ぶ氣はしないのである。太夫の美を味ふにはどうしても後に說く島原まで行かなければならない。

祇園での普通の茶屋遊びといへばまづこんな處で一應了解は出來ると思ふ。扨て次に起つて來るのは經濟の方の問題である。私なぞはどうせ作者風情のことであるから大盡がやるやうな大遊びをしたことはないが、それでも萬事につけて手堅く、約ましやかに出來てゐる京都の人に比較したらば割りに遊んだ方かも知れぬ。それから割り出してみると、私は今迄諸國の色里で遊んだ經驗に徵してみても京都ぐらゐ遊びに金のかゝらぬ所はないと思ふ。近い話が万亭ですら今云つた位な遊びをして、一晩泊つて、東京で遊ぶ割にしたら半分の金も要らないのである。月末々々に茶屋の拂ひが百圓を超えるには可成遊ばなければならない。東京などでは少し手つぱつてくると百圓ぐらゐな金は馬

鹿なことをしなくても二日一晩で消えてしまう。それが京都では三十圓を一晩に費ふのすらちよつと骨である。とにかく中どころの茶屋で十圓もあれば、東京で二十五六圓に當る遊びは出來るのである。その調子であるから、假りに客の數を三人として万亭で今云つたやうな遊び方で藝妓舞妓を十人も招んで三十圓もあればたつぷりである。

それならば何故さう安いかと云ふと、第一藝妓舞妓に座敷の祝儀と云ふものが要らない。そのうへ花代も安い。こんな内幕を云ふのははしたないことだが、併しそれを明らかにして置かなければ遊びの振合ひの見當がつかないから敢て下賤を云ふのである。祇園では藝妓も舞妓もほかの土地と違つて同じ花代であつて、一日二十四時で八圓なにがしといふのださうである。それに酒や、僅かな肴が雜用となつてつくきりなので安いのは眼に見えた話である。

併しこれが一歩進んで祇園の藝妓と關係の出來る場合には全然違つて來るのである。誰れと當りがついて、茶屋と妓を置いてゐる屋形の男衆との話合ひになり、愈話が定まると客はその妓の位置に從つて莫大な枕金を出さなければならないのである。それに都踊り、祇園會、正月、その時折々に手當やら、箱やら、衣裳代やらいろいろなことで金が要る。一流どころの妓を自分のものにして置くには可成眼に見えた金が要ることを豫め承知してゐなければならない。

それにしても京都ぐらゐ遊ばせ上手な、そして又遊びいゝ土地はないと思ふ。私なぞは祇園の廓の組織は所謂遊びの形として長い歴史を經て來てゐるだけに最も完成したものだと常に讃嘆して措かないのである。

玆に又茶屋のほかに席貸しといふ一種の機關がある。圓山から高臺寺畔につゞく一帶の綠濃い東山の山裾の下河原、それに鴨川の西岸につゞく木屋町、席貸しのいゝのは大方その二箇所に集まつてゐる。表は旅館の看板をかけてゐて、中は東京でいふ待合と略ぼ似た組織になつてゐる。料理屋の鑑札をもつてゐながら料理はすべて仕出屋から入れるし、宴會も引受ければ、

普通の宿屋もする。木屋町の方には夏になる京名物のひとつである例の涼床が懸け渡たされる。今日此頃は無論それも取除かれて、これから薄雪の降る宵などにはそこの粋な離座敷が廓雀の口の端にのぼる浮名の源になつたりするのである。京都で粋どころと云へばまづそこいらを随一としなければなるまい。

此處も矢張り一現はしないので、茶屋へ行くと同じ手數を踏まねばならない。しかし茶屋に馴染みが出來た上はそこから紹介させるが一番順當である。そして此處で遊ぶのには萬事茶屋のお女將なり仲居なりが取賄ふことになつてゐて、藝妓を呼ぶにも舞妓を呼ぶにも一應茶屋へ花を通して、更らに此方へやつて來るのである。

此處では好きな料理を取寄せて、勝手氣儘に遊ぶことが出來る。長く京都にゐついてみると席貸ほど氣安く遊べる處はない。私は今年も木屋町の西村家といふのに丁度春から夏の最中までゐたが、こんなのは京都の人に云はせたら寧ろ野暮の骨頂かも知れないが、併しそれも木屋町の味が忘れられなかつた爲めである。朝に夕に、比叡から如意嶽、東山一帶の翠巒を欄(そばしま)に移して、咽ぶやうな鴨川の瀬音をきゝながら時々舞妓や藝妓を寄せて遊んでゐる趣味は到底東京などでは得られぬ長閑さをもつてゐる。殊に此れからの長い長い黄昏は山々の色彩を刻々に變化させて、北山の方から迷つて來る雲のたゝずまひも美しく、雁の列が山を越えて琵琶湖を北へ歸つてゆく姿などを見る時には得も云はれぬ情味が自づと湧いて來るのである。春雨によく、涼床によく、秋風によく、又雪にいゝこの席貸の宵々は京都の情的生活にどれほど深みを添へるか知れないのである。

此等の席貸しで遊ぶには茶屋へ拂ふ金に料理の代と宿屋としての費用を加へればそれでいゝのである。茶屋で遊ぶよりも贅澤になるのは無論のことである。

次に祇園の遊びとして最も興味のあるのは所謂他處(たしよ)行きである。藝妓でも舞妓でも花さへ買つて置けば何處へ行かうと東京のやうに遠出の祝儀をつけたり、倍

の玉代を拂つたりすることはいらないので、茶屋や席貸しに倦きた人は彼等を連れて京都の郊外へ出懸ける可きである。三尾の紅葉、嵐山、嵯峨、八瀬大原、山科の松茸狩り、大津、八景めぐり、石山、宇治、奈良數へたてたら行く先は限りがないほどある。なかでも紅葉狩、茸狩、八景めぐり、宇治行き、奈良行きなどは最も季節にふさはしい企てゝあらう。

紅葉狩と云つても今では道も樂になつたから三尾は無論のこと、嵐山へも廻つて、三軒家かほとゝぎすで夕飯をしたゝめて、歸りに二尊院から祇王寺あたりへ蟲聽きのぼつてそれで一日の遊程としては樂に廻れるであらう。茸狩だつたら豫め山を買つて置いて出掛けるのもよからう。又八景めぐりをするのだつたら、朝早く大津まで電車で行つて、琵琶湖週遊の白石丸に乗つて、唐崎、堅田、近江舞子をみ、竹生島へ參詣して、歸りには膳所なり大津なり石山なりで一泊するのも頗る妙である。大津には紅葉館、さゝなみ温泉、石山には柳屋、いづれも琵琶湖の特殊な風光を前にした趣致の多い宿がある。それから又宇治へゆくのだつたら、これも電車の便をかればすぐに行ける。時雨に暮れる夕べに興聖寺の鐘聲を聽きながら柴舟の急瀬を下る風情を眺めるのも捨て難い趣致がある。温泉や菊屋なぞもいゝが、併し私は此處では花やしきを最も愛する。近來宇治水電が出來たためにひどく景色をこわされたが、それでも谿山の眺めはこの家からみるのが一番いゝ。殊に朝出す湯豆腐は都會の味と野趣とを併せもつた宇治そのものを具體してゐるといつていゝ。

さうした處々の風光は無論ひとりで杖をひいてもいゝが、併し祇園の女、殊に舞妓を伴れていく場合に又それが一種の點景になつて格段の興味が湧くのである。彼等の古風に、悠長に育てられた素質も分るし、思はぬことから往々にして盡きない興趣が生じて來ることなどもあるのである。

次にもうひとつ料理屋のことをつけ加へなければ祇園の情調を完全に說いたとはいへない。食べものを賞美する家としては祇園の廓内にはさう數がないのであ

る。景色としては圓山の左阿彌がよく、會席料理としては西石垣の千茂登がよく、變つた味を見せる家としては南禪寺畔の瓢亭がいゝとされてゐる。殊に瓢亭へは是非一度行つておく必要がある。今はもうないが、夏の頃朝早くそこで食べさせる粥の味は今でも私の舌に殘つてゐる。併し食通を云ひだしたらとてもそんなことでは納まらないのである。

祇園についてはざつとこんなことで止めるとして、都踊りのことを一寸書いて、扨て次の島原へ移らう。

都踊りは何を云つても京都で重要な年中行事のひとつである。ひとつの廓としてあれだけ宏壯な歌舞練場を持つてゐることが既に異數であるとゝもに、大阪を除いたらひとつの廓であれほど多數の妓が一晩のうちに衆人の前に出演する舞踊が何處にあるであらう。春光燃ゆる四月には連夜、祇園ですぐりもすぐつた妓達がそこの美しい舞臺に上つて、絢爛眼を奪ふ舞ひを演ずるのである。三味線太鼓の音色は春そのものゝやうな情調を湧かせて、近來では濃艶に過ぎて稍俗惡な嫌ひもないではないが、併しそれにしても都踊りは祇園を代表する唯一の行事なのである。十一月にはそれが開演されるといふから、是非一度は見て置く可きものであらう。

祇園を去つて島原の廓へ入ると情景がまるで一變する。そこは祇園と反對に京都の西郊が朱雀野に連ならうとする境のところにあつて、祇園のやうに普通の人家の櫛比した間にあるのではなく、麥圃や菜畑のなかに妓樓ばかりの一廓をつくつてゐるのである。此廓はもう日に日に衰微してゆくやうな寂しい廓であつて、武家門のやうな大門の傍にある見返り柳の影も寂しく、古めかしい店格子をした家々の薄暗く建續いた陰では晝でも蛙が鳴いてゐるといつた有様である。太夫道中、差棒をさした長持ちを先にたてゝ夕霧のやうな姿をした太夫が三つ脚の木履で宵闇をさゝめかしてゆく後影、さういつた古風なものは今猶ほ辛うじて保存され、角行燈の暗い灯影も此廓でなければ見られぬ名殘りをとゞめて、嚴密な意味で古めかしいものといへ

ば此廓の外には京都の何處へ行つてもないのである。

揚屋では角屋を隨一とする。太夫をみるのだつたら何を置いて此家へ行かねばならぬ。松本といふ家もいゝが、それはこの廓・馴染んで後のことである。ほかにも輪違ひ家富田屋などゝ云ふ家があるが、私は行つたことがないから知らない。

角屋は此の廓が寛永十八年に六條の柳町から今の處へ移つて間もなく建てられたまゝで、爾來二百七十有餘年の間、一度も祝融の災を蒙つたことゝなく今猶ほ昔ながらの姿で厳存してゐる家なのである。それゆゑ家の構造なども浮世繪に出てくるその儘で、林泉のたゝずまひ、座敷々々のとりまはしかたなどもその時代の寛濶をつくし、贅を盡したものらしく、大阪の新町の吉田屋と並んでかうした家の最古なものゝ双璧であらう。私などは角屋へ行く度にいつも感嘆の念に胸を塞がれて歸つて來るのである。岸駒の巨浪の壁畫にとりかこまれた松の間、床板といはず、壁といはず障子の棧といはず總て青貝の螺鈿を鏤めた青貝の間、蜀紅錦のやうな古緞子で張りつめた緞子の間、さうした美しい座敷々々が幾つとなく連つてゐる。名匠應擧、蕪村、常信、峨山などの筆跡は單にその座敷の裝飾として鼻につくほどある。そしてそれ等のものがすべて年代に燻されて、寺院の奥殿のやうに薄暗く煤けてゐるのであるから、そこに又得も云はれぬ風韻がある。

角屋へいくには祇園の茶屋へ行くと同じ手續きを履んで、矢張り紹介者を要する。先づ行く前に電話で照會して置いて松の間か青貝の間をあけて置いて貰ふがいゝ。そこでその座敷々々についた特有の調度を据ゑて、藝妓の二三人も招んでわつさりの酒にしたあとで、折をみて太夫のおかしと云ふのを見る段取りになるのである。

おかしと云ふのはつまり吉原で云ふ引附けである。太夫が自分の屋形から夜具、枕、その他すべての小道具を入れた長持を先にたてゝ揚屋入りをするとそのまゝひとまづ溜りへ入つて仕度をして、扨て客の前へおかしの式として見立てられに出てゆくのである。太夫

の數は客の望みによつて何人でも構はない。一人で四人でも五人でも見ることが出來る。そのおかしが島原での誇りなのである。一々書くのは煩はしいから私の「祇園夜話」のなかからその一節を引いてみる。

「いよいよ太夫のおかしが始まると云ふので仲居頭らしい鐵漿をつけた丸髷の紅前垂が次の間から蒔繪の臺にのせた盃をもつて入つて來た。そしてそれを座敷の眞中から少し下つた處へ置いて、燭臺を彼方此方へ置きかへたり、白蠟の心を剪つたりしだすと、さすがに噪ぎきつてゐた藝妓達も鳴りを靜めて、一座は何ものかに壓しつけられるやうに妙にひつそりと聲をひそめてしまつた。殊にさうした古式な廓の習慣を初めてみる私は、燃えさかる好奇心と期待とに胸を咬られて、じつと息をつめながら今か今かと待ちあぐねてゐた。

やがて三間ばかり距てた遠くの廊下の方で板のうへを滑つて來るやうな足音と、しやり／＼と云ふ不思議な物音が幽かに聞えて來た。ひそひそ四邊を忍んで笑ふ女の聲がひと足ごとに近づいて來たが、やがて出入口の紙襖が音もなくすうつと開いて、そこから漆のやうな暗闇がそつと差し覗くやうに見えて來た。と、その瞬間、暗中にきらりと輝くものがあつて左右にかすかに搖れたかと思ふと、すぐ前の曲彔の模樣を象眼した衝立の陰にほの白い女の顏がぽつと浮き上つて來た。立兵庫の髷に挿し翳した澤山の笄をきらきら輝かしながら少時の間そこに立澱んで衣紋をつくろつてゐたが、やがて歌麿の線の纎麗よりも、豊國の內容をもつたやうな太夫が煤けた砂壁の前へその全幅の姿を現はして來た。そして燻んだ五彩にいろどつた襠裲の模樣のなかに縫とつた金絲だけを鮮かに浮き立たせて、胸のところへ幅廣に結んだ帶の下へ兩手を置いたまゝ、ほの暗い燭臺の光に照り映へながらしづしづと步み出て來て、盃を置いたあたりへ來ると、そのまゝゆつたり腰をおろして長い襠裲の裾を片手でしなやかに捌いた。そして右の手で靜かに盃をとりあげて、木彫のやうな厚化粧の横顏には如何なる表情をも動かさず、肩から腰、肩から手先への線の流れをまるで浮世

繪に現はれた姿態のやうな様々な形に崩しながら盃ごとの型をはじめた。

私は釘づけにでもされたやうに恍惚とそのさまを凝視した。ひとつの姿態から次の姿態へ移る度に私の心には何とも云へぬ讃嘆の念が喘いで來た。私の眼に映つる太夫はもう廓の廢頽した空氣のなかに生活してゐる一個の無智な娼婦ではなかつた。元祿の末期から文化、文政へかへて爛熟しきつた妖麗な藝術の假象で、殊に繪絹の面に現はされたその精髓を最も偶成的に、そして最も傳統的に解ぐしたり、結びつけたりしながら夢幻の美を織り紡ぐ蜘蛛の姿のやうに見えたのであつた。

燭臺の光のなかには、盃を置いた太夫が今度は襠裲の裾を引捌いて、春信の女の如くに不自然な、而も肉感的に極めて美しい嬌態をしながら斜に體をひきゆがめた。

「あんたはん、光雲太夫はあん。」と、仲居頭が手をついて、滅入るやうなかぼそい聲で殊更に語尾を消しながら云ふと、それをしほに太夫は初めて人間に歸つたやうな色つぽい眼眸で一座をきつと見渡しながらすうつと立ち上つた。そして少し脱げかけたやうな艶な襠裲の後姿をみせて、その儘またすらすらと衝立の後へ入つて、次の間の暗闇のなかへいつともなく掻き消えてしまつた。……」

おかしが濟んで見立てがきまると、今度は粹をとつて襠裲をぬいで、南京袖のついた紅づくめの部屋着に男帶のやうな平ぐけの大帶を前へだらりと垂らした太夫が再び客席へ出て來る。そしてそれからがひと夜妻のこなしになつて、客の隣へ坐りながら打解けた盃ごとをしたりする。その姿が又なく艶なものである。そして夜が更けると、八景の間なり、馬の間なり、檜垣の間なりへいつて、蘭燈ほの暗い翠帳裡に近松や西鶴が描いたとほりの昔めかしい戀のひと夜をあかすのである。枕についてからあとで、

「お薄茶どうどす。」などゝ云つて太夫のたてた薄茶の味に醉ひを覺ますのも此廓でなければ味はゝれぬ粹い

ひとつである。

島原は祇園あたりに比べて割合に高い金を拂はなければならない。おかしを見て、泊つて一人前十圓ならば立派な遊びであらう。祝儀なぞの出しかたは祇園などゝ違つて矢張り現金なので、自分で財布の口をしめ加減にしてゐさへすれば太夫任せにして置いて差支へないのである。

これだけやれば兎に角一應祇園と島原の情調は味はゝれる譯なのである。それから先のことは遊ぶ人の好勝手で、お大盡になつて手活けの花をお荷物にして歸るなり、また費ひ果たして紙衣を着て歸るなり、いづれともその人々のお心懸け次第なのである。

甚だ不備ではあるが、廓の手引草を書き馴れぬ身の不粋は不肖して頂いて、これで筆を擱く。猶ほ祇園、島原に漂ふ情味、遊びの心持ちなどを詳しく知りたい方は拙著「祇園夜話」「鴨川情話」「小夜ちどり」「舞妓姿」などを御覧になつて頂き度い。生命から二番目の「藝術」まで賣りものにして、それを資本にやつとあれだけ集めたのであるから、私にとつては懸け換へのない記念なのである。敢て自作の廣告をする譯ではないがつまり此等の作は廓の行事記乃至風俗記であつて、この四種の著作を名殘りに私も色つぽい廓に「幻滅」といふ別れを告げなければならなくなるかも知れないから、今度初めて祇園島原に遊ぶ方々はあの中から前に云つた所謂「様式」を捜し出して、充分その變つた情調を味はつて頂き度いと思ふのである。

思想界の新權威

文學博士 服部宇之吉序文

文學士 手塚宏壽
文學士 手塚良道
文學士 柴田安正 共著

▶最新刊◀

東洋思潮講話

■四六判總クロース 三百五十頁 箱入頗美本■

定價金壹圓
內地送料金八錢

○混亂せる現代東洋の思想界に向つて、的確なる羅針盤たるものは、實に本書である。

○本書は、從來とかく煩鎖なりとして顧られなかつた東洋哲學を、新らしい然も權威ある見解と叙述とを以て簡明に說明してある。

○最新の思索と研究とに基いた、此の講話は階級の如何を問はず須く必讀すべきである。

アカギ叢書

內容解說總目錄進呈
□定價金拾錢送料各貳錢□
□第一編より既刊全部缺本なし□

(中付二の一)

發兌 東京麴町區三番町五〇 赤城書店 電話番町二二八〇 振替東京一〇四三二

眩目すべき新代の驚異

神秘にして（しかも）近代藝術の匂高き印度古代の文學を見よ。

文學士 松村武雄氏著

印度文學講話

紹介されたる主なる梗概

■イリアッド、オデッセーに比すべき雄麗幻怪なる最大の二大雄篇
- ラーマーヤナ物語
- マハーバーラタ物語

■ゲーテを三嘆せしめ歐洲批評界を驚倒せしめし優秀典雅なる印度古代戯曲
- シャクンタラ物語
- ヴィクラモルバシー物語
- ナーガーナンダ物語
- ムードラ、ラークシャ物語
- ラトナバリー物語
- ムリチャカチャー物語
- マーラチーマーダバ物語

■其他シルレルの感興をそそりハイネの詩情をインスパイヤしたる寶石の如く燦たる叙情詩「雲の使」「季節のめぐり」を初めとし、「ギータゴインダ」の濃麗なる戀愛詩等美しき物語は本書に充てり。

梨倶吠陀（リグベダ）の神話の幽玄。神咒吠陀（アールバベダ）の詩歌の婉奇。さてはラーマーヤナ、マハーバラタの二大英雄詩の雄麗！！燦たる印度文藝はまさに新人の來り尋ぬるを待てり。今や篤學の士は相率ゐて皮想の境地を去り、我等の血肉をなす印度の藝術に沈潛せんとす。つつましく且つ深く。東亞の哲學と文藝とを究めんとするものは宜しく、本書を繙いて法悦光耀の思に浸るべし。たふとく匂高き梵文學（サンスクリット）のゆかしさ限り知られず。

挿畫五葉 四六判 箱入美本 定價壹圓貳拾錢 送料八錢

阿蘭陀カタログ 三色版寫眞版入 送料二錢封入贈呈

（中付二の二）

東京麻布坂下町十三番地

阿蘭陀書房

振替口座東京一四八九

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

高安月郊著作集

著者執筆多年稿本肩に及ぶも多く公にせざりき今其重なるものを集め装幀に最高雅の意匠を凝し挿畫に珍藏の逸品を寫し内容外形悉著者の風韻を表象し半年一冊宛自費にて出さんとす望の方は十一月三十日迄に東京本郷西片町十番地に二號高安三郎方へ申込まるべし撰抜随意前金不要製本次第引換へ

東西文學比較評論

菊版本綴五百餘頁 自筆金入 名畫肖像十餘入 二圓 特製布表紙天金三圓 一冊

是著者半生研究の結果多天の勞力實驗權威を以て古今東西の文學を總合し撰擇し解釋し比較し評論し偶像を破壞し價値を顚倒しては又人類共通の點と自今相補益すべき所を示し人生の第一義に渉る文章亦專門家より初學者迄解し易く廣く内外を指導し普醒せん事を期したり

第一 敍情詩—悲觀樂觀空想寫實象徴冥想詩人 第二 敍景詩 第三 敍事詩 第四 劇—謡曲と希臘劇 近松と沙翁 ゲーテ、シルレル、イブセン、ハウプトマン、ストリンドベルグ、象徴劇喜劇等 第五 小說—紫式部とイリオト、西鶴とバルザク、自然派空想派滑稽小說主觀小說等

月郊脚本集

平賀源内。飴賣土平、小柴、靜、正成、地獄太夫、舞踊劇歌劇楊貴妃、淨瑠璃樓時雨等 四六版五百頁本綴一冊一圓五十錢特製天金見返光悦模樣二圓五十錢以下同 二冊

月郊詩集

敍情敍景敍事詩短歌唱歌俳句散文詩等 著者寫眞自署 光琳默語畫入 著者の詩知る者最稀然も最著者の個人格を表現するは此書なり 一冊

月郊文集

文學藝術自然人物日蓮光悦光琳乾山蕪村嶽樵柳里恭蕭白團十郎等評論感想小說 細香と山陽等 宗達松花堂抱一吳小仙等名畫肖像舊蹟入 一冊

悲壯之人

最總合的の人物を主人公として戀愛故郷因襲古典自然教育藝術宗教超絕の諸界を過て最高の生に達する靈の經歷著者の代表作とすべきもの 二冊

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文展と院展と二科會

笹川臨風

昨年は文展と二科會とが上野にあつて、院展が三越に開かれたが、本年は文展と院展とが上野で、二科會が三越である。院展と二科會とは其數に於て其量に於て遙に文展に及ばぬが、各々一方の雄を稱して、文展と對抗せんとするは、獨り其意氣の壯なるばかりでなく、藝術界の勝事と云はねばならぬ。

文展の日本畫の出品數は二百二十有餘點、院展のは三十六點、但し其うちに双幅、三幅對、四幅對などがあるから、いづれも、其實際の量は之より多い。昨年の文展日本畫が鑑査の標準低く、甚しい惡畫を混じたるに比べると、本年の文展は遙に立優つて、一體の標準が高くなつてゐる。けれども其の立優つてゐると云ふは、技巧本位から云ふので内容の空疎なる誹は所詮免れ難い。飛び離れて嘆賞に値するものは遺憾ながら殆どないと云つても差支があるまい。此點から云ふと、よし昨年の院展に凌駕することは出來ぬにしろ、本年の院展は其量は少くとも、内容は遙に豐富と云はねばならぬ。

一々作品に就いて之が批判を試みるは、作者に取りて忠實ではあらうが、藝術界の趨勢を論ずるに於て實は無意味である。展覽會型の技巧本位の文展畫に向つて、區々たる技巧の末を云々するの要はあるまい。我等が要求する所は大なる藝術品の出現である。日本畫の前途に向つて光明を放つべき藝術品の發表である。

官僚の文展に於て當代藝術の大家たるべき審査委員が何等かの口實の下に多く出品せざるに反して民黨の展覽會に於ては其棟梁連が奮起して競て其努力の跡を示せるは、甚だ快事である。唯獨り文展に於て寺崎廣

業が二點の大作を出したるは、大に其勇を多とすべきである。審査委員は隱居でない以上は、宜しく後進の爲に範を垂れ、藝術の前途に大なる默示を與ふべきものであらう。

審査委員の或ものは、本年の文展を目して、昨年は京都派に勝を制せられたが、本年は東京派の勝利となつて甚だ愉快であると云つたさうな。如何にも京都の八十三點に對して、東京の百三點は多數と云はねばならぬ。しかし數の多少が果して輸贏の決する所であらうか、授賞の段に至ると、東京と京都との權衡上、例に依つて例の如しであらうから、之れに依つて輸贏を決することは困難である。けれども依然として技巧を以て優れた京都派の技巧は場中到る處に於て之を看取するに難くない。若し此點で太刀打をなすとすると、東京派の百餘點は到底京都派の八十餘點に對して瞠若たらざるを免れぬ。

京都派の中堅たるべき橋本關雪の「猿」、小村大雲の「東工」を見ると、其技巧は年一年に進歩したあとが見える。關雪の馬は本年に入つて奔馬となり、大雲の牧馬は一轉して馴馬となつた。此二點に就いて云ふと、大雲のは、關雪に立優つてゐる。しかし兩者とも筆致は纖細に入つて寫生の巧妙は示してゐるものゝ、さて其趣はどうであらう。畫面に現した以外、そこに何ものも潜んでゐないではないか。木島櫻谷の「うまや」は依然として京都派の得意否寧ろ弊とも云ふべき田園生活を寫したもので厩あり鶏小屋あり、洗濯女もあり、縱横泥繪具を塗れる樹葉を以て之を點綴して、更に畫面にゆとりなく、技巧派の通弊なる畫き過ぎて些の情趣なきものになり畢つた。菊池契月の「浦島」は彼が得意の纖細な上品な技巧を離れて、一種の象徴式理想畫を構成せんとしたのであるが、非常な失敗に陷つてゐる。アルバート、ムーアの「夏の夜」に見るが如き三人の女と浦島の子とには仙味もなければ情趣もない。其色彩の不快なる、三幅相並びて、一種の謎を作れる、内容あるが如くにして、しかも遂に空虚であつた。川村曼舟も亦技巧に優れてはゐるが、其色彩は一昨年に於て甚だ厭ふべき傾向を示してゐたが、本年に至りては更に甚しくなつた。此點に於ては、泥繪具を厚塗りにする厭味はあるが、平井楳仙の結構と傅彩とを寧ろ多とせねばならぬ。獨り群を拔いてゐるのは、土田麥僊の「大原女」である。左半双の櫻花流水と云ひ、脩竹青山と云ひ桃山式の豪華をねらつて、大膽にして、壯麗である。唯水車小屋は如何にも不調和で、畫面從容たるところを打破したかの感がある。技巧の京都派中に在つて彼が着眼する所はともかくも遠く俗を離れた所がある。

上村松園の「花筐」は狂女に熱烈の氣分なく、衣裳に狂亂の趣が乏しい

く謡曲を主題としたものだが、院展の「弱法師」とは其差千里のみならず。想も平凡に筆ものびずに、平生の松園に見るが如き色彩の調和さへも見えぬ。技巧の點と、傳彩の調子に於て、松園には劣るが美人畫として東京派を代表すべき鏑木清方の「晴れゆく村雨」は畫面騒々しく、我等が鈴木春信に於て、將た鳥居清長に於て見るが如き悠揚なる點を更に看取し得ざるを憾とする。作者は荷葉藕花の千態萬狀を畫き、或は雨滴のたまれる、或は溜れる水の翻へる、或は花の綻へる、或は蕾の傾ける雲間に虹の淡く映えたるなど、極力精細に之を描いてはゐるが、其效果は蓋し半をも收め得ぬ。のみならず寫し過ぎて却て、畫面の騒々しさばかりを贏ち得て、畫の情趣を殺ぐこと夥しい。此寫し過ぎると云ふ下らぬ努力は、文展の型で、同時に弊である。技巧本位は即ち努力本位で、京都派の影響感化は甚だ偉大なるものがある。唯以前に濃厚な色彩で失敗した作者は、極めて調子の低い、薄い色彩を用ひてゐるが、或は去年の院展に於ける「異端」などが作者を啓發させたのではあるまいか。しかしとにかく本年の文展に於ける東京派を代表するものは此作者であらう。此點に於て作者の奮勵を多とする。第三室に於ける紅紫絢爛の間に最も努力を發揮したるは、池田輝方の「木挽町の今昔」であらう、とかうの評はあるが、去年の「両國」に於ても進境を認めた作者は、本年に於て更に進境のあつたのを認めるに難くない。作者のすら〱とした進境に反して、池田蕉園の「かへり路」は沈滯の氣味である。願くは「かへり路」たらざらんやうに祈る。北野恒富を中心として、大阪にも美人畫家少からず、第三室中に於ては七點の多數に上つてゐる。恒富の「暖か」の背景は極めて趣はあるが、長襦袢の緋鹿子は誘ふ水あらばの風情ありて餘りに挑發的に近い。今少し工夫があつたらばと思ふ。院展に於ける同人の「鏡の前」を見ても、さうであるが、此作者は頗に工夫をする妙はあれども、體格の研究は甚だ乏しい。蕉園の骨格無しの肉團々の弊はないが、其身體は往々にして釣合を保たぬ。

山元春汀の「華嚴」は場中第一の俗嚇であるが、寫生の妙は即ち存する。けれどもあゝ大きなものを描かねば雄壯の趣を發揮し得ぬとなつては、頗る考物である。俗嚇しの點に於ては尾竹國觀の「血路」も、尾竹竹坡の「豪華」も兄たり難く、弟たり難い。「血路」が其武器物具に於てさま〱の時代を鵺式に陳列したるは、故實の不詮索であるが、努力主義を畫の本義と心得るに至りては、之れ亦大に一考を煩はせねばならぬ。兄竹坡の「豪華」も畢竟努力本位で、其他に何ものをも見出し得ないのである。豪華と云ふものはこんなものだとの畫的説明では、嗚呼危いかな。

色彩を離れて、筆力を示したものに、青山青山の如珠雨村上華岳の春耕圖がある。春耕圖は小品ものでは

あるが、筆意が極めて面白く、輕妙にして趣が深い川邊華堂の「雨後の奔流」は巖石に到らぬ處があつて、頗る物足らず、野田九浦の「發願」は前年の「天草四郞」と云ひともに此人の前途の心細さを感ぜしめるもので、町田曲江の「三大門」は久し振での入選なれども、日本畫中第一の高價以外には云ふべきことがないばかりでなく、頗る惡感を催すべきものである。

いづれを見ても、其の多くは忠實なる寫生か、若くは裝飾風の畫で、所謂文展型をなしてゐる。纎巧はあれども雄大なく、濃艶はあれども清楚に乏しく、大膽なる手法、飄逸なる筆致、逸宕なる趣は絶無と云つてよからう。嘗て隆能隆信隆兼を有し、恵心僧都を有し、周文雪舟を有し、光悅宗達光琳を有し、蕪村大雅堂を有し、應擧蘆雪を有した我が藝術界は今や唯に纎巧軟弱を競ひつゝあるのである。

審査委員菊地芳文は京都派の審査委員が揃ひも揃つて出品を見合はせたるうちに、獨り氣を吐いてゐるが此氣甚だ昂らず、「鶺鴒」の色彩重濁にして、甚だ不快である。寺崎廣業の「信濃の山路」は昨年の金屛風に描ける山水を墨畫にて繪卷になしたるものにて、頗る深切で、一筆苟もせざる風があり、處々に面白い處、頗る首肯させる處あり、其筆致は和かにして、潤ひあるが惜らくは豪宕颯爽の氣に乏しい。信濃の山は日本アルプスに接し、雄大にして峻嶒。作者其肉を畫いて未だ其骨に及ばざるの感なきにあらずであるが、兎に角、重味は十分に存する。

寫實の技巧を爭へる多くの作者のうちにあつて、筆致に氣分を現さんとつとめる一人は平福百穗である。「朝露」は墨で往くべきところを彩色で描いて、露滴々の趣を發揮せんと工夫はしてゐるが、中形の浴衣地となつて、朝露の濡れてしつとりした氣分が現はれてゐぬ。寧ろ去年の「七面鳥」の優れたるを思はせる。

小室翠雲の「駒ヶ嶽秋粧」はまだ見るを得ないが、「夏景山水」は奥行がなくて、情趣に乏しい。必ずしも「夏景山水」にのみ限らず、此人の畫には幽趣神韻の掬すべきものなく。表面は達者に書きこなされてゐるものゝ索然として含蓄なく、觀去り觀來つて轉た餘情の乏しきに落胆する、又

必ずしも此作者のみならず、南畫の末流は型に拘泥して絶えて畫の工夫に注意せず、氣韻浮動をはき違へて、様に依つて葫蘆を畫くの狀に陷る。第二室の諸作品を見ても、滔々たるもの一に舊式に囚はれざるものなく千篇一律の觀があるではないか。

けれども之は獨り南畫のみではなく、我が純日本畫の土佐派を比べるものに就いても亦同様の感を起さねばならぬ。高取稚成の「四季文體」と云ひ、松本暢羊の「青葉の笛」と云ひ、松岡映丘の「御堂關白」と云ひ、其他前田氏實、川船水棹の如き、土佐派に向つて更に一の革命を起し得ぬ、飛田周山の「晨合ひのそら」の如きも、美術院の謀叛者としては更に謀叛の旗幟がなく、磯田長秋も畫紅兒會員として「住の江」のやうな情趣に乏しいものを畫いてゐては、美術院派の畫紅兒會員に對して面目があるまい。此點に至ると、土佐畫ではないが同じ美術院の不平兒であつた勝田勝琴の「曾根づたひ」が纖巧にして淸楚なるを寧ろ多とする。

土佐畫を學ぶもの、若くは之が革新を企てんとするものゝねらひ所は餘りに卑近ではあるまいか。近年に於ける土佐畫の妙手である吉川靈華に對しても、余は猶慊焉たるものがある。それは土佐派を學ばんとするものが、田中納言・冷泉爲恭・浮田一蕙あたりを的にするのは頗る間違つたことゝ思ふ。猶遡るにしても、土佐光信あたりをねらつてゐやしまいかと懸念する、なぜ、ずつと遡りて、藤原全盛期の土佐派に私淑して、更に其上に新工夫をなすとをつとめないのであるか。隆能源氏・伴大納言繪卷・北野天神緣起・春日權現驗記あたりに遡りて摯實なる研究をなさねば、土佐の妙味は十分に理解が出來ぬとと思ふ。京都に於ける近古の土佐復興は相當に功果を收めてゐる。しかし其復興したる土佐に囚はれては、其以外に妙趣を發揮することは到底難い。土佐も住吉となり、板谷となつては、狩野の末流南畫の末流と何の選ぶところがあらう。土佐派復興は之に慨して新生命を賦與せんとしたのであるが猶一部分の運動に過ぎない。大なる運動は更に後人に待たねばならぬ。

圓山派から出た四條派は、南畫を加味して新しいものを作つた。寫實から出て、之に寫意を加へたのである。しかし舊の南畫は何ものをも加へず何等の新しき試をなさずに終つた。けれども、純日本畫なる土佐派と、宋元の畫風を本とした南畫とは、どうしても今後の日本畫が進むべき畫の基礎ではあるまいか。光悅と

云ひ、宗達と云ひ、光琳と云ふが、何も別段に新しく創立した畫風ではない。其出立點は土佐にある。狩野と云ひ、四條と云ふも、特殊に起つたものではない。いづれも支那畫を立脚點としてゐるのである。我等は今後の日本畫として、土佐と南畫とに新しい工夫新しい試をなすべく要求する。

京都の全盛期に生れた土佐である。土佐畫の山水は京都近畿の山水である。其人物も衣冠束帶の人物を主とする。土佐畫に現はれたものは皆一に京都の風物を語らぬものはない。されば近古に於ける土佐派の復興運動も京都に起つたものである。然るに今の京都に土佐派の新しい試が起らぬは何の故であらう。これは圓山四條に囚はれて、其圈子を脫し得ぬ故ではあるまいか。圓山四條は寫生を主とする。寫生寫實を主とした京都派は遂に土佐派に遡ることを忘れたのではあるまいか。同じく裝飾畫を描くにしても今の裝飾畫には絕えて光悅宗達光琳の放膽がなくて、纖巧に流れ細緻に陷つてゐる。之は寫生寫實が齎らし來た過である。院展の榊原紫峰の「秋草」を見ても、寫實から出た裝飾畫であつて、艶は即ち艶であるが、ゆきつまつた感じを起さしめるも、即ち此れがためである。

純粹の南畫は型に陷つたが、四條の流を汲んだ今日の京都派は又南畫の氣韻を失つた。蕪村大雅堂より竹田杏雨を初め、南畫は關西のものであつて、關東には渡邊華山・高久靄崖・立原杏所ぐらゐを除いて、南畫の大家名家はないと云つてよろしい。然るに其畑であるべき京都に新南畫の起らないのも、亦圓山四條の寫生寫實が京都を席捲した其餘波ではあるまいか。猶近年田園生活を主題にすると云ふ變な傾向が齎らし來た其過失ではあるまいか。京都派が技巧に勝れると云ふのは、圓山四條のお蔭である。しかし古土佐の研究を忘れ南畫の研究を度外視するに至つたのも、其影響である。田園生活などと云ふ如きは抑も瑣末の問題で、日本畫を指導すべき道でないことは無論である。

京都派が閑却した大問題を東京派は着々として研究しつゝある。昨年の院展に於ける安田靫彦の「お產の

祈り」前田青邨の「竹取物語」「湯治場」を始め、新土佐の試みとしては、本年の院展には下村觀山の「弱法師」あり、前田青邨の「朝鮮の卷」あり、小林古徑の「阿彌陀堂」がある。新南畫の試みとしては、横山大觀の「竹雨」「漁樵問答」富田溪仙の「宇治川の卷」の三點を擧げ得る。院派の目黑黨即ち赤曜會の一派は最新の南畫と云へば云ひ得べきが、南畫の精神を捉へんとして捉へ得ざる傾がある。南畫が墨に依つて現はしたところを色に依つて現はさうとつとめてゐるが、餘りに抽象的で、調和も組立も度外視して、唯に個人の感想を現したに過ぎぬ。今村紫紅の「出づる日」「入る月」速水御舟の「山頭翠明」牛田鷄村の「隅田川」富取風堂の「河口の朝」の如きもいづれも此病に侵されて、前途の遼遠を思はせるばかり。此點に於て目黑黨は既に一種の型に陷りつゝある。更に大なる型に陷つて、千篇一律の嫌あるは、院派の大久保黨である。大智勝觀の「山色四趣」箏谷等觀の「たそがれ」「霽るゝ朝霧、暮るゝ峠路」綱島靜觀の「木曾鞍馬」文展に於ける同人の「木曾の夏、日原の秋」田中月觀の「竹裡館」の如き、いづれも同樣の型に入つて、何等かの變化を要求せずんば、もう餘地のない場合に立到つてゐる。但し大久保黨に向つては、今の儘では、進路がない、向上の工夫を要求する。目黑黨には進路を求めずして、反省の工夫を要求して置く。

空には曉の星輝き、地には平等院型の燈籠に有明の灯殘れるうちに定朝の刻める阿彌陀佛及須彌壇の金光燦爛として、剝落したる扉繪に其痕を留める青綠鮮かに、鳳凰の光は夜の明けぬ大空に煌めいて、屋の棟朦朧として、見るからに莊嚴の趣あるは、小林古徑の「阿彌陀堂」である。一の人物なく、樹木なく、花鳥なく唯建築物に配するに曉の空と池水に映れる影とを以てして、觀るものに此感興を惹起さしめる作者の構想と手腕とは敬服に値する。然らば此作を以て完全にして畫の上乘となすべきかと問ふに、頗る物足りぬ思がある。上品で優美で、其ねらひ處は好いが、一體に弱々しくして、未だ十分なる滿足をなさしめぬ。一點の弱

氣匠氣はないが、才氣が乏しく、稚氣あるは免れ難い。昨年の院展に於ける同じ作者の「異端」も如何にも上品で優美で、心持は善く現はれてゐたが、「阿彌陀堂」と同じ樣な缺陷はあつた。しかし此缺陷のある處が此作者の未來の大なる所で前途の洋々たるを思はずには居られぬ。此作者に乏しい才氣は前田青邨之を償うて餘りがある。寧ろ青邨に對しては其才氣が前途の大成を邪魔せぬかと疑はしめる。「朝鮮の卷」は朝霧の霽れかゝれるあたりに白衣の人が逍遙する、土手艸は露に濕つて雉子が飛ぶ、朝炊の煙は立ち上つて、城門には人の往き來ふ影繁く、やがて日午に近づいて市場の雜閙末段渡頭の夕を畫いて、夕闇の空と水とに漕ぎ去る舟に蕭條たる日暮を思はしめる。古繪卷から出て新意を試みるは此作者獨得の壇場で、先年の文展の「竹取」と云ひ、「御輿振」と云ひ、去年の院展の「竹取物語」と云ひ、「湯治場」と云ひ、作者は次第に其技倆を發揮して本年は遂に此前人未開の境を拓いたのである。古徑は腹藝で、思ひ入れを主としてゐるが、青邨は筆々活躍して、思ふ所を語らずんば已まぬ處がある。絕えて一點の稚氣なく、才氣横溢して、一卷の中到る處に鋒鋩閃めき、人をして應接に遑あらざらしめる。之を彫刻界に比較すれば、青邨は內藤伸と髣髴たる點がある。佐藤朝山の熱はないが、古徑には朝山にないしつくりした從容迫らざるところがある。

下村觀山の「弱法師」は近年の佳作たるを疑はぬ。謠曲の題目を捉へて、斯くまでに理想化し、裝飾化する人他に在りやと問ひたくなる。天王寺を畫かず、石の鳥居を畫かず、左衛門尉通俊を畫かずして、滿幅の梅花を畫き、落花繽紛として弱法師の袖に散りかゝる。其梅の根に五輪塔と彌陀三尊の供養塔を畫いて、四天王寺をきかせたる才の働きは、他人の企て及ぶ能はざる所である。盲目なればそなたとばかり心當てなる日に向ひたる弱法師の姿、思ひ入れも極めて善く、之に對しての落日は、日想觀を示して、阿字門を入つて阿字門を出づる、彌陀の御國も極樂の東門に向ふ、難波の西の海に舞ふ入日の影、誠に有難くも神々しく拜ま

れた。梅の花は一體に裝飾風に畫いて俗ならず、盲目の俊德丸も甚しく厭味なく、構想と技巧と相待ちて、殆ど完璧の妙諦に入つてゐる。本年の藝術界に於ける第一品と推賞して置く。

觀山と云ひ、古徑と云ひ靑邨と云ひ、其出立點はいづれも土佐である。土佐に向つて新しい試をなしたもので、日本畫の行くべき最善の一道を示してゐる。院派の重きをなせる第一は即ち是にある。

南畫をねらつて、之に新しい工夫を凝らさんとするは横山大觀の「竹雨」と「漁樵問答」とである。此思潮は院派に少からず流れて、院派今後の勢力となり、其重きをなすべき第二となつてゐるが、是れ亦日本畫の未來に於ける最善の一道であると信ずる。「竹雨」と云ひ、「漁樵問答」と云ひ、如何にも飄逸で、古人に囚はれず、後人の爲に道を開く。其淡々たる處が苦心の存する所で、煙雨の趣は四條派に似て四條派ならず、多くの道具立てを用ひずして、神韻縹眇たるものがある。努力しない樣で、實は努力した作で、作者は前人以外に氣韻の浮動を求めんとしつゝある。「漁樵問答」は陳腐の題材であるが、作者は濃淡ある白描を以て之を寫して新意を現さんとつとめた。山なく水なく、何等の背景を用ひずに、輕々筆を着けて、飄逸の趣を現はすに於ては、先づは成功したと云つてよからう。

富田溪仙の「宇治川の卷」は部分々々に就て之を見ると、云ひ知れぬ面白味はあるが處々に錯綜せる處あつて、少からず畫面の混雜を來したのは甚だ遺憾である。此人の畫は由來俳趣に饒かである。若し其會得したる俳趣に依つて取捨したならば、今少し省筆するところもあつたらうし今少し統一したところもあつたらう。

由來印度の題材を取り、佛敎歷史に其畫題を求めた院派も、本年には此種のものが甚だ減じて來た。佛畫としては木村武山の「彌陀三尊」あり、佛敎史に關しては荒井寬方の「乳糜供養」あり、印度の題材を取れるものには中村岳陵の「薄暮」がある。若し夫れ我が邦の佛敎史に縁あるものとしては長野草風の「向原寺」がある。しかし今の院派にはもう其やうな最古の高遠な畫題を求めるより、卑近なるもの、陳腐なるものを取つて之に新意を試みんと云ふ傾向を生じ來たやうに見受けられる。

文展に文展の型を生じ來れば、院展にも院展の型を生ぜんとしつゝある。殊に院展の目黑黨と大久保黨に於て最も著しく目立つ。型は前人のもの先輩のものを眞似て其轍に傚はんとするもので決して結構なことで

ない。新興藝術を標榜するものが型を作るやうでは決して慶事とは云はれぬ。

京都派の技巧は尊むべきことで、決してけなすべきものでない。しかし京都派は技巧一點張りである、今少しく他の未開地を拓いては如何であらう。日本畫の進むべきを唯に寫生唯に裝飾と信ずるは誤りである。院派の進まんとする路は決して間違つてゐないと信ずる。京都派も更に進路を擇び、其技巧を之に用ひたならば日本畫の前途は春、海の如きものであらう。しかし畫題を田園生活に求むと云ふが如き愚たる執着心は斷乎として棄てなければ、到底新しき路は開けぬであらう。

「繪空事（ゑそらごと）」なる通語が西洋畫界に行はれて（アーサー、ジエローム、エッヂの三角畫家及後期印象派第一四七頁參照）東洋畫の影響が近年西洋畫界を靡かすの時に、我が西洋畫界が之を逆輸入して來たのは著しい現象で、作家は內的生命の爲めに心勞するよりか、寧ろ形式の末に新奇を競ふさまとなつた。即ち精神よりは手法の上に於て新高を求めるにある。しかし此點に至ると、その源が東洋であるだけに、東洋人には先天的會得があるから、直に理解される。のみならず、東洋畫の精神をカンバスに刷毛に鼓吹する恰好の地にある我が國人であるから、旨く成功したならば西洋畫界を風靡し得るかも知れぬ。斯う觀察すると、我が西洋畫界も頗る多望のものと云はねばならぬ。

東洋畫と西洋畫との接近、融合は次第に其步を進めて來る。獨り中川八郎の「高山の夏三題」ばかりではない、長原老太郎の「晩春」ばかりではない、院展の小杉未醒の「黃初平」ばかりではない、二科會の津田靑楓の「鷄」「梅に頰白」ばかりではない、絹紙とカンバスとの差違はあれ、筆と刷毛との相違はあれ、觀る所畫く所に甚しい差別相はなくなつて、東西文明の接觸が繪畫の上に現はれて來るのである。

けれども西洋畫には西洋畫の長所がある。其素描の正しき其科學的研究を經たるが如きはそれである。されば、此等の長所を度外視して、直に新に沒頭せんとするが如きは西洋畫の爲に甚だ採らぬ。けれども十年一日の如く同じ題材の下に譬へば裸體の研究をなして、命題の異るだけで內容の一向に進步せぬのも取らぬ。

文展の西洋畫は流石に此畫界の名ある人々を網羅してゐる。院展の西洋畫は小杉未醒の獨舞臺で、有るも重きをなさず、無くも輕しとなさぬ。長谷川昇の色のしつとりとして輕佻ならざるが目につく。就中「オレンジユ持てる女」の落付きあるを取る。二科會の安井曾太郎は筆に力があつて、強味がある。唯其色彩の灰がゝつた紫ずんだところは頗る感興を殺ぐ。文展の頭目黑田淸輝は品が好く、挑發的でなく、筆のこなしも流暢で、流石に此人と思はせるところがいつも見える。今年の「跡見刀自」でも同感である。和田英作の「佐用姫」は今少し狂熱の處を見せて欲しかつた。岡田三郎助の「五十島の雪」は手に入つたもの、南薰造の「葡萄棚」は院展の倉田白羊の「葡萄を採る男」と其差千里ならず。鹿子木孟郎は水彩畫の方が宜しく、餘り例の堅さを發揮せぬところが目つけものであつたと思ふ。藤田武二の「匂ひ」「空」には強烈の香ひが漂ひ、吉田博の「奔流」以下の數點、山本森之助の「凍れる小川」はいづれも往年盛名の名殘をとゞめる。滿谷國四郎の「魚市場」「行水」等は作者が往日の手法を棄てたるを償ふか否やは問題である。過去の主張過去の手法を棄て新しい主張新しい手法を取るには、取るだけの自信があるに相違ないが、棄てたから向上したとは云へぬ。橫路は到る處にある。幽谷を出でゝ喬木に遷るものもあれば、喬木を出でゝ幽谷に遷るものもある。太田喜二郎の「薪」は鮮やか。中村不折の「補衲」はいつも程の芝居氣なきを多とする。しかし此作者が領分の開拓を心掛けるは西洋畫界に於て兎に角注目すべきことである。小糸源太郎の「雨のあと」は道具立ては十分に備はつて居るが、割合に詩趣俳味に乏しい。宮芳平の「海のメランコリー」はベツクリンを偲ばせ、渡邊ふみ子の「樂譜」はいつもながら此作者の畫ける顏の思ひ入れが氣に入る。手法は相變らず幼稚なところがあるが、あの表情は又なく善い。必ずしも今回のみならず。

安井曾太郎を除いた二科會では、頭目石井柏亭甚だ振はず、其うち唯「鮭倉」を擧げて聊か氏の健在を祈る。小杉未醒の作も院展のものに劣り、格別に出色のものも見受けられぬ。山下新太郎の諸作はいづれも難がないが、此作者としては、大作を見たかりしと思ふ。小川千甕の「沙丘の井」「水郷の秋」は面白く、殊に「沙丘の井」を取る。

文展の木彫米原雲海の「曠野」に曠野の感なく、氏の畑はやはり「松風」である。新海竹太郎の「長袖善舞」はとぼけた處に妙味を覺える。院展の內藤伸の「壺」は色彩品よく、少女と相映發して、恍然とさせる處に云ひ知れぬ趣がある。佐藤朝山が例に依つてシヤクンタラ姫一點張りは少しく考物であらふ。平櫛田中が新らしく向へる路は大疑問と思ふ。此他文展に於ての塑造としては藤井浩祐の「早朝の靈拜」をゆかしと見た。

以上は藝術家諸君が多年の蘊蓄を傾けたる一年間の

收穫に向つて、我等は唯數時間を拂つて、人波に押され押されたる間に瞥見した其印象を臚列したに過ぎぬ。然り瞥見した印象ではあるが、其印象は恐らくは再度三度の觀賞に於ても甚しく相違はあるまいかと信ずる

淺草公園　金龍館の樂屋より

木村駒子

男でも、女でも、人は先づ自分の爲めに生きねばならないといふ個人的自覺から出發して、私が女優にならうと決心したのは此頃に初まつたことでは御座いません。自分の思想といふものを文章の形式で表はすのも、芝居の科白で表はすのも、その志すところは一つだと思ひます。この自分の思想とか主義とかいふものを何處までも發表して、自分の周圍に遠慮や氣兼やあらゆる妥協と讓歩とを廢して、本當の意味での自分の生活に入りたい爲めに、小さな幼な心にも私は何れ位華やかな舞台生活を憧れたでせう。恐らくは誰れよりも先きに、森律子よりも、松井須磨子よりも、もつと〳〵以前に女優にならうと決心したのは私だと思つてゐます。それには私の生れ故郷の風習が知らず識らず私をさういふ風に導きもしましたらうし、四つの齡から十四の春まで、まるで藝人のやうな厳格な踊りの稽古をみつしりさせられたのが因ともなつてゐませう。が、それよりも人一倍野心の强かつた私は、相當に敎育も受けてこれ迄の俳優といふ者よりは勝れた理解や知識を持つてゐる積りの私が、女優にさへなれば自分の思ふ事は何でも成らないことはないと、かういふ風に考へて居つたからでも御座います。

ところが、實際にはあれやこれやの事情に妨げられてさう急に自分の思ふやうにはまゐりませんでしたが、自分の思ふことは何處までも實行しなければ止まない私の性分はとう〳〵私を驅つて、公園の樂屋にまで運びました。この塵埃だらけな、燻んだやうな樂屋の裏に、鏡台一つを前に控へて私は毎日〳〵私の顏を彩つてゐます。さうしては狹い舞台の上で、極めて俗な見物人を相手に泣いたり笑つたりしてゐます。他人から觀れば、何の爲めにこんな穢しい所で、何の爲めに飛んだり跳ねたりしてゐるのか不思議にも思はれるでせうが、私とても満更初めからこんな所の役者にならうなどとは思つても居りませんでしたのを、ふとした機で妙な事から、他人の卑しむ公園の役者になつて了つてもそれを今更

私は嘆いては居りません。寧ろ私は何の拘束をも受けないで、誰に累はされることもなしに、斯うしてゐられる今の生活を、外の女優達に較べて何れくらゐか幸福に存じて居ります。成程嚴密な意味での藝術はとても今の淺草で、かうした見物を相手にして得られやう筈のないのは解り切つた事で、その點では未だ〳〵不滿にも不足にも思ふことは澤山ありますけれど、監督といふ者もなければ、誰れ一人指圖がましいことをいふ者もなく、自分の思ふまゝに個性を發揮して行かれる今の自分の境遇を何程か仕合せに思つてゐます。第一此座(こゝ)では無理な連中を作らねばならぬ必要が御座いません。一圓の切符を買つて貰ふに五十錢の遣物をしてぺこ〳〵頭を下げて廻らねばならぬ必要も御座いません。見物にしても僅か拾錢か廿錢の切符で一晩の歡興と慰藉とを得て歸ります。さうした階級の欲求が現在の社會に在る以上は、それらの人に滿足を得させるといふことだけでも今の私にとつては嬉しい誇であります。それが縱令一歩〳〵でも新しい方向に道を拓いて行く便(よすが)ともなれば、今遣つてゐる私の仕事が必ずしも無意味なものでも御座いますまい。

今度井上正夫が新派の規約から脱れて公園に來るやうになつたに就ては、兎も角も劇界では一つの問題となつたやうに見受けます。新派の名優とも言はれる人が公園に入つたといふので、他人事(よそ)ならぬ自分の足元にまで動搖の浪を漂はせて驚いてゐる人もあるやうですが、私どもから觀れば何でもない一つの時代の推移、發展とでも云ふべきものだらうと思ひます。何にも公園が芝居の邪道でもありますまい、行く〳〵は天下の名優と稱せらるゝ人々も、この公園から出演るやうになり、またそれを怪しまなくなる時代が必ず來ると思ひます。私が初めてこの土地へ來た時の世の中の迫害といふものは、到底今の井上正夫の比ではありませんでした。困難や苦痛のかず〳〵が私等の周圍に蒼蠅く附き纏つてゐました。まだそれよりも以前に、此座の五九郎が眞砂座を失敗して此公園に旗擧げをした時には、所謂芝居者の中でも誰一人附いて來る者が無かつたといひます。三十何人といふ弟子達が喰ふや喰はずのその日を送つてゐながら、五九郎が公園で儲けて來た二千圓とかの金を銀貨に換へて、それをその弟子衆の前に投出して、兩手で一杯掬へるだけ掬つて今夜はそれで遊んで來いと言つて喜ばせやうと思つても、公園で儲けた金の厄介にならうとは思はないと言つて誰一人手を附ける者がなかつたと言ひます。それ程までに公園といふ處は人に卑しめられたものでした。ですけれども公園に出るといふことがそれ程藝道の墮落でもなければ、出ない役者が何もそれ程藝術的なものでもありますまい。それに淺草の見物でも近頃では今迄とは餘程違つて來たやうです。幾分か上品な相當知識もあり地位もあるやうな人々をも呼んでゐます。鼻つたらし小僧や兒守つ子ばかりの寄合でもありません。その證據には此場内での菓子の賣子が近頃では餡パンなどを買つて喰ふお客が尠くなつたと言つてゐます。尤もまだ土地が土地だけに樂屋内の空氣はとても私どもの足踏みを許しません。出方にしても大抵はこの近邊の待合や銘酒屋の主人で、初めからさうした人の傍(かたはら)の仕事に遣つて來るのもあれば、またそこいらの

お女將さん達がちよい〱見物に來ては、何時しか出方と喰つ付いて、出方の方ではこれ幸ひとその儘待合や銘酒屋に轉げ込んで亭主氣取りになつたりしたのもあるやうです。お白粉塗つて、白いエプロンを掛けた女案内人の中には、フキルムの合間〱に、眼と眼でものを言ひ合つたり、世は暗闇の隅々に手と手を握り交しては直ぐに交渉が成立つて、其足で、一晩幾何〱の御祝儀を當てにお座敷に侍る者もないとは限りませぬ。さうした空氣の中にゐて、昔ながらの女役者や、今の所謂女優と同じやうに思つてる人は、私のところへも遠慮なく猥らな誘惑の手を擴げてかゝります。昨夜も昨夜で差出人の知れない妙な手紙が舞ひ込みましたがそんなのは珍らしくも何ともありません。今では綑でからげて一束にも餘りませう、中には眞面目に私の藝の批評をして下さる方もございますし、熱心な方になると替り目毎に必す批評の手紙を寄越して下さる方もありますけれど、多くは物珍しさの戯れか、人を馬鹿にしてかゝるのが多うございます、そんなのは音樂學校や帝國大學の學生に多うございますが、中にはわざ〱會ひに來る人も少くはございません。忙しい中ではござりますし、私もさう矢鱈に會つてゐられませんから大抵は斷つてしまひますが、それでも餘り熱心に足を運ばれるとつひ會つて見ることも御座いますが、多くは何の用事もなくて只愚にもつかない事を喋舌つてゐるにはほと〱持て餘してしまひます。餘り馬鹿〱しくなつて鏡に向つて勝手に顏の拵らへでもして相手にしないで放つて置くと、それが爲めに感情を害して生意氣な女だとか何だとかいろんな事を言つて寄越すのもございます。けれどもそんなのはまだ良い方で、此間も一晩五十圓の祝儀を出すからちよつとでもいゝ座敷へ顏を出してくれと言つて來たのがありましたが、良人が怒つて「そんな馬鹿な事を言つて來るのは何處の奴だ」と言つて電話で怒鳴り散らしたことさへございます。それもこれも仕方のないことで私の目的を達する一階段として、また藝術修業の一道程として、妥協や讓歩の嫌ひな私も止むを得ないとと諦めてゐます。行く〱は私のほんとに望むやうな、舊劇でもなければ、さうかといつて歌劇でもない、その中間を行くやうな眞の演劇を作り出すまで私はこゝにかうして塵埃に塗れてゐる積りで御座います。

私がこの女優の生活に入つてから私と私の良人との關係は別段昔も今も變りはありませんけれど、私としては隨分能く働かねばならぬ立場に立つてゐます。此座に來てゐます間は良人も役者として私を認めて呉れますけれど、夜の十時になつて宅に歸りましてから、翌朝の十時に宅を出ますまでは一家の主婦としての任務を少しも怠るわけには參りません。良人は極めて一徹な寸毫も假借しない性質で、ぐず〱してゐると何と言つて怒鳴られるか知れません。それに良人は私の舞台に立つことを心から喜んでは居りません、寧ろそれを歇めさせやうと思つてゐます、離れて考へてゐると妙に何とも言へぬ厭な心持に侵されて直ぐにも呼びつけて歇めさせやうと思ふこともあると言つてゐます。私が舞台でキツスをしたりしてゐるのを見ると別に嫉妬むわけでもないに言ひ知れぬ憎ゝしさを感じるさうです。延いては頭が荒んで自分の仕事も手につかな

いやうな事になりますから、私もそれは非常に氣の毒なことに思つてゐます。けれども今の私には、それならばといつて此生活を廢めやうとはどうしても思へません。一旦思ひ立つた以上は何處までも通り通さねば置かない私の決心ではあり、又今廢してはこれ迄の私の仕事は何の意味をも殘さない事になつてしまふでせうから。が何よりも夫婦の愛は愛として私は私でなければなりません。その昔私と良人(うち)とは世にも珍らしい神聖な熱愛の中でありました。其頃まだうら若い幼稚な私の頭に宿つてゐた人生觀戀愛觀といふものは、もとより一夫一婦の神聖な戀愛で成立たねばならなかつたのです、良人(うち)も勿論嚴粛な宗教的禁慾的な考から、私と結婚前は素より、結婚後八年といふものは私以外の女に關係をするなどといふことはありませんでした。それが一二年このかた良人(うち)の思想の上にもまた實行の上にも一大變化があつて、それと同時に私の考にも一大革命を持ち來しました、私の自尊心が滅茶々々に踏み躙られたのを悲んだ私は、それによつて今迄とは全く變つた思想が私の胸に萌し初めたのを覺えます。一口に言つて了へば今では私は多夫多妻主義者です、私は男の多妻を認めます。それは生理的にも心理的にも已むを得ないことと思つてゐます。それと同時に良人も私の多夫を是認してゐます。只自分よりも偉大な自分よりも立派な男と見換へるならばなど〻も言つてゐます。そこへ行けば色々議論もありませうけれど、兎に角私は夫の不品行を認めると同時に妻の不仕鱈をも認めて貰ふべきだといふ考を持つてゐます。素よりそれは思想としてで、實行の上に於ては今の私がそんな眞似をしやうなどとは思つても居りません。けれども男と女との關係は愛が無ければ成立ちません。男には兎も角、女には愛に其生命です。私は愛を以て生きてゐます。其意味で愛が無くなつてまでも、喰はねばならぬ爲めに餘儀なく離れられないでゐる世間の夫婦といふもの程憫れなものはないと思ひます。一切の妥協や氣休めや、人の思惑を考へて生きてゐるのは卑怯です。私は今後何ういふ風に變化するかは知れませんけれど、只私の考へてゐるやうに生きて行くより外はないと思つてゐます。私は何處までも斯うして生きて行かうと思ふので御座います。

勝利？敗殘？

黑頭巾

其一

●御大典の前の京都は敗殘者を驅逐するに忙はし。乞食、行路病人、すべて敗殘者の醜なる者は、警察の力を以て排撃せられ、京都を去つて、神戸、大阪に移り、

爲に京都に近き養育院、救誨院は頓に繁忙を加へつゝありと聞く。

●食卓の蠅は掃へども又た來る。京都が一たび驅逐したる敗殘者は再び京都に來ること無き乎。一たび之を掃蕩すること、既に容易の業に非ず。而して驅逐したる曉、再來すとせば、當初の驅逐は徒勞に屬せず乎。

●京都は敗殘者を驅逐し盡くすこと、譬へば南禪寺山の松篁を、此の秋に、取り盡す如くにして、來年、再び松篁の生ぜざるを保するを得べきか。

●京都が驅逐しつゝある敗殘者は、外來者ばかりなる可き乎、京都に自生する者は無き乎。若し京都に自生する者も少からずとせば、京都は敗殘者を驅逐すると共に、併せて、京都自から京都人を驅逐しつゝあるに非ずや。

●京都が敗殘者を驅逐しつゝあるは、蒼蠅を逐ふとは同じからず、恐らくは田蟲の皮を剝しるが如くならざるを得る乎。自から以て、醜劣なる敗殘者を掃蕩するなりと思へども、其の實は、自から身の皮を剝ぎつゝあるならずんばあらず。

●吾輩は、京都の敗殘者驅逐の一事を笑ふに非ず。寧ろ此の機會に於て、世人が敗殘者に對して深酷なる感興を以て研究を爲すに至らん事を希望せざるを得ず。

其二

●萎れたる花瓶の花を取り捨つる時に、此の花の活けられし始を思ふ者は少かるべし。捨てらるゝ花は詩なり。

●破れたる筆、削り殘りの鉛筆は敗殘者たるを失はず。然れども此の筆、詩を書きし筆なり。此の筆の生涯は詩にあらずや。

●屑屋の籠の中に詩あり。屑屋は敗殘者なるが故に、此の詩が、世に出るの運命は少し。

●敗殘者の手に委せられたるものは、すべて敗殘者なり。被治者の運命は治者の運命に伴ふ。敗殘者に委せられたる詩が、振興者に依つて歌はるゝは、唯だ運命の神のみ之を能くす。

其三

●舊るくなるの始は敗殘の始なり。新らしきものに敗殘無し。舊るくなるといふの一事、既に、勝利の神に見放され、振興の壇場を退却することを意味す。

●疊は、新たらしき時に、必らず勝利者たり、振興者たるを得る。然れども必らず舊るくなるものなり。舊るくなるは其の運命なり。疊は、則ち、敗殘者たらずんば巳まず。

●梅干となるは梅花の使命なり。梅干たるを以て敗殘とせば、梅花も亦た必らず敗殘者たらずんばあらず。花は開いて榮あり。其の萎めるや敗殘あり。

●敗殘を厭はゞ花は、開かずして巳む可き乎。敗殘ありといふとも、花

は開かずんばある可らず。勝利の後に來るの敗殘は、尙ほ或は可なり。勝利無くして敗殘ばかり來るは、屈辱なり。

●新たらしき茶碗の缺けたるは、モダン、ルインなり。モダン、ルインは必らず天意に非ず。モダン、ルインは敗殘の生涯なり。敗殘を全部とするものなり。敗殘を象徵するものなり。敗殘、其のものなり。天道、初より敗殘を作らず。

●敗殘に生死することを莫れ。天意、敗殘を惡ならしむ。賽の河原に集れる子供を、鬼の虐待するといふは、天意を表現するものに非ずや。

●賽の河原に往かず、敗殘して浮世に存するものは、賽の河原を現世に發見するなるべし。

●天意、全部の殘敗を惡むも、一部の敗殘を、何者にも賦與す。四時の序、功を成すものは去るも、効を成さしむるの後に敗殘を與ふ。

●天は、振興と敗殘とを何者にも與ふ。盛者必衰、諸行無常といふは、此の理を歌へるものに過ぎず。盛者必衰、諸行無常の中に、全部の敗殘無し、一部の敗殘あり。

●諸行無常に捕はれたるものは哀れなる哉。花の萎みて枝にしがみつけるは則ち捕はれたるものなり。盛りの花を花瓶に盛りて、これを放任して、其の萎めるに任かす者は罪あるべし。

●櫻花は諸行無常に捕はれざるが故に、其の散るや美し。散るの美しといふは捕はれざるなり。捕はるゝといふは必ずしも執着に非ず。執着には努力あり。捕はるゝに努力なし。然れども櫻花の散るも、尙ほ遲し。

●花の散ること烟火の散るが如く、燦爛たる公伊藤のハルピンに薨ずるが如くならしめば、諸行無常の理に逝くと雖、盛者必衰の形を脫するを得べし。誰か無常を免がれ得可き。必衰に死せんこそ悲しかる可けれ。

●沙羅雙樹の花は、頃刻にして開き、頃刻にして散る。此の花、盛者必衰の理を示すと歌はれしも、何の花か、盛者必衰を示さゞる可き。但だ此の花、悉も必衰の形に捕はれず。豫め必衰の理の免かれ難きを知つて、必衰の形に捕はれざる可き覺悟を示すものに似たり。此の花、盛者必衰の理を示すといふの意、此に存せずんばあらず。

其四

敗殘の意味は甚だ廣し。世運の中流を離るゝ者は、悉く之を敗殘者なりといはれざるに非ず。然れども敗殘の意味、必ずしも、此の如く苛酷なるを要せず。

◉人生、榮枯、勝敗は免かれ難し。唯だ敗るといふと、尙ほ殘兵を擁して孤壘に據るを得る者は恕すべし。落武者となりて、這々として夜行する者は、敗殘者の面目をも維持する能はざる者なるべし。

◉人生の敗殘者の慘憺たるは、乞食、行路病人より慘なるは無く、而して古來、敗殘の詩的なるはナポレオン一世に過ぐるは無し。

◉今の獨逸は案外に强しといふも、ナポレオンが歐洲を席捲したるの猛威に比す可くもあらず。カイゼルは第二のナポレオンを夢想しつゝあるやも知れず。然れども彼の强味がナポレオンに及ばざるを見れば、假令、獨逸は統局に大敗することありとも、カイゼルはナポ

レオンの如くに、慘憺たる敗殘を爲さゞるべし。

◉ナポレオンには、極大の光榮ありたるが爲に、此の如き敗殘あり。敗殘の慘は、勝利の高さに比例す。此の意味に於て、敗殘の慘を極むるは、或は、勝利の光彩を反映するものならずんばあらず。

◉水呑百姓の子と娘とが手鍋を提げて道行すとも詩にはあらず。深窓の人、裾を曳き、荊棘に戰ぎつゝ、茅の屋根を潜るに於て始めて詩たる可く、劇たるべし。

◉ナポレオンは帝冠を奪はれ、セントヘレナに流竄せらるゝのとき、其の心事の憤悶、果して如何とはするぞ。古今、何人も未だ此の時のナポレオンの敗殘の心境を味ひ得たる者あらず。此の意味に於ては、風雲の氣帶ぶる者、誰かナポレオンを羨まざらん。敗殘すといふとも、彼の如くなるを得ば、古今の光榮たるを失はず。

其五

◉今茲、十月十七日は、ナポレオンが帆船ノーザムバーランドに搭して、セントヘレナのゼームスタウンに上陸したる百年の記念日に當る。此の偉大なる精神が、此の島の上陸場の上り段に立ちたる時、燦爛たるウォータローの戰、尙ほ心頭に在り。荒凉たる光景、眼前に在り。彼の悔恨、憤懣、煩悶、追懷、希望の念、如何なりしぞ。

◉彼が此の島に上陸したるは僅に四十六、慘風悲雨、六年を經て、其の永眠に就けるは五十二歲。これを今の我が政壇の人に比するに、内閣大臣の中の最年少者なるに過ぎず。

◉島の生活は、彼の雄志を消磨せしめたる乎「光輝」の如くなりし彼の影は薄くならざりし乎。肉體としては眇たる、此の偉大なる敗殘者は、檻中の獅子の如くに、物々しく護られて逝けり。

◉英人が、ナポレオンをして無上の敗殘を味はしめたるは可なり。其の役後に、其の家を物置にし、或は、之を馬小屋に宛てたるは大無情といふべし。此の心、則ち大英國、衰運の徴光にあらずとせんや。

◉仙臺の支倉六右衛門等、圖南の船が歐洲に使したる時、此の島に寄港して、十一日間を滯泊したるは、稀有の宿縁に屬す。當時、此の島の美なりしに非ず、唯だ風帆船の、風に送られたるのみ。

◉無上の敗殘に對する時、無上の勝利と振興とを味ふを得可し。吾輩は、時、早くして、支倉の寄港がナポ

レヤンの、遠く前に在るを惜む。

◉吾輩は、ナポレオンが絶島に窮死したりしを憾まず、また是れ沙羅双樹の巨花の末路ならずんはあらず。伯大隈の如きは、優曇華の花咲くように復活せしも、其の還り咲きは、色彩褪せたり。名花は還り咲す可らず。

◉ゼームス、タウンは、昔も今も、此の島の唯一の港にして、其の上陸場は、初てナポレオンの足跡を印してより百年、此の島の光景、すべて變化あるを見ず。唯だ帆船に、代うるに汽船を以てするのみ。其の餘は、此の島は、萬古、海洋の碧、渝ること無きが如くに、其の儘、依然たるセント、ヘレナなり。

◉日新といはずや。日に新ならざるものは、敗殘せずんば已まず。變化せざること百年、此の島こそ、天意、絶海の中に、敗殘を象徴しつゝあるものに非ずや。此の島が振興するの時は、何の日ぞや。恐らくは大洋の水、涸盡するの時ならん。ナポレオンが敗殘？、セント、ヘルナが敗殘？

其六

◉陰影を知らずんば光明を知らず。社會は、勝利と振興とを謳歌するに慣る、而して敗殘を閑却す。敗殘は陰影なり。敗殘を處分する一切の事業は、すべて陰影の中に在り。

◉小なる敗殘は小なる傲慢より來る。佛蘭西のガスコニイ人は法螺吹きの集團を以て目せらる。試みに、巴里のルーヴルは如何と問へば、私の家の馬小屋を想起すと答ふといふ。ガスコニイに風雲兒の輩出せしを聞かず。セント、ヘレナに窮死するほどの大なる敗殘者を出せしを聞かず。

◉乞食、行路病人は、救護院に收容せらる、の後も、尚ほ一介の傲慢魂を有す。一寸の蟲にも五分の魂ありといふ。五分の魂といふは傲慢魂のみ。

◉勇氣無き者は努力無し。勇氣無き者は慈愛無し。努力と慈愛とを知らざる者は、先天的の敗殘者なり。勝利無くして敗殘あり。

◉敗殘者を見よ。其の影、薄し。救護院の入院者を見よ。暗くして夜の如し。人は希望に輝く。影の薄しといふは、努力、慈愛に依つて生ずる一切の希望の光を失ひつゝあればなり。

其七

◉敗殘に生るゝ者あり。乞食の子は、其なるべし。敗殘は融通の利くものなれば、乞食の子は、敗殘たる所以を自覺せず。

◉學問は勝利を飾る。或は振興の基礎と爲すことあり。然れども敗殘を彩るものは學問ならずんはあらず。

●敗殘は詩なり。敗殘者の詩は、感興を以て讀まる。詩にあらずと雖、敗殘者の言、往々、無韻の詩を爲す。勝利者の言は淺し。敗殘者の言は、深き響あり。

●學問が、敗殘を彩る所以は一ならず、無色にして雅なるものあり、彩りて慘なるものあり。敗殘を彩りつゝある學問は、敗殘をして醜ならしむ。

●各地の救護院に在る者、紳士たりし者、大學、高等學校に在りし者も珍なりとせず。彼等の學問、素養は、其の敗殘をして、傲慢、奸黠、醜劣の色彩を加へしめつゝあり。

●彼等は酒を飲む可くして酒無し。腰痛を口實としてアルコールを求む。アルコールを飲むは、彼等の學問が敗殘を彩る所以の色彩ならずんばあらず。

其八

●一世の敗殘者を掃蕩するを得可き乎。人世の存在する間、敗殘の斷絕すること無し。此の意味に於て、樂園(パラダイス)は人間に在ること無し。樂園は勝利者にのみ在り。

●錦の褥を設け、小笠原流の禮法を以て、山海の珍味を備へて、乞食の子を招くとも、彼等は喜ばず。彼等は、又た自から獨得の自在境あり。則ち敗殘者にも樂園あらざること無し。

●コーランに、神はマリアを以て天の使に擇べりとなす。回教徒がコーランを左にし、劍を右にして、聖母を敬信するは奇蹟ならずんばあらず。

●回教徒は、聖母を以て「汚點無き童貞」となし、能く如何なる汚れでも防ぐと爲す。歐洲の軍人の守護聖となすものも、一に十字架にして、二に聖母なり。此の如く、修羅の巷にも、聖母の祀まるゝは、唯だ其の清淨なる慈愛の光に非ずや。マリアは愛を象徴するものなり。

●社會の敗殘者は、マリアを信じつゝありや。彼等は愛の光を見ず。愛に對して失明なり。愛の光を見ば復活し來る可き乎。

●傲慢は敗殘者を呪ひつゝあり。敗殘の咽喉を狹くし、眼を細くし、すべての機關をして糸の如くならしめて、何物をも容れず。彼等は何をも知らず、而して何物をも知れりと思へり。モンテインは曰く、Que sais—je?

●敗殘者は塵溜なり。塵溜は金殿にも附屬す。勝利にも敗殘にも樂園あり、金殿の庭にも鶴を養ひ、塵溜にも鶴下ることあり。唯だ敗殘の樂園には、一の帚あり、勝利の樂園には愛あるべし。愛の光輝かずんば勝利も敗殘も無し。勝利？ 敗殘？

吾輩、土佐より歸航するの時、神戸に、釜下山人を訪ひ、救護院を看て、敗殘の研究の感興を覺ゆ。此の秋は、晴暖長く續いて、倘ほ九月の如し。袷を著けて此の稿を畢るに臨み、單衣一枚にして、潮風に吹かれし南海の旅を憶ふ。

十月廿日　黑頭巾　再記

● 夏目漱石先生著

縮刷

社會と自分

定價壹圓貳拾錢 郵税八錢

總假名附ポイント廓表紙函入

津田靑楓先生裝幀三六新型金文字美本

著者の縮刷の序文に曰く――『社會と自分』は大正元年の末に出版になつた私の講演集であるが……私の講演が大正元年に多少なりとも讀者の役に立つたとすれば大正四年の今日になつても同じ程度に於て讀者の役に立つだらうといふ自信を私は充分に持つてゐるのである。それは私が偉いといふ意味でなく私の説が三年や五年で時勢後れになるやうな際どい題目ばかりに打ち込まれてゐないからである

夏目金之助

大好評八版

―目次―

■道樂と職業
■現代日本の開化
■中味と形式
■文藝と道德
■創作家の態度
■文藝の哲學的基礎

先生の性格と思想と情行を最も能く發露せる唯一の文集

本書は小説に非ず先生の講演集にして先生が文藝に對する抱負、識見及社會に對する意見を集む之を表面より論ずれば容易に俚耳に入り難き文藝上、社會上の意見を極めて巧妙にして興味あり且つ通俗なる譬諭を以て説き來り説き去り一言半句と雖も絶大なる興味の裡に人を捉えずんば已まざる所、誠に先生獨得なり好評又好評熱烈なる讀者の要求は茲に縮刷として之を發行するに至る、先生の小説を愛好する人は須く本書を讀んで先生の思想に觸れざるべからず本書は重に小説以上の興味を以て愛讀せられん。

東京市京橋區南紺屋町

實業之日本社

振替口座三二六番

(中付三の二)

▽見よ重版忽ち四版!!

文學博士　澤柳政太郎先生著

野心論

▽全篇悉く著者の心血!!

四六上製 ■ 定價壹圓貳拾錢 ■ 總布函入

郵税八錢

やまと新聞評

野心論の標題既に痛快也内容豈然らざるを得んや言々痛烈舌端火を吐き眞に澤柳氏其人に接するの感あり眞摯熱烈の大志ある者に非ずんば斯くの如きを得ず評者は滿天下の青年に向ひ本書の必讀を勸告するの義務を痛感す。

著者文部次官となり高商校長となり東北大學總長より京大總長に榮轉し今や野に下りて一管の筆克く天下を風靡す。著者常に熱烈なる理想雄健なる經綸を抱き眞摯事を處し行く處として特異强烈の印象をとゞめざる莫し。本書は實に先生最近の名著にして第一編に國家と野心第二篇に日本の大志大抱負を論じ第三篇を以て個人と野心を說き力說詳論す。燃犀の筆克く時弊を指摘し現代青年の無氣力を叱咤して縱横高く權勢名譽黃金を超越して天下第一を志せとなす。是れ著者の本領にして又本書の面目也。

時事新報曰く

國家にまれ個人にまれ熾烈なる大志實現せでは已まぬ理想勃々たる雄圖なからんには畏退のみ敗滅のみ燃犀なる文明史的觀察とを辛辣にして同情に富める個人的洞察とは本書に相煥發し片言隻句悉く青年の血となり肉となる

(中付三の三)

東京京橋南紺屋町　**實業之日本社出版部**　振替口座三二六番

法學博士 蜷川新先生著

最新刊

列強の外交政策

□定價金壹圓五拾錢□ 郵税拾貳錢

菊版總クロース

金文字入箱入

人種問題と支那問題とは今世紀に殘されたる二大懸案にして其の解決は日本帝國の双肩に懸れり!!!

燃犀なる史眼と政策眼とを有する著者蜷川博士一度親しくオットマン帝國を歷訪し其の過去の盛大と今日の衰勢とを比見するや感慨無量、歸來本書成る。即ち本書は第十六世紀より二十世紀に至る四百年間歐洲列國の對土政策を指呼論述して、縱横所說細微に亘り讀者をして身自ら其の複雜紛糾せる列强外交の渦中に立ち、老帝國の盛衰、列强勢力の消長の跡を歷然目睹するの感あらしむ。然れども著者に取り土耳古の問題は直に友邦支那の問題にして、其の運命は又支那の運命なることを痛感する時、本書は實に我國民に取り一大警鐘たり。今や世界未曾有の戰亂猶酣にして支那亦動搖恒なく我が世界外交の前途益々多忙ならんとするの秋！本書の出現は讀者に絶大なる活訓を齎すならん。

(中付三の四)

東京京橋
南紺屋町

實業之日本社出版部

振替口座
三二六番

世界五大強國 戴冠式拜観記

▽ジョージ第五世の戴冠式

内ケ崎　作三郎

千九百十一年六月二十二日は英國のジョージ第五世及びメリー女王の戴冠式を行はせられたる日であつた。僕はその當時幸に英國に滯在したるが故にこの盛典の一端を實見することが出來た。何分四年半前のことである、覺束なき記憶と多少參考のために保存したる新聞雜誌の記事とを參照してこの一篇をものするのである。

戴冠式は Coronation といふ。これはラテン語の Coronatio から來たのである。西紀五七一年にアイダン王が聖コロンバによりて戴冠したるが、當時の記錄には之を the Hallowing 聖式と稱してゐる。七三五年大監督エックベルトその弟ノルサンブリア王の爲に戴冠式儀典を制定した。アルフレッド大王は年少にして羅馬に使せし時法王レオ第四世によりて戴冠した。懺悔者と呼ばるゝエドワード王がウエストミンスター大寺院にカンタベリーの大監督を招いで戴冠式を擧げし以來、代々の英國々王は之に則ることゝなつたのである。國王及び女王が共に戴冠式を行ひたるは一二七二年八月十九日エドワード王とエレアノール女王とを以て嚆矢とする。

法王もしくは國教會の最高代表者たる大監督によりて戴冠するは新に即位したる國王及び女王は神に對してその心身を奉獻するといふ意味である。即ち戴冠式は國王と女王とが國民の忠誠と信頼とを受くると共に神及び國民に對して元首たるの義務職分を行ふべきことを宣誓する宗敎的儀式である。この宗敎的儀式は東羅馬帝國に於てはセオドシウス第二世が初めて採用したもので、西羅馬帝國にありては初代中世紀の頃に於て之を行うたのである。英國は新敎國にして國敎會が存在するが故に、カンタベリー及びヨークの兩大監督が主としてこの儀式を司るのである。

* * * *

大英帝國はヴイクトリア女王時代に空前の發展をなした。エドワード七世の治世はよくこれが充實を企てた。ジョージ第五世は洋々たる希望に滿ちて世界空前の大帝國の君主たる光榮を擔はれたのである。

英國民はこの記念すべき祝日を莊嚴ならしむるために全力を注いだ。ロンドン市民は街路の裝飾のために藝術と金力とを結合せしめた。英國の津々浦々よりの見物客、世界の果々よりの參列者、新大陸よりの旅客

は當日の數日前より大なる都會の混雜を一層甚しくなした。旅館といふ旅館、下宿といふ下宿は殆んど人を以て埋つたといふてよろしい。

六月二十二日の朝の模樣は甚だ怪しくあつた。八時頃には一しきり通り雨があつた。されどもバッキングハム宮殿よりウエストミンスターに至る通路とウエストミンスターよりトラフラガークエーア、ピツカデリー、コンシチチーション・ヒルを經ての還幸路は前夜來徹宵の幾十萬の拜觀者を以て溢れた。空地らしい空地には足臺が仕掛けられて盛裝したる紳士淑女の群集が早朝より控へてゐる。九時過ぎに空はやゝ晴れて日光が洩れそめた。人々漸く愁眉を開いた。街路の兩側には美しい服裝の兵士がゐかめしく護衛の垣を作つた。午前九時三十分より行列の先頭が動き出した。喇叭の音は勇しくバッキンガハム宮殿の中より起つた。種々たる先驅者や護衛兵を先にして各國代表者、王室賓客等の四頭挽馬車の行列が過ぎた。車窓を鎖したるによりて內部は能くは見えたかつた。我が東伏見宮殿下及び妃殿下は第十三の馬車に希臘の皇太子及び妃兩殿下と御同乘遊ばされた。第十四の馬車にはルーマニアの皇太子及び妃セルビアのアレキサンダー親王、デンマルクの皇太子の諸殿下召され、第十二のにはアソシタス公爵及び公爵夫人、西班牙のフエルデナンド大王、露西亞のウラデミール大公が同乘せられた。第十一の馬車には獨逸皇太子及び妃の兩殿下が召された。四年の後には大義親を滅して互に敵となり味方となりて相見ゆることあらんとは誰か夢想すべき、堵のごとき群衆はたゞ偏へに初夏の薰風の中に動き行く列强の代表者の威嚴をたゝえて心私かに大英帝國の潜勢力を誇りがに感ずるのみであつた。

この行列が去りて待つこと十五分、近衞の一隊が肅々と先驅し、バッキングハム前庭より又一しきり吹奏が聞えて、ウエールス親王即ち皇太子殿下が御馬車に乘られたることが知れた。一隊の騎兵の護衞隊、十九名の皇族を乘せたる四輛の馬車に續いて最後の御馬車に皇太子エドワード殿下はメリー內親王、ジョージ、ヘンリー、アルバート諸親王殿下と同乘せられた。この行列は至る處に歡呼せられた、殊に群衆中の小國民は聲を限りに奉祝の意を表した。

國王の龍車に隨伴したる行列は十時十分にモール及びコンシチツーションヨン・ヒルを進んだ。この時空曇りて雨また降りいでんとする氣合を示した。この行列こそ眼も眩むる計りの華麗と莊厳との配合であつた。一隊の近衞騎兵の先驅護衞の後に王船長に率ゐられたる十二人の水夫が禮裝づくめにて來り、その後には宮內官を乘せたる四輛の馬車が續いた。次の軍人團は印度傳令士官、國王直屬傳令副官、フレンチ、ハミルトン、ロバーツ、グレンフエル、ウード等の諸將軍、陸軍省の高級士官、その他何々といふ役目の職士謀將綺羅星のごとく着飾りて各々靜かに馬を打たせた。植民地騎兵隊、ことに印度騎兵の將校團は著しく注目をひいた。之に續いて近衞騎兵の一隊、參謀總長、警視總監が進んだ。さていよ〱龍車の番となつた。クリーム色の八頭の白馬に挽かれたる金色燦爛たる御召馬車が進んで來た。折しも黑雲を破りて輝きいでたる日光は龍車と見事に飾られたる馬と黃金色と紅色とをいみじく配合したる御者、別當、

侍從の一行を照した。時に祝砲はハイデ・パークより響き渡つた。群衆の歡呼は天地に轟き、小國民の手にふるユニオン・ジャックの色彩は綾實の上を漂ひゆくかと見えた。龍車の中を窺へば國王は毛皮にて縁とられたる大禮帽を被られ、御服は毛皮の襟のつける緋の大禮服である。女王は金色の刺繡のある象牙色の繻子の御衣を召し給うた。兩陛下共に群衆の歡呼に輕く會釋せられた。後衞を承はる將士の一群は鳴りどよめく鯨波の名殘りをあびて進んだ。

行列は左側の拜觀臺に集れる幾萬人の奉祝のうちに海軍省の穹門に達した。穹門は美裝を凝した。兩側の裝飾の旗差物、層樓の上に飜る國旗、一行の眩ゆき服裝、鍍金せられたる龍車、劍の光、ヘルメットのきらめき、取り集めて一大光榮の海を現じ、その渚には立番の兵士の緋の波燃ゆるごとく、幾十萬人の群衆は黑山のごとく聳え立つた。此間に大空に響き渡る各寺院の鐘の聲は更にこの光景をして神嚴の感あらしめた。街路の兩側、拜觀臺、窓といふ窓よりは絹帽と絹ハンカチーフとは盛に振られた。十數分迄動かざることゝ泰山のごとく見えし模樣とは全く變化したる狀態を呈した。かゝる道筋を縫うて光榮と勝利と希望の行列は聖マーガレット街を經てパーリアメント廣場へと進んだ。

* * * * *

ウエストミンスター大寺院の入口はこの朝六時半に開かれ、この大禮に參列の榮譽を荷へる貴族とその夫人達と紳士淑女が押し寄せた。或は靜かに遽かに自働車を飛ばし來るあり、或は家の紋所を打つたる仰山なる古式の馬車を驅つて來るあり、或は步して來るがあつた。貴族はいづれも緋の天鵞絨に毛皮の襟つける禮服を纒ひ、冠を手にし、封建時代を偲ばしむる裝束せる小姓を從へた。寶珠明玉にて飾られ、白絹の衣美はしく整へる上に緋の衣をかつげるは貴族の夫人方々であつた。陸海の將士、外交官、政治家、高僧、廷臣いづれ劣らぬ禮貌を競うた。午前九時には貴紳の流れが漸くやんだ。やがて正面の大門さつと開かれて國王の行列の參着遲しと待ち構へた。さる程にロンドン市長と下院議長は各々馬車に乘り、幾人かの行列を作りて到來したが目立つた。かゝるうちに行列の先着より順次に到着し兩陛下は午前十時四十五分に龍車より降り給つた。

* * * * *

默せる巨人のごとくテームス河畔に屹立する西の大寺院（ウエストミンスター）、風雨幾百年の歷史を語る石の伽藍、大帝國の英雄豪傑の靈魂永しへに息ふこの名刹の内部は今日こそ生れ變りたらんごとく花々しく飾られた。しばし想像の翼を張りて千載一遇の大典をかいまみばや。祭壇前の即位の「劇場（シアター）」の床は深綠の絨緞にて敷きつめられ、行廊は綠色錦襴を以て飾られた。祭壇に對せる處に五階の高座があり、その上に兩陛下の眞紅にして金色燦然たる玉座が設けられてある。その向には美はしき東洋風の綴錦の上に「聖エドワードの椅子」即ち英國代々の戴冠椅子が安置せられた。その下に低い二脚の椅子ありて兩陛下は儀式の初めの程これに倚り給ふのである。祭壇は金色の布にて被はれ、その上に薔薇色と石竹色との印度製の

絨氈が擴げられた。兩翼堂周圍の棧敷及び翼式場の周圍には特典を與へられたる拜觀者の坐席が設けられ、他の拜觀者は本堂、外唱歌隊室等に席を與へられた。中央式場より北の翼堂に至る迄は貴族婦人席に、その反對の位置は貴族席に、その先には下院議員の席が設けられた。午前八時より參列者は坐に着いたが、蓮歩を靜に移す貴婦人は裾を長く引いて甚だ優雅にみえた。貴族席は五色の虹の張るがごとく美はしい。勳章の光をきそふ外國使臣の服飾も美事であつた。この中には我が加藤大使及び夫人も混じつてゐたのである。殊に貴婦人方の白き肩を飾れる金剛石は互に光と光とを反射した。

*　*　*　*　*

時次第に迫りて大式場は人を以て埋まつた。ウエストミンスターの中教正は多くの僧侶を率ゐて聖所の北側に列した。九時半ポールランド博士新作の喇叭の吹奏あるや、一同起立し、獨逸皇太子及妃兩殿下を先頭にせる列國皇族及び代表者の行列を迎へた。一行は設けの席に着いた。再び吹奏がありて、一同起立する程に英國王室の親王内親王の一行進ませらる。ウエールス親王先頭に立たる。皇太子殿下にはガーターの禮衣を召され、コンノート親王及びアーサー親王も左右にして貴族席の第一列の坐に着かせらる。メリー内親王は他の内親王と共に左翼堂の一隅の席に着かせらる。暫しの待つあはひに、莊重なる大風琴の奏樂がある。最後にチヤコイスキーの戴冠進行譜も奏せられたれども參列者は更に不思議なるものを期待した。軈て街頭に歡呼の聲、馬蹄の音、どよめき渡る頃、大風琴の一奏と共に詩篇百二十二の『人我に向ひていざエホベの家に行かんと言へる時我喜べり、エルサレムよ、我等の足は足の門の中に立てり云々』との數節は合唱隊によりて朗らかに歌はれぬ。大波の寄するが如き樂の音、サプライとアルトの聲は高き天井へ反響しぬ。さる程に國王の行列はゆるやかに近より來りぬ。氣高く輝く法服を纏へる僧侶、侍僧、國王旗及び屬領各國の國旗を運べる代表者等に先んぜられ、之に續く面々は塗油式に際して天蓋を捧持すべきガーター勳騎士、即ちローズベリー、ミントウ、カドガン、クルーの四卿、式部官長、掌璽官、カンタベリー及びヨークの二大監督、モーレー卿、首相アスキス、等を數へた。

やがて女王メリー陛下は附き從へる貴族、監督、貴婦人の一群の中より一際丈高く薔薇、薊、酢漿草、蓮の花の金の刺繍を縫ひ込める白綾の御衣の裾を重げに引き給うた。紫色の天鵞絨の裾は三ヤードに餘れるが、眉目美はしき六人の名門の乙女の手に運ばれた。乙女等も絹と寶石にて光り渡つた。女王は未だ王冠を戴き給はず、褐色の御髮を現はし給へども、御胴衣の上には幾つかの金剛石輝き、御頸のまはりには明珠寶石の環をつけ給うた。御伴の貴婦人方もいづれも冠をば小姓達に持たしめて隨ひ奉つた。そのうちには女王塗油式を受け給ふ時天蓋を捧持すべき四人の公爵夫人も混じてゐた。優悅なるサザランド公爵夫人、威容あるポートランド公爵夫人、ハミルトン、モントローズの兩公爵夫人は女王陛下御自身の如く衆に拔んずる身丈は滿場の注目を引いた。ポートランド公爵

夫人の髮には世界に名高きポートランド金剛石が輝いてゐた。

* * * *

女王陛下は式場南側の左の椅子に着席せられた。かゝる程に國王の行列が近いて來た。先づ第一に玉寶(レガリア)を携帶せる貴人、三筋の劍と笏はロバート卿、キッチナー卿、ボーフォールト公によりて奉持せられた。內大臣ノールフォーク公は大典の中心人物として成功を喜ぶがごと見受けられた。ボーチャンプ伯は國劍を宮中警官長は聖エドワードの王冠を、三人の監督は聖書と聖餐杯と、祭碟とを奉持した。

國王陛下は緋の宮廷服の上に同じ色の大禮服を打ちかけ、白絹の袴と扣子付の靴を召された。王冠は未だ戴かせられざれば貂の毛皮にて裏打したる緋の天鵞絨の大禮帽を戴かれ、ガーター頸章その他の勳章を掛けさせられた。肩衣と半ズボンとの八人の小姓は玉衣の重き裾を捧ぐる。國王の行列は本堂、合唱隊席を過ぎていよ〳〵高座に入られた。此時まで導き渡りたる大風琴の音止みて、ウエストミンスターの合唱隊より"Vivat Regina Maria! Vivat Rex Georgius. Vivat! Vivat! Vivat! And Vivat! Vivat! Vivat!"『女王マリア萬歲! 國王ジョウルジ萬歲! 萬歲! 萬歲! 萬歲! 又萬歲! 萬歲! 萬歲!』といふ一語は一語より聲音を加へて最强音聲(フォルテシーモ)に達したる祝聲が揚げられた。

國王は女王の前にて叮嚀に敬禮し給ひてその右席に着かれた。兩陛下は床几に跪かれて滿堂靜默のうちに神に祈りを捧げられた。終りて椅子に着かれた。

この時祭壇の北側の座席よりカンタベリー大監督は立ちて、高座の一隅に他の三人の大官と共に位置を占めた。大監督は十分に深く息を吸うて、『諸君、余は玆にこの王國の擬(まぎれ)もなき王、ジョージ王を諸君に披露す。故に諸君今日服從と奉仕とをなさんとて集りたるなり。諸君はかくなすことを欲するや』と。この大音聲終るか終らぬかに七千人の參列者は異口同音に『ジョージ王萬歲』と叫んだ。そは貴族席より、下院議員席より、貴婦人席より、合唱隊席より發せられて、壁にあたり、柱に傳はり、穹窿に飛び、終に喇叭の吹奏のうちに混じりて再び餘響を堂內に送つた。大監督は三人の大官を連れて殘りの三隅に立ちて同じ宣言を繰り返した。國王はその間椅子の前に起立して聲の向ふ方へと四度轉ぜられた。この都度全會衆の萬歲の聲は怒濤の寄するごとく鳴りどよめいた。眞に印象深い瞬間であつた。

木枯吹き荒さびたる野の曙の靜けさが續いた。兩陛下及び皇族一同床几に椅りて祈禱の態度を執り、二人の監督は兩陛下に代りて懺悔の連禱を捧げた。その唱和は合唱隊によりて歌はれた。聖餐式が始まつた。『信仰箇條』は一五九〇年ジョン・メルベックの手になれる音譜によりて唱はれた。兩陛下及び會衆一同起立した。

此時ヨークの大監督は威儀を正して敎壇に上りて國王の爲に說敎を試みた。聖句は聖路可傳二十二章二十七節『我は爾曹(なんぢら)の中に事ふる者の如し』である。說敎は短いが、力が充ちてゐた。其大要は次の如してある。

『大典の日となつた。忠誠なる幾千萬の臣民に從はれ、彼等の祈禱によ

りて高められて、王は今神より聖式とその王冠を受けんとしてゐる。歴史と信仰との尊敬すべき家に於て一帝國は今や諸王の王即ち神の御前に來る。暫く止まりて神よりの言を聞け。『我は爾曹の中に事ふる者の如し。』そは基督がその王國を得且つ支配し給ふ方法を敎ふるのである。：：王は神と人との奉仕に於て國民を指導すべき位にある。彼は神の僕(しもべ)である。神の祭壇より劍と笏と天體と王冠との徴象に於て彼はその支配を受く。其は神なる主人によりて王なる僕に托せられたる信任である。：：王はまた人民の僕である。奉仕する者として人民の中にあること、印度の群衆の中に、強く若い植民地の國民の中に、萬人のことを考へ、萬人のために注意し、共通の記憶、共通の理想、共通の犧牲の親交の中に萬人を結合するために個人的、地方的利害の上に超越したる人としてあることは王者の生活である。：：王は獨りこの聖式に列するに非ずして、彼はその人民を携へ來たのである。蓋し國民的生活にとりて今日は聖別せられたる日である。この大國民は今日を以て吾等の父なる神に對して奉仕の契約を結ばんことを祈る。如何となれば神に使ふる時にのみ眞の自由が存するのである。我國民は人類間に正義、平和、公平の聖なる主張を努むる　國民として世界の諸國民の中に卓然として屹立する榮譽をえんがために祈らねばならぬ。最後に此處に參列する特典を與へられたる我等は人民に事ふることに於ては王を則とすべきである。吾人に對して與れる程度に於て神は公の責任、影響、經驗を托し給うた。されば吾人をして祖先の鄕土、その子孫の帝國に事へんがために、神と王とに今日を聖別せしめよ云々。』

*　*　*　*　*

ヨーク大監督は力ある說敎の後に敎壇を降るや、カンタベリー大監督は起ちて玉座に進み、低き熱心なる聲にて宣誓を國王に求めた。國王は然りと應じ、『大不列顚、愛蘭との聯合王國、それに屬する諸領土をば議會の協贊を經たる成文律、同じき法律と習慣に從ひて支配すること、福音、新敎改革宗敎、法定せられたる英國敎會の敎議、禮拜、訓紀、及び政治等の眞正なる信仰表白を維持すること』等を宣誓した。これを述ぶるや王は國劍を捧持するボーチャンプ伯に先導せられて祭壇に進み、その階段に跪坐し、右手を聖書の上に從きて宣誓せられた。銀製のインキ入れにペンを浸して國王は宣誓書に署名し給ひて又玉座に復し給うた。國王をして暫く瞑想せしめんとにや合唱班は美はしき'Veni Creator Spiritus'『降り給へ靈の父』が唱へられた。

大監督は短かき祈をなし、その手を黄金製の鷲の形をせる聖油入に手を浴きた。この時合唱班と管絃樂とはハンデルの『祭司ザドック、豫言者ナタンソロモン王に塗油しぬ』を奏した。こは崇高なる曲にして勝ちほこりたるハレルーヤにて終り、折返しは『神よ王を救ひ答へ、國王萬歲、國王萬々歲』を高唱した。國王は式部長に扶けられて禮帽と禮服とを脱き、戴冠椅子に着かんとて玉座より起立せられた。ローズベリー卿及び他の三卿は黄金色の絹の天蓋をその上に捧げた。大監督は祭壇より匙を取り、之にて聖油を國王の頭と胸と兩手とに塗つた。ウエストミン

スターの中敎正は種々の法衣を國王に呈した。塗油せられたる王は昇天したる基督の王權の代表者として半ば僧侶の性質を有するといふ傳說に從うたのである。式部長官は黃金の拍車にて國王の踵に觸れて之を祭壇に納めた。國劍はボーチャンプ伯の手より式部長に渡され、他の劍はボーチャンプ伯に渡された。この劍は大監督に渡されて、最後に祭壇の上に横へられた。その劍は國王に渡され、國王は之を佩用した。大監督は次の森嚴なる敎を垂れた。

『この劍を以て正義を行へ、不義の發達を止め、神の聖なる敎會を守れ、寡婦と孤兒とを護れ、朽敗せんとするものを回復せよ、回復せられたるものを維持せよ、過失を罰し且つ革めよ、善良なる秩序にあるものを堅實ならしめよ、是等のことを爲さば汝は一切の德に於て輝かん、されば來らんとする世に於て彼と共に永遠に支配し得んが爲にこの世に於て我等の主イエス・キリストに忠實に事へよ。』

國王は起立し、劍を解いて之を祭壇に横へて椅子に着いた。この時ボーチャンプ伯は百志(シルリング)にてウエストミンスターの中敎正よりその劍を購ひ、式の絕る迄鞘を拂つたる拔身を捧げた。王は黃金色の上袍を纏はせられ、指環と二個の笏――一個には鴿、一個には十字架がついてゐた――と手袋とが與へられた。かくして國王は戴冠椅子に着いた。ウエトミンスターの中敎正は祭壇よりチャールス二世用のために作られたる『聖エドワードの王冠』を取り之を大監督に渡した。大監督は短かき祈の後に之を恭しく國王陛下の頭上に被らし奉つた。貴族は同時に冠を戴いた。

會衆は總起立して『神よ國王を救ひ給へ』を連呼した。今や燦爛たる光輝は冠といふ冠より發せられた。寶石、勳章、緋衣、彩旗、白絹、皆照り輝いだ。あゝ何等の光景ぞ。眞に人間世界の天使劇を見るがやうである。どよめく波を靜めんとして幽玄なる大風琴の音樂が響渡るや、大監督は國王のために祝禱を祈つた。

『主よ汝を祝し、汝を守り給へ。神は汝をして汝の人民に王たらしめたれば、神は汝を此世に於て榮えしめ、來らんとする世に於て彼の永遠の慶福を汝に分ち給はんことを、アーメン。

神は汝に豐かなる國と、健全る時候と、勝利の艦隊と軍隊と、平安なる帝國、忠實なる元老院、賢明正直なる顧問官と裁判官と、忠誠なる貴族と、義務を重んずる中流階級と、敬虔博學にして、有用なる聖職、正直、平和、柔順なる平民を汝に與へ給はんことを。アーメン。』

大監督はまた全會衆に對して告げた。

『同一の主、全能の神は、この偉大なる嚴肅なる儀式に集りたる聖職と貴族と、この邦の全國民を併せて、神を恐れ、國王を尊び、聖なる攝理の慈悲深き監視と、我等の英明なる君主の注意深き保護とによりて、絕えず平和と豐富と繁榮とを享有し得んことを許し給はんことを、我等の主イエス・キリストにより祈り奉る云々。アーメン。』

＊　＊　＊　＊　＊

國王は高座の玉座の右席に復せられた。大監督は玉座の前に、他の監督等は各の位置にて跪いて、『余、カンタベリー大監督たるランダルは汝

我等の君に對して、忠誠眞實なるべし云々。』と言うた。大監督は國王陛下の左頬に接吻して退いた。ウエールス親王は冠を脫し、玉座の前に跪きて、若々しき聲にて父王に忠誠を宣誓し給ひ、進みて父王の頬に接吻し、父王は皇太子に接吻の返禮をなし給うた。コンノート公爵、アーサー・コンノート親王、ノーフオーク公爵等いづれも敬意を表された。この時ルーテルの作に係る『神は我等の城なり』の大風琴の奏樂があつた。そが終るや大鼓鳴り、喇叭響き、貴族と民衆とは國王萬歲、ジョージ王萬々歲を連呼した。

* * *

續いて女王メリー戴冠椅子に着いて同じ式を行はせられた。これは重複すれば述べない。終りて『汝聽けよ』といふ奏獻歌が奏せられた。兩陛下は共に祭壇の前に進み、供物をなし、大監督よりパンと葡萄酒とを受けた。かくして大典は聖餐式の敬虔なる莊嚴を以て終つた。兩陛下は聖エドワード禮拜堂の一隱所に暫く退きて、紫天鵞絨の國王禮服を纏はれ「アフリカの星」と黑親王の紅玉を有する王冠を被られて現はれ出で給うた。

かくして兩陛下は再び起る萬歲聲裡に西の戸口より退出せられて又龍車の中に入り給うた。

* * *

劇の如き複雜なる徵象のうちに基督敎的君主の理想が現はれたること、我等東洋人にとりて幾多の暗示といはねばならぬ。我國の御大禮には我國固有の信念と意義とがある。されど王道の宣言たるは東西揆を一にする。四年前異國の盛典を追懷して　今上陛下御大禮を祝し奉らんとするのである。

▽佛國大統領就任の日

五來素川

現佛國大統領ポアンカレー氏は、其英邁剛健の資を以て今や此空前の國難に當つて居る、彼れの熱烈なる愛國の情、彼れの不撓不屈の大意力は、實に此世界文明の運命を堵せる大戰亂に際し、優に人類の庇護者たる大責任を負ふて立つに充分なる資格を示して居る、彼れの治世が此くの如く劇的（ドラマチック）なるが如く、彼の就任事情も亦甚だ劇的（ドラマチック）であつたのである、其大統領就任の日に於ける巴里の盛況は全く是から來たので、其就任の日の光景を物語る前、吾人は先つ其就任事情を物語るを以て當然の順序なりと信ずるのである。

獨乙が歐洲の覇權を握らうとして居たのは一朝一夕のことでない、唯露佛兩國か其東西の國境を覗つて居るので其志を得なかつた丈けである、然るに露國か一たび日本の爲めに敗衄するや、獨乙は得たりかしことなし、直に其本音を出して佛國に食ひ掛つた、是が千九百五年より十一年迄續いた有名なモロッコ問題と云ふものである、即ち亞弗利加北

岸のモロッコと云ふ國を、佛國が獨占しやうとするのに對して、獨乙か故障を申立て、六ケ年の葛藤の後、遂に佛國は亞弗利加のコンゴー植民地を割譲して、僅に獨乙の攻撃を免れたのである。

此くの如きは佛國の一大屈辱であつたことは云ふ迄もない、特に獨乙の野心は烱眼なる佛國政治家の注意を喚起し、此に大に國民の愛國心に訴へて、自衛の策を講ずるの必要を覺らしめた、其處で此精神を體して起つたものが現大統領ポアンカレー氏である、彼は則ち前首相カイヨー氏に代つて此に愛國内閣なるものを組織した、而して其内閣の特長とする所は佛國の第一流の政治家を網羅し得た點である、彼の法相ブリヤン氏、勞働大臣レオン、ブルジョア氏の如き、前に屢々首相たりしことありし人々で、海相デルカッセ氏は有名な外交家、陸相ミルラン氏は有名な經綸家であつた。

此くの如く名士を集めて首位に座したポアンカレー氏の威望は頓に上つた、然し若し是丈けならば或は虛名丈けに終つて彼れをして今日の如き地位を占めしめ得なかつたかも知れぬが、幸にして時世の風雲は彼れの手腕を試むるの機會を得せしめたのである、即ち千九百十二年彼れの首相兼外相となつた年は、バルカン戰爭の勃發した年で、土耳古が、勃、塞、希と戰つて敗れ、勃は亦羅、塞、希と戰つて敗れると云ふ有樣であつた、此間獨、墺、伊の三國同盟に、英佛露の三國協商と互に外交上の暗闘を開始し、將に歐洲の大亂ともならうとした戰亂を、危機一髪の間に防ぎ止めて、事を平和の間に解決したのは、彼れポアンカレー氏の斡旋の功大に與つて力あつたことは當時萬人の認むる所であつた、殊に彼が其陸相ミルラン氏をして、軍隊の示威運動を以て愛國心鼓舞策を實せしめて、大に成功したのは、當時の人心に一大感動を與へた、此くして彼の威望は隆々として上るの有樣であつた。

然るに翌千九百十三年一月は大統領改選の時である、佛國の制度は、大統領は國民の直接選擧する所たらずして、上下兩院議員の選擧する所である、是れ國民の英雄崇拜心を利用して一躍帝位に登つたナポレオン兩帝の先例に鑑みて其制度を立てたのである。

當時其候補者が多數あつたが、結極二人の競爭となつて仕舞つた、其一人はポアンカレー氏で、他の一人は時の農相パムス氏である、パムス氏は唯裕福な無能の好人物で、之を推したのは、時の多數黨たる社會主義的(ソシアリスト)急進黨(ラヂカル)で、之に急進黨(ラヂカル)の一部が加つた、即ち共和主義を抱懷する大多數である、彼等はパムス氏を以て一の傀儡として其頤使に任ぜんとしたのである之に對してポアンカレー氏を推したのは、急進黨(ラヂカル)の他の一部と、溫和共和黨及び保守黨（非共和主義）であつた、此故に共和主義者の多數はパムス氏の味方なので、若しポアンカレー氏が選擧されるとすれば、それは非共和主義者即ち帝王黨僧侶黨の力を假らねばならぬ譯である、（社會黨は傍觀の地位にあり）佛國の習慣として大統領の選擧される前々日、共和黨の議員丈けが上院に會して、本會議に足並を揃へる爲めに、其候補者の豫選會を開くことになつて居る、所が其結果はパムス氏の方がポ氏に比して多數であつた、唯パムス氏も全體の過半數を

得ないので。正規の候補者たることが出來ない、然し乍ら比較的多數を得たるパムス氏が本會議の候補者たるのは當然だといふので、ポアンカレー氏に候補撤退すべき様勸告すべきの議共和黨に納れられ、其勸告委員を上げた、それは從來首相たりしことある佛國の政治家連で、カイヨー、モニー、コンブ、クレマンソー氏等であつた、彼等は袖を連ねて外務省にポ氏を訪ふた、コンブ氏は當然急進黨の首領として、其勸告の辭を叙ぶ可き筈であつたが、餘りに老年なので、クレマンソー氏代つて其辭を叙べた、それはポ氏にして候補を撤退せずば、共和黨は此に二分す可く、殊にポ氏が帝王黨の援助に依りて大統領たるは、共和政治の基礎を危くするものであると云ふ趣意であつた、ポアンカレー氏は答へて、自分は何が故に共和黨員と見做され得ぬかを解せぬのである、諸君の候補撤退の勸告は之を謝するも、我が政友は之を撤退す可らずと我輩に忠告しつゝあるが故に、諸君の忠告には應じ兼ねる』と云ふて、頑として聽納れなかつた、猛虎將軍の綽名あるクレマンソーの如きは湯氣を立てゝ怒つた、けれどもポ氏は堅く其說を執つて動かなかつた、其夜クレマンソーは彼に書を送つて、大に彼を痛罵した、人は彼等の間に決鬪の起らんかを氣遣つたか、調停者があつて大事なくして事濟みとなつた。

此事件は當時佛國の輿論を沸騰せしめた、何となれば急進黨が其多數を頼んで、其利用し易き無能の人物を擧げ國家多難の際尤も有要なるポアンカレー氏を退けんとしたからである、從來國民は彼等政治家の常に嫉妬、怨恨等の私情を肆にして、國家の大事を顧みない實例を目擊しつゝあつたのである、此に於て此際國民愛國心の權化とも云ふ可きポ氏を、彼等政治屋が其私情の犧牲に供するといふことを怒り、心を等うしてポ氏に同情し、非常なる熱心を以て翌日の選擧の結果を待ち構へた。

選擧當日其會場たるヴェルサイユ宮の內外は實に千古の偉觀であつた、ヴェルサイユ宮は巴里の西南五里の地にある十七世紀の名王ルイ十四世の築いた宮殿である、其建築は一丘陵の上に峙ち、其中心を成す宮殿と其左右兩翼とを併せて長さ實に數百間に達し、其結構の壯麗雄大蓋し世界第一と稱せられて居る、加ふるに其庭園は廣さ數里四方に亘り、トリヤノンの別宮亦一里の距離にあつて、其間の黑き森の間に通へる大路小路實に四季散策の眺めに飽かぬ所である、又其上に宮殿の周圍には大小數個の池があつて、其中には希臘神話の男神女神の裸體像か散布してあつて皆噴水する樣に仕掛けてある、唯之が爲めに水を多量に要求するので、夏期丈け一ヶ月に一回第一の日曜に噴水さすることになつて居る、之を大水（グランゾール）と稱し、內外の觀客を呼び集むこと夥しいものである、此くの如き大建築は所謂西洋の阿房宮で之を築くが爲めに如何なる巨費を要したか素より吾人想像の外である、彼の佛國の王室が國民の怨府となつて、遂に大革命を勃發せしめ、國王ルイ十六世を斷頭臺の露と消えしめたのは、此宮殿を建てた爲めだと云はれる位である、今日では此大宮殿には歴史畫を掛け併べ、以て國民教育の資に供して居る。

此ヴェルサイユの一部に增築された一棟があつて、それは普佛戰爭後當時の大政治家が集合して、五ヶ年間此戰後の跡仕末を議した有名な國

民議會(サンブレナシヨナル)の議事堂である、此議事堂を見物する者は有名なる大統領チエールや、獨眼龍ガンベツタ等の議席を指されて一種の感慨を引き起すのである、大統領の選擧は上下兩院の合併で、之を國民議會(アツサンブレナシヨナール)と稱し、此處に集合して行ふを例として居る、是は佛國第三共和政治創立の紀念を新にする所以であるからである。

今や上下兩院八百の議員は此莊厳なる式場に會して此に國家の元首を擧げんとして居る、若しパムス氏勝たんか是れ多數黨なる急進黨派の横暴を肆にせしめて、佛國の利益を黨人私情の犧牲に供せしむることになるべし、若しポアンカレー氏勝たんか、此に徐佛國民の愛國心を鼓舞して、國防の大事を完うし得ることになるのである、實に此一日が佛國興亡の決定する秋なるかの如き觀を與へ。議場内の光景は實に緊張し切つて居たのである、會場の外はと見ると、宮殿の周圍は兵卒を散布して警戒を嚴にして居るが、其の會場内の光景は見えずとも、せめて一刻も早く其結果を知らんとて宮殿の外に群集せる人々は數萬に上り唯一條の路を開いて僅に議員大官を通行せしめ得る丈けであつた、場所が佛國の名所丈けに、其旅宿(ホテル)の數は數十に登つて居るが、其食堂は悉く滿員で、皆珈琲を飲み、サンドキツチを喫り乍ら選擧の結果を待つて居る、各國の使臣、朝野の名士悉く此一市に集り來つて、其日は巴里の交際社會(ソシエテ)はヴエルサイユに移轉したと迄云はれた、

開會の前パムス氏側はクレマンソー氏、ポアンカレー氏側は法相ブリヤン氏が互に熱心に議員の間を往來し、彼所此所に團體を作つて居る議員中に入つて行つて其反對黨の候補者に惜氣もなく熱罵冷笑を浴せ掛けて居る、時としては此兩周旋者は互に鉢合せをやつて、額をしがめて別れることもあつた、やがて上院議長デユボスが議長席に就いて開會は宣言された、各議員が着席すると、忽ち其一方から議長と呼んで立つものがある、それは帝政黨(アンペリヤリスト)の一議員で、彼は大聲此選擧會の不法なることを抗議するのである、其理由は大統領は國民が直接に選擧す可きものであつて、議員が之を選擧す可きものでないと云ふのである、是れは兩那翁が皆國民の直接投票で大統領になつたからで、是が帝政黨の一大政綱となつて居たるからである、畢竟佛國民の英雄崇拜に對する傳說を主張したものである、云ふ迄もなくそれは憲法違反であるといふので議長は取り合はない、其處で正式の選擧に取り掛つた、其時の候補者は右二人の外に、上院議長デユボス氏、下院議長デシヤネル氏、今の藏相リボー氏皆然りである。殊に社會黨は其老政治家ヴアイヤン氏を以て其候補に擬した、此くの如き形勢であるから中々投票が散布して居て兩院の絕對過半數を得難い、第一回の投票は既に較やポアンカレー氏の多數を示したが、他の小得點者が其投票者をして皆力をパムス氏に集めしむる形勢があるので國民は中々安心が出來ない、其結果が場外に傳はる毎に場外では鯨波を揚げて之を迎へる、巴里の各新聞社前は實に空前の人出で、道路の通行も止ると云ふ有様である、巴里からヴエルサイユに行く汽車の中では、新聞記者やら、壯士やら、泡沫を飛して候補者の人物も品隲し殆んど摑み合はん許りの勢である、やがてヴエルサイエ宮殿の上で遠雷

の如き聲が聞えるので何事か起つたかと思ふと、それは物好きな男が飛行器で選擧見物に來たのである、あれよ〳〵と云ふので數萬の人の顏が上の方を向く、飛行機から見たら定めて白い小石を併べたやうであつたらう、やがて今回の決選投票後で勝け遂にポアンカレー氏に歸して仕舞つた。歡聲は實に佛國全土を震はして起り、祝電内外各地より巴里に向つて集り、各國帝王にして、ポアンカレー氏を首相として面識あるものも皆其成功を賀すると云ふ有樣であつた。

其夜巴里の光景は實に目醒ましいものであつた。自分はヴェルサイユから還つて、レザンヴアリード巴里の中央の停車場を降りると、其停車場の前面は人を以て埋められて居る、是は幾時間か過ぎて後、新大統領が特別仕立の列車で歸つて來るのを迎ふる爲めである、其實際に歸着した時の市民熱狂の有樣は實に言語に絶した、或人が其有名な彫刻家ロダン氏に逢つて、ポ氏投選の所感を叩くと、時事に冷淡な氏ではあるが『パムスと云ふ人は一體今迄何處に何をして居たのかい、聞いたことがないではないか、ポアンカレーさんなら僕でも知つて居るから、餘程偉い人だらう』と云ふて喜んだそうである。

其夜巴里の熱狂は非常であつた、其銀座通りとも云ふ可き、大樹街（グランブルヴァアール）は旗行列や、提燈行列が引きも切らぬ、此連中が皆ポ氏の邸前へやつて行つて、萬歲を叫ぶ、ポ氏は諸方より送り來る花環の中に埋まつて居たが、やがて夫婦連れで窓の所へ來て挨拶する、新聞屋が直ぐに寫眞を取るマグネシユームを注ぎ掛ける有樣である、やがて兵隊迄行列を作つてポアンカレー萬歲、ミルラン萬歲（陸相）をやると云ふ有樣であつた、是が現大統領ポアンカレー氏の當選といふ實際上の就任日の光景である、其形式的に大統領就職式を行つた日も、亦非常な人出で、氏に歡呼を浴せかけたが其盛況はとても此當選日には及ばぬのである、今でも自分の記憶に殘つて忘れられないのは、翌朝の新聞に出た、負け嫌ひの猛虎將軍クレマンソーが、戰に敗れてヴェルサイユの議場を出る時の顏色、態度である、兩手を外套の中に突き込んで、帽子を退けそりに被り、落膽と憤怒の兩方の感情が不思議な調和を取りて其樣子に顯はれて居たことである。其後彼れが此自由の人（オンムリーブル）と云ふ日刊新聞を起し、毎日論說を揮いてポ氏の政策を攻擊したのも無理ならぬことゝである。

▽露國皇帝戴冠式

大前退藏

露國の戴冠式のあつたのは今から二十年程以前であるが、丁度其頃私はペトログラードに居合せた。日本からは伏見宮殿下を始め、大使としては山縣元帥が參列せられた。然しながら私は其頃公使館の書記官をして居たので日本から來た人々の接待や世話や何かに忙殺されて戴冠式には列したけれど、何ういふ式があつて、何ういふ順序で行はせられたかといふことに今は能くも覺えてゐない。何でも各外國からは皇族方や使

節が來られて二十何萬人といふ人が集まつたのであるから、ホテルなどは非常な混雜を極めて、平常の十倍も支拂はねばならぬといふやうな始末であつたから、私は一軒の貴族の家を三週間五千何百圓かの金を拂つて借受け、それに日本の使節を悉く收容したといふやうな次第であつた

露國の戴冠式は、矢張り日本の京都といふべきモスコーで行ふのが例になつてゐる。モスコーの王宮の一廓クレムリンで行はせられるのであるが、儀式は歷代の王の遺骸を祀つてあるウスペンスキーといふ相當に廣い寺院で擧げさせられる。私共は其頃寺院の周圍に構へた棧敷の上から拜觀しただけで、只もう莊重な、極めて嚴肅な儀式が長い間かゝつて取行はれたといふのみで其外の事は記憶に殘つてゐない。國民一般は全國津々浦々に至るまで奉祝の意を表して盛に皇運の無窮を祈るのであるが特に其儀式の擧行地だけにモスコーの市民は家毎に國旗を揭げ、其頃まだ左程用ゐられてゐなかつた電燈の滿艦飾（イルミネーション）は到る處に煌々と輝き、モスコーの全都は殆ど燃えるやうな美觀を呈してをつた。何しろ二十日程の間といふものは滿都奉祝の意を以て非常な混雜を極めたのであるが、中にも、代々の慣例となつてゐる皇室から市民へ下さるゝ施物を分配する。時の騷ぎは殊に大したものであつた。廣い野原のやうな所に人が集まつて待つてゐるのであるが、われも〳〵と推寄せた群集は人の雪崩を打つて、爲めに二千人の死傷者をさへ出したといふ騷ぎであつた。色々の人種が集まつて成つてゐる露國の國民だけに、それ〳〵固有の服裝を着けた人間が、あつちにもこつちにもぞろ〳〵してゐたのは今思ひ出しても稀觀である。

▽カイゼル卽位の頃

文學博士　井上哲次郎

獨逸帝國の、今のカイゼルの卽位の頃の狀況を回想して見るに、いろ〳〵感ずるところがあるからして、それを簡單に纏めてお話することにしよう。

我輩が獨逸に留學生として行つたのは、恰度明治十七年であつたが、伯林に到着したのは其四月である。四月からして七月まで居つて、それからハイデルベルヒに行き、ライプチッヒに行き、彼此二年を經た後又伯林に歸つて來たのである。それが明治十九年の四月であつた。それからして明治二十三年の七月まで伯林に居つたのであるからして、彼此五年ばかり伯林に滯在して居つたのである。其間に隨分變化があつて、ウイルヘルム一世が一八八八年三月九日に崩御になつたのである。さうすると其皇太子が卽位されて、フリードリッヒ二世となられたのである。ところが此方は卽位前から喉頭癌を病まれて居つたので、卽位後は益々重患となつて九十九日間帝位にあつて崩御されたのである。而して引續いてウイルヘルム二世卽ち今のカイゼルが卽位されたのであるからして一八八八年には獨逸にとつて隨分大きな變化があつた次第である。卽ち

吾々の伯林に居る間に獨逸帝が三世代つたといふのである。で、今のカイゼルは、一六五九年即ち我が安政六年に生れた人であつて、恰度即位の時には三十歳であつたのである。なか〱元氣盛んな壯年の帝王であつた。殊に今のカイゼルは普通の學生と同じやうな教育を受けた人である。カッセルのギムナヂユームに學び、後ボン大學に入つて法政の學を修められたのである。それ故に學生生活を普通の者と同じやうに遣つて來た人ではあり、又なか〱鬱勃たる元氣があり、且つフリードリッヒ三世の喉頭癌のまゝ帝王となられたやうな後に直ぐ王笏を握つて帝位に立たれた次第であるからして、萬民皆刮目して其なさるゝところ如何を待つやうな狀況であつたのである。或者は非常に新帝の將來に望みを囑したであらうが、多數の者は如何なる事をなされるであらうかと、隨分危んだ者のあつたやうである。それに其頃は恰度ビスマルクの名望全盛の時であつた。獨逸聯邦を大成し且つプロシアを獨逸聯邦の頭となすことに成功しにのは、ビスマルクであるから、獨逸國民の輿望を荷ふて立つて居るので、實に名聲隆々として殆ど獨帝以上に出ずるかといふやうな感があつたのである。已にウイルヘルム一世の時でさへも、皇帝の誕生日の祝よりも、ビスマルクの誕生日祝の方が一層盛んであるかの如き有樣であつた。ウイルヘルム一世はまア創業の帝王であり且つ非常の名君であつた。それでさへも其樣な有樣なるに、今や三十歳の若々しい元氣はあるけれどもまだ經驗の十分でないカイゼルが即位されたのであるからしてどうも多少當時の獨逸國民に不安の念を生ずるところがあつたのではなからうか。固よりそれ等の事を確めることゝ、容易でないけれども、何だかさうであつたやうに思はれる。けれども今のカイゼルの即位後の活動は、實に目覺しいものであつた。フリードリッヒ三世の崩御になつたのは七月十五日であるが、其同じ月の二十五日にライヒスターグ即ち帝國議會を開會してそして、其時にカイゼルがなか〱有力なる精神氣魄ある演說をして平和主義を鼓吹されたのである。それから同じ月の二十七日には、議會に於て國民の忠實なる奴僕たることを宣誓されたやうな次第である。それからして幾何もなくカイゼルは軍艦に乘つてバルチック海を橫ぎり、ペテルスブルグに赴いて、時の露西亞皇帝亞歷山三世と逢ふて、獨露兩國の和親を固うすることを努めたのである。そして其の歸途瑞典に到りストックホルムに赴き、時の國王オスカール二世と交を結んで兩國の誼みを厚うされたのである。そして又其歸りにコーペンハーゲンに立ち寄つて歸られた。であるが、當時漢文で書いて居つた自分の日記にはカイゼルの露國に行かれた事並に瑞典に行かれた事は、即位後間もない事となつて居る。即ち七月廿日にペテルスブルグに行かれ、廿六日にストックホルムに行かれたといふ事になつて居る。カイゼルが帝國議會に於て、演說をされたのと少し一致しないところがあるけれども、さういふ日記があるから少しく疑を存しながら此事を話して置く。

それからカイゼルは、更に墺伊の二國に赴かれたのである。そして殊に伊太利では非常に歡迎されたのである。ローマ及びネアペルの歡迎は尋常でなかつた。斯樣にカイゼルは墺伊二國に赴かれたのは、三國同盟を鞏固にする爲めであつた。兎に角今のカイゼルはフリードリッヒ三世の後を受けて即位するや否や忽ち大活動をして三國同盟を固うし、且つ露國などとの關係も安全にしようといふ努力をされたことは目覺ましいもので、其後の活動益々盛んで、引續いて今日に至つて居るといふてよい。それにもう一つこゝに忘るべからざることは、ビスマルクとカイゼルの衝突である。ビスマルクは非常に名望を有つて居つた人で、公の一言一行は各國に影響する。ところが今のカイゼルはなか〱の利かぬ

氣の人で、牢固に意志を抱いて居つたから、どうしても相容れない。さらいふ事であつたけれども即位後幾何もなく、カイゼルはビスマルクをフリードリッヒルーへに追ひやつたのである。それはビスマルクの居つた田舍である。それが八月一日である。然し其時はビスマルクは矢張りライヒスカンツレルであつた。

其後カイゼルが事業を初むるに從つてビスマルクと相容れず、一八九〇年三月廿日に至つて官を罷めて田舍に引込だ。即ちそれが明治廿三年である。其時の事である。ビスマルクは伯林を去るに當つて、市民は之を非常に惜しみ鐵道の線路に大勢立つて、一時は汽車の進行の出來ぬやうになつた。とう／＼ビルマルクも出發はしたが、伯林市民のビスマルクを惜んだことは實に一通りでなかつた。以てビスマルケに對する市民の同情が如何に深かつたかといふ事が解る。さういふやうな譯けで、ビスマルクに對する同情の深かつたといふことは、一方に於て時のカイゼルの若々しいに對して多少不安の念の生ずる所以であると思ふ。けれどもビスマルクが居つては、此若々しい三十一二歳のカイゼルにとつては眼の上の瘤ともいふべきであつて、自分の思ふ通りに遣れない。而して動もすればビスマルクの聲望の大なるものあり、カイゼルの立場からしては、どうしてもビスマルクを退けなれねばならぬ事情もあつたに相違ない。それで其頃の我々自身の感じはよく覺えて居る。今のカイゼルは餘程突飛であるやうに見えた。あれではどうであるか、餘程の遣り損ひが出來るか、然らなれば餘程の英雄的事業を遣るか、どつちかと思ふて居つた大成功か大失敗か、兎にも角にも餘程の事になるであらうと考へられた。斯ういふ風に初めから隨分危むところがあつたが、爾來矢張り其感じは同じで、今日の大戰爭に至つて益々初の感じが强くなつた。之は自分獨りの感じてなからうと思ふから、玆に大體の點を話して置く次第である。

終りに即位當時の伯林の光景について一言しよう。自分は獨逸留學中の日記があるが、其日記には簡單ながら大抵の事は記載してあるが、其時の事はどう云ふ譯か委しく書いてない。けれども何でも確かに覺えて居る所では、今のカイゼル即位の時は軍隊や學生なとが代る／＼宮城の前に來て、萬歲（ホッフ）を唱へた事丈けである。殊にさう云ふ際には學生の團體がなか／＼盛んな儀式をなすのである。學生の各團體は各々聯隊旗の樣な旗を持ち、隊伍を僞して行動する。學生はなか／＼愛國心に富み、いざとなれば正々堂々の運動をなす。此等は日本の學生の及ぶ所でない。もう二十何年前の事でハッキリ覺えて居らぬから、これ位で止めておく。

▽米國大統領就任式の光景

法學博士
農學博士　新渡戶稻造

ウヰルソンの選擧の際は恰度我輩も米國に滯在中であつたから、其時の事情を目擊した事もあるけれども、いよ／＼選擧されて就任する時には居らなかつたから、其時の就任式の事についてはお話することは出來ない。然し三十年前彼國に留學して居つた頃恰度クリーヴランドの就任式があつた。恰かもワシントンに近きボルチモルの大學に居つたけれども只のお祭り騷ぎに過ぎぬものであらう、且つ我々が行つたとて其式場に臨まるゝ譯でもないから、學校は休日になつたけれども我輩は下宿屋に閉ぢ籠つて居る積りであつた。然るに我輩の專ら附いて居つた歷史の敎授アダムス博士が云ふのに、「お前こんな機會を逸しては可かぬ。四年毎にはある式ではあるけれども、今度のは數年間續いて居つた共和黨（レパブリカン）が其勢力を失墜して、永らく頭を擡げ得なかつた民主黨（デモクラット）が大統領を出した

のであるから、君等の國(東洋を指しての意だ)で王朝（ダイナスチー）が代るやうなものだ。容易ならぬ政變であるから是非行つて見よ。自分も行く所だから連れて行つて遣る」と云はれたので、隨行してワシントンに行つた。時は三月の事で曇天の日であつた。新聞などには「クリーヴランドは生きてワシントンには着くまい」とか、「就任式も決して首尾よくは終るまい」とか、其他好奇心を喚び起すやうな、血腥き風評が、反對黨側から大分流布されて居つた。式場はワシントンの郊外に高い臺を築いたもので、軍隊も出て居るが然し其數も大したものでもない。それに集り來る群衆は何十萬を以て數ふるやうな素晴らしいもので、廣小路のやうな處も人の頭ばかりで眞黒になつて居る。其中には無論下層社會のものが多數を占めて居り如何にも我々の眼から見ても物騒がましい扮裝をしたものも少くなかつた。其等が到る處群衆の大部分をなして居る。新聞にもあつたから何か騒ぎても起すのは此連中であらうかと疑の眼を睜つて見て居つた。警察官も群衆に交ぢつて可なり居つたけれども 大して數多いと云ふ印象を與ふる程でなかつた。やがて時刻が來ると演臺に三四百人と思はるゝ數が上つた。何れも眞黒な普通の服で、帽子は山高もあれば中折もあり、鳥打帽こそなけれ、必ずしもシルクハットには限らなかつた。其簡單なる事には驚いた。又式場は只幕がかゝつて旗で飾られて居つた。眞中に机があつて其上に大きな聖書が載つて居つた。此座に連つて居る人々の中で、少しく禮服めいて見えたのは裁判官と一二の僧侶であつた。新大統領自身も普通の平服であつた。婦人が居つたかどうか今記臆しない。假令居つても殊更ら花々しく其席を賑はした程でなかつたに違ひない。目に附くやうであつたならば記臆のわるい我輩も忘れもしないだらう。式は頗る簡單で、新大統領は高等法院の裁判官に向ひて聖書の上に手を載せて就職の誓言を述べ、それから群衆に向つて演說をなす。それも長い事はない。小さい紙に書いた事を半分朗讀的にやつた。無論何十萬の人に聞ゆる程の聲はあの體格の偉大なクリーヴランドにも出來ない業であつたらしい。故に演說が初まると群衆が前に押し寄せて耳を聳てゝ聞いて居る樣子は、更に彌次る風もなく、殆ての啞であつたから、演說の妨害位はするものだらうと心待ちに待つて居つたが、何れも靜粛に聽いて言葉は明かに聽き取れなかつたらうけれども、只シンとして終りまで何の故障もなく聽いて、彼等が演壇より降り初むるや群衆は解散した。其式の終つたのは恰度晝頃であつた。中にはよい場所を取らうと思つて早朝から立ち詰の人もあつた。よい程に腹が減いて、爭つて近處の飲食店に入つた。我輩もアダムス博士に隨いて蛎蠣店（オースターハウス）に行くと、蛎蠣がもう盡きて二人前はないとて一人前分を半分づゝ喰べた事を記臆して居る。其場所に居つた人の噂し合ふのを聞くと、皆、クリーヴランドの演說や風采の事のみであつた。大勢の中には定めて過激な反對の人もあつたらうが、就任式が濟めば、いよ〳〵自分の國の大統領と仰いで相當の敬意を表する態度が周圍の人々にも見えて、或程之れでこそ共和國と云ふだらうとつく〴〵感心した事である。我輩の最も感じた事は選擧最中の騒ぎは非常の事で、血でも流さなければ此選擧が定まるまいと思ふ程であつたが、いよ〳〵定まると洗ふが如く政敵も政友もなき有樣が一つと、も一つは式の非常に簡單な事である。勿論今述べた事は一聽の公式であつて其外宴會とか舞踏とか云ふ事は澤山あるだらう。假令あつたにしても共和政體と云ふものは金のかゝらぬものだと云ふ事をつく〴〵感じた事であつた。

人物評論（六十五）

高田文相論

▽「我輩の内閣」の文相

鵜崎鷺城



勅選議員になつて間もなく文部大臣に任ぜられ、若し御大典のとき御多分に漏れずして男爵になるとすれば、今年は高田博士の當り年である。

世の中は何が幸福になるか分らぬもので、大浦の犯罪事件の爲めに内閣の意見が二つに割れた結果だ

とすれば、高田は大隈よりも先づ大浦に其福運を感謝せねばならぬ譯である。大隈内閣が大臣の首を三つ四つ取換へたのを改造といふならば改造に相違ないが、改造には必ず好き意味が伴ふものとせば、石井菊次郎や箕浦勝人のやうな粗末な代物を入れたのは餘り感服できない。唯だ何程か改造らしい色彩の顯はれて居るのは高田を文相にしたとであらう。

大隈首相は從來口癖の如く我望の内閣といふ。又た實際留任後の内閣は一木と石井を除くの外、武富なり箕浦なり尾崎なり高田なり、孰れも自分の言ひなり放題になる人々であるから、益々我望の内閣振りを發揮することが出來る。是れと同時に夫子自らが早稻田の本尊であるし、高田は早稻田大學長であるし、武富、箕浦も伯爵邸の御家人同樣であるし此外に早稻田系のものが大分入り込んで居るから、早稻田内閣といつても好い。現に早稻田大學の職員生徒中には近頃ます〱調子に乘つて早稻田が天下を取つたのだと威張つて居る者があるさうである。

高田は生抜きの江戸ツ兒で、萬延元年生れといふから五十何歳といふ中老人である。有賀長雄、天野爲之、故山田一郎等と同時代の文學部(政治科の前身)の學生で、卒業は明治十五年であつたと思ふ。其頃は政論が勃興して海内の青年、天下國家の議論に血を沸した時代であるから、政治理財の學を修めた大學生中一つの會を造つて政治問題を研究する一組があつた。當時大隈の幕僚として鳴し、其後肺病で死んだ小野梓は、今から考へれば其時代の望小太といふべき人であつたが、此一連の牛耳を握り、夜な〱彼等を向島の家に集めて氣焔を吐き合つた。高田は其組の一人で一番年少者であつたと聞て居る。彼等は大學を卒業するや小野の手引に依て改進黨に加はり、其關係から東京專門學校の敎師になつたのである。志を得ずして蚤く死んだのもあり、地方に行つて辯護士をして居るのもあり、早稻田大學の今日猶ほ昔の如く關係して居るのは高田、天野、市島の三人であるが、兎に角此一組の中で高田が一番頭を擡げた譯である。

高田は早稻田大學々監になつてから政治運動を止めたが、それ迄は埼玉縣から代議士に選ばれ、改進黨から憲政本黨になる迄政黨に關係して居た。進歩黨では領袖株とまで行かなかつたが、改進黨系の名士といふので准領袖の待遇を受け、議會に於ても花形の一人に數へられた。或年星の壯士に要擊せられて背部に負傷したが、それは讀賣の主筆時代で、何でも星攻擊の記事が原因であつたと思ふ。外務省通商局長になつたのは松隈内閣の時、文部省專門學務局長になつたのは憲政黨内閣の時である。其當時まで順境であつた進歩黨も憲政本黨になつてから漸次衰運に傾き黨中黨を樹てるものが出來た。高田も鳩山と共に矢來俱樂部といふものを造つて黨内の不平家や野心家を集め、副議長運動などを試みたが、黨の幹部が箕浦を推薦したといふので益々不平に思ひ、所謂る幹部反對の參謀長であつた。敎育專門になつてから餘程人物が變つたやうだが、政黨に關係して居る頃は間々策士めいた振舞を爲し、鳩山を早稻田大學より排斥したのも彼の仕業だと傳へられて居る。

今日は寄る年波に白髮頭になつて、額の皺も殖えたが、改進黨時代は

美貌家の色男で、紅葉館の美人と安くない關係があつた。今でも其方の趣味は可なりあるさうである。彼は男爵前島密の婿さんで、夫人は主人と反對に餘り、顏の美しい方でない。高田と前島との緣組について面白い話がある。或年前島は息女を伴ふて京都見物に行く時、丁度角田眞平と同じ汽車に乘合はした。角田は同乘の婦人を眞逆前島の息女と知らぬから、耳許に口を寄せてアンナ粗末な顏の娘を持つた親は氣の毒ですねとか何とか囁くと前島の方では自分の娘だともいへず默つて苦笑をして居た。それから一年餘りを經て一日角田が前島を訪問した時、茶を持つて出た婦人を見ると紛ふ方なき汽車中の女であつたから、其時の惡口を思ひ出してギヨツトした處へ、前島は息女を紹介して、時に角田さん不束な娘も今度良緣があつて、高田文學士の許へ嫁に行くことになりましたから、御安心を願ひますとの挨拶に、流石の角田も穴があれば入りたい氣がしたさうだ。

高田は舊いけれども學問はあるし、演說も下手でなし、政治の大體を知つて居るし、人格上の缺點はなし、殊に多年早稻田大學を經營して敎育の經驗があるから、文部大臣としては決して不相應でない。今までの大臣中、或は優るとも劣つて居ない。が、是れは比較的の議論で、大した政治家でもなければ、文政上卓越した抱負經綸があるとも思はぬ。學制改革は彼の宿論であるから、文相になつたに就て此宿論を實行しようとするは尤もな事であるけれども、今度敎育調査會に提出した大學令案は學制改革の名あつて其實がない。從來彼の唱へた所のものと內容を異にし簽の附けられない遠席料理を出して胡魔化さうとする虚名案、姑息案、變位改論案である。反對者中東西帝國大學は私學に關係ある文部大臣の發案といふので、若干感情が交つて居るかも知らぬが、反對さるべき理由は文部省案其物にあるからである。今までの贊成が鋒先を向けて居るのは、案の實質の價値が乏しい證據である。高田が功名に急なるの餘り、强ゐて事を爲さうとする氣分が見える。それにしても該案が否決の運命を免れざるは最早既定の事實で、當然文相の顏が潰れることになるが、高田は其當時如何なる態度に出るか。多分男が下つても文相の椅子を去るやうな度胸はなからう。

大學令案の感服すべからざると同時に、最初高田の入閣其物に就ても識者の腑に落ちぬ點がある。昨年大隈が內閣を組織せんとする時、丁度高田は外遊の途に上らんとする間際であつたが、早稻田大學の爲め將た伯晩年の爲めに其不可なるを說いた。是れは早稻田大學長たる高田としては尤もなる心配である。若し彼にして其考が渝らぬならば、大浦問題が動機になつて大隈內閣總辭職をした時、大隈をして飽まで居直るが如き不心得をさせないやうに爲すべき筈である。縱令留任の理由は何にせよ、之れを機會に元の早稻田に引戻すべきである。況んや聖旨に藉口するに於ては尙更のことである。然るに高田は之れを止めるどころか、夫子自ら早稻田大學を出てノコノコ非立憲的留任の內閣に入るに至ては、奇怪に感ぜざるを得ぬ。尤もオンタイの勸誘でもあるし、殊に大臣といふ耳寄りの話であるから。心が動いたのかも知れぬ。更に突込んでいへ

ば昨年内閣組織の時も、無關係の位置にあつたから諫止したものゝ若し入閣の交渉を受けたとすれば、或は野暮を言はずに二つ返事であつたかも知れぬ。最初はいろ／＼早稻田大學や大隈の爲めに心配し、又は後援會などと稱して早稻田の關係者や學生が有頂點に騷ぐのを困つたと思つたかも知らぬが、段々周圍の空氣に化せられて、早稻田の天下といふ氣分になつたのだらう。さすれば高田も案外の喰はせ者である。

入閣した以上今更返らぬ話であるが、更に文相としての高田の考へを聽くべき問題がある。それは大浦不起訴と乃木家再興である。憲法上の責任をいへば無論内閣全體に關係して居るし、殊に事體其物は共に世道人心に關する問題であるから、身、教育家にして而も文教の重職に在る高田としては知らぬ顔で濟まされぬ道理である。而も彼は平然として内閣の辯護じみたことを言つて居るさうである。彼までが親分の出鱈目主義にカブれたとあつては困つたものである。

▽政治家七分、教育家三分

三土忠造

高田といふ人は何ういふ人か、私は平素の行ひや何かに就いては甚しも知らないから、ちよつと評し難いが、一口に言つて、彼の人は私はよい人だと思つてゐる。氣の利いた人、粹な人、苦勞をした人だと思ふ。酸いも甘いも嚙み分けた人といふのはあゝいふ人を指して言ふのだらう。で、私は彼の人に就いて細いことは知らぬが、政治家としては立派な政治家だらうと思ふ。議員としても立派な議員であり、學識も有り手腕も有り、加ふるに雄辯家であつて、改進黨中でも有數な人であつたのは人の知る通りで、今日國務大臣としても立派な國務大臣であるのは疑ひない。

彼の人は最初は政治家たらんとする希望を有つて居つた。現在の實際政治を觀て、本當の立憲政治を行ふには先づ其基礎となるべき國民の政治的智識から養つて行かねばならぬ。即國民の頭腦を作つてかゝらねばならぬといふので、中途から政治家を止して教育家になつた人である。そこで自分の經驗から、政治家として實際には何ういふ人物を要するかといふことも知つてゐるから、此等の人物を作るに力を用ゐることに方針を變へたのである。

私は惟ふに、彼の人は今でも教育家か政治家か、これは問題だと思ふ。無理に言へば政治家的教育家であり、教育家的政治家ともいふべきであらう。どちらかと言へば政治家的色彩が七分に、教育家的色彩が三分といふところだらう。

今日では、彼の人は學校の方を休止して閣員に列し政治に關係してゐるが、地金が政治家だけに、爲ることが玄人である。從來の學校經營の遣り方を觀ても、又其他の事業に關係してゐるのを觀ても、政治家といふ地金がところ／＼に顯れてゐたのは事實だ。兎も角大隈門下の偉才で

あることは勿論である。

私が彼の人を知るやうになつたのは教育調査會に入つてからであるが、それからもちよい〳〵政治家的の運動や策略といふやうなものをも用ゐてゐるやうに見受ける。何か問題の出た場合にも、又問題を出す場合にも、それまでに運動をして人を纏めておくといふやうなことを遣る。意見の共通なものだけを先きに纏めて、異論の有るものを後に廻して、ずん〳〵事を運んで行く手際などは巧いものだ。今度の學制改革に就いて觀ても、調査會の實績としては年限短縮といふことだけが共通の希望であつて、然らば其方法はといふ段になると所謂十人十色で、早川にしろ澁澤にしろ、中野にしろ、所謂實業家連の年限短縮論などといふものは年限さへ短縮されればよいといふだけで、何ういふ風に短縮してよいのか、何ういふ風に短縮しなければならぬのか、そんな事は知つてゐる者は一人も有りはしない。只短縮さへすればよからう。それには菊池さんのやうな大學經營者も居ることだし、高田さんのやうな私立大學の經營者も居ることだから、其具體的方法は其等の人に任せておいたら、不良いやうにはしないだらうぐらゐの考しか有つてゐない。そこで、彼の人は其具體的の方法には手を觸れぬやうにして、皆の一致した共通の短縮論だけを纏めてかゝらうとしたのが今度の問題である。

大體今度の學制改革の中心は菊池男であるが、男の意見としては以前から、低級の大學と高級の大學との二種を作ることにして、高級大學は現在の帝國大學よりも高いものを作るといふにあるのだが、高田さんの今度の遣り方は其高級の大學といふことには觸れずに、低い方の大學だけを取つて『菊池さんもさういふ意見だから……』とか何とかいふやうな具合に、教育には何の智識も經驗も無い實業家連を說いて、謂はゞ菊池男を擔いで、自分は下働きになつて、そして自己の年來の希望を實現しようとしたものである。

かういふ風に菊池男の提出した改革案の中から、高級大學に關することには手を觸れないで、先づ兎も角も低級大學の方だけでも片附けて行かうとする此遣り方が、實業家連の、只年限短縮には賛成してるが、其方法は何うしたものかと迷つてゐる連中や、帝國大學の處分は何うするのか高等學校の處分までも含んで密議するのか。こんな事を問題にしてゐる大學側が納まらなくなつて、晩蒔きながら大學に諮問するといふやうな事になり、玆立往生といふやうなわけになつたのである。だから、高田さんは菊池案の第一條たる年限四ケ年制といふのを大多數で調査會だけは通したが、其實行といふ段になつて、自らが其衝に當ることになり今では自繩自縛といつたやうな有様に立至つて居る。卽ち早川君の動議により委員會の附托といふことゝなり、高田さんはヂメレンマに陷つたやうなわけである。

私等の思ふには調査會といふやうなものは、小數で懇談的に、それ〴〵白紙の頭腦を有つて、人の說を聽き、意見を聽いて判斷すべきものであつて、策略や運動といふやうなものは用ゐてはいけないと思ふ。少くとも吾々はさういふ風に遣つて行きたいと思つてゐる。高田さんの今度の

遣り方は餘りに策を用ゐ過ぎて自ら其策に陷つたものといふことが出來る。彼の人も早稻田大學の經營者であり、學者であつたら、斯ういふ事にはならなかつたらうと思ふ。また或はかういふ策をも用ゐ得るといふ事が卽ち高田さんが文部大臣としての手腕のあるところかも知れない。兎に角平常から私は今言つたやうに、あの人はいゝ人で、氣の利いた人だと思つてゐるが、何分舊(もと)の出が政治家である爲めに策を用ゐ過ぎる嫌ひがある。そこはあの人の缺點であり、又同時に長所でもあらうと思ふ。

▽改造內閣の新文相

鐵拳禪

一 彼れの戸籍

東京府平民高田早苗が文部大臣になつたのか、早稻田大學長法學博士高田早苗が文部大臣になつたのか。謂ふ迄もなく後者てある。彼れが一個の東京府平民では、早稻田內閣の一員となる因緣はない。早稻田田甫の案山子ですら時めく今日、政治的閱歷はあり、敎育界に功勞はあり、伯大隈に親近せる彼れが、文相の椅子に据るのは當然であるが、東京府平民としての彼れは、長屋住ひの子爾者よりも貧弱なる戸籍の所有者に過ぎない。論より證據、先づ其の戸籍面を見よ。

高田早苗　萬延元年三月生、埼玉縣平民亡高田貢平三男

妻　ふじ　明治二年三月生、男爵前島密長女

養子勇雄　明治廿八年八月生、東京府平民二宮郁次郎長男

養女たつ　明治卅九年四月生、兵庫縣平民市瀨恭次郎二女

文相當年五十六歲、夫人四十七歲、臭い仲か何うかは知らぬが、正に九歲の差である。迷信は九婚を嫌ふが、九つ劣りだから、平穩無事には相違ないが、矢張實子の無いのが苦の種とも謂はうか。養女は、夫人の實妹むつの娘で、姪に當つてゐる。岳父前島は、遞信事業の元勳。隈選總監元老院議官等の官歷を持つて居たが、明治十四年官を辭して進步黨に入り、十九年頃には早稻田大學の前身たる東京專門學校の校長になつて居た。斯うまで云へば、伯大隈との關係、博士高田との關係が、手に取るやうに明かになるであらう。

二 文學士半峯

埼玉の大根畑の間から夙に志を立てゝ上京して以來、英學を共立學校に學び、明治七年大學豫備門を經て帝國大學文學部に入り、政治及經濟科を研究し、十五年首尾よく卒業して、文學士の稱號を得たと云ふ平凡な順序だ。併し卒業したのは二十三歲の時だから、今日の發面をしてゐる大學生などを見ると、年限短縮の要を認めるのも無理のない話だ。今日の發面が意氣甚だ振はざるに反し、當年の白面書生は盛んに天下國家を論じて、政黨に出入して居た。素より『密かに』では有つたらうが、さう云ふ所に出入して、政界の新氣運を作り、將之に乘じやうとして居た彼れ高田の如きも、政界の興味に動かされた一人で、卒業の前年小野梓

と懇意になつた。小野は十四年の政變に大隈に殉し、男前島等と野に下つた駿足であつた。で、彼れは同窓の岡山兼吉、山田一郎、砂川雄峻、山田喜之助、市島謙吉、天野爲之等を紹介し、鷗渡會と云ふ政治問題研究の團體を組織した。當時彼等は大學の寄宿舍に居たので、時々夜に乘じて監督の眼を盜んで大學を脫け出で、墨田川を渡つて會合する所から斯う名づけたのださうだ。立憲改進黨は、十四年の政變が齎した產物で比較的智識あり、資産ある人士を糾合した新政黨であつた。彼れは鷗渡會の關係から、改進黨に結び付き、伯大隈に知らるゝに至つたのだ。

高田は、黨人から見れば學究風な所があり、其の新智識が鼻について政界に沒頭することの出來ないたちの人であるが、學者側から見れば、政治家肌の人で、學理の研究よりも經綸眼が光つてると云ふやうな所がある。水陸兩棲類の動物があるが、彼れも亦政學兩棲類の人物である。一郎の狂熱なく、喜之助の豪傑肌はないが、理智と事務とに富んでゐる、近眼鏡の底から政界を見て居る人だと云ふ許は、沈着冷靜の風ある彼れには最も能く當つてるやうである。彼れは改進黨に入つても、眞黑になつて働かず。不即不離と云つた關係で、身は東京專門學校の教壇に立つてゐた。伯大隈が條約改正で騷いでゐる時は、讀賣新聞の主筆で、裏面的後援とお出でなすつた。斯う云つた風で、彼れは表面に立つて花々しい活動をしない。唯初期議會の開會前、民黨合同問題の際は、島田三郎と共に必死の運動を試みたやうであつた。

斯樣な所を見ると、彼れは策士のやうに思はれるが、彼れは所謂策士なるものでは無い。策士としては餘りに政界の情僞に通ぜず、黨人の呼吸を解せず、理想に偏する傾向がある。今日で云へば、高遠の理想に少しばかり手腕のある、夫れが當時の政界に於ける高田半峰であつた。尤も雄辯家として、敵を切り捲るだけの舌を持つて居たから、儕輩を拔いたこと勿論である。

三　代議士早苗

埼玉縣選出の代議士で、評判三人男と云へば、高田早苗、加藤政之助夫れに近年賣り出した長島隆二である。加藤は裏天のニックネームで有名だが、財政通として政界に認みられたものだ。今は大藏の參政官に納つて低い鼻を高くして、不徹底な事を云つて居るが、往年は確かに議會の一異彩であつた。昔の高田、今の長島は時代の寵兒とも稱すべきもので到る所青年の喝采を博する。彼れ高田は、夫れ程豪い人物では無いが、時代の新潮に掉して、政界の當面に現はれた。彼れの學識、彼れの風采、彼れの辯舌は、當時の人氣に投じたものだ。第一回の總選擧に當つて大多數で當選してゐる。鷗渡會員で初期議會に顏を出したのは、岡山（靜岡）と、天野（佐賀）と、彼れとの三人だけであつた。彼れは當時三十一歳の少壯代議士で、今日の人氣者長島の三十八歳に比すれば、遙かに若かつたのである。爾來當選すること六回、三回ほど落選したが、三十六年の第十九議會まで一席を占めて居た。天野の早く政界に見切を付けたに比すれば、可なり長く活動したが、彼れが選擧區に於ける政友會の勢力の旺盛を致せると、彼れが人氣の漸く衰へたるを觀取せる彼れは、遂

に早稻田大學の經營に盡瘁するの勝れるを知りて、政界を勇退するに至つたのである。尤も彼れは革新黨と改進黨とが合同して進歩黨が成立した以後、次第に政黨と疎遠になり、教育事業に沒頭せんとする傾向が見えたが、伯大隈の內閣に入る毎に任官したので、代議士だけは繼續して來た。處が、最う大隈が內閣組織の望が絕えたのと、彼れの人氣の漸く去れると、學校經營の多忙に赴いたとの、三つが渦を卷いて、斷然政界と絕つべく心機の一轉を促したのであつたらう。

彼れが任官は、今度で三回。前の二回は、松隈內閣の三十年に、外務省通商局長に拔擢され、隈板內閣の卅一年に文部省參事官に任ぜられ、高等學務局長の椅子を占めた。何れも短日月の間であるから、其の手腕の見るべきものが無かつたが、學務局長の時に美術課を新設したのは、一個の卓見たるを失はなかつた。當時美術の鑑賞眼がどれ程發達して居たかの疑ある法學士正木直彥が其の課長になつたが、今日では官界修養のお蔭で、東京美術學校長にもなり、文展などゝ縱橫に切り廻し、掻き廻して居る。要するに、正木は、高田の卓見から產れたやうなものだ。そは兎も角、彼れは就任すれば、必ず何事かを試みんとする人だ。無爲に甘んずる事の出來ない所に、彼れの神經質の一面を見ることが出來る。彼れは政治よりも教育に、理想より實際に、雄辯より事務に、計畫より經營に、頭腦より手腕に於て自己を發見し、之に向つて進まんとしつゝあるやうだ。

四　學校屋か教育家か

彼れの法學博士の學位を得たのは、明治三十四年である。東京專門學校時代から彼れと光を爭うて居たのは、法博鳩山和夫であつたが、彼れよりは何程か光力が强かつたやうだ。で、鳩山は校長で、彼れは學監と云ふやうな一枚下の地位に居た。鳩山は看板で、經營の實力は彼れにあるやうに云はれて居たが、鳩山の政界に雄飛し、轉輾して居る間に、彼れの勢力は根强い力を持つて來た。而して早稻田は最早鳩山を要せずして高田の必須な時代が來た。多少の暗鬪や、勢力の衝突があつたやうであるが、鳩山の逐はれのは、全く早稻田に於ける時代の勢力であつた。其の勢力に擁されて、彼れは大學長となつたのである。

東京專門學校の名は、博士坪內の文學科に依つて江湖に稱いたが、當初の目的は政界有用の材を養成し、一種の勢力を張らうとしたかに見える。で、學校の繁昌を圖るよりは、寧ろ人物を圖るを急とし、一意其の方針に向つて進んだやうだ。然るに、早稻田大學と改稱した後は、專ら學生の收容に努め、學校の繁昌を策せんとするに傾いた。以前は社會の先覺者を以て自任するの風があつたが、今日は社會の需要する人物を供給する方針になつた。斯樣に變化し來つたのは、時代の風潮に因ること勿論だが、人物よりも大學を作るを本位とし、經營方法を改めた結果である。而して此の經營を執るに至つたのは、高田早苗其人である。彼れは大學の維持費を得んが爲めには東奔西走する。東奔西走の報酬として學校は今日の如く膨脹し、早稻田の學校街なるものを現出するに至つたのである。此の膨脹は、素より彼れ一人の努力で無く、伯大隈の勢力に

負ふ所多いに相違ないが、彼れが能く職員を統一し、經營するの才なくんば、如何ぞ玆に到ることを得よう。彼れを目するに、學校屋を以てするは之が爲めであるが、彼れは之に依りて利せんとするの考は毛頭なく必ずや敎育家を以て自任したであらう。

彼れの文相に新任すると同時に、法博天野爲之が据り、彼れは名譽學長となつたが、今後共その後援者たるは明かである。彼れは夙に高等敎育會議員となり、大隈内閣の下に貴族院議員となつたから、早稻田の勢力を代表する者は、天野に非ずして依然として彼れである。天野は徹の生へた學者と云ふ感じのするに反し、彼れは思慮ある事務家のやうに思はれる。而して早稻田の脈管は、尠くとも生々した彼れの血潮と鼓動を一にして居るやうに感ずる。

五　新文相高田

以前は然うでも無かつたが、彼れは近來如才なく、お世辭が旨くなつた。私立大學の經營者より文相になり、學長より役人になつたのであるから、少しは威張るかと思ひの外、一向そんな素振を見せないと云ふので、平民主義の文相杯と稱つた人もあるやうだが。平民が平民主義を實行するに何の不思議も無い譯だ。平民で居て、貴族主義にかぶれるのが間違なんだ。一體高田は簡單得要領を主とし、客の長談義は餘り好まず、一刻も早く應接間から退却させる樣に工夫する人なさうだが、役人かぶれがしたものか此程少しく不得要領に傾いて來た。法相尾崎のやうに、自己を辯護するに多辯になつても仕方が無いが——

高田が就任匆々、手を染めたのは、學制改革案だ。該案は前文相の一木からの讓り物で、早晩解決せねばならんものだ。唯彼れは高等會議員の一員として、年限短縮を主張し、採決の際に菊池案に贊成したから、責任の地位に立てば、其の解決の困難を豫想させた。變說改論は當節の流行とは云へ、法博高田の如く主義主張あり、理解ある紳士が、尾崎の如く在野當時の主張を一擲すべしと信ずるを得ない。果然該案に對して帝大派は反抗の氣勢を揚げた。唯帝大を守るのみに急なる彼等の、文部省に反對すべきは豫期の事實で、毫も怪むに足らない。年限短縮は、殆んど天下の輿論である。實地の研究案より等閑に附するを得ないが、名を研究に假りて時日を遷延し、帝大派を緩和するに空過するやうでは、何時まで經つても解決する事が出來まい。彼れが文相たるの眞價は、該案の解決によりて發揮さるべきである。

彼れは趣味の人である。繪畫は淫する程、好きである。從て美術の鑑賞眼も高い。歷代の文相中、比較的美術なり文藝なりを尊重する者は彼れである。文展の改造、文藝院の設置等、彼れに期待する所は尠くないが、彼れの手腕を要するは、當面の問題として學制改革案以上のものは無い。現内閣の壽命も、然う大して長いものと思はないから、此の問題だけでも解決すれば、先づ澤山とせねばならぬ。政界復活の記念として何らか確かり遣つて貰ひたいものである。

▽進歩的大臣

慶應義塾々長　鎌田榮吉

高田君の文部大臣は、私は至極好からうと思ふ。人物が良いといふのみでなく、其方針も好い。何故に良いかと言へば、それが總て進歩的であるからである。今度の學制改革も、何とかして高田君の手に依つて遂り遂げ度いものだと思つてゐる。其他高田君はローマ字採用論者であるから、敎育上の新施設たる國字改良即ち文字の改良の丼なども、君の手で解決して貰ひたいものだと思ふ。大學の年限短縮の問題などは、從來保守的思想に妨げられて、國家の急務であると知りながら今日まで解決されずにゐたのであるから、縱令全部でなくとも幾らかでも此進歩的大臣の手に依つて解決して貰ひたいものであり、又解決するに最も好い機會であると思ふ。で、事情が許すならば永く其職に留任して君の抱負を十分に行はんことを希望する。又吾々も出來るだけ是れが後援を惜まないつもりである。

▽一歩社會に先んずる人

法學博士　浮田和民

高田君は今日の國務大臣としては、最も適當な人の一人であると思ふ。從來の國務大臣といふものは、多くは各省内の事務さへ執れぬやうな人が多かつた。只國家全體の問題に就いては聊か議論を吐くといふに止まるか、然らざれば全然伴食の位置を占めて居るに過ぎないといふやうな人々であつて、眞に天下國家の事に就いて適當な判斷を下し、同時に各省内の事務をも執り得るやうな國務大臣といふものは寔に尠かつた。即ち是れ迄の國務大臣は一種の裝飾又は伴食の人が多く、内閣の重力は主に政府部内の或一部分に存在して居つたやうな次第である。然しながら少くとも將來は、我政治界の重力の中心點は之を有効なる且つ健全なる政黨に求めなければならぬ。現内閣の如きも勢力の中心確實ならず、動もすれば動搖せんとするが如き傾向のあるのも此中心點が定まらないからである。故に將來の國務大臣は一方に於て政黨を率ゐ、又國民一般の輿論を制し得ると同時に、各省内の事務を管理し、兼ねて其改善若くは發展を期し得るやうな人を要するのであるが、今のところでは政黨に其基礎を有するといふことが必ずしも必要でも無ければ又有益でもない。是れ我憲政の爲めに甚だ歎かはしいことゝ言はなければならぬ。

高田君の例に就いて觀ても、明治三十二年以來、常に政黨に關係を有して今日に至つたならば、果して文部大臣に爲り得たか何うかといふことは甚だ疑はしい。政黨には政黨の歷史が有り、政黨の先輩が有る。黨閥の弊亦た藩閥の弊に異らぬものがある。而して民間無責任の地位に在つては政治家の品性も發達せず、又其手腕も施すに所なくて空しく頽廢し、徒らに大言壯語して單に辯論の雄を以て顯はるゝか、然らざれば親黨

分子分の關係で數多の浪人や食客を養ふ才能を發揮するくらゐに止まつて居る。今日高田君が文部大臣と爲り得たのは全く明治三十二年以來、專心一意早稻田大學創業の任に當り辛苦經營して今日に及び、私立大學の學長として遺憾なく其才能を發揮したからであつて、それと言ふのも思想は進歩的であり、而も着實な人であるが故に危險思想の巣窟と見做さるゝ私立大學の學長でありながら、政黨の後援にも據らず一躍國務大臣の位置に上るを得たのである。彼は僅かに此成功を爲すべき正當な理由を其身に具へてゐる。思想明晰、判斷確實、個人としては狷介の人でありながら能く衆を容れ、而して常に社會に一歩を先んずるを以て政治家の本分たることを自覺して居る人である。彼は學者や思想家の如く二歩も三歩も猥りに社會に先んずるとをしない。一歩社會に先んず可し二歩社會に先んずべからずとは彼が平常の主張である。其實際的政治家としての見識は確かに之を具備して居るのである。國務大臣といへば一世の豪傑又は大政治家といふ見地から論ずれば、高田君の如きは未だ一介の書生であつて稚氣滿々として今後尙餘程の進歩發展を要する人であるけれども、一體國務大臣といふものは必ずしも一國第一流の人たるを要しない。先づ世間より兎角の非難攻擊を受けず、國家の大局に通じ、一省の長官である以上盲目判をのみ捺すといふのでなく、少くとも其省が何を爲さねばならぬか、又それを如何に爲さねばならぬかくらゐの事は自ら判斷して省内の關係を指導し得る人であれば宜しい。此點から言つて高田君の如きは大隈内閣中第一の人であると言ふことが出來ると思ふ。

明治十五年以來其政黨關係よりも半以上永くなつて居る。而して幸にも昨年歐州戰亂勃發の間際に於て兎も角一通りは歐米諸國を歷遊して其教育事務を視察して歸つて來たのであるから、今後我國の學制を根本的に而も着實健全に改革する適當の文部大臣として今のところ容易に得べからざる人であると思ふ。例へば今度の教育調査會に提出した夫の大學令案の如き、餘り簡單で物足らぬ感じがするので、世間では種々誤解もあり、非難をする人も有るやうであるが、是れ彼が判斷の頗る確實なるを證明するに足るものである。從來新聞紙上で空漠な大問題とされた帝大處分問題の如きは、實は其事の眞相を知らざる局外者流の議論であつて、國務大臣たる者、文部大臣たる者の就任早々唐突に提出さるべき問題ではないのである。教育調査會が曩きに建設した意見中にも先づ大學は四年以上にするといふ一ヶ條だけを必要の條件として他は當局者の適宜處分に任せるとある。そこで高田文相は先づ根本的に日本の大學は中學卒業後四年以上たること、及び官公私立共に國家教育機關の一部たることを確定した案のみを出し、其案にして通過したならば其次には帝國大學及び高等學校の處分に就いて力めて公平なる輿論に基き、一方には社會の非難攻擊を受け、他方には官學部内の同盟的反抗などを惹起すやうな拙劣な手段は彼の最初より斷じて之れを取るを避けたのである。今度の新大學令案に帝大及高等學校の處分の條項無きは即ち是れが爲めである。若し今度の大學令が通過しないやうなことならば、今後の帝大及び高等學校處分及び其他漸次着手すべき

中等教育及普通教育の改革などは容易に行はるゝものではない。先づ今度の大學令案が通過して、而る後帝大及高等學校處分問題並びに私立大學組織の細則を規定する運びになるのである。今度の大學令案には帝國大學に關する細則もなければ、私立大學に關する詳細の規定も無い。此令案にして通過したならば帝國大學令を改正し、新たに公私立大學に關する條令を發布せんとするのが彼の最初から決定せる改革政策であつて頗る着實正當なものと言ふべきである。

高田君の事に就いては昨年委しく述べたこともあるから、今復た玆に縷返す必要もないと思ふ。但、彼の成功と否とは半ば大隈内閣の成敗に關するものである。彼は身政黨出身ではないけれど、大隈内閣と其運命を共にせねばならぬのであるから、不幸短日月にして其地位を去るやうな事になるかも知れぬが、是れ我輩の甚だ不本意となすところである。我輩は素より將來政黨内閣の出現を必要とする者であるけれども、總べての問題、總べての國務を政黨化せしむることは最早時勢晩れであると思ふ。宮内省の如きは何處までも政黨の範圍外に立つべきであり、外交と教育だけは内閣の交迭に依りて主義方針を變更することは國家の政策として我輩の飽迄反對せんとするところである。内閣が替つても、大臣が變つても、外交方針と教育方針とだけは動揺することなく、繼續的進歩發展をなさしめることは今後の學界に處する立憲國の必要條件であると思ふのである。

▽文相としての高田博士

安部磯雄

私は今より以前、鎌田塾長と並べて高田學長の人物を論じたことがあるから、單に人物評としては、私の考へてゐるだけのことは其時に言盡したと思ふ。只文部大臣としての高田博士といふことになれば、其間多少趣きが違ふところもあらうから、其點を今玆に少し述べてみたいと思ふ。

私の觀た高田博士は飽く迄自由主義の人である。大學こそ帝大を出たが官僚臭味といふものの少しもないことは、今更私の言ふまでもないことである。政治家として活動せられた時代も、進歩黨中錚々たる人であつて、其後全く早稻田大學の爲めに働くやうになられてからも此自由主義といふことは、何の方面にも顯はれて居る。單に官僚臭くないといふのみでなく、官僚主義といふものに對しては、博士は何處までも反對して居られた。然しながら私共の觀た、學長としての高田博士、早稻田大學經營者としての高田氏は、或は普通に謂ふ自由主義者でなかつたかも知れぬ。寧ろ專制主義者であつたとも言ふことが出來やうと思ふ。元來自由主義の人が、學長としては時として獨斷で、人の意見を用ゐずにドシ〲遣つた場合もあるやうである。然し是れは私立大學の學長としては洵に已むを得ないことであつて、若し高田博士をして官立大學の學

長たらしめたならば、非常な自由放任主義を採つたであらうと思ふが、私立大學の學長としてはさうはいかないのである。丁度今度の歐洲戰亂に比較して見るならば、官立大學は聯合軍であり、私立大學は獨逸軍の地位に在る。今日の獨逸が四面楚歌の聲の中に在ると同じやうに私立大學は常に迫害を受けても同情を受けることは無かつた。官立大學と競爭するなどといふことは迚も出來ることではなかつたのである。

さういふ立場に立つた私立大學の經營者と言ふものは、專制主義でなければ其經營が六ケ敷しい。それに比較しては官立大學の學校は遙に容易である。設備も整つて居れば、金も定つたのを宛はれてゐる。各科は別々に分れて、各學長が其任に當り、更に其上を統ぶる總長は大した權力を揮ふ必要がない。或點までは學長任せで、只統御するだけであるから、仕事から言へば極めて樂である。が、私立大學はさうではない。經營には金がかゝる、其金からし集めねばならぬし、複雜な内部を統御するのは決して容易な事ではない。高田博士が爲めに健康を損ぜられたのも亦無理からぬことであると謂はねばならぬと思ふ。財政困難が三十年間も續けば健康を害するのに巳むを得ない次第である。であるから、博士は文部大臣になられてから此方、却つて健康を恢復せられたといふことは不思議なやうであつて不思議でない、這間の事情を最も明かに語つて居るものであらうと思ふ。

・で、學長時代の高田博士は專制君主のやうにも觀られたであらうし、又實際さうでもあつたらう。が、それはさうでなければ遣れなかつたからである。玆に一つの面白い事實を發見することが出來る。即ち、學校の經營に關しては私立大學が官僚的であり、官立大學が却て自由主義と思はれる點である。が是れは經營として洵に巳むを得ないのであつて、決して高田博士が官僚的であるが爲めではない。其證據には、博士が文部大臣になられて世人から何ういふ風に迎へられて居るかといふことを觀れば解る、文相就任後新聞記者最初の訪問にも、いかにも平民的な自由主義な文相とされて居る。其他色々の人の訪問を受けても、其與ふるところのインプレッションは、平民的な飾り氣の無い、洵に氣の置けない門戸開放的大臣といふにあるを見ても解る。先達或人の話に、是れは人の話に聞いたのであるから眞か僞か解らぬが、西園寺侯が現内閣を批評した言葉の中に、今の内閣はつまらぬが、高田の文部大臣だけは氣持が好いと言はれたと云ふとである。十有餘年間博士に接近するの機會のあつた私共から觀ても、學長時代より文相になられて後の方が一層平民的で接近し易いやうにさへ思はれる。謂はゞ人懷つこい、親しみ易いところがある。是れは博士の長所であつて、何分帝大を出て今日まで、在野黨として働き、私立學校經營者として働いた人だけに毫も官僚的分子といふものが無く、全身自由平民主義で堅められて居るからであらうと思ふ。

早稻田大學の主義精神とするところは、夫の三十年紀念の時にも三ケ條に纏めて發表せられたが、其第一に早稻田大學は學問の獨立といふことを明言してゐる。是れ正しく高田博士の精神である。此精神は實に現

在の早稻田に於て最も能く實現されて居るのを見る事が出來る。例へば近頃の出來事で觀ても、吾々の最も愉快に感ずるのは、早稻田に集まる人の中に各人各個如何なる政治上の異見を有つて居つても舉げて問はないといふことである。早稻田大學の敎師中には隨分激烈な大隈内閣反對論者も有る。又實際に反對運動を遣つて居る人も有る。副島義一博士の如きは其極端な例で、氏は早稻田の留學生として外國にも行つた人であるが、大隈内閣の政策に絶對的反對を唱へて、處もあらうに大隈伯の佐賀から、隈伯反對の旗幟を翻して出た人である。私は副島博士の顏を早稻田大學の講師室の内に見る時、言ひ知れぬ愉快と歡喜の情を味ふ。其他政友會の戶水博士といひ、鳩山一郎氏といひ、政治上に於ては大隈内閣を攻擊する立場の人達である。又政友會内閣の司法次官小山溫氏などは、實際は何うか知らぬが、平沼檢事總長などと相圖つて今度の大浦事件を惹起したとさへ言はれてゐる。それにも拘らず、早稻田の敎室に敎鞭を取つてゐること舊の如く、先般敎授會の開かれた時には選ばれて議長になつた。此等の事は何も取立てゝ賞讃に値ひする程の事ではなく、謂はゞ當り前の事であつて、私共と雖も之を以て誇るべき程の事とは思つてゐないし、學校としては之を歡迎するのは當然の事と信ずるけれど日本人の情として、からいふ場合きまりが悪いといふのが普通の人情である。若し此四人の中できまりが悪いといふやうな感じを持つ人が有つたとすれば、四人共に早稻田で敎へなければ生活に困るといふやうな人ではなし、何等かの口實を設けて職を辭したであらうと思ふ。それが今日まで政治上に於ては大に相爭ひながら、學園に於ては相變らず敎鞭を執つて居るといふのは、言はずして早稻田の氣風が居好いからである。即ち學の獨立といふことが實際に行はれてゐる證據であり、換言すれば高田博士の自由主義が然らしめた結果であるといふことが出來ると思ふ。

今度の學制案にも高田博士の此精神は遺憾なく顯はれて居ると思ふ。今日の菊池案といふものは菊池高田案とも言ふべきものであるが、嘗て私共は菊池案として此改革案の發表せられる以前に高田博士から學制改革の意見を聽いたことがある。其要點は第一劃一主義の打破といふこと。第二は學位問題である。劃一主義の打破は今日の敎育が一定の型に嵌つて、爲めに種々の弊害を生じて居るからそれを打破すること、又學位は世界何れの國に於ても皆學校當事者の與ふべき權利であつて、文部大臣に一任すべき性質のものではないといふのである。而して特に博士は此點を力說せられたやうに覺えてゐる。私共は惟ふに、今度の學制改革といふのは、政治に譬ふれば憲政擁護運動である。政治上に於ては今日已に憲政擁護運動が起り、藩閥の勢力は次第に衰へつゝある。然るに今日帝大が一種の特權を有ち、日本の大學は四の帝大が獨占權を有して、他の私立大學は專門學校令に據るべきものであるといふが如きは甚だ時勢に順はざる固陋の處置である。菊池案といひ、高田文相に依つて企てられた改革案といひ、孰れも此點に大斧鉞を加へんとしたものである。即ち劃一打破の精神から、最低年限を四年とし、それ以上五年でも乃至六年でも好いといふのである。最低年限を四年としたのは、天下の輿論

であつて、西洋の二十二歳位で大學を卒業するに比して、我國の實際に二十五六又は七八でなければ卒業することの出來ないやうな制度は餘りに長過ぎるといふにある。而して此年限を自由にすることは現在の我國に於ては最も必要なことであつて、之に依つて學校其物もそれ〳〵競爭して好い卒業者を出すことに努めるであらう。私は玆にも高田博士の鋭敏な、先見の明といふものに服する者である。それは博士は實際に於て早稻田大學といふものを興し、帝大より一年半の節約を試みた最初の人であるからである。

ところが玆にも世間の誤解がある。即ち年限の短縮は學問を低下する虞があるといふ一部の非難がそれである。私共から觀れば全然誤解であつて、今度の學制案は一方年限の短縮であると同時に一方から觀れば短縮ではなくて、却つて延長とも言ふことが出來るのである。所謂大學敎育なるものは四年でも出來るが、同時に將來學問の研究に身を委ねんとする者、又は試驗論文を書いて博士號を得んとする者は、大學院又研究科に於いていくらでも研究が出來るからである。現在のやうな有名無實な大學院でなく、實際に學問の研究を續けることの出來るやうな設備が出來て居る。今日よりも學問の程度が低くなることは決して無いのである。只高田博士の平素の主張として、大學敎育を終つて世の中で實際に働く人には必ずしも深遠なる學問の必要がない。又それが實際生活に必要なものではない。今の社會が要求して居るのは實際的な人間であつて其要求に應ずるやうな人物を作ればよいといふのである。而して特に學問に依つて身を立てんとする者は大學の上に四年間も眞面目に學問を研究することが出來るのであるから、程度の低下を憂ひる必要は毫も無からうと思ふのである。

唯玆に帝大側から當然起る議論としては學位の問題である。高等學校を合せて六年七年も遣る大學と、四年の大學とを同一視して同じき學位を與へるのは不當であるといふ言ひ分である。私共の考としては、學士などといふやうな稱號はアメリカのバツチエラーと同じものでさう大したものではないから何方になつてもよいと思つてゐる。大學を卒業したといふ證據に學士といふ稱號を與へればよいのである。然しながら博士といふものになると、幾らかそこに議論も有らうと思ふから、少しく私の考を述べて見たいと思ふ。私は之を公平にする爲めに研究科の年限を增減するといふことが一つの方法ではないかと思ふ。即ち帝大を出た人の研究科は二年位として合計八年、醫科のやうなものは大學年限七年であるから、研究科を一年、四年の大學になると研究科を四年とし、若し將來五年の大學が出來たならば研究科を三年にすることにしたら何うか。之は姑息な方法のやうではあるが、研究科で頭を揃へることになつて比較的に公平ではなからうかと思ふ。學士の方は今言つたやうに、一の大學令の下に本當に平等の待遇を與へるといふこととし、社會も學校に依つて其待遇に區別をしないやうになれば、眞に實力の競爭で、天下の秀才は好んで年限の永い大學に入る必要もなく、實際社會の要求するやうな人物を四年五年にして得られるといふことになつて、大學令の趣旨にも

協ふことになるであらうと信ずる。卽ち大學の門戶が廣くなるわけで、我學界の爲めに非常な幸福といはねばならぬ。而して又一つには悉くの如くして帝大の特權を除くといふことは、學問上に於ける藩閥打破であつて、政治上の閥族と共に我國民は此學問上の閥族を除くことに努めなければならぬのである。

博士號の授與を文部省の權限に置かずして、各學校の敎授會に與へるといふことに就いても議論を生ずるやうであるが、それらは根本的の考が已に官僚的であるからである。或種の特權を少數者に依つて獨占するといふことは甚だ官僚的である。之を民間の大學に與へると濫授しないかといふ問題であるが、今度の文部省案といひ、菊池高田案といひ決して濫授になるとは言へない。四年の大學を卒へて四年の研究科を經なければならぬ、卽ち博士になる爲めには八年の年月を要するといふことは寧ろ遠慮に過ぎた提案であつて、獨逸では大學に三年間籍を置いた者は誰しも應ずる資格を有つてゐる。尤も中學は我國よりも一年程度は高いけれど、それにしても中學卒業後八年といふ月日は單に博士となる爲めに決して安價な歲月ではない。縱令過つて濫授するものがあつたとしても、それは其學校の恥であつて、其學校の爲めにならないから相戒めて其弊に陷らないやうに努めるであらうと思ふ。

尙一つ最後に附加へておき度いのは、今度の大學令の中に單に、學藝を授くるのみでなく、人格の修養に重きを置くとあるのは、英國流であつて、單に學藝をのみ授ける獨逸流ではないのである。從來我國では大學と云へば獨逸流の大學を想像して居るものだから、中には揶揄する人もあつて、人格修養は中學で終つて居る。大學に來て之を遣るのは晩れた考であるやうに言ふ者もあるが、私は此人格修養といふことに重きを置いた點にも高田博士の人物が現れて居ると思ふ。大學は理想から言へば修養をやる必要は無いけれども、今日我國では此人格敎育が出來てゐるか何うか、私は現在の中學では覺束ないと思ふ。然らば小中大何れかで遣らねばならぬのであるから大學の敎科の中にも之を加へて敎授を行ふといふのは適當な方法ではあるまいか。

繰返していふが、今度の學制案には、いかにも高田博士の人物を表現して居るものが多い。博士が此平常の抱負を實行する爲めに文部大臣に爲られたことは寔に適當なことで、又非常に面白いことである。我輩は多大の興味を以て此學制案の前途を觀んと欲する者である。

▽高田文部大臣論

文學博士　三宅雪嶺

高田氏の文相職は適役である。いろ〳〵な人が文相となり、大岡氏がなつたりした中で、出色といへる。然し文相が適任であるか、他の職が適任であるかは判明せぬ。氏は何の職でも相應に遣つて行くことが出來、何大臣になつたとて、特別に不適當と思へぬ。他の人なれば、何々の職

は當嵌るとか當嵌らぬとか言へるが、氏は之と違ひ、何でも當嵌るやうに見え、内相たれば内相らしく、外相たれば外相らしく、藏相たれば藏相らしく、其他は尙更のことである。それだけ何が最も適して居るかゞ解らぬ。何でも相應に遣つて行けるのは、誠に器用に出來て居るのであつて、其點が長所と言へば長所である。けれど〻何の立場に於て何を爲すべきかは、急に言ふ譯にゆかず、氏自ら豫め己れの天職を認めて、之に力を致すよりは、勢に應じて宜しきを制し來つたのであるらしい。

勢であつても、初めから政治と教育若しくは教育と政治に跨がり、或時は一方に重きを置き、或時は他の一方に重きを置き、約り此二つを追うて來て居る。教育家としての根據は早稻田大學にあつて、全く之を離れたことないが、衆議院に列して居る頃、殆ど全く之を專務とし、一の政治家として立つて居つた、そのうちに衆議院を斷念し、大學の學長として專ら盡力することゝなり。人に語つて言ふ『これまで自分は惑うて居つた。これからは惑はずに飽くまで力めねばならぬ』と。其後の學長としての努力は一通りでなく、世は學長としての高田を認め、往年政界に奔走したのを忘れるに至つたが、近頃學長から轉じて文相となり、再び政界に頭を出すことになつた。文相職に就いたのは、曾て教育と政治の二道を追ひ、其究極に達したのであると言へるが、二道を追ひ來つたのは、得策であるか何うか、今猶疑ひを免れぬ。氏が夙に大隈伯に隨ひ、伯が幾年か政權より離れただけ、氏も政權より離るゝの避くべからざる勢であつたにしても、若し一層政界に關係して居つたならば、今は文相でなく更に重い位置に居るであらう。氏の後輩ともいふべき人が、幾人も入閣して居り、一木氏とても後輩である。後輩が内相に移つて後、其後を承けたとあつては餘り目出度くもない。内閣は何といふても、内相か、外相か、將た藏相か、大臣らしい大臣となるには、其一つに居るべきであつて、假令文相職それ自ら重大なるものであるにせよ、從來の慣例で、大臣中の最も末席たるを免れぬ。氏が他の職に不適當であれば兎に角、どの職でも務まるとあつては、もつと有力なる職に就いた方が宜からう。而して僅に文相となり、剩へ大隈内閣組織の當時に於てゞなく、改造後に一木氏の後任者となるなど、位置の上にて決して賀すべきでない。

それならば、文相とならぬがよかつたか。即ち何時までも早稻田大學々長として勤め、以て老を告げるのがよかつたかと言へば、それは考へものである。氏は教育家として不適當でないが、教育家として特別の能力を發揮し得るとはいひ難い。孰れかと言へば、氏は教育家たるよりも學校經營者である。學校の盛衰は、經營者の最も與るところであつても、經營者と教育家と往々相容れぬところがある。教育家は何程か精神家たるを要する。利害得失を打算するよりも、我が信ずるところを貫徹するに努むるを要する。ペスタロッチの如きは、教育家として廣く認められて居るが、經營者として甚だ拙であり、失敗だらけであつた。精神家は餘り經營に長ぜぬ。日本の吉田松陰を教育家とするは、所謂教育家連中の間に異論があるにせよ、教育家に松陰の如き精神がなくてはならぬと一般

に解せられて居る。ところが松隈は經營者として頗る覺束ない點がある。新島氏は同志社の基礎を作り、且つ經營に長じて居つたと思はれるが、大學の基本金を作り始めた頃、漸く疑ひを招ぎ來つたのである。若し長命して經營の任に當つたならば、同志社は頗る盛になつたらうが、新島其人は今日人の認めて居るやうな者であるかは疑はしい。福澤氏は學校經營に於て確に成功し、而して主なる教育家と見られて居るが、世才に長じ經營に巧みでありながら、一種俗情と異るところがある。斷じて人爵を受けぬときめたところなど、由つて來つたところの何事なるとも、常人と違つた精神の閃きを見る。教育家も或る程度まで宗教家に似て居つて、教育を最上に措くことを證明するところがなくてはならぬ。高田氏は此邊のことがない。普通に能く出來た人と云ふのであつて、經營に持つて來いであるが、閃きがない、インスパイヤする所がない。若し意地を張つたならば、學校の經營が六ケしくなるが、意地を張らないでは教育家たるの特能を發揮し得さうもない。今まで氏は、早稻田大學元老の随一であり、教育界に功あるに相違ないけれど、教育家として如何であるかは人直ちに之を言ふに苦しむ。

教育家らしい教育家と爲る意志なければ、文相となるもよからう。寧ろ大隈内閣組織當時入閣した方がよからう。ならうことならば、政治生活を中絕せずして、更に重要な位置を占めた方がよからう。けれども文相となつたのは惡くなく、學校經營者としての氏に、重きを加へるところもある。眞に教育家として立つの人ならば、『學長から文相に榮轉し』と言はれるのが結構でないが、普通世間で之を榮轉とし、『前文相』といふのが重きをなせば、却て機會を捉へ得たのを賢い仕方といふべきである。今となつては、文相として大いに努め、從來の文相が敢て爲得なかつたところを成し遂げるに力むべきである。人は多く之に望みを囑して居る。若しよく之を成し遂げたならば、或は大隈内閣に於ける第一の功績となるかも知れぬ。ところが教育調査會に關聯して、學制改革に從事するや、帝國大學に觸れるやうな、觸れぬやうな、策略めきたことの見えたのは面白くない。已に文部案は調査會に於ては修正せられることになつた。後如何なる結果になるかは、經過を見ねば解らぬが、今のところ最も智嚢を絞るべきところである。文相としての高田氏は、こゝに試驗せられるのである。啻に文相としてゞなく、其生涯が試驗せられるのである。若しこゝで見事成功したならば、文相となつたのは自らの得策なる事この上ない。反對に若し先日の案の如く解らぬものであつて終に失敗に了るが如きことあれば、文相とならなんだ方が、どれ程よいか解らぬ。然し現に文相であるからは、なるべく成功するやうにありたい。其成功は氏の爲め許りでなく、併せて國家社會の爲めになる。盤根錯節は利器を試みるに足る。今最も肝要な時である。成功を望む。

○大好評初版忽賣切再版出來!!

女人國記

定價 壹圓廿錢　送料 八錢

◎右の如く斯界の泰斗を始めとし、其他諸名士の日本全國に渡る女批評記を網羅し、最後に「各地遊廓の色彩」と題し、遊廓取締所員及女將等の實地娼妓人國談を掲載したる實に全代未聞の快著なり。

發行所　東京赤坂區青山北町一　振替東京二七二四七　精文館

大賣捌　東京堂

(中付四の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

御大典記念豫約出版

●史上の事實を曲ぐるに及ばずして宛然小說を讀むが如き多趣味の通俗史!!

通俗世界全史

坪内博士監修

中島孤島　薄田斬雲
高須梅溪　松本雲舟
新著

豫約價
甲種(即納)金拾參圓五拾錢
乙種　毎月一圓宛分納　金拾六圓

送料
一回ニ付東京市内四錢、内地八錢、支鮮樺臺十四錢

送本
本年十二月ヨリ毎月一冊發行十六冊完結

書名			
東方列國史	希臘史(前編)	希臘史(後編)	羅馬史(前編)
羅馬史(後編)	新民族勃興史	暗黑時代史	封建列國史
十五世紀史	十六世紀史	十七世紀史	十八世紀史(前編)
十八世紀史(後編)	十九世紀史(前編)	十九世紀史(後編)	沿革地圖及索引

申込期限　十一月三十日

四六判布製
全拾六冊
八千餘頁
歴史名畫寫眞版百枚
地圖卅枚挿入

見本　通知次第送呈す

【注意】本書は豫約以外に販賣せず又選種豫約の申込を受けず

●世界的知識の緊切なる大正國民の曠古の大典を紀念すべき空前の大出版!!

(中付四の三)

豫約元　東京牛込早稻田　振替二二一三番　早稻田大學出版部　取次各書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京帝國大學教授
文學博士 松本亦太郎先生新著

現代の日本畫

（日本畫論の權威）

參版發賣

松本博士は日本畫の心理的解釋者として、畫家養成機關の指導者（前京都美術學校長）として將た現代繪畫の審判者（文展審査員）として重要なる職責に任じたる人なり。而して本書は斯る實歷上より得たる博士獨特なる見識の表現なり。明治大正の日本畫を論述の中堅となすと雖も、其前驅としては寧樂、平安朝より德川末葉に至る千有餘年間の日本畫の時代的及民族的風姿を論じ其後從としては、日本畫將來の諸活問題を考ふ。論旨透徹、行文明快且挿入するに幾多古今名畫の圖を以てし、人をして一讀日本繪圖の全發展を窺ふを得せしめ、日本民族の卓拔なる畫魂に親しく接觸する思あらしむ。座右の友として何人にも怡樂を感ぜしむる本書の如きは蓋し稀なるべし。

古今名畫六十餘圖挿入
菊判美本箱入
五百數十頁
定價金二圓八十錢
送料金十六錢

（中付四〇四）

日本女子大學教授兼學監 麻生正藏先生新著

家庭教育の原理と實際

（家庭教育の寶典）

菊判上製
六百五十餘頁
◎
定價金二圓四十錢
送料金十六錢

◎大阪朝日新聞評 兒童が各自の個性を重んじ夫に適當な教養を授けて將來有用の國民を作る教育の基本となり眞髓となるものは家庭に於ける教育である本書は其根本原理と實際の條件を講說して頗る精細によく其要を盡して居る一般教育の理想を說いて後教育と遺傳の關係を說き家庭教育の細說に移り胎內教育を說述し更に個性の教育性格の訓育良習慣の訓養等に及んで居る（下畧）◎東京朝日新聞評（前略）其組織の整然として特に著者自身の工夫と考案とを本とし世の教育學者の如く大部に飜譯臭を帶びたるものと其選を異にす（下略）◎時事新報評（前略）やゝ實用主義の家庭教育の職責に要求さるゝの秋本書は最も完全に其解決法を示せり

發行所 東京小石川區櫻木町 振替東京一四四八四 北文館 電話番町三五八一

評論

内外時事評論

支那帝政問題に對する我國の態度

古川學人

外相の缺員の爲め、久しく閣議の具體的問題に上らなかつた支那帝政問題は、石井新外相の就任と共に、初めて本式に内閣諸公の頭を惱ましたといふ事である。斯くて朝野の政論は、自ら「此問題に對して我國の政府は如何なる態度を執るべきや」といふ事について意見を鬪すことゝなつた。而して新聞などにあらはれて居る議論の大體の調子を見るに、帝政の實現は則ち各地の擾亂を招ぎ、爲めに内外の經濟的利益の少からず蹂躙せらるゝものあるが故に、最も關係の近い我國としては、之を默視する事は出來まいといふに一致して居るやうである。中には好意的忠告を與ふべしとか、進んで干渉すべしとか論ずる氣の早い論客もあるやうだ。

大體に於て我國の新聞などの論調は、少くとも袁世凱皇帝說には同情がない。何故に殆ど總ての新聞が斯くも打ち揃うて好意同情を表せぬかといふに、其原因を細かく分析すれば、いろ／＼の要素があるだらう。第一袁世凱氏は、我國に於て元來頗る人氣が無い。日淸戰爭以來彼は陰險な政略家として通つて居る。日露戰爭後滿腹の好意を我國に示した時でも、德望丈けは斷じて彼に許さなかつた。其後日本に楯をつくやうになつてから、彼に對する人氣は俄然として惡くなつた。殊に革命後の所置は頗る陰險惡辣を極むるとして激し

き批難の的となつて居る。第二には、我國には、殊に民間の有志家の間には、所謂孫黄の革命派に接近して居る者が少くない。此等の革命派に對する義理合上、袁皇帝説に同情する事が出來ないといふ點もあらう。單に之ばかりではない。第三には、袁世凱氏が帝位につけば必ず反對黨の擾亂が起る。現に南方に於ては、已に頻々として不穩の警報を傳へて居るではないかといふ立場から、袁氏をして皇帝即位を思ひ止らしむることが支那の爲めにも日本の爲めにも得策であると考ふる者もある。斯る觀測の適當なるや否やは別問題として、此見地から帝政問題を忌むといふのにも一應の理屈はある。終りに我國には尙支那の事といへば、何でも政府をして嘴を容れしめたがる人がある。恰度支那は何事をするにも、日本に相談する義務がある。否な日本は支那を監督する權利があるといふやうな態度で、何か彼か文句をいひたがる。所謂好意忠告論乃至干渉論の如きは隨分こんな思想にも淵源して居るかと思はるゝ。

右のやうないろ〳〵な原因から、隨分無遠慮な批評を我國の操觚社會は、支那帝政問題に對して與へて居るのである。が、我輩一個の意見としては、議論として支那政府の態度若くは支那政治家の運動を辯難するのは、先づ差支ない。無論此場合に於ても言語を愼むといふ事は、望ましき事であるけれども、多少過激の言辭を弄するとしても、それが議論である間は大いなる妨げはない。けれども我國が政府として進んで支那へ忠告なり干渉なりを試むるといふ事ならば、之は決して輕々に看過し能はざる大問題である。苟くも他國の內政に干渉するといふことは、事決して容易の談ではない。

此問題について我國は、果して支那に干渉するの正當なる理由ありや否や。他國の內政には干渉せざるを原則とする。若し干渉するとすれば、そは我國の重大なる利益が害せらるゝ場合に限るべきである。而して帝政問題に關聯して其爲めに我國の重大なる利益が害せらるゝといふのは、袁氏が帝位に即いた爲めに支那

の彼方此方に、大擾亂が起るといふ場合に限るのである。然るに袁氏が皇帝に即けば必ず擾亂が起るものだらうかどうか。成程彼れ皇帝の位に即けば、市井の間に蟄伏して居る反對派には、益々再起の希望が絶える。從つて自暴自棄になる。其自暴自棄の極は、過激なる手段をも厭はないやうになる。然しながら手段が過激になるといふ事は、決して其勢力が大になるといふ事を意味するのではない。彼等に再び世に時めくの希望が絶滅するとなれば、一部の者は益々過激になるだらうけれども、他の一部の者は或は軟化し或は妥協し或は屈服して、欵を袁門に通ずる者少からざるべきを想はざるを得ない。故に袁皇帝反對の聲は、其聲徒らに大にして、其勢力は實は決して左程大なるものではあるまいと思ふ。凡そ支那では相對抗する所の兩勢力が、天秤の兩秤相平均するが如き狀態を見ることは決してない。一時はある。けれども必ず何れかに傾く。而かも其一方に傾くや、恰かも大石を坂の上より轉下するが如くに非常な勢を以て一方に傾くの風がある。例へば之を夫の革命の初期に見るも、革命軍やゝ振へば天下忽ち革命黨を謳歌した。之に對して袁世凱の劃策やゝ功を奏すれば、四百餘州は忽ち袁氏の天下となつた。多數の人民は今尙事大主義なるが故に、少しでも勢のよい方に皆就く。袁氏に非常な失敗なき限り、反對派に非常な英雄が出現せざる限り、今のところ反袁勢力は、到底天下を近き將來に於て、麻の如く亂れしむるほどの、强大なるものとなるの見込はない。假りに一步讓つて相當に袁政府を苦しめ得る程の勢力になつたとしても、然し袁政府を覆す程の勢力となる事は斷じてなからう。袁氏は現に政權を握つて居るといふ點に於て已に强味がある。政府の要路に立つて居るが故に、必要があれば外國の精神的物質的助力を借り得る地位にある。支那に於て最近政爭を解決する最も重要なる要素は、外國の金力的援助にある事は言ふを俟たない。金を頒たずんば人は集らない。而して誅求は人氣を失ふ所以なるが故に、人を集むる爲めの金は之を外國に仰ぐの外はない。袁政府反對運動は固より到底外國に

助力を期待する事は出來ない。袁政府に至つても容易く之を得るの見込みありや否やに疑ひあるけれども、之を得れば忽ち反對派を屈服するを得べく、之を得ざるも亦多少解決を遷延する事の外、袁政府にとつて非常に不利なといふ事もない。故に我輩は袁氏が帝位に即いても、先づ酷い紛擾は起るまいと思ふ。最も袁氏百年の後、若し後繼者に其人を得ずんば、或は擾亂が起るかも知れない。然し袁氏の薨去を機として天下の亂るゝは、袁氏が皇帝となつたと否とに係はる問題ではない。假令彼れが皇帝と稱せずとするも、彼れの死は必ずや彼れに代らんと欲する者の奮起を促し、其結果、延いて天下の擾亂となる事はあらう。然し之は與れ〳〵もいふ通り袁氏の帝たると否とに係はらない問題である。

之を要するに、我輩は大體に於て、彼れの存生中は皇帝となつても擾亂は起るまい。只彼れの沒後は彼皇帝とならなかつたとしても擾亂は起るに違ひないと思ふ。果して然らば、彼れ皇帝の位に即けるの故を以て我國は直に支那に干渉するの口實と理由とを發見し得ない。却て干渉は徒らに支那人の嫉視を買ふに止まるであらうと思ふ。

若し夫れ支那國民の永遠の幸福の爲めに、我輩の一家言を求むる者あらんか、我輩は、抽象的の論としては帝制の可なる事を論斷するに躊躇しない。單純なる理論として、帝制の共和制に優る事は今日何人も異議を挾まざるところである。けれども個々の國に帝制を可とするや否やの具體的問題は素と、皇帝となるべき人又は家の如何に繫る。歷史的に國民の尊崇を受け、傳來的に儼然たる權威を萬民の上に有する所の一帝室存在する時、初めて帝政は之を可とせらるゝ。非常に偉大なる人物でも、一代の成り上り者では、國民の崇敬を受くる事は出來ない。流石の豐臣秀吉も、關白たる重みを維持せんが爲めには『我が母太陽を夢見て我を孕めり』と自分に勿體をつけねばならなかつた。袁氏も亦『我れの祖先は明朝の忠臣某なり』として、新たに岳飛と並んで之を祀らしめたといふ事である。斯

くても支那人の多數は、袁氏の人物又は家柄を決して重んじては居ない。此點については、元の清朝といへども決して滿足すべき境遇にはなかつた。何となれば南方の漢人種は、皆清朝に對して反感を有つて居つたからである。斯くの如くに國民崇敬の中心を缺く國柄にあつては已むを得ず共和制を布いて、徐ろに民智の開發を俟つの外は無い。故に若し人あり、我輩に向つて支那の爲めに策を建てよと云ふならば、予は支那人に告げて、只自發自彊の途を講ぜよと云ふのみである。或は共和制を變じて帝制とすべしと云ひ、或は袁氏を倒して共和制を維持すべしと云ふが如きは、之れ目前無用の紛爭にして、決して永久に支那を救ふの途ではない。我國の支那に對する態度は又其根本に於て此見地から出發すべきであると思ふ。少しく詳かに之を云はんか、吾人は帝制共和の爭の畢竟永遠の意義を有する大問題にあらざるを認識し、徒らに之に干入して目前の小紛爭を重大視するの態度を取るべきでない。況んや帝政の實現によつて特に我國の利益の害せらるべきものなきに於てをや。故に曰く、我國政府の執るべき最良の政策は傍觀に在りと。且つ此傍觀政策は、偶々我國の干渉を期待しつゝある革命派の亡命客をして、事を起すの機會からしめ、終に彼等をして、支那を救ふの途は自發自奮の外なきを悟らしむるの利益もあるだらう。若し夫れ內外輿論の迫る所となつて、干渉の手段に出でざるべからざる事情に遭遇せんか。其時は我國は須らく率先して關係諸强の意見を纏め、協同一致の態度を執ることを怠つてはならぬ。干渉は我輩の好まざる處であるけれども、之れ亦袁世凱政府をして、帝制共和の說の畢竟皮相の爭端に止り、四億の生民の爲めに計らんとせば、自ら他に途あるを悟らしむるの機會となるを得ば是亦徒爾にして終らない。只干渉するについては、我國自ら率先して關係諸國と共通の措置に出づるを必要とすることを呉々も注意して置く。

收賄贈賄、罪孰れか重き

九月二十六日尾崎司法大臣が大浦兼武氏不起訴に關

する理由書を發表してより、此事件は再び八釜しき論議の種となつた。予輩も亦一般世論と共に、司法省が明白に大浦子爵の罪狀を認めながら、所謂刑事政策に籍口して不起訴に決せしを以て極めて、不都合な處置と認めるに躊躇しない。

どうせ起訴しない位なら、初からあんな理由書などを公表しい方が宜かつたらうといふも亦一説である。所謂平凡なる政治家の淺薄なる政略的見地よりせば、初めから臭い物に蓋をして、闇から闇に葬り去るのが一番賢明な手段と見ゆるであらう。司法大臣が一方に大浦子の罪狀を露骨に明るみに出し乍ら、生中利口振つて刑事政策上起訴しないのが國の爲めであるなどゝ云ふのは、如何にも愚策である。併し乍ら、一部の世論が尾崎氏の處置を愚策と罵りつゝ、暗に臭い物に蓋主義を勸奬せんとするが如き口吻を示すのは、甚だ心外に堪へぬ、何となれば、眞に公明なる憲政の發達を冀ふ吾人の立場より云へば、愚策ながらも事件の眞相を公表したといふことは、秘密主義に比して少くとも一段の進歩たるを失はぬからである。此點に於て我輩は、假令其智慮に於て足らざる所ありしとはいへ、尾崎氏が事實の前に良心を僞り得ざりしその正直の態度を寧ろ多とするものである。

併し乍ら尾崎氏の理由書の中にも、看逃し難き二つの重大なる謬見がある。一つは飽くまで瀆職事件を大浦子爵一人の責任に歸せることで、一つは大浦子の潔白なる動機に對して同情的言辭を弄せしことである。

大浦前内相の瀆職事件に付て政治上何人が其責に任すべきやは、其法律上の責任が何人に歸すべきやの論と、全く別の問題である。法律上の刑罰を受くべき者は、成程此事件に直接關係した者のみである。大隈首相にしても尾崎法相にしても、事實上全く之を與り知らなかつたといふ證明が立てば、何等の咎なくして濟むことは論を待たない。併し乍ら、法律上の無罪は必しも政治上の無責任を伴ふものではない。そは大浦事件なるものは、事明かに政府の高等政策に關するもので、全内閣の道理上之を與り知らずといふ事の出來な

い事柄である。假りに事實上全く大浦子爵一人の專擅に出でたとしても、政治上他の閣員が知らなかつたと平氣でいへる性質のものでない。多年立憲的政治家を以て任じて來た尾崎氏にして、此位の道理の分らなかつたのは驚くの外はない。予輩は吳々も注意する。法律上の責任と政治上の責任とは全く別問題なりと。

若し夫れ尾崎氏が、公共の目的の爲めに財物を收散せるの故を以て、陰に大浦子の心事を諒とせるが如き口吻を洩せるに至つては、憲政道德を解せざるも亦甚しと謂はざるを得ぬ。凡そ立憲政治の運用に於て、第一に憎むべきは自ら德義を破る者でなくして、德義を破らしむる者である。所謂政界の腐敗なるものは、常に政策の遂行に急ぐ當局者の、群小政客の節操を買收する所より起るは、東西其揆を一にする所である。買ふ者あればこそ賣る者がある。買ふ者に一大鐵槌を下すに非んば、政界の廓淸の期すべからざることは、苟くも憲政要義の初步を解するものゝ、誤る能はざる所である。海軍收賄事件などの如く、不義の財を以て私腹を肥せるに非ざるの故を舉げて、多少其心事を諒とせんとするは、以ての外の事といはねばならぬ。社會を毒する影響の大小より之を見る、大浦事件の罪の重きは到底海軍收賄事件と同日の談ではない。

元來我國には、自ら財を貪るを卑しめ、財を散ずる以て任俠自ら喜ぶといふ風がある。他人の物を盜んでも、之を貧者の間に頒つときは、時に義盜の美稱を受くるではないか。斯の考が抑もの間違である。假りに此考に一應の道理があるとしても、之は市井の小人の間に於てこそ通用すれ。天下の公人の間に於ては決して容るさるべき言ひ草ではない。況んや一國の大臣たる者に於てをや。殊に大浦子爵の場合に在ては、不義の富を自ら私しなかつたといふ丈けで、國民の良心を麻痺し、社會の腐敗を助長したるの罪、決して輕くはない。何となれば、彼は第一に官職を利用して不正の財を集め、第二に之を意思の弱い政客に投じて其節操を賣らしめ、第三に此不正の手段に依つて天下の公器を弄ばんとしたからである。單に一文一錢をも私しな

かつたといふ理由で、斯かる行爲を少しでも勘辨してやる樣では、我國政界の氣風は百年經つても淸淨潔白になるの氣遣はない。舊式政治家の最後の典型たる大浦子爵が識らずして此大罪を犯せしの無智は、暫く之を問はずとするも、英國風の憲政の運用に最も通ぜりと人も許し自らも許せる尾崎法相までが、這般の道理を誤るとは、以て如何に我國の政客間に、健全なる憲政思想の缺如せるかに驚かざるを得ないのである。知らず、健全なる同業の操觚者諸君、亦法相の態度を是認するや否や。

立憲政治家の憐むべき封建思想

先月半ばの新聞によれば、石井外相の新任と共に、久しく缺員のまゝであつた外務省正副參政官の人選が、再び廟議に上つたとの事で居る。然るに玆に奇怪に堪へざるは、其任命につき、同志會と中正會との間に奪合ひがあるとか、又同志會内に於ても、此前の參政官の任命の時には、東北、中京に厚かつたからとて、關東組が不平を言ふ。そこで關東方面から少くとも一人を拔擢しようとか、或は北陸三縣に最近大いに同志會の勢力が張つたから、此地方からも一名を拔いて地方の人心を繋がうとか、又南北信からも取れとかいふ議論があつて、即ち各種の團體が鎬を削つて暗闘して居るといふ事である。爲めに政府乃至與黨幹部間に於ても、黨内の人的關係又は各地の黨勢に對して均衡を失せざるやうに人選をしようとて、大いに苦心をして居るといふ事である。先に第一次の參政官任命が全く情實に依つた事は、明かな事であるが、今度も又才によつて人を取らず、情實によつて人を取らんとするの說を耳にして、我輩は今日我國立憲政治家の思想の如何に舊式なるかに驚かざるを得ない。

參政官任命の本旨は、こゝに事新らしく說明するを待たない。一方に於ては、政界の人才を擧げて樞機に與らしめ、一般の官僚社會に淸新の氣を注入するとともに、他の一方に於ては、將來ある有望なる少壯の政

客に、行政上の實務に接するの機會を與ふる所以のものである。一面に於ては人才の登龍門である。一面に於ては人才の教育機關である。何れにしても、將來大臣にでもならうといふ者の、喜んで赴くべき地位である。又斯くの如き人才にのみ許さるべき地位である。此點に於て參政官といふ地位は、立憲政治に於て頗る重要の意義を有するものである。此地位が行政上の實蹟を擧ぐる上に何等直接に加ふるところなきの故を以て、無用の冗官なりといふが如きは、未だ立憲政治の妙諦を解せざるの論である。蓋し立憲政治は人才政治である。能ある者が獨り物をいふべき政治組織である。故に人才の登龍門にして又人才の教育機關たる參政官の地位に何人を擧ぐべきやは、一に能不能を以て之を判斷すべきである。而かも其能は現在に於ける能、若しくは將來に於ける能であらねばならぬ。過去に於ける功勞すら、此地位に擧ぐべきや否やを決する標準とはならない。況んや二流三流以下の低能を、單に各地の黨勢に對する權衡を保つの趣意の爲めに持ち來るが如きは、封建時代の思想であつて、決して今日に通用するものではない。然るに政黨の領袖も又政府も、折角此好機關を設けながら、之を適當に利用せないのは甚だ怪しからぬ次第である、彼等は適任なりや否やを見て其人を擧げない。其人を此地位に置くことによつて得んと期待する黨の利益を見て其人を擧げんとする。故に中には一二適任の者もあるやうであるが、多くは名もなき雜輩が此地位を汚して居るといふ今日の有様である。從つて本來此地位にふさはしいやうな相當の人物は、却て馬鹿げて此地位を避けて居るやうな傾向がある。要するに、今日參政官の地位は、地方的利益の代表者たる田舍政治家か、又は長く黨界に奔走して之まで餘り振はなかつた老骨に、お情けに與へられて居るやうな有樣である。凡そ健全なる政治社會に於ては、現在に働くの能ある者は大臣となるべく、將來に活躍する希望ある者は參政官となるべく、只過去に功勞ありといふ丈けの者は、假令第一流の地位を占むる者と雖も、現在に望みを絕つて、樞密院か貴族院邊に

葬られて滿足すべきである。若し夫れ第二流以下の人物に至つては、議會以外に頭を出すの必要はない。

戰局巴爾幹に擴がる

勃牙利愈々起つ　久しく風雲の去來定かならざりし巴爾幹の外交界は、勃牙利が獨墺側に味方して起つに及び、益々變調を呈することゝなつた。戰爭開始以來、殊に土耳其の參加以來、交戰諸强の外交が、羅・勃・希の三國政界に於て、鎬を削つて暗鬪しつゝあつた事は、今更說明を要せぬ。勃牙利が初めより獨墺側に近く、希臘・羅馬尼亞が初めより聯合軍側に近かりしは公知の事實。而して獨墺外交は、希・羅を制して中立を守らしめ、以て勃を起たしむるに全力を注ぎ、聯合軍側の外交は、希・羅を起たしむる前提として勃に中立嚴守を約せしむるを必要となし、爲めに希・塞・羅をして勃に多少の割地を爲すに同意せしめんと骨折つたのであつたが、比較的單純な獨墺外交遂に勝を制して、玆に勃の起立を見るに至つたのである。今となつて見れば、是れ寧ろ當然の成行であつて、必ずしも之を以て英佛外交の失敗といふべき程の事ではないと思ふのである。

勃國の態度の愈々明白になりしは、九月下旬土勃割地條約の公表せられてからの事である。此條約はトゥナシァ・マリッツァ兩河間の土地を、土より勃に割讓するとを定めたものであるが、何故に突然斯かる條約の成立を見たかといへば、勃國首相は當初之を「過去の中立に對する報酬にして勃國將來の行動を拘束するものに非ず」と辨解しては居つたけれども、實は（一）獨墺軍隊の土國輸送に便宜を與へ、（二）其の爲めに獨墺軍と響應して對塞戰に參加することに、勃國政府が最後の決心を堅めた結果に外ならぬ事は、衆目の視る所を一にした點である。而して此勃國の態度は、九月二十一日より動員を開始し、十月二日露國の最後通牒に接受して之に答へず、却つて塞國に同様の通牒を發するに及んで愈々明白になつた。

勃牙利と獨墺　勃牙利起立の眞相を明にせんとせば、先づ其の獨墺との關係を精査するの必要がある。

抑も獨墺外交が、勃を誘ふに見事に成功せしは何の爲めか。之を單純に、英佛側が希・塞・羅の同意の下に與へ得ざりし領土的利益を、獨墺側が土國を强要して勃に提供するを得たことのみに歸するは、淺薄なる觀察である。第一に、勃を以て、孰れでも利益を提供する方に附くといふ我利々々主義の國とのみ觀るのは正當でない。利益の提供は慥に國家の向背を決せしむる一大要素ではあるけれども、猶其外に特に獨・墺・土に接近すべき理由を有たなかつたならば、勃は決して斯くも輕々しく其態度を決しなかつたらうと思ふ。予の觀る所に依れば、勃の獨墺に附きしは、假令利益の提供なかりしとするも、之を當然と看るべき理由がある。何となれば、彼は一九一二・三年の巴爾幹戰爭以來、塞・希・羅の三國と離隔し、僅に土と攻守同盟を結んで、半島上に於ける孤立の境遇から脫して居つたからである。第二次同胞戰爭の敗殘は、假令其源を自國の飽くなき慾望に發するとはいへ、其恨や綿々として盡きざるものがあつた。斯くて戰前に於ける勃國の地位は、希・塞・羅と水臭く、寧ろ土に近きものがあつたのである。是れ一つ。次に勃は、英佛に對して特に何等親しむべき關係がない。最近の巴爾幹第二次戰爭に於ては、英佛兩國がブカレスト條約を其儘承認し、露・墺が特に勃の利益を保護せんとするに反對したるの理由を以て、却つて之を恨むべき理由がある。是れ二つ。終りに露は、屢々世人より巴爾幹に於けるスラヴ諸國の保護者たりといふ尊稱を受くるのであるが、勃は必しも露の誠意を信ずるものではない。成程一八七八年、勃が自治權を得たのは、露の盡力の結果である。併し乍ら、露は勃を意の儘に操縦し得ざるを見るや、一八八六年八月、時の君侯亞歷山を誘拐して、之に退位を迫つた事がある。賢相スタムブロフが斷乎親露黨を斥けて、現王フェルヂナンドを獨逸サックス・コーブルグより迎ふるや、露國は之が承認を拒むこと約十年の長きに及んだ。十年此の方、勃露兩國は再び親交の關係に入つたけれども、最近露の特に塞に厚き態度は、勃國多數の政治家をして、密に心を獨墺に寄せしめた事は人

の知る所である。是れ三つ。以上三つの歴史的事實は、勃國今次の態度を考察するに當つて、決して忘るべからざる點であると思ふ。

更にモ一つ考へねばならぬ事は、何故に土國が容易く割地を承諾したかの問題である。漫然外國に土地を割くを苦痛とするは、土も希・塞・羅も同樣である。而かも平素倨傲自ら高く標置する土國が、之を諾して惜まざりしは何故なりや。是れ思ふに、一方には土國に獨墺の救援を求むるの急なるものあり、他方には獨墺亦ダ海峽に於ける聯合軍の攻勢を阻止するの急要を認むるありて、之が爲めには如何なる高價を拂っても、獨墺は土との連絡を計るの必要ありしに因るものであらう。ダ海峽に於ける英佛連合軍の攻擊は、九月に入りて大に進捗したものらしい。當時土國朝廷は、重要書類を亞細亞方面に搬出したといふ報道さへ傳つた。此時に當つて恃む所は獨墺側の援軍のみである。土國が容易く對勃割地を承諾したのも、この窮迫の結果であらうと察せらるゝ。而して土國の運命の、全戰局の發展に影響するの大なるとは、言を俟たない。故に獨墺としては、何事を措いても、土國の滅亡は之を救はざるを得ないのである。去ればこそ、獨墺は對露征戰の一段落を告ぐるや、當時段々窮迫して來た土國を救援する爲め、南下の大方針を決したのである。而して獨墺の南下は、英佛側に取つては是亦由々しき大事なるが故に、彼は九月初め來、此形勢に氣付いて、大に牽制運動に苦心したらしい。九月下旬より一時頻々として我々の耳朶を打つた西方戰場に於ける英佛軍攻勢の報の如きも、其後本式の攻勢に轉じたらしくも見へない點より想像するに、是れ或は獨墺軍の南下に對する牽制運動に過ぎなかつたものではあるまいか。孰れにしても土國の運命は英佛側の非常に重きを置きし所たるは疑を容れぬ。それ丈け獨墺側も、亦必死となつて其救援の策を講じたのである。而して其救援の目的を達するには、先づ塞國に打擊を與へ、勃を味方として土京に連絡を取るにある。何となれば、獨墺より土京に到るの大道は、塞京ベルグラードより新都ニッシにいたり、東勃京のソフィアよりフィリッポポリスを通り、土國舊都アドリアノープルを經て土京に南下するにあるからである。斯く考ふると、獨墺外交が、死者狂ひとなつて勃を味方とすべく盡力した所以は、極めて明白に了解せらるゝのである。

勃國參戰の結果如何

勃國の參戰は重大事ではあるが、其事自身直に戰亂の全局に大影響を來すのではない。全戰局に大影響を來すのは、寧ろ勃國參戰の結果として來るべき土國救援の目的の到達如何に在りて存するのである。土國にして救濟せられずんば、爲めに獨墺を一層の窮境に陷れて、戰局の結末を早くする。之に反して不幸聯合軍の巴爾幹より一掃せらるゝことあらん乎、戰局終結の希望は、更に一層吾人を遠退くのである。然らば土國は結局救援せらるゝだらうか。之は主として希・羅二國の態度に依りて定まる。此二國にして今日の如く煮え切らない態度で居る以上は、英佛側に七分の弱味ありといはざるを得ぬ。去

ればにや、英佛側は頻りに伊國をして巴爾幹派兵に同意せしめんとし、甚しきは葡萄牙をしてまで參戰出兵せしむべしなど論ずるものもある。此方面の戰局の發展は、追つて後報を待つて重ねて論評を加ふる事としやう。

希羅兩國の態度について

勃が起つた以上は希羅兩國も亦起たねばならぬ。而かも此兩國は今尚形勢を觀望して容易に起たうとせぬ。此形勢は何時まで續くであらうか。我輩の觀る所に依れば、元來巴爾幹諸國は、自力を以て立つに非ず、歐洲列强の支持承認の下に立つ國柄なるを以て、輕擧盲動は偶々國家の存立を危うする所以であつて、此點は大に愼まねばならぬ國柄である。去ればとて仲間の二三者が事を起せるに際し、自分のみ永く傍觀の態度を執るときは、戰後に於ける利益關係の按配に取り殘されて仕舞ふといふ惧がある。勢力均衡を以て、半島の平和の上に、又自國の安全の上に、必要不可缺とせば、機を見て渦亂の中に投じ、以て他日容喙の口實を得て置くことが極めて肝要である。故に希羅兩國も、結局に於ては、永く現狀を維持することは出來ないのである。只ウッカリ動くことの極めて危險なると、其他種々特別の事情とが相綜合して、今日の形勢を現出せしめて居るのである。

尤も羅を以て、本來露と近いものと觀るは誤である。歷史的云へば、今日の羅民族は一八五六年の巴里條約にて、やゝ獨立自治の體面を得るまでは、隨分露土兩國の協同壓迫の爲めに苦められたのである（露は一七七〇年以來、特別の條約によりて、土領たる之等の地方に一種の政治的權利を有つて居たのである）。一八七六年の露土戰爭の際には、露と同盟して土の勢力を排斥し、其結果完全なる獨立を得たのであるけれども、羅は後に露の不信を憤りて、寧ろ心を西境の墺國に寄せたのであつた。兩三年此方、頓に親露派の頭を擡けたるを觀るも、其以前は、永く羅は墺國の藥籠中のものと認められて居つたのである。況んや去年十月死んだカロール王は、獨逸皇室の分家の出であり、其甥の現王フェルデナンド亦、其妃に英露皇室の血を交ふるものあるとはいへ、純然たる獨逸派たるに於てをや。故に羅の連合軍側に投ずるは、自然的好感の之を促すものあるに非ず、只利害と威壓とに依りて之を齎すべきのみである。利害は略ぼ一致して居ると見ていゝ。只英佛露側が、モ少し威力を示すに非んば、羅を引き入るゝことは一寸困難かも知れない。

若し夫れ希に至つては、歷史的に英佛と極めて近い關係に在る。何となれば、希の一八三〇年を以て獨立し得たるは、全く其援助の結果であ

るからである。加之、希がエーヂアン海上に於て全然土と其の利害を異にして居る事情は、當然に希を英佛に加擔せしめねば熄まない。希が獨墺側に味方して、土國の窮迫を援くるの無意義なるは勿論、假りに中立の嚴守によりて好意を表したとても、戰後何の得る所あるべき道理はなく、却つて英佛伊と阻隔する事から生ずる孤立的地位の爲め、大に困む事となるであらう。然らば希は本來一刻も早く英佛側に馳せ參ずべき筈である。而かも今なほ躊躇決せざる所以のものは、噂の如く、國王コンスタンチンの反對の爲めであらう。

國王の妃ソフィアは、獨帝の妹である。女房に甘い西洋人の常として、國家の利害を犧牲としてまで、義兄の機嫌を取らうといふのは、一應は怪むに足らぬ。併し此狀態は何時まで續くであらうか。此點を考ふるに當り、吾人は獨り希王室の獨に近きを視て、英露兩國と更に親しき關係にあるを看逃してはならぬ。その故は、一昨年三月サロニカ出征中兇漢の狙擊に斃れた先王ジョーヂ一世（現王の父）は、丁抹の先々代クリスチアン九世の第二子で、英國皇太后アレキサンドラ陛下には弟、露國皇太后ダグマール陛下には兄に當らせらるゝ。故に希の現王は、英露兩帝とは差し向ひの從兄弟に當るのである。啻に之れ計りではない。現王の母、即ちジョーヂ一世の后は、露の先々代亞歷山二世の弟コンスタンチン・ニコライヴィッチの女で、現露帝に取つては、一廻り廻つた叔母君に當る。斯くて希の王室は、極めて英露に近いのである。希の獨と近いのは、只現后が獨帝の妹であるといふ一點のみである。王后陛下の希王に對して陰然たる一大勢力たるは、今日までの事實之れを示して餘りあるも、王室内部の一般の空氣がもと全然英露的なるを想ふとき、希が其中國家の利害の正當なる打算に基き、其の當然に執るべき道に復歸する日の、遠からずして來るべきは、必ずしも之を豫想するに難くない。

文藝時評

藝術の力

正宗白鳥

私は長谷川二葉氏からたつた一度直接にいろんな話

を聞いたことがある。氏が露西亞へ立つた年の初春だつたと覺えてゐるが、私はある友人に誘はれて偶然氏の宅を訪問した。氏は行火に當つて外字新聞を讀んでゐた。初對面だつたが氣の置けない人らしかつたので、私はいろんなことを訊ねて、自分の方からも可成りに意見を述べた。燈火の薄暗い何等の裝飾も施してゐない狹い二階で、煙草を持つた手を震はせながら、粘つた口調で文藝や政治や社會の種々の出來事に對して批評を下してゐた氏の面影は、今でも朧ろげに私の記憶に殘つてゐる。

　どんなことを話したか、話の內容は殆んど忘れてしまつたが、その時氏は「ある時ツルゲネーフを讀んで噴き出したことがあつた」と云つて、小說なんてたわいのない詰らない物だと云はねばかりの口吻を洩らした。この言葉は爾來折に觸れては私の記憶に浮んで、意味ありげに考へられることがある。勿論その頃の二葉亭氏は實行を重んじて、口では文學を卑しみながら、心の底では一種の愛着を持つてゐたのに違ひないが、氏の矛盾した心持には、私は今尙ほ無限の同感を覺えるのである。

「トルストイは氣六ケ敷變人、ドストエフスキーは人のいゝお爺さん、ウキッテはえらい」とは確かその時二葉亭氏の口から出た批評だつたが、私なども時としてはこれに類した考へが起らないではない。殊に我々は先頃まで戲作者を低級な人間として卑んで來た日本人の子孫だから、どうかした機會にはさう云ふ考へが起つて來る。

「家庭の小紛擾や青年男女の平凡な戀愛などを描いてばかりゐては駄目だ、社會問題を取扱つたものを書け」とか、理想が淺薄だとか、非難する根柢には、知らず〳〵文藝をたわいのないものとして卑しむ氣分が潛んでゐるのである。氣に入らない嫁に對する姑の苦情のやうに、左へ行けば右、右へ行けば左と、何方向いても難癖はつけられるのである。私などは今日の文學藝術に對する時に、これを西洋の文藝に比したり、教師めかしき態度で缺點を指摘したりするに先立つて、眞

面目臭つてこんな者を書いてゐるといふことに一種の嫌惡を感ずることがある。芝居を見て、演技の巧拙如何よりも、男子が紅粉を粧ひつくり聲を出し所作ぶつてゐるのに先づ不快を感ずると同じやうに、小說を讀んでも侮蔑の感のみが後に殘ることが多い。破れ三味線を彈きながら子供に踊らせて、通りすがりの人々に一文二文の合力を乞うてゐる藝人の憐れさを作家の身の上について感ずることさへあるのだ。どういふつもりでこんな厭らしいことをだら／＼と書いてゐるのだらうと思ふ瞬間に、藝術尊重の念は全く消えてしまうのである。

社會問題を書けとか、理想を抱いてもつと確かりしろとか云ふ注意が得てそんな時に起つて來るものだ。世間の人のやうに單純に頭から文藝その物を排斥し得ない人々は、尤もらしい文句を捻出して注意を加へやうとする。

しかし、私はまだ藝術をたかゞ退屈醒しのそら事と見くびつてしまう譯には行かないのみか、時としては重い敬意を寄せることがある。それはトルストイとかドストエフスキーとか、ロダンとかその他いろ／＼の世界的に有名な大家や、既に死せる日本の文豪のある種の作物に對して感ずるばかりではない。現に我々と同じ地上に呼吸してゐて月々の雜誌のために勞作してゐる人の作についても、ふと敬愛の感に打たれて、直ぐ今まで抱いてゐた自分の文藝觀を裏切るとさへある。月々の數多き作物を讀飽いてゐて、それ等から何も期待しないでゐながら、をり／＼は感動さゝれることがあるので、我ながら不思議に思つてゐる。その瞬間には私はその作者を尊く思ふたりする。そして、私が感動さゝれる作物は必しも社會問題を取扱つてはゐない。問題を提供しても解決してもゐない。高い理想を標榜してゐるらしくもない。

たとへば、私は今月の小說を幾つか暇つぶしに讀んでゐる中、野上彌生子女史の「二頭の小馬」に目を留めるに及んで、藝術的感興とでも云ふべき感じを起さずにはゐられなかつた。そして珍らしくさう云ふ感じを起したことは、私の心に取つては決して損ではなかつた。何故かを省みる前に、この作を讀むことによつて、退屈醒まし以外に一種の喜悅を覺えたことは動かしがたい事實である。直きに忘れてしまうやうな些細な喜びであらうとも、私など乾燥無味な日を送つてゐる者には、瞬間でもそんな氣持になれたのは幸福と云はねばなるまい。殊に私は外國文で書かれた外國の小說を讀んで感奮するよりも、たとへ小いながらも、自國の今日の作家の小說を讀んで藝術的感興を覺えたことを、一層快く感じてゐる。雜多紛々たる今日の作物中にたまにでも、私をして藝術侮蔑の念から免れしめる物のあることを私は心強く思つてゐる。

私は女史の小説はこれまでに一つか二つしか讀んでゐない。讀んだものも印象を殘してゐない。從つて女史の作風は全く知らないから、新作家の處女作でも讀むつもりで、先入主となる何等の考へもなしにページをめくつて行つたのだが、落着いた素直な筆で作中の事件や人間が讀者の頭に浸み入るやうに描かれてあつた。小說に有り勝ちな反感を抱かせるやうな辭句がないので氣持がよかつた。この作から推察される作者の態度は生活に對して大人しい地味な見方をしてゐて、風變りの點はない。しかし色氣づきかけた憂鬱性の少女に對する批評の目は遺憾なく働いてゐて、中々鋭いところがある。私は自分のよく知らない一種の少女の心の世界をこの作によつて瞥見することが出來たやうな氣がする。それだけでも藝術によらねば得られない賜物ではないかと思つた。

この作者は非凡な天分を持つてゐるかどうか私には分らないが、この作の傑れてゐるのは、作の材料について作者の知識が豐富であつて、空想で捏廻す必要のなかつたことが重なる原因になつてゐるかも知れない。

水野仙子女史の「淋しい二人」は、女らしい感傷的の心持をぶつ付けに書いたものである。只それだけに過ぎない。しかし、私は小川未明氏のよく書く感傷的の文章に比べて、作者それ〴〵頭の中を考へた。男は男、女は女といふことも考へた。

田村俊子女史はます〳〵縱橫に才筆を發揮してゐる。今月に「奻情」といふのを讀んだ。男女關係について例の通りよく書いてはあるが、しかし、我々に特異の感じをも新しい智識をも與へるところは些しもなかつた。筆の上から云つても平生の女史の作に比べて力をも色彩をも缺いてゐる。この作者も多作するに從つて、最初の淸新な氣持に垢がついて、書く事も月並になつて來たらしいところが見える。讀者の方でも飽いて來て反感を抱くやうになつて來る。どの作者にも大か小か、かういふ時期が巡り來るものらしいが、それを切り拔けて新しい境地を拓くか否かによつて作家の眞の天分が硫められるのだと思はれる。私は女流作家中最も傑出したるこの作者が、衆人環視の中でどんな徑路を取つて今の境地を出て行くかを興味を寄せて見てゐる。

行詰まつたとか停滯してゐるとか、種々雜多の惡評を受けても、作家としてはそれに憤慨して自家辯護なんかするのは無駄なこのやうに思はれる。自分で是とした道を全力を注いで進んでゐる以上は、それが他の目には滑稽に見えやうとも淺薄に見えやうとも仕方がないではないか。他をして强いて自分を感服させやうとする位無駄なことと馬鹿なことはない。出來難いことではあらうが、藝術家の極致として自家辯護を口にしないほどに自分に確かな物を把つてゐたい。自分で自分の作物を讀返して不快に感じながら、他人の惡評を恨むやうな淺間しい根性になりたくないと、私は自から、戒めてゐる。

長田幹彥氏の「春雨」は例の京都情話の一つであるが、私はこの作からはあまりいゝ感じを與へられなかつた。こんな短い物にさへ、古めかしい作り事染みた趣向を凝らしてゐる作者の態度は不快に感ぜられた。しかし其處にこの作者の企て及ばざる特色があるのかも知れない。この短

篇について見ても、小說脚色の技倆と一種の艶をつけた文章とは、硯友社全盛時代であつたら、氏をして紅葉山人などゝ覇を爭はしめたであらうと思はれる。それにつけても日本在來の古い詞藻から得來つた一種の美文として、氏の文章は殆んど推敲を經てゐない。谷崎氏の文章には古めしい形をしてゐながら新しい言現し方をしてゐる所があるが、氏のにはそれがない。

伊東忠太氏の「名建築の逸話」を讀んで名匠の苦心と自信とに感歎した。この話に現はれてゐる人々の氣持は私などまだ一度も經驗したことがないが、此處に達すれば藝術家としてのみならず、人間として最早遺憾なき生涯だと思はれる。疑ひ惑ひ恐れを脫して聰明なる自信に生きてゐる名匠の心境は羨ましい。

名匠の頭に映つてゐる歡喜の世界や、傑れた藝術に潜んでゐる力を想像しながら、私は味も卒氣もない小說や評論などを讀んだ。自己告白小說も冗漫に調子が低くだらけて來て、評家の非難も無理がないと思はしめるものも少くなかつた。評論文はひと頃よりは餘程實際的になつて、筋道の通つた者が多くなつたが、それでも何のためにこんな堅苦しい文字を陳列して鯱子張つた理窟を捏ねてゐるのかと、筆者の心根の解しがたいものも少くない。三馬の「浮世床」に出て來る殘念閔子騫といふ田舍儒者が連想される。

田山花袋氏が「蒲團」などを發表した時には、思切つた私生活の暴露をしたその作風を推賞した人でさへ竊かに冷笑して見てゐたのである。自分の日常生活をそのまゝに醜惡汚穢の行爲をも見のがさずに描けといふ氏の議論には盛んに反對者もあつたが、時勢がその氣運に向つてゐたのか、知らず〳〵皆んながかぶれて、多くの作家が我勝ちに自己の持つてゐる「蒲團」式の小說を書き出した、花袋氏があの作を出す時には、その苦しみもあつたであらうが、後から出す人には、頗悶がない。臆面もないところがあつて、今から見ると、「蒲團」など甘いものとなつた。

しかし、この臆面もなく自分の私生活の何でもを持出すといふことはそろ〳〵切上げていゝ時分ではないだらうか。自己隱蔽といふことが自己告白よりも一層價値があるのではないかとさへ、私はこの頃思つてゐる。それは小說ばかりではない、實際生活についても切に感じてゐる。赤裸々といふことも意味の取りやうによつて妙なものである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

永井荷風氏著

最新刊

日和下駄

□風景畫十六面挿入（コロタイプ）□

四六判全一册

定價金壹圓

本文總四號組

わが邦特有の美景は、現代文明の暴力に逢ひて、日に〳〵荒廢しゆかんとす。會て風雅を解したる民衆は、現代文明の皮想的壯感に眩惑せられて、沒趣味無理想の民衆と化しつゝあり。景に對する愛惜の情、人に對する嗟嘆の涙。著者漸く初老に近し、冷笑に一脈の曖昧を藏し、熱愛に一縷の寒意を存す。其言漸く質實、其の文益圓熟。「日和下駄」一卷、再讀三讀を禁じ得ざるもの、豈に謂れなしといふべけんや。

■新刊

水上瀧太郎氏著

心づくし

其題材は現實社會と活きたる人とにして之を描くの筆は詩人の才筆なり宜なる哉其意人に迫り其文人を魅する事

金九十錢

（中付五の一）

東京市丸の内三菱廿一號館

籾山書店

振替東京二四一七

■藏版時報冬季號申込次第郵呈す

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

増訂

新佛和辭典

特價提供

野村泰亨著

■五千部限特價金壹圓八拾錢

郵税 内地八錢 臺樺廿錢 朝支卅錢

本書は著者野村泰亨先生全力を傾注し數年に亘り再三改竄補修を成し大に佛文界に貢献せられ其販賣數萬部に至れり今又斯界に忠實なる著者は平素愛讀せる珍書大作中より得たる曾て他の辭書中に見るべからざる珍語秀句を初め這般プラン夫人の「佛蘭西語調拔粹」及アアボン氏著「佛蘭西熟語集」中より難解の[illegible]語俚諺俗語等を纂集加美せり、加之比喩轉義の文字には其本義出所を審にし同一の文言にて學者間に其解説を二三にするものは細大洩さず之を詳録し得たる百廿餘頁を卷尾に補遺となし今回發行す故に佛文特得の典雅優尚の文趣より通俗卑近の俚語に至るまで具に翫味するを得小説脚本美文を誦讀せんとする人士の一日も座右に缺くべからざる寶典たり

内容見本申越次第進呈す

■即決即斷只今速に此の特價利用せられよ

新形金文字入總クロース製箱入美製全一冊紙數壹千三百三十餘頁▲語數六萬五千餘語▲挿畫貳百五十餘個

正價 金貳圓貳拾錢

發行所 東京日本橋角 大倉書店 (振替東京二三八番)

(中付五の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

興味ある文字を満載せる十一月號

早稻田文學

□小説 死顔の群より……小川未明

□小説 黎明……村山勇三

□小説 孤獨……三上於菟吉

□小説 闘鷄……榎本獨境

■二大思潮闘爭の事實と意義……相馬御風

■ノラの犯罪……秦豊吉

■リアリストの悲劇……宮島新三郎

■院展、文展及び二科會評……森口多里

全國青年に對する「政府の所置」

吉野作造、新渡戸稻造、安部磯雄、大杉榮、長谷川天溪、生江孝之、小松武治、太田三次郎、中島半次郎、内ヶ崎作三郎外數氏

詩歌（西條八十、齋藤未學、尾山篤二郎、其他數氏）

最近思潮

■新學制問題

■ウキッチに關する私見

■日本畫教育論

■戰爭の結果私生兒問題

■無名會の『村の祭』

■バ夫人の新らしい試み

■常識試驗

■ベルナール夫人の渡米

欄

■戰爭の諷刺畫家

■愛蘭勞働者と姓名登錄

■青年美術家の救濟

■海外出版界の消息

▶附錄◀ 我等が生活の日（藝術座上演臺本） アンドレエフ 昇曙夢譯

定價二十五錢 郵税一錢五厘

半ヶ年分倍號共一圓九十六錢 ■ 一ヶ年分倍號共三圓七十六錢

東京神田表神保町 ■ 振替東京二七〇番

東京堂

（中付五の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



某夫人の自殺

後藤末雄

晩秋の暖い夕暮であつた。夫人の横顔が、ふと著者の目に留つた。妙に面(おも)やつれのした青白い顔をして、夫人は頸垂(うなだ)れながら、駿河臺を上つてゐた。人違ひではなからうか。併し左の耳には昔ながらの大い黒子(ほくろ)が殘つてゐた。そして足許には可愛らしい白犬が、御主人を保護するやうな、案内するやうな顔をして、頻りに尻尾を振りながら、幾度(いくたび)も立ち止つては、氣遣しげに夫人の横顔を覗いてゐた。それほど打ち沈んだ夫人に、著者は挨拶したくもなかつた。

夫人の凶報に接したのは其の翌々日であつた。果して夫人は病死を遂げたのか。著者は兼ねて夫人の性格も境遇も知つてゐた丈け、此の悲しい通知のかげに、深秘な「人生記錄(ドツキユマン、ユーマン)」の潜在してゐる事を、直覺せずには居られなかつた。殊に塑像めいた死骸の肌(はだえ)に、紫色(むらさきいろ)の斑點が微かに殘つてゐた事も人傳(ひとづて)に聞いてゐた。猶さら不思議な事實は、夫人の愛犬「茶目」が其夜、應接室で

惨らしい死態を曝した事なのであつた。

「まあ、畜生のくせに感心で御座いますこと……あんなに可愛がつて居らしやいましたから、御跡を、お慕ひ申して……それを思ふと、私なんぞは何うしたら宜しいでせう……」

と御氣入りの小間使は途方に暮れてゐた。まつたく愛犬「茶目」は日頃の御恩返しに夫人の跡を慕つていつたか。忠犬らしい殉死を遂げたのか……

一

夫人の名を假りに綾子と言つて置きたい。綾子が十六の歳までは別に左したる話も無かつた。唯だ深窓の少女として、温室の植物みたいに、荒い風にも當てられず、平和に、伸んびりと、是れまで育つてきた世間並の、幸福な令孃に過ぎなかつた。母親は樂しみのやうな、心配のやうな心持で、先づ惡い蟲を附けまいと用心の眼を見張つてゐた。

「年ごろの娘を持ちますと心配で堪りませんよ。子供だ〱と油斷してると、飛んだ間違で手を燒きますからね……まあ、後悔、先き立たずと申しますから、執つこいほど世話を燒いてをります。それに今の殿方は厚かましくつて御話になりません。」

と母親は人さへ見れば斯う繰り返してゐた。そして母親の何時も口にする「殿方」といふ言葉が、華やかな昔を語つてゐた。

「そりや御前が浮氣で身に覺えがあるからだ。いくら御前の娘でも御前見たいに浮氣だとは限らないよ。第一、俺の娘だから浮氣ぢやない筈だ」

と微醉ひ加減の父親が斯ういふと、

「あら貴方だつて隨分浮氣で居らしつたわ……」と母親は小皺の寄つた頰邊に甘い微笑を浮べて、若々しい身振をした。そして遠い昔の追懷を樂しむやうに、恍惚と壁の表を見詰めてゐた。とにかく母親は自分の浮氣に引較べたせゐでもあるまいが、綾子の女學校へ這入つてからは、惡い蟲を付けまいと一そう嚴重に監督して、絕えず疑惑と嫌疑の怖しい眼付を光らしてゐた。綾子は年の割に老成てゐた丈け、母親には心配の種であつた。

每朝、綾子は老車夫の車に牽かれて虎の門の學校に通つてゐた。そして三時頃になると、老車夫は校門のそばに俥を置いて、蹴込みに腰を掛けながら「義士銘々傳」を讀み耽つてゐた。時には日向に涎を垂らしながら、あんぐり口を開いて居睡をしてゐた事もあつた。この老車夫に牽かれて行くのが泌み泌み悲しかつた。洗晒しの半被、色のはげた饅頭笠、その下から見える白髮の襟、筋立つた細い脚、筋骨の波を打つ息切れを聞いても、綾子は、氣の毒だとも思へなかつた。何故と言へば綾子を牽いて吳れる老車夫よりも、牽かれてゆく自分の方が何より先きに可哀さうだと思つてゐたから……堀端の柳が靑々と芽を吹いて、大內山の靑巒に朝日の匂ふころ、並木の樹蔭を話してゆく同級生の後姿を見掛けると、綾子は車を乘り棄てゝ、友達と一緒に行きたかつた。併し老車夫は「そんな事をすると、私が奧樣に叱かられます。」と言ひ立てゝ、梶棒を下ろした事は無かつた。綾子は何うして此の車に乘らなければならないかと考へて見た。そして殊さら老車夫に曳かせる母親の意中を思ひやると、異樣な憤懣と反抗を感じない譯には往かなかつた。

克く日比谷近くへ來ると、四人馬車に出逢つた。それは「罪惡」そのものを密封したやうな重い車であつた。そして陰痛な輪音を立てながら並木を辿つていつた。この車にも朝日は當つてゐた。自然の大いこと、人間の小さい事が、ふと綾子の胸を掠めた。幾月ぶりで自由な空氣を吹ふのか、幾年ぶりで娑婆の景色を眺めるのか、それとも刑場に曳かれる途すがら、この世に最後の一瞥を惜しむのか、青い顔が金網のかげから凝つと往來を眺めてゐた。時には若い女囚の顔も見えた。すると綾子は嫣然笑つてやつた。女囚と自分の境遇とに、何處か似通つた點があるらしく思はれて、同情を禁じる事が出來なかつた。

ある日、綾子が學校から遲く歸つて居間に這入り掛けると、襖のかげから母親の姿が目に留つた。母親は机の抽斗をあけて、中を探したり、手文庫をあけて友達の寫眞を調べたり、隅から隅まで猜疑の眼を見張りながら、屋搜しをしてゐた。

「阿母さん。何をして居らしやるの。人の物を見散らかして……」と綾子が呶鳴つたとき、母親は如何ほど驚いた事だらう。惡戯を見つけられた子供のやうに、もぢ〳〵しながら、靑醒めた顔をして暫しは見向もしなかつた。併し口調を改めて斯ういつた。

「何か間違があると往けないからさ。」

「それぢや間違を待つてゐらしやるの……」

「別にさうぢやあないが、念には念を押す方が好いからね。」

「それぢや間違が起ると決めてゐらやんでせう……」

綾子は頬を膨らしてゐた。冷たい沈默が親子の胸を流れてゐた。母親は居ずまゐを正して嚴格な口調

で尋ねた。

「今日は何うして斯う遲いんです。」

「お當番ぢやありませんか。阿母さんも隨分疑ひ深いわねえ。」

綾子は、おろりと母親の顏を見ると、母親は俄かに俯向いて恥しげに指先を組んでゐた。綾子は漸つと考へだした。父親の歸りが遲いと、方々へ電話を掛け散らして、新橋や柳橋の待合にも空々しい變名で尋ねてゐた。そして今だに燒餅喧嘩をしないでもなかつた。實際、母親が父親よりも三つ年上な事は少女の心にも不自然な感じを與へた。かういふ婦人を妻とした父親の不幸と、また母親としてしまつた自分の薄運を嘆かずには居られなかつた。その夜、寢る時にも綾子は口を利かなかつた。

寢床のなかで、綾子は兩親を比較してみた。飽くまで自由で活濶な父親が大好きであつた。父親には海洋のやうな度量があつた。併し母親には針の穴ほどの度量もなかつた。そして臺所の女王であつたせゐか、女中が居つかなかつた。綾子が母親のそばを離れて父親の膝許に往くと、暗闇から明るみへ出たやうな心持がして、母親の疑深い、淺猿しい行爲や、端たない叱り方が吐氣を催すほど堪らなかつた。そして一種の輕蔑を感じない譯には往かなかつた。

綾子は何時も母親から逃れやうとした。執拗な母親は綾子を捉らへやうとした。そして母親が追ひ驅れば追ひ驅るほど綾子は逃げだして、父親の膝にかくれた。實際、父親の膝許が、唯一の隱れ場であつた。溫い避難所らしかつた。そして母親は一種の孤獨と嫉妬を感じて、父親の膝に靠れた綾子を遠くから怨めしげに眺めてゐた。そして綾子が父親に甘へたり、ふざけて居ると母親は御機嫌が惡かつた。妙

な阿母さんだと綾子は何時も考へてゐた。殊に綾子の嫌ひな事は、母親の舊弊と迷信とで、暇さへあれば火鉢の抽斗から暦を取りだして、九星や日柄を調べたり、遠足の出掛け、試驗の朝などには、火燧石を打つて、切火を掛けてゐた。

「もう止して頂戴、舊弊なことは大嫌ひだわ。そんな物を打れると、頭に響いて腦が惡るくなつてよ。」

「そんな勿體ない事をいふと罰が當りますよ。」

綾子に言はれると母親は押し切つて切火も掛けられず、火燧石を手にしたまゝ、頰を膨らしてゐた。その間に綾子は靴の紐を結んで、俥に乘つてしまつた。母親の膝許から凱旋するやうな氣がして胸が透いた。併し活潤な父親までが母親の迷信に化せられて、毎朝、銀行の出掛けに、切火を掛けて貰らつた。それが綾子には不滿であつた、それも畢竟、體の好い敬遠主義だと綾子は飽くまで父親を偉く考へてゐた。

ある日、父親は何時もより遲く歸つてきた。そして平生なら茶の間へ這入つて洋服を着換へながら、冗談を言ひ散らして、皆んなを笑はせる筈のに、その日に限つては、大い鞄を下げたまゝ、二階の西洋梯子を、づか〳〵上つていつた。梯子を上る靴音が唯ならぬ不安を傳へた。綾子は其の靴音を聞きつけると、我知らず飛びだして、梯子の上り口近くると、父親は常になく怖しい顏付をして、「誰れも來ちやならんぞ。」と呶鳴つた。そして何時も活潤な赤ら顏が、ぞつとするほど青ざめて、額には沈痛な懊惱が鮮やかに刻まれてゐた。四邊(あたり)は森閑とした夕暮の沈默であつた、梯子の中程に開いた硝子窓から、夕燒の空が見えて、薄暗闇が肌寒い氣味の惡るさを傳へてゐた。書齋の重い扉が、がたんと

締まつて、ぴしんと鍵の下りた音まで聞えた。

「阿父さまは何うしたんだらう……」と母親は梯子段を仰ぎながら泣聲をだして、綾子の考へを訊かうとした。綾子は返辭を與へなかつた。先刻の鍵音が綾子の小さい胸に殘つてゐた。二人は默つて二階を見上げてゐた。何か待つてる風らしかつた。暗闇から物を見ようとしてゐた。音の無い處から音を聽かうとしてゐた。梯子の中程に革手套の片手が落ちてゐた。破綻が起つたに違ひがない。秘密の大事が突發したのだらう。他人に聞せる事の出來ない大事件が、あれほど思慮と沈着に富んだ父親を是程までに狼狽させてしまつた。父親は書齋を締め切つて何をしてゐるのか。綾子は凝つと二階を見上げて呼吸さへ忘れたやうに、息を凝らしてゐた。そして不吉な想像が苛々した心を刺戟してゐた。

夕燒の空は何時か暗くなつて、寒い風が窓から吹いてきた。暗闇は刻々に募つて、宵月が遠い〱空の果てから、小さい窓を目掛けて、薄氣味惡い微笑を漏らしてゐた。梯子段の暗がりから秘密の香ひがしてきた。凶兆か、死の豫感に違ひない、氷のやうな戰慄が脊骨を流れて、綾子はぞつと身振ひをした。そして胸許に何物か乘り掛つたらしく、息苦しくなつてきた。そばに立つてゐた母親は、「あゝ」と堅い溜息を漏らしながらも、二階を見上げてゐた。綾子は、もう凝つとしては居られなかつた。異樣な反抗し難い力が湧きだして、二階に駈け上がらうとした瞬間に、ガタ〱と高い靴音が響きだした。是れだ。この靴音であつた。先刻から此の靴音を待つてゐた。父親は無事であつた。綾子は、ほつと胸を撫で下ろすと、恰も餓ゑた唇が貪るやうに、耳を聳て、此の靴音を聽き澄ましてゐた。そして母親と綾子は我れ知らず顏を見合はして、につこり笑つてしまつた。二人に取つては、これこそ最初で最後の純潔な微

笑であつたらう……。

二

その夜の終列車で父親は出發してしまつた。用件も行先も告げずに、着のみ着の儘の洋服で、大い鞄を下げながら車に乘つた。併し靴の紐を結びながら、

「直ぐに歸つてくるから大人しく待つてお居で……何か御土産を買つて來よう。」と父親は綾子だけに言殘した。

母親は何んとも言はれないでも、思ふ儘に切火を打つたので、充分滿足してるらしかつた。

父親が出掛けてしまふと、家中が秘そりしてゐた。夜の沈默が主人の出掛けた家を傲然と占領してゐるかと思はれた。そして礎の落ち去つたやうな悲哀と不安とが、薄暗い部屋を立ちこめて、掛時計が夜陰に響いてゐた。

母親は途方に暮れてゐた。財界に活動してゐる良人の常としては、斯ういふ事柄も無いではなかつたが、是れ程までに神秘で偶然な事はなかつた。恰も神隱しに出逢つた不幸者の行方を的もなく捜すやうな氣がして、心元無いやら心配やら、思へば思ふほど心細かつた。母親は諸方へ電話を掛けだした。併しいつもの燒餅沙汰とは違つて、嚴粛な心痛が母親の額に刻まれてゐた。

「まあ、好かつた。阿父さまは名古屋へ入らしつたんだつて……支店が取り付けに逢つて、今、大騷ぎだとさ。是れで私も安心したよ。」

母親の報告は綾子の胸を鎭めた。併し二三日立つても父親から何の音信もなかつた。筆まめの父親が、

葉書さへ送つて呉れない事は、非常に重大な事件が寸暇さへ父親に呉れない事を示してゐた。綾子に取つても父親の居ない事は淋しかつた。學校へ通つても勉強し榮えがなくつて、何をしても手に着かなかつた。父親の夢を見て嬉しかつた事もあつた。殊に母親は日増しに心元ない顏をして、柱に靠れながら、内懷に片手を差し入れたまゝ、凝つと考へ込んでゐた。そして何うしたのか、俄かに電話室に駈け込んで、先づ新橋の待合を呼びだすと、空々しい變名で、鎌を掛けたり、白らを切つたりして、何か手掛りを求めようとしたが、骨折り甲斐もなかつた。けれども母親は嬉しいやうな、自烈つたやうな顏付きをして、待合から待合へと、それ〳〵心當りを探してゐた。母親の聲は何時になく艶を帶びてゐた。ほんとに嘘が巧かつた。萬事が輕妙を極めてゐた。二十餘年の堅氣生活が今は見る影もない野暮にしてしまつたが、いざとなると昔の凄い腕が甦つてきた。一週間ほど立つて名古屋から葉書が着いた。金の鯱鉾の城樓を寫した繪葉書は、簡單に父親の明日歸ることを告げて、宛名も綾子であつた。母親は葉書の表を凝つと見てゐた。そして俄かに顏色が曇つて眉がつれ上つた。

翌日の夕方、父親は歸つてきた。一週間ぶりで見たせゐか、面やつれが目に就いて、目も窪み、頰も心もちこけたかと思はれた。そして約束を忘れた事のない父親が、綾子に御土產を持つて來なかつた。それは父親の心痛と多忙とを裏書してゐた。

久しぶりで賑やかな食堂が開かれた。窓掛を絞ると、朧夜の滿月が霞んで、溫い春風が柔らかに頰を撫ぜた。阿蘭陀渡りの掛皿も、聖餐の圖を寫した油繪も、煖爐の上の置物まで、久方振りで御主人を迎へて恭悅らしい顏付をしてゐたが、殊に掛時計が、絕えず祝辭を述べてゐた。親子は圓い食卓を圍んだ。

父親は無斷で旅行した事を謝した後で、東海道の夜景、夜汽車の退窟、殊に新婚旅行の、いちや付きを見せつけられた災難まで元氣よく述べて、微醉機嫌の口許を拭ひながら、斯ういつた。

「女の髮の毛は仲々、意氣なもので、着物の胸などに長い奴がついてるのを見つかると、大いに調戯はれて、嬉しかつたもんだ。けれども時と場合に依ると、ぞつとする事があるよ。この間、泊つた宿屋で顔を洗ふとして金盥を見ると驚いたね。長い奴が、べつたりと、くついてるんだ。脂切つて、まるで蛇が這つてるやうなのさ。俺は、ぞつとした。さうして何うしても其の金盥ぢや顔が洗へなかつたよ。汚いんぢやないんだ。氣味が惡いのだ。高が髮の毛一筋で、胸を惡くしたかと思ふと、俺も老込んだものさ……」

父親の話としては纖細過ぎてゐた。まつたく野蠻と無鐵砲で成功してきた父親には似はしくなかつた。高が一筋の髮の毛で、胸を惡くしたほど弱々しい父親ではなかつたのに……何か精神上に急劇な變化が起つてゐたのに違ない。併し今夜は、顔色も顔付も昔の儘の父親で、活潤と元氣とが肥つた身體から溢れてゐた。そして笑ひ聲にも力が籠つてゐた。洋杯を持つた指先にも、眞赤な血液が爪際から透いてゐた。彼は絶えず葉卷を燻らしながら、洋杯を重ねてゐた。

「葡萄酒があるだらう。あれを持つておいで……あれなら御前方にも飲めるよ。」と父親は言つた。そして大い洋杯に手づから波々と注いで一口飲むと、

「これを飲んで御覽、甘くつて、旨しいよ。」と洋杯を綾子の前に置いた。

「旨しいだらう……」

「甘いわねえ。」と綾子は氣味惡るげに、二口ほど飲んで、洋杯を父親に返さうとした。すると先刻から羨しげに親子仲の好いのを見守つてゐた母親は思ひ立つたやうに、

「私にも下さいなねえ。」と嫌味らしい口調で言つて、洋杯を手にすると、まるで渇いた人のやうに、一口ぐつと飲み込んだ。そして最後の一滴まで飲み乾して「あゝ旨しかつた。」と空洋杯を良人の前に置いた手付には、燒餅やきの不貞腐れた態度を否む譯には往かなかつた。綾子は我知らず父親の顏を見た。すると何事だらう。今までの活潑な顏が俄かに曇つて、日外、二階の梯子を、づか／＼上つた時の横顏と寸分の相違もないほど沈痛の色を帶びてゐた。綾子は、ぞつとした。そして、もう一遍見直すと、此んどは相變らず活潑な顏付であつた。綾子には合點が往かなかつた。電燈の具合か、それとも目の迷ひか、或は父親は苦悶をかくして活潑を裝つてゐるのか、綾子は假面を捩ぎ取つて眞相を見たかつた。そして常になく父親のウイスキーを呷ることが不思議に思はれた。

　話は仲々盡きなかつた。三十餘年前、父親が小さい行李を脊擔ひながら、五圓ほどの金額を虎の子のやうに胴卷にくるんで、遙る／＼と東京へ出てきた昔話、それから財界に是迄の地位を得てきた苦心談——聞き古るした話であつたが、特に父親の元氣なせゐか、新しい興を添へて、しんみりした感興に魅せられてゐた。併し此等の話は殊さら母親の低い鼻を高くして、母親は初めて得意の場所に出てたらしい恭悅顏をしてゐた。すると父親は西洋の事情なぞを話したりして、婦人問題の由來を細かに說明した末、口調を改めて、

「是から女子は誰れでも職業を覺えておかなきや往かん。それでないと男子の壓迫を蒙つて、在來の婦

人のやうに見ぢめな境遇に居なくちやならない。だから御前も職業を覺えるやうに心掛けておき……是りや私が呉れ〲も、そいつて置くよ、」と父親は諭すやうな口調で言つた。

それから食卓を離れたのは九時に近かつた。

「皆んな先きへ寢てお呉れ……些し調べ物があるから遲くまで起きてるよ。」

父親は斯う言つて食堂の扉を締めた。廊下には微かな月の光がさしてゐた。生温い風が吹いて、何處となく春の香ひを吹き送つてきた。

「朧月夜だなあ……」と父親は窓際に佇みながら空を見詰めてゐた。黒い雲が、とつ〲と駈けて、その切れ間から、をり〲十五夜の月が顔を見せて、鉛のやうな光を洩らしてゐた。父親はまだ窓際を離れなかつた。言はゞ最後の一瞥を惜しむやうに凝つと見詰めてゐた。月あかりのせゐか、横顔が妙に青ざめてゐた。

程なく父親は西洋梯子を上つて書齋へ這入つた。綾子は上り口に佇んで暗い天井を仰いでゐた。一週間以前の出來事が、あり〲と胸に甦つてきた。母親と一緒に佇んで途方に暮れてゐたのも此處であつた。靴音を待つてゐたのも此處であつた。梯子段の窻から温い風が吹き込んで、書齋の窻から電燈の片あかりが二階の上り口を鮮やかに照らしてゐた。鞄の開く音がした。そして算盤の音も聞えだした。綾子は、ほつと胸を撫ぜ下ろした。

何時か十一時が打つてしまつた。綾子は何うしても寢付かれなかつた。妙に目が冴え、胸騷ぎがして、先刻、食卓で、父親の顔が俄かに沈痛の色を帶びたこと、綾子にまで葡萄酒を飲ましたこと、訓誡めい

た言葉、長らく窗際に佇んで、朧月を見入つた事などが、父親の深い覺悟を物語るやうで、凶變の暗示を受けるやうな心持がしてゐた。

「そんな事はありやしない。」と幾度も綾子の頭は否定してゐた。いくら頭が否定しても、心が満足して與れなかつた。隣部屋では母親の大きな鼾が聞えてゐた。綾子は母親のやうに單純な心が持ちたかつた。すると二階から咳拂が聞えだした。綾子は安心してゐた。併し何うしても氣掛りであつた。

すると、ばら〳〵春雨が降りだした。俄か雨だ。ざつと雨脚が繁くなつてきた。綾子はぞつと身振をして、思はず寢卷の襟を掻き合はした。雨の音は、乾き切つた綾子の心に、いかほど潤澤と平和とを與へた事だらう。そして彼女の心を睡眠に誘つていつた。

…………………………

ふと目がさめた。怖しい音だ。怖しい音が耳を裂いた。

…………………………

綾子は起き上つた。そして隣部屋の襖をあけると、

「阿母さん〳〵、大變〳〵、」と手荒く母親の搔卷を揺すぶつて、直ぐさま二階へ駈け上つた。

父親は窗際に倒れてゐた。綾子は父親の身體を抱き起して、「阿父さま〳〵」と耳許に口を寄せると、肯くやうに眉が動いて、手足の痙攣が傳はつた。母親が、のそ〳〵上がつてきた。

「お醫者へ電話を掛けて下さい。直ぐ來るやうに……」と綾子に呶鳴られて、母親は間誤〳〵しながら階下へ降りていつた。

多くの帳簿が燒き棄てゝあつた。卓上の灰落からは吸掛けの葉卷が遠い埃及の香ひを傳へてゐた。そばに落ちた短銃が目に這入らなかつたほど、綾子は不安に驅られながら、希望に滿ちてゐた。父親の痙攣が遠のいてきた。通り雨がすつかり上つて、晴れ渡つた空から、滿月が冴え〳〵と二人の脊中を照らしてゐた。四邊は森として、冷たい寂寞が領してゐた。夜寒の春風が、逆上返つた綾子の頭を冷やさうとしてゐた。をり〳〵痙攣が傳はつた。

階下では女中の起る音がして、やつと電話が掛りだした。綾子は如何ほど自烈つたかつたらう。

綾子は父親を抱へて醫師の家へ驅け付けたかつた。「阿父さま、確りつなさいまし。」耳許に叫びながら父親を抱々締めてゐた。

もう眞夜中だ。四邊は死のやうな沈默であつた。

すると何處とも知れず、犬の遠吠が聞えだして、巷から巷へと消えて往つた。強い痙攣が終ると、生温い液體が綾子の手を流れた。血だ。生血だ。彼女は、はつと思つた。ふと短銃が目に留つた。自殺だ。自殺なのだ。前額から後頭に貫いた一發の銃丸が、父親の生命を永遠に攫つて往つた。綾子の抱いてゐたのは父親ではなかつた。父親の死骸であつた。さうと知らずに抱いてゐた。

綾子は俄かに死骸の重量を感じた。すると異樣な冷氣が慄然と身にして、戰慄が脊骨を走つた。父親の顏は眞青になつてゐた。死骸は月の光に濡れてゐた。

「阿父さま、阿父さま、」と綾子が絕望の聲を上げた時、初めて淚が湧いてきた。死骸は氷のやうに冷えて四肢が硬張つてきた。併し綾子は死骸を手放すことが出來なかつた。凝つと抱き締めて、鉛のやうな

冷氣を感じながら、凄惨な死顏を見守つてゐた……

三

父親は他人の犧牲となつて、自殺を遂げたのであつた。あの夜、食卓を圍んで父親が綾子迄に葡萄酒を飮ましたのは其れとなく最後の別れを惜しむ爲めであつた。總てが豫定の行動に違ひなかつた。そして綾子は其の凶兆を感じながら、この凶變を未前に防ぐ事の出來なかつたのを如何ほど後悔してゐたらう。要するに父親は立派な死を遂げた。「死」が總ての責任を解除する極東では、誠に男らしい、義俠的な自殺に違はなかつた。綾子は父親に對して益々尊崇の念に驅られてゐた。隨つて母親は益々愚劣に見えだして、馬鹿にするだけの甲斐がないとも思はれた。そして今は寡婦になつた老婆を相手にするのも可哀さうだと考へて、綾子は何に就いても默つてゐた。それほど氣が折れたのを母親が至極、滿足して、やつと娘が我手に歸つてきた歡びを裹む譯に往かなかつた。まつたく綾子の性格は一變したらしかつた。勝氣で活潑な氣性が消えさると、沈欝な、涙つぽい性質が新に生れてきた。それは父親を失つた哀傷といふよりは戀人を失つた悲哀といふ方が適切であつたか知れない。とにかく父親の自殺が純白な少女の心に、最初の陰影を與へたのであつた。

父親が歿くなつたので、長らく獨逸に留學してゐた長兄は、疾くに歸朝する筈であつたが、死んだ後では歸り甲斐がないし、折角、緒に就いた細菌學の研究は、一時も捨てゝ置けないと言ふので、歸つては來なかつた。それで麴町の洋館を引拂つて、彌生町に小さい家を構へた。そこで長い〳〵夏をば送らうとしてゐた。

九月から綾子は御茶の水の學校へ這入つた。毎朝、出入の車に迫られて、校門を潜つていつた。そして殘暑が過ぎると、いつか凉風が身にしみて、秋も段々、深くなつてきた。

初めて綾子が當番の日であつた。硝子窓に靠れながら、青々と澄み渡つた空を仰いで、ちやうど故郷の空を懷しむ工女のやうな顔付をしながら、唯だ茫んやりと眺めてゐた。何うして見詰めてゐるか、自分にも解らなかつたが、唯だ斯うしてゐれば、魂が遠い國へ、一歩づゝ攫はれて往く心持がして、それが快かつた。すると音樂室からヴアイオリンの音が聞えだした。啜り泣くやうな、咽び泣くやうな絃(いと)の音は綾子の心に浸み透つて、心が暗闇に落ちてゆくやうに、自然と涙ぐんできた。彼女は恍惚(うつとり)、聞き取れてゐた。

「綾子さん、貴方も御當番なの……」

斯う言ひ掛けられて横を向くと、隣室の窓から、かねて御茶つぴいと聞いてゐた生徒の顔が笑つてゐた。

「何を見てゐらしやるの……」

「別に何れも見てゐませんよ。」

「だつて可笑しいわ……」

「なぜ……」

「なぜつて……知らばつ晃れるから隨分よ。御存知のくせに……」

隣室の生徒は意味ありげな笑聲をして、嘲るやうに見詰めてゐた。綾子には薩張合點が往かなかつた。

「ほんとに御存知ないの。まあ、呆されたわね。それぢや敎せて上げてよ。御覧遊ばせ。テニスをやつてる方が有るでせう。そら一番綺麗な方よ。」

隣室の生徒は運動場を指さした。木深い片隅にはテニス、コートが設けられて、十人程の生徒が、さやつ／＼と笑ひながら、ラケットを手にして、球を受けたり、飛ばしたりして、仇氣なく遊んでゐた。や〻傾いた秋の日が樹(こ)の間を漏れて、鼈甲のやうな、ばら斑を、コートに染めてゐた。綾子の視線が此の生徒の指さした方向を辿つて行くと、今しもバックを打たうと身構へた生徒の上に落ちた。テニスは一ばん巧かつた。様子といひ、顔付といひ、當世風の美人で、殊にラケットを手にした男優りの遊びぶりが、永く綾子の視線を捉へてゐた。

「綺麗な方でせう。松野藤枝さんと仰有るの‥‥あれが學校の花(フラワー)なのよ。大へん貴方がお好きだわ。この間も紹介して呉れと仰有つてゝよ。」

隣窓(となりまど)の生徒は、自分の言葉が如何なる反應を與へたか吟味するやうに、綾子の顔を見詰めてゐた。その顔には薄紅(うすべに)がさしてゐた。

やがて當番は濟んだ。綾子は車の上で路々、考へてゐた。同級生の言葉は嘘ではないらしかつた。克く傘置場などで藤枝の姿を見かけた事もあつたし、何が媚びるやうに笑ひ掛けた顔付も、今から考へれば其れと肯けた。そして藤枝は綾子を好んでゐた。心の礎が見付かつたやうに思はれて、暗い魂に明るみが射してきた。藤枝は美人であつた。そしてラケットを手にした、きび／＼しい姿が、綾子の眼に刻まれてゐた。あゝ言はれた許りで綾子も藤枝が好きになつてきた。‥‥

藤枝は全く御茶の水ノ花（フラワー）であつた。色白の瓜實顏、涼しい眼付、締つた唇、——總て聰明の表徵らしかつた。そして海老茶の袴を低く結んで、校門の木立を通る時には、女王樣の御通りを迎へるやうに、樹間（このま）がくれに小鳥が歌つてゐたほど、純潔な高貴と、滴るやうな新鮮とが藤枝の姿に溢れてゐた。そして何（ど）の學課も總て滿點で、學校初まつて以來の才媛と言ひ離れてゐたが、殊に一般の女子に不得意な語學と數學とに長じてゐたことは、流石に博士の令孃であつた。藤枝は女だてらに教師と議論をして、何時も言ひ負してゐた。それが藤枝の得意で、快樂であつた。殊に教生などは頭から手酷しい質問を浴びせられて、即座に應答が出來ず、教壇の上で、もぢ／＼してゐた。綾子は火のやうな教生の顏を見てゐた。そして心では冷やかに笑つてゐた。とにかく藤枝は強い者を挫きたかつた。異樣な征服欲が若い心に漲つて、ラケットを手にした女だてらの競技ぶりも、性格の反映に過ぎなかつた。そして教室でも、運動場でも、藤野は女王であつた。彼女は後悔するほど長く此世に棲んでゐなかつた。幸福と歡喜とは競うて彼女の意を迎へてゐたが、若し悲しい事は何んだと訊ねたら、男に生れなかつた事だと藤枝は即座に答へる事だらう。

ほんとに藤枝は男子より寬濶な、高潔な性格を備へてゐた。そして不思議な事には藤枝の陰口をきく女生徒も、外形ばかりは藤枝の眞似をして、袴の穿き方、靴の運び方、風呂敷包みの持ち方まで、みな藤枝を手本として、中には藤枝の買ひつけた呉服屋や靴屋から、買ひ調へる者さへ無いではなかつた。そのうへ藤枝には二三の部下があつた。そして神妙に冊いてゐた。

「藤枝つて好い名だこと……御綺麗だし學問は御出來になるし、まつたく才媛だわ。私、好きよ。」

綾子は斯ういつて、下讀の濟んだ教科書を包みだした。初秋の夜更けであつた。電燈が悄んぼり點いてゐた。綾子は何氣なく四邊を見廻はすと、襖や壁に自分の影法師が寫つてゐた。父親は自殺してしまつた。長兄は遠い伯林で醫學を學んでゐた。母親は隣部屋で鼾をかいてゐた。誰れもゐない。影法師より他には誰れも居なかつた。すると孤獨の情が嵐の樣に、空しい心に吹いてきた。綾子は自分の淋しい心を覗いてみた。すると父親の空席には、何時か藤枝が腰を掛けてゐた。心の底が暖くなつてきた。そして藤枝に愛されてゐる誇は綾子が一生中に贏ち得る幸福の全部かと思はれた。そのうへ亡き父親の性格を、藤枝の性格中に新しく見出した心持がしてゐた。隨つて父親に捧げてゐた尊敬と、懐しさとを、今は藤枝の上に移してきた。藤枝を愛する感情は、亡き父親を慕ふ心と同じ純潔な樂しみであつた。

新しい父親を見出した歡びが湧いてきた。すると久しく隱れてゐた母親に對する不滿が一緒に甦つて、斯ういふ母親を持つことの恥辱と不幸とを感じない譯には往かなかつた。藤枝と母親——玉と瓦を較べる馬鹿らしさが、思はず綾子を笑はしてしまつた。併し母親は貞女に違ひなかつた。相變らず不動樣には凝つてゐた。良人の冥福を祈つて、命日には屹度、墓參をしてゐた。そのうへ近頃は隣の奥さんに勸められて、陶宮を信じだし、暦を繙いて日柄を考へたり、御伺ひを立てゝ有難がつたり、古袷の襟から錆び付いた絹針の出た事にも、朝から掛時計の留つた事にも、勝手な理窟を付けて無暗に嬉しがつてゐた。そして何時も貞女らしい顔付をしてゐた。併し、あの年では貞女となるより他はなかつた。その傍、綾子を鵜の目鷹の目で監視してゐた。けれども母親の監視は單純に娘の身を愛する監督ではなかつた。何處かに嫉妬の色を帶びてゐた。併し近所の人達は母親を貞女だの賢女だのと言つてゐた。母親も

一ばし其の積りでゐた。して見ると、世間の貞婦賢母は誠に詰らないものだと綾子は考へてゐた。いろ〳〵な事を考へると、目が冴え返つて、睡に就く事が出來なかつた。目は、しよぼ〳〵して居たし、頭は、ずき〳〵痛んでゐたが、心のなかの冷めたい鏡が冴え渡つてゐた。綾子は目を瞑つて考へまいとした。そして唄ろかな睡眠を待つてゐた。

流石に秋の夜更けであつた。四邊の森とした中から、何處とも知れず蟋蟀が鳴いてゐた。啜り泣くやうな、細い音が、綾子の弱い心を搖りだした。綾子は魂の奥で蟋蟀が鳴いてゐるかと思つた。魂が泣いてゐるのだ。綾子は悲しかつた。淋しかつた。そして肌寒むかつた。

すると異様な音響が聞えだした。何處から聞えるか解らない。遠い〳〵暗闇から聞えてきた。蟋蟀のやうな細い聲だ。併し人間の苦悶が充ちてゐた。すがれた魂の囁き、亡靈の泣き言かと思はれた。何をしても、何を試みても、死を免れる事の出來ない人間の聲であつた。その聲は潮の寄せるやうに近づいて、綾子の耳許で止まつた。怖しい聲だ。牢屋の重い扉を叩く音だ。いや、あの靴音だ。日外、待つてゐた父親の靴音だ。その途端に父親の笑顔が現はれて、頻りに唇を動かしてゐたが何うしても言葉が聞き取れない。綾子は父親の袂を押へやうとして追駈けた。併し追駈かれば追駈ける程、父親は逃げだして、とう〳〵綾子は疲れて地面に泣き俯した。

すると綾子を抱き上げるやうに白い手が目先にちら付いた。藤枝であつた。藤枝の溫い手であつた。綾子は其の手を握らうとすると、藤枝は後退さりをしだした。藤枝も其んなに冷淡なのか。綾子は見違へたのが口惜しかつた。

「藤枝さん。藤枝さん……」と呼びながら追駈けると、藤枝は、くるりと後を向いて駈けだした。綾子は益々口惜しがつて、一目散に追ひ駈けると、藤枝は息せき切つてゝ逃げてゐたが、綾子の手が片袖を捉へようとした途端に、暗闇が月を掠めた。

ふと目が醒めた。今のは夢であつた。びつしより寢汗を搔いて今だに息がはずんでゐた。そして硝子窓に白らんだ黎明の光が寢足りない目に泌みた。綾子はいくら夢だと考へても、藤枝の冷淡な逃げだし方が、忘れられないほど腹立しかつた。

四

ある日、母親は隣りの奥さんに誘はれて歌舞伎へ出掛けた。綾子は學校を休んで往きたくもなかつたが切符の遣場がないとかで、無理やりに連れて來られた。母親は久し振りで芝居を見ると言つて大そう嬉しがつてゐた。

ちやうど中幕の幕合であつた。手洗鉢で手を洗つてゐると、「あら」と言つて肩を叩いた人があるので、振り返つて見ると藤枝であつた。

「まあ、嬉しいわ。何處へきて居らしやるの……」

「彼處よ……」と綾子は高土間を指さした。

「あらさう……私と向ひ合ひだわ、どうして氣が付かなかつたのでせう。」と藤枝は活潑に言つた。二人が言葉を交はしたのは今日が始めてであつた。綾子は嬉しいやうな、恥しいやうな、心元ない氣持がして、丁度、猫に可愛がられる鼠のやうに、薄氣味惡く、もぢ〳〵してゐた。

併し藤枝の方は一向平氣で、新しい妹でも見付かつたやうに、馴々しく話し掛けて、誰れと一緒に來てゐるか訊ねたり、どの役者が贔負か聞いたりして、言はゞ揶揄るやうに、調戯(からか)つてゐた。

二人は階子を上りだした。

「學校で此んな處を見られたら大變だわ。學校の方はゐらしやらなくつて、……貴方は御逢ひになつたの……」

「いゝえ……何方にも逢ひません。」

斯ういつて綾子は胸を撫ぜ下ろした。二人はヴエランダの欄干に凭れてゐた。築地の空は夕燒がして宵月が、ほんのりと化粧眉を見せてゐた。もう軒燈に燈火(あかり)が這入つて、美しさうに積樽や繪看板を見上げて行く横顔に、强いアーク燈の光が輝く。電車は鈴生(すゞなり)の御客を載せて齒音を軋ませながら擦れ違ふと、青い火花を散らした。二人のそばには藝者や御酌が何やら役者の名を言ひ立てゝ打ち騒ぐのを、年増藝者が冷やかに見やりながら、卷煙草を咬へてゐた。そして俄かに視線を藤枝の上に落した。綾子も藤枝の服裝(なり)には驚いてゐた。何んといふ變り方だらう。學校では山の手の御孃さんらしい藤枝は、どう見ても下町の娘であつた。そして髮さへ瑞々しい桃割に結んで、帶の模樣と言ひ、衣紋の拔き方と言ひ、見違へるやうに灰汁(あく)が拔けて、何處となくか御酌めいてゐた。これが海老茶の袴を穿いて束髮を振り亂しながらラケットを手にする藤枝とは似ても似付かなかつた。

「貴方に御逢ひするなんて思ひ掛けなかつたわ。ほんとに不思議ね、でも私、嬉しいわ。」と藤枝は繰り返してゐたが、俄かに思ひ出したやうに、斯ういつた。

「此れから御手紙頂戴な……私も差し上げるから……好くつて……」

藤枝は綾子の口許を凝つと眺めて返辭を待つてゐた。

「好いわ、」と綾子は俯向いて頬を赤くしてゐた。

ちやうど其時、木が這入つた。今まで戯ざけてゐた藝者も御酌も、また鏡を出して鬢を掻き上げてゐた貴婦人も、二番目狂言の初まりに胸を躍らせながら、棧敷へ這入つて往つた。

「さあ、初まるわ、貴方の處へ送つて上げませう。」

「好くつてよ。」

「私なんぞに送つて貰らひたくないの……」

「さうぢやないのよ。」

綾子は藤枝に送られて袖と袂の間を縫ひながら梯子段を下り掛けた。正面の姿見には親しげな二人の姿が映つてゐた。

「この次にも御迎へにくるわ。」と藤枝は言ひ棄てゝ小走りに歩きだした。やがて脚燈が附くと賑やかな下座が始まつて、純帳が上がれば、土間は水を打つたやうに森とした。

綾子は棧敷を見詰めてゐた、後の戸が靜かにあいた。そして藤枝の姿が鮮やかに見えて母親らしい人のそばに座はつた。もう綾子は身を入れて舞臺を眺める事が出來なかつた。ちよい〳〵棧敷を見ると、藤枝は望遠鏡を手にして、此方を見詰めてゐた。

次の幕合にも藤枝の方から迎へにきて自分の棧敷へ連れていつた。そして不思議な事には、學校では

女王様を綽名を取つた藤枝が、綾子のためには、頻りに媚を呈して、巧に歡心を買はうと努めてゐた。藤枝の母親にも紹介された。それは博士夫人とは思へない程、下町風の貴婦人であつた。綾子は斯うい ふ母親を持ちたかつた。そして斯ういふ母親を持つた藤枝が羨しかつた。けれども此度は綾子の母親を紹介する番であつた。綾子は母親を何處かへ仕舞つて置き度かつたが、綾子が探しにきた母親は、其れと悟ると自分の方から麗々しく名乘つて出た。綾子は穴へ這入りたかつた。

最後の幕合であつた。二人は復た二階のヴェランダに出てゐた。夜更けの風が肌寒せゐか、誰れも傍には居なかつた。二人は人の居ない處が好きであつた。綾子は何時までも藤枝のそばに居たかつた。そして思ふ事をば悉く打ち明けたかつたが、恥しいせゐか、それとも遠慮のせゐか、異樣な感情が折角、喉まで出てきた言葉を提へると、何時か口許が硬張つて自由に話が出來なかつた。そして此の大切の幕一つで、今日の歡樂が盡きてしまふ悲しさと殘惜しさが限なく漂つて、帽子やコートを運ぶ出方の顏さへ妙に淋しかつた。向ふの瓦家根から鞠のやうな月が上らうとしてゐた。

「好い月だわね。」

斯う言ひながら藤枝は同意を求めるやうに、綾子の顏を覗き込んだけれども綾子は默然(むつつり)してゐた。

「どうして貴方は、そんなにセンチメンタルなの……」

「センチメンタルつて何に……」

「あら御存知ないの。可愛いゝわねえ。さあ何んと譯したら好いでせう。貴方みたいに、涙ぽくつて、くよくよしてる事よ。でも私は其處が好きだわ。」

藤枝は輕く綾子の肩を叩いた。そして若衆を愛するやうな淫婦の笑顔を見せたのであつた。

五

藤枝から毎日、手紙が屆いた。何處で買つてくるのか日毎に、變つた西洋封筒で、桃色や薄靑い紙の表には、何時でも紫インキが御座なりを述べてゐた。まつたく閨秀雜誌の流行文句を並べて、咏嘆と誇張に富んだ感想を披瀝するのに過ぎなかつた。それは藤枝の手紙ではなかつた。彼女の假面であつた。何故なら何の文句からも、何の一行からも眞の綾子を覗ふ事が出來なかつたから。學校では、あれほど壓制な女王も、手紙の上では涙つぽい、それこそセンチメンタルで、ヒステリカルな女性であつた。そして古歌を引いたり、古文を並べて昔ながら厭世觀を並べてから、綾子のやうな優しい妹を見いだした幸福を細々と說いてゐた。時には校門を同時に潜つた事を喜んだり、時には態〻教室の窓から顏を出してゐたのに、綾子が見向きもしないで通り過ぎた冷淡をば、嫌味交りで責めてゐた。そして何に感じたのか一生結婚しないと繰り返してゐた。

綾子も毎日、返事をかいてゐた。そして新しい西洋封筒を見いだすためには、丸善、伊東屋なぞを探し廻つて、時には榛原から玩具のやうな封筒と卷紙を買つてきた事もあつた。そして「妹より姉君へ」なぞと萬葉假名で古風な文句を並べてゐた。なんだか戀の手習らしかつた。

綾子は昔の通り陽氣な娘になつてきた。そして歡んだのは母親であつた。立派な姉さんが見付かつたので、やつと監督の重荷が下りたやうに、二人の仲が好いのを隣近所に吹聽してゐた。そして父親と仲がよくつても妙に嫉んだ母親が、女同士の親交には、聊かも不滿を現はさなかつた。

いつか其年も暮れて樂しい冬休みが寒い顔をしてやつてきた。やがて春休みが來てしまつた。校庭の櫻が滿開のころ、藤枝は卒業の答辭を讀み、舍監の月並な告別の辭に安つぽい涙を流して、證書を手にしたまゝ、天晴れ才媛の譽高く、女王らしい顔付をして、永遠に王國を立ち去つてしまつた。

春の學期が始まつた。新學期は如何ほど新しい歡びを生徒の心に傳へた事だらう。新しい教室、新しい机、新しい教科書、——總てが新しい知識の福音を傳へて、毎日見馴れた先生の顔さへ、何處か新しい味を宿して、言はゞ古い着物を脫ぎ棄てゝ新しい片袖に手を通した歡びが、移氣な少女の心を醉はしてゐた。唯だ藤枝の居ない事が綾子には物足りなかつた。

同級生は折に觸れて調戯つた。

「綾子さん。御愁傷さま。お察し申してよ。」

併し藤枝と綾子は日曜毎に遊びに行つたり、遊びに來たりして「お姉さま」だの「綾さん」だの、新派の臺辭めいた言葉を呼び交はして、仲好く一月過してゐた。時には琴の合奏をするかと思ふと、仇氣ない「小母さんごつこ」を始めて、人形を玩つたり、姉様を飾り立てゝ、良妻賢母の下稽古をしてゐた。時には湯殿から、きやあ〳〵笑ひ聲が漏れてゐた。

いつか藤棚が色づくと、眞靑な空に雲の峯が湧きだした。藤枝の家では毎年の例で、沼南の旅館に、この夏を送らうとしてゐた。綾子の母親は旅行嫌ひだし、家が無人なので、蟬時雨の朝も、油日照の晝間も、蒸熱い晩も、綾子は藤枝の便りを樂しみにして、この夏を過す積であつた。

土用の暑は一入であつた。人々は海のやうな空を仰ぎながら、薄黑い雲でも見つけると、胸を躍らし

て夕立を待つてゐた。併し毎日〳〵瓦家根が火のやうな息を吐いてゐた。

藤枝の處から、ぷつつり手紙が來なくなつた。そして幾ら手紙をだしても、葉書さへ來なかつた。綾子は妙な疑惑に囚はれた。藤枝が重い病に罹つて、枕さへ擡げられない青ざめた顔が想像された。また濱邊に上つた死骸は、藤枝のやうにも思はれた。とにかく悪い事の起つたやうな氣がして、追つかけ〳〵手紙を出しても、まつたく梨の礫で返事が來なかつた。

「藤枝さんから御手紙が來ないぢやないか。どうかなすつたのかも知れない。御見舞の手紙をだして御覧な……」

母親までが氣を揉んでゐた。

「ほんとに何うなすつたのでせう。いくら御手紙を差し上げても御返事が參りませんの。きつと御病氣なのよ……」

綾子は藤枝へ手紙を出して見た。併し音沙汰も無かつた。綾子には何うしても合點が往かなかつた。手紙の文句が藤枝の機嫌を損ねたのではないかと思つた。それゆゑ初めから出した手紙の文句を繰り返して、考へて見ても、皆な御機嫌を迎へる言葉であつた。いつそ避暑地に出掛けて往かうと思つたが、それも無躾だと考へて、暗闇の落し物を手探りで捜すやうな心細さと、奥歯の物の挾まつたやうを心持で、凉風の立つ頃まで、藤枝の便りを待つてゐた。やつと返辭が來た。それも走り書の葉書で、萬事は後便に譲るとかいてあつた。

三日程立つて長い〳〵手紙が來た。それは戀の自白であつた。避暑地の放縦な生活は、藤枝に戀人を

授けて呉れた。それは此の夏、銀時計を拜受した工學士で、隣室の親しみ、殊に濱邊の散歩が二人の情熱を煽り立てた。そして二人の戀は、もう悉皆、母親が心得てゐて、永らく西洋の教育を受けて萬事意志の自由を尊ぶ父親は譯なく結婚を許すから、此の秋には華燭の典を上げる筈だと言ひ散らした揚句、磯邊傳ひの、そぞろ歩き、月夜の密語など總て戀の情趣を説いて、綾子に情熱を唆ることが此の手紙の役目らしかつた。最後に銀時計を頂戴した光榮が繰り返してあつた。

この手紙を讀み終つた綾子は如何ほど悲しかつたらう。便りを失つたやうに、夕暮の窓に靠れた。腹立しかつた。口惜しかつた。そして欺まされたと考へると、弱い胸に反抗が溢れてきた。軈て絶望に代つた。悲しかつた。淋しいのであつた。

「あゝ、藤枝さんに奪かれてしまつた。」

綾子は斯う叫ぶ毎に、異樣な苦味が脣に湧いてきた。それは後悔の苦味であつた。心の底が冷え渡つてきた。そして綾子は死人のやうに、ばたりと倒れて泣きだした。やがて夕闇が淋しい姿を裹んでしまつた。暗闇から啜泣ばかりが聞えてゐた。

菊の咲き匂ふころ藤枝の結婚式が擧げられた。そして婦人雜誌は逸早く秀才と才媛の寫眞を掲げて、處女の虚榮心を唆つてゐた。總模樣の振袖に角隱しを戴いた花嫁振りは、流石に御茶の水の花であつた面影を傳へてゐたが、フロックコートの身に着かない朗君は、所詮「教育された農夫」の範圍を出でなかつた。綾子は藤枝の物好きが可笑しかつた。

結婚してからも克く手紙が來た。結婚した後悔、良人に對する不滿、母となる恐怖など事細かに並べ

て、娘時代の自由な生活を殘し惜しく思つてゐた。そして何うして結婚する氣になつたか解らないと言つて、結婚に對する不用意を悔いたり、良人の選擇を誤つた事を悲しんで、只管、綾子に老嬢生活を推稱してゐた。ある晩、長い手紙が藤枝の許からついた。夜中に摑み合ひまでした夫婦喧嘩の顚末を敍して、良人の冷酷な事だの、性格が下劣で野蠻な事だの、それに嫉妬深い事まで、一々、實例を擧げて說明してあつた。そして生れてから今まで親にも打たれた事ない頭を續けさまに張り付けられた以上は、遲くも今年中に離婚する決心だと述べて大そう力味んでゐた。それから近ごろ淋しく堪らないから是非、遊びに來て吳れと言つて、都合の好い日に此方から俥を迎ひに上げる積だと書き添へてあつた。そして昔を忘れない心か「悲しき姉より、懷しき妹の君へ」と結んであつた。綾子は此の手紙を讀むと、深い感動に打たれた。そして何にもかも許してやつた。

菊日和の日曜であつた。藤枝の方から俥が迎へに來て綾子を瀟洒した門構の家に運んでいつた。

「克く來て下すつたのね。先刻から待つてよ。さあ此方へ來て頂戴な。」

藤枝は綾子の手を取るばかりにして、庭先の六疊へ連れていつた。締め切つた障子には、秋の日が柔く射して、下町ながら閑靜な、長閑な心持がしてゐた。片隅には新しい簞笥だの、大い姿見などが置かれて新婚生活の樂しさを語り顏に、長火鉢の鐵瓶が、たぎつてゐた。そして長押には新しい鬱金の袋に入れた火熨斗が掛つてゐた。

「御座敷より此處の方が好いでせう。外の方ぢやないから。今日は良人が遊びに往つたの。晩でなきや歸らないから緩くして頂戴な……」

藤枝は斯う言つて蒲團を勸めた。そして針箱の蓋をすると、手早く縫物を片付けだした。

「御仕事をしてゐらしつたの……お忙しくつて……」

「別に忙しかないんだ。私だつて奥さんですもの……ちよいと見て頂戴な。克く似合つて……」

と藤子は投げだすやうに言ひながら、わざ〳〵横を向いて赤い手柄の丸髷振りを示した。

「ほんとに似く似合ふわ。」

綾子は碌に見もしないで斯ういつた。綾子は藤枝の變り方に驚いてゐた。男らしい身體付が俄かに丸味を帶びて、襟筋といひ、肩といひ、乳房までが柔く膨れて、見違へるやうに艶麗を増してゐた。此の間まで袴を着け靴を穿いてラケットを手にした御轉婆振りは、夢のやうに消えてしまつた。まつたく美しい新夫人であつた。可愛らしい奥樣であつた。そして奥樣たる事を歡んでゐるらしかつた。綾子は欺かされたやうな心持がしてきた。手紙で訴へるほど藤枝の境遇は不幸でもなかつた。綾子は三月ぶりで逢つたが、其れほど懐しくもなかつたし、何んだか二人の間に冷たい溝が出來たやうで、話にも實が這入らなかつた。綾子は藤枝の冷酷な事も克く覺えてゐた。藤枝の方でも綾子に酷い事をした事は覺えてゐるらしかつた。併し二人は素知らぬ顔をして樂しげに話してゐた。口と口とは話してゐたが心と心とは横を向いてゐた。そして言葉使ひにも昔ほどの親密は窺はれなかつたし、兩方とも妙に遠慮をして、言はゞ離婚した人が、久振りで膝を突き合はした趣がないでもなかつた。併し藤枝は境遇の不平は悉皆、忘れたやうに何にかに就けて「良人々々」といつてゐた。そして思ひだしたやうに斯ういつた。

「男なんか大嫌ひだわ。肉欲の奴隷で、尊敬なんかされやしない……」

「何うして……」

「何うしてつて……困るわね。貴方が結婚すると解つてよ。」

藤枝はほんのり顏を赤くした。そして姉らしい笑顏を見せた。

久振りで學校の話が始まつた。樂しい逸話もあつた。冷汗の出るやうな失策もあつた。併し幾ら話しても昔ほどの感興もなく、上面では笑つて居ても、心のなかは其れほど可笑しくはなかつた。虛僞と虛僞とが笑つてゐるのに過ぎなかつた。綾子は藤枝のそばに居ても昔のやうな溫味を感じなかつた。隨つて活潤にもなれなかつた。折々、言葉のない沈默が冷かに二人の胸を流れてゐた。

「あら、歸つてきたわ。一寸、失禮……」

藤枝は慌しく立ち上つた。そして立ちながら襖を開けたほど、藤枝の心は良人の歸りに餓えてゐた。

舖石には靴音が聞えてゐた。藤枝は靴音で良人の歸りが解つたほど敏感であつた。

「お歸り遊ばせ。」

藤枝の言葉が襖一重の居間に聞えてきた。女禮式の繪にあるやうに、敷臺に恭しく手を突いて良人を迎へる藤枝の姿が、ありありと目に浮んだ。全く良人に從順な良妻で、女王樣と綽名を取つた昔の面影は無くなつてしまつた。

「御客樣かい。」

「綾子さんよ。お目に掛つて頂戴な。」

良人の返辭は聞えなかつた。二人で秘そ〳〵話してゐた。綾子は自分の名が呼ばれた時には、何んとなく氣が揉めだして、人質に取られたやうな心持もしてきた。何處を見ても敵らしい氣持がした。そばには誰も居なかつた。他人の話聲ばかりが聞えてゐた。そして樂しげに話す人は他人であつた。障子の日影も何時か翳つて、だん〳〵薄暗くなつてきた。此から何うなる事だらう。綾子は怖しいやうな、腹立しいやうな、心細い氣がして、一刻も早く家へ歸りたかつた。隣の部屋では鈕を外す音、洋袴吊の音などがしてゐた。

「あら、お酒を召上つて……」

「飲んだよ。飲んぢや惡いのかい。」

「私、知らないわ。」

新婚の樂しさが香つてきた。軈て襖があいて藤枝の良人が顔を見せた。

「やあ、失敬、緩くりしてゐらつしやい。」

彼は此れだけの言葉を云つた許りであつた。それも半開きの襖から顔だけ見せて、立ちながら斯う云ふと、襖を締め切つてしまつた。如何にも綾子を子供扱ひにして、妙に高ぶつた物の言ひ方であつた。綾子は腹立しかつた。そして寫眞で見たより貧弱な方だと思はずには居られなかつた。如何にも銀時計向きの、融通の利かない顔付をして、誰れにも威張つて見せたい風であつた。

「嫌やな方、こんな方を……ほんとに藤枝さんの氣が知れやしない。隨分物好きだわ。」

綾子は藤枝に對して深い蔑視を感じた。そして良人の人格が下劣なこと、嫉妬深いことを告げた藤枝

の手紙を思ひだして、その實物を見た丈けに、滑稽な感じもしてゐた。

併し良人が歸つてからは藤枝の態度が一變して、迷惑らしい顏付をしながら、時計の音と一緒に綾子の歸りを忙き立てゝゐた。

「私、歸るわ。」

「まだ好いでせう。緩くりしてゐらつしいな。」

「だつてもう五時よ。」

「そんなら復た來て頂戴な。」

藤枝は義理ばかりの御世辭を並べて、女中を呼んで俥を言ひつけた。

もう町には夕闇が募つてゐた。街燈は薄青い灯影を、行人の肩に投げて、三日月が電線の間から透いてゐた。ふと肌寒い秋風が身に泌みた。綾子は俥の上でいろ〳〵考へてゐた。藤枝の素振といひ、言葉といひ、新婚の樂しさを語つてゐた。男は大嫌ひだと云つた藤枝の言葉は、良人ばかりが大好きだといふ謎らしかつた。實際あの貧弱な良人に滿足してゐるのであつた。何處に境遇の不平があらう。何處に離婚の決心が窺へよう。總てが眞靑な虛僞であつた。そして圓滿な家庭を見せ付けるためには、僞りの手紙をだして、綾子を呼びよせたのであつた。その手紙を讀むと、背かれた事も打ち忘れて、何にもかも許してやつた。言はゞ見せつけられに往つたのであつた。綾子は自分の愚かな事を嘆かずには居られなかつた。

「もう往きやしない。死んだつて往きやしない……」と綾子は唇を嚙んでゐた。

深幌の俥は、後悔のみを載　て夕闇を走つてゐた。

六

それから夢のやうに五年の月日が立つてしまつた。それは悲痛な年月であつた。先づ母親の死が沈痛な五年の初期に悲しい陰影を投げてゐた。併し綾子に取つては一種の解放であつた。如何ほど禱らうとも、願はうとも、所詮、免（のが）れる事の出來ない不幸の實例として、「死」は母親の心と肉體とを永遠に攫つていつた。その年の暮、多年の留學を卒へて、長兄が獨逸から歸つてきた。兄妹（きやうだい）は十年ぶりで顏を見合はしたが、慕はしさも、懷しさも感ずる事は出來なかつた。他人らしい心持で埠頭へ赴いた綾子も兄を認める事が出來なかつたし、兄の方も鼻眼鏡の下から青ずんだ瞳を動かして頻りに妹を捜してゐた。幸ひ手鞄に刻んだ苗字が、探しあぐんだ二人を紹介して呉れた。

二人は久振りで同じ家に住んでゐた。隣家の人達は綾子の御聟さんが來た事と早合點して、御祝物を持つて來かけたほど二人の顏立も違つてゐた。

「いや飛んだ間違ひだ。いくら兄姉（きやうだい）でも十年逢はないと他人のやうな心持がするものだ。」

兄は斯ういつてゐた。そして自分の嫁を迎へるためには綾子を片付ける方が得策だと考へてゐた。

「お前も好い年頃ぢやないか。一生獨身を立て通すなんて、そりや不自然だ。不自然な事は最も惡い事だ。若い内は其れで好いかも知れないが、年を取つて御覽。とても孤獨の情に堪へられないからね。そして婦人の不行跡は皆んな此處に胚胎してるんだ。外國でも尼さんとか、教師とか、老孃ぐらゐ嫌やな者はありやしない……」

長兄は老嬢の精神的に、肉體的に厭ふ可き實例を示して、片言のやうな日本語を使ひながら綾子に結婚を勸めてゐた。そして相手さへ推薦して置いた。その人は兄と一緒に永らく留學してゐた醫學士で、近ごろは毎日遊びにやつてきた。そして年甲斐もなく綾子を見染めたのであつた。
「あの男なら人格といひ、學識といひ一點の申し分もありやしない。來年は學位を貰ふ筈だ。お前だつて、あの人なら嫌やぢやあるまい。とにかく一生の運命に關する事だから克く考へて御覽。」
兄は綾子の顏を覗き込んでゐた。そして恥かしそうに頰を赤めた横顏を見ると、蔑むやうな、調戯ふやうな下品な笑ひ聲を發したのであつた。
「まあ、緩くり考へさして下さい。」と綾子は微かに答へて、直ぐさま他の座敷へ立つてしまつた。兄の笑ひ聲が腹立しかつた。
綾子は一週間も考へてゐた。兄が醫學的に說明して呉れた老嬢の心理狀態、殊に淺猿しい實例を考へると、我知らず身振ひが出てきた。
やがて兄の處へ花嫁がくると、小姑として意地目られたり、厄介にされる世間の實例をも考へてゐた。結婚の事、五年程以前に藤枝から見せ付けられた樂しい新婚生活の情趣、なほ良人となる人の人格學識も吟味して、飩くまで親切にして呉れる素振が何により賴母しかつた。いろ〳〵考へた末に、
「私は宜しう御座います。」と兄の前で、恥しさうに答へるより他はなかつた。
「いや、御芽出たう。それで私も重荷を下ろして精々した。」
兄はさも嬉しさうに微笑を漏らした。併し此の兄は妹のために笑つたのではなかつた。また妹のため

に御目出たうとは言はなかつた。彼は自身のために微笑を漏らし、自身に對して祝辭を述べたのであつた。何故なら新しい妻を迎へて、野遊び、劇場、音樂會と西洋流の自由な理想生活を實現するためには、先づ綾子を片付ける事が必要だからであつた。

とう〳〵十月の初めに綾子は夫人となつてしまつた。そして熱海、箱根と新婚旅行を一週間ほど續けてゐた。併し新婚の夫妻に取つては寧ろ苦痛の一週間であつた。先づ絶望したのは學士であつた。何故と言へば彼は夫人の生理的缺陷を見いだして、性欲上の見地からあらゆる手段を盡した甲斐もなく、夫人の心と肉體とに露ほどの情熱を味ふ事が出來なかつたからであつた。

「お前は枯木冷灰だ。生れてくる時、情熱を忘れてきたのだらう。女としても不幸だし、良人としては猶さら不幸だ。」學士は生涯の冷めたい不幸を豫想して、男泣きの涙を浮べてゐた、そして夫人は「はい。」と冷淡に答へるよりほかは無つた、此の短い返辭は處女の羞恥を含んでは居なかつた。まつたく情熱の空虚を示してゐた。併し夫人は人間生活の裏面に驚異の目を見張つてゐた。いつぞや藤枝が男は大嫌ひだと言つた言葉も泌々、思ひ出されて今は其の意味さへ了解したのであつた。そして學士は、恰も技師が器械を取り扱ふやうに夫人の肉體を取り扱つてゐた。それは全く器械的の愛情であつた。唯だ其れに過ぎなかつた。そして夫人は學士から器械的に取り扱はれた事を考へると、深い侮辱と嫌惡とを感じない譯には往かなかつた。殊に學士の執拗と猜疑とは亡き母親を思ひ起さした。遂には脊中合せの一夜を明かした事もあつた。

夜汽車が新婚旅行の冷たい夢を載せて新橋に着いたとき、學士は淋しげに夫人の一歩あとから蹤いて

いつた。そしてプラツトフオムの舗石に落ちた新夫人の後影を凝つと見詰めながら考へてゐた、夫人は流行のパラソルを手にして盛装を凝らしてゐた。模様散らしのコートが後姿を飾つてゐた。そして誰れも目を聳てたほど纖麗な夫人に違ひなかつた。併し魂の抜殻であつた。心の形骸であつた。美しい人形に過ぎなかつた。學士は、もう一遍、夫人の後姿を見た。そして舗石の冷たい影法師を眺めてゐた。夫人は影法師に他ならなかつた。その影法師を一生、抱いてゆくかと思ふと、夜風が、ぞつと身にしみて悲痛と苦悶を感じた。そして何時か二人は離れ〲に歩いてゐた。二人ながら路傍の人のやうに默然として、頸垂れながら、冷たい心持で夜更けのプラツトフオームを辿つてゐた。

併し學士は飽くまで夫人の纖麗を愛してゐた。執着と未練とが學士の心に膠着してゐた。彼は決して絕望しなかつた。そして遙々、獨逸から、様々の原書を取り寄せて、手に卷を釋かないほど讀み耽けてゐた。學士の顔は希望に輝きだした。そして深奥な學理を夫人に應用して、人形のやうな肉體に生命と魂を吹き込まうと試みた。併し學士は心の糧を夫人に與へなかつた。忘れたのではなかつた。それに氣が付かなかつたほど彼は人間を器械視してゐた。言はゞ人形のやうな夫人を單純な人形として取り扱つたのであつた。時々は熱帶の土人が或る樹皮から發見したといふ熾烈な興奮劑を試みた事もあつた。そして反應を樂しみに待つてゐた。併し絕望のみが所得であつた。

學士の顔は曇つた。そして絕望の餘憤を屢々夫人に漏らした。時としては怒りに任せて夫人の横顔を打つた事もあつた。夫人は如何ほど學士を嫌つてゐたらう。器械として取扱はれた事が何より不滿であつた。淑女の純潔を汚されたやうな氣がした。また人間の權威を侮辱されたやうにも思はれた。夫人は

學士と碌々口も利かなかつた。そして人間の總てが嫌やになつてしまつた。唯だ父親ばかりか、自分を理解して呉れたやうで、慕はしくも、また戀しかつた。

一學士は情熱の亡骸を抱いて一生を伴にする事は出來ないと考へた。併し夫人を離婚するには餘りに美しかつた。唯だ美術品として遠くから眺めようと決心した。そして醫師に共通な嫉妬と猜疑から藥局生も代診も悉く婦人に代へて駿河臺の家には一人として男切れがなかつた。夫人は醫院の管理者に過ぎなかつた。毎朝、學士は濱町の妾宅から通つてきた。

翌年、學士は博士の學位を受けた。

近頃、夫人は二階の窓に靠れながら暮れゆく空を眺めるのが癖であつた。そして省察と追懷とに耽けつてゐた。父親の事も思ひだした。母親の事も思ひだした。藤枝の事も思ひ浮べた。そして自分の事も考へて見た。昔は勝氣な小娘だと非難されたほど活潤で無遠慮な少女であつたのに軈て沈欝な涙つぽい氣性と變つてしまつた。我ながら其の理由は解らなかつた。あの藤枝は何うしたらう。とにかく藤枝に欺まされてしまつた。そして夫人の心には二つの暗い影があつた。父親の自殺と、藤枝の背信とが、この悲しい陰影を投げ掛けたのであつた。そして夫人の若い情熱を盗んだ者は藤枝であつた。彼女は少女の胸から情熱の源を永遠に攫つて往つた。あの親交は全く戀の手習であつた。博士は此の陰影を知らなかつた。そして藤枝の盗んでいつた情熱を探さうと燥せつてゐた。併し無いものが何うして求められようか。そして博士は徒らに疑惑と猜疑とに驅られてゐた。此の點では亡い母親に似てゐた。母親は無智で素性の惡いだけに許す事も出來た。併し博士は何んだらう。最高の教育まで受けて、獨逸で學藝の蘊

奥まで研めて來たのではないか。そして母親よりも我執と嫉妬に富んでる事は何うしても許す事が出來なかつた。殊に器械的な性欲教育を施さうとした事を夫人は如何ほど怨んでゐたらう。博士は何等の尊敬にも價してゐなかつた。美術文藝の趣味もなかつた。唯だ富を作り性欲を滿足させるために醫學を專攻してきた。獨逸に留學して學位まで得た。併し學問その者に對しては露ほどの嗜好もなかつた。他の卑しい目的のために學問を濫用した罪人であつた。唯まつたく富と性欲とが生存の基礎と目的とであつた。

併し夫人は斯かる人をば良人としてしまつた。そして純潔な肉體をも捧げてしまつた。かう考へると夫人は深い悔恨に打たれた。そして譬へ形式ばかりにしろ、冷たい運命は、死ぬまで夫人と博士とを釘付にしてしまつた。釘付けにされたかとも思はれた。その束縛から脫れるには何うしたら宜からう。何うしたら解放されようか。博士が死にさへすれば、……夫人は如何ほど博士の死を願つたらう。併し苟りにも良人と名のつく人に死を願ふ事があらうか。夫人は深い良心の呵責に打たれた。夫人は斯んなことを一切考へまいとした。併し心は博士の死を要求して止まなかつた。夫人は精神と心の鬪爭する激しい苦惱を感じてゐた。時としては何のために生存して居るのかとも考へた。夫人は物質上の不安を知らなかつた。同時に精神上の幸福をも知らなかつた。奥樣と呼ばれても、醫院の管理者に過ぎなかつた。

そんなら離婚を要求しようか、併し夫人の歸る處は無つた。長兄夫婦は理想の生活を實現するためには、墻を高くして門を閉してゐた。何うして嫂は鬼千疋の小姑を引取らうか、よしや引取られても、飼殺しの憂目を見るのは必定であつた。殊に再婚などは思ひも依らなかつた。もう總ての人間が嫌やになつてしまつた。博士も嫌やであつた。亡き母親の事は考へても不快であつた。唯だ亡き父親に對しては

一種の熱情を抱いてゐた。そして再婚しないことが、父親に對して貞操を立てることかとも思はれた。まして夫人の心には青錆が吹いてゐた。要するに夫人の生活する處は玆より外にない、そして生甲斐ない月日を送るより他はないのだ。いつそ死なう。さうだ。

夫人は斯う考へて窓から半身を乗り出して、窓下を眺めた。もう夜だ、植込から蟋蟀が悲しい魂を誘ふやうに鳴いてゐた。すると柔い風が髪を吹いて夜の香ひを持つてきた。若し死んだら何うだらう。死骸を抱いて泣く人があらうか。あの冷酷な博士も、怨めしさうな死顏を覗いたら濟まなかつたと言つて後悔の念に打たれよう。あの藤枝も死んだと聞いたら、さぞ寢醒めの惡い心持だらう。夫人の死骸を見て呵責の感に打たれた博士の顏、藤枝が囈言を並べる夜の苦悶などが、痛しい現實として夫人の目に浮んでゐた。そして夫人は泌々と復讐の快感を味つてゐた。此れが唯一の樂しみであつた。

ある晩、夫人が何時ものやうに空想に耽つて復讐の快感を味つてゐるとクン〳〵鳴き立てる淋しい聲が耳に這入つた。夫人が窓下を見下ろすと、燈籠の片かげに小さい白犬が踞つて饑を訴えるやうに二階の窓を見上げてゐた。

「まあ、可哀さうに、いま何んか上げるよ。待つておゐで……」

夫人は窓から斯う言つた。それから階下へ降りて庭下駄を突かけたまゝ、石燈籠のそばへいつた。小犬は夫人を見ると、小さい尻尾を振りだして、黒斑(くろぶち)の前足を、きちんと揃へながら、畏つてゐた。夫人が手を差し伸ばすと、小犬は近いて、小さい片手を夫人の膝に突きながら、頬邊を擦りつけた。夫人も膝へのせてやつた。そして額を撫ぜながら、

「お前は何處から來たのかい。可哀さうに何うして、さう振へてゐるの、寒いのかい。まあ、夜露に濡れてること……お腹が空いたのだらう」と夫人が言ふと、小犬は人間の言葉を解したやうに肯いた。

夫人が小犬を抱へて立ち上がると、小犬は溫く柔い感觸を樂しむやうに、夫人の內懷に身體を擦り寄せて感謝の意を表するやうに夫人の片手を甞めだした。日ごろ綺麗好きな夫人が今日に限つて小犬の甞める儘に任せてゐた。臺所へ這入ると、小間使が逸早くも此の白犬を見つけて、

「奧さま、何處の犬で御座りますの、おゝ可愛らしい……好い犬で御座いますね。」と言ひながら小犬の顏を覗き込んだ。

「何處の犬だらう。私に知らないよ。誰れか見掛けた事はないかい。」

夫人は小犬を膝から下ろさうとすると、小犬は仲々降りなかつた。夫人は棄犬だと考へてゐた。何故と言へば、飼犬の證據には妙に人なつこくて、媚を呈する事に長じてゐたから。

軈て小犬は皿にあけた牛乳を飮みだした。誰れも默つて物見高い目を見張りながら小犬の飮ぶりを眺めてゐた。ピチヤ〳〵いふ妙な舌の音が臺所の寂莫を破つて、お鍋の焦げ付きさうな香ひも氣が付かなかつた。

「ほんとに何處の犬だか知らないかい。」

「お貞さん。ペスの子ぢやなくつて……」

「馬鹿お言でないよ。ペスは男犬ぢやないか。男が子を產むのかい。」

「だつて……」

「だつて……何處の世界に男犬が子を生むもんか。」

仲働は鍋の蓋をあけて、菜箸で抓みだした馬鈴薯を手の平にのせて、熱さうに頰張りながら、鹽加減を見てゐた。小間使は口惜さうに頰を膨らしてゐた。

小犬は何時か牛乳を飲み乾して、また尻尾を振りながら後をねだつてゐた。

「よつぽど御腹が空いてるんだよ。何かなかつたかね。御味つけの殘りがあるだらう。冷たくつても構まはないよ。御飯が焚き立てだから……」

夫人の言葉に隨つて小間使は、まだ、お初を取らない御鉢から、御飯を取りだして、冷たい味噌汁をかけてやつた。小犬は嬉しさに喰べだした。そして瞬く暇に喰べ終ると、いきなり夫人の膝に飛びのつた。

「まあ、危ない。倒れるぢやないか。」

夫人は半分、尻持を突きながら、斯ういつて毛並を撫ぜてやつた、言はゞ人なつこい小犬の素振が夫人の氣に入つた。そして新しい人形を買つてきた少女のやうに、夫人は小犬を抱へて、なか〱放さなかつた。

十年ぶりで夫人の顏が輝いた。その日から小犬は夫人の愛犬になつてしまつた。翌日になると、この小犬が妙に人なつこく、惡戲をするから「茶目」といふ名前さへ付けて、赤い丸紐で頸鐶を拵へてやつた。それからメリンスの殘り布で派手な「ねんねこ」を脊負して、寒空の酷しさを凌がせてやつた。勿論朝から牛乳を飲ましたり、牛肉を喰べさせたりして、夫人は「茶目」を抱いたり、かかえたりしながら

一日暮らしてゐた。時には庭中を遊び廻つて夫人は茶目と鬼ごつこをしてゐた。そして茶目は息切れがして、駈けられなくなると夫人の膝に飛びのつて息をつくとまた鬼ごつこを始めだした。仕舞には夫人の方がへと〳〵に弱つて、

「お春や、御茶を一杯お呉れな、大いそぎで……」と、緣側に腰をかけながらせい〳〵息をはずませてゐた。

夫人に撫ぜられたり、さすられたりすると、見る〳〵うちに毛並の光澤が增して、胴も大きく手足も肥つてきた。何時か物心が着いて、夫人の御寵愛に增長したのか、氣に入らない女中や看護婦なぞには高慢な顏をして、いくら茶目と呼び掛けても振向きもしなかつた。そして夫人の御機嫌を迎へるには茶目の歡心を買ふより他はなかつた。

「奧さま、御覽遊ばせ、茶目が雀を取つて參りましたよ。」

如才のない小間使は茶目の一擧一動を、朝から晩まで夫人に報告してゐた。

「奧さんの、犬氣ちがひにも呆きれて物が云へやしない。」

仲働は朝から晩まで零しながら、梅鉢のやうな緣側の足跡を日に幾度となく拭いてゐた。そして茶目が何をしても夫人は許してやつた。女中の前垂を嚼み切つても笑つてゐたし、隣の下駄を咬へて來ても叱りはしなかつた。そして餘んまり惡戲をすると、畜生ながら惡いと心付いたのか、コスモスの花蔭に踞つて、改心したらしく小さい眼を見据えながら、畏つてゐた。それが繪のやうに思はれた。そして猶さら可愛らしかつた。ほんとに茶目は夫人の生きた玩具であつた。氣晴らしの道具らしかつた。

「茶目や、お預けだよ。よし。」と夫人は朝から藝を込仕んで、「お預け」が出來ると、「チン〳〵」や「ワン〳〵」を敎へてゐた。そして「御手手」といふと、偶然に差しだした茶目の片手を取つて、夫人は、さも聞き分けたやうに歡んでゐた。そして暖い朝は、茶目を湯殿へ連れ込んで、夫人自ら甲斐〳〵しく襷掛けで、茶目を洗つてやつた。石鹼の泡を立てゝ、茶目を洗に終ると、乾いたタオルで雫を拭き取つて、自分の差櫛で毛並を搔いてやつた。そして遙々、巴里から舶來した香水を惜しげも無くかけてやつた。茶目は迷惑らしい顏付をして、鼻をクン〳〵ならした揚句、大い嚔をした。

「氣をつけないと風を引くよ。でも精々したらう。此方を向て御覽、まあ好男子になつたこと……」愼しみ深い夫人が輕口を滑らした。

茶目が出來てから夫人の氣質は一變して活潤になつてきた。夫人は久し以前に失つた若い心を、茶目の中に見出したらしい樣子であつた。ほんとに一種の情熱が甦つてきた。

毎朝、患者の診察に歸つてきた。博士は異樣な感激に襲れた。如何なる科學上の研究も、醫學上の手段も、夫人の心に生命を吹き込む事が出來なかつたのに、一匹の小犬が端なくも情熱を喚び醒まさうとは夢にも思はなかつた。博士は奇怪な嫉妬を感じない譯には往かなかつた。

博士の眼は異樣に輝いてゐた。そして陽らさまに其れと言ふ譯には往かなかつた。飽くまで紳士の假面を脫ぐことが出來なかつた。そして博士の心は絕えず不滿と嫉妬とに炎えてゐた。そして思ひ出したやうに夫人の冷淡を責めた事もあつた。そして折に就け事に觸れて夫人を責め立てた。時には看護婦の落度まで、御尻を夫人に持つてきた。それも些細な過失で平生の博士なら笑つて濟ます筈であつた。時

には家中に響くほどの大聲を出して、力まかせに夫人の腕を打擲した事さへあつた。まつたく教養ある人の態度とは思へなかつたほど、冷靜と批判とが博士に缺けてゐた。そして夫人には其の原因が解らなかつた。

「貴方、御覽遊ばせ。こんなに大きくなりました。茶目や、御手々をお出し。あゝ好い子だね。」

陽氣な夫人は緣側に腰掛けながら斯ういつた。その言葉には常にない媚を含んでゐた。そして夫人は茶目の片手を取つて純白な毛並を博士に示した。博士は先づ目を潰つて此の樣子を見まいとした。何故なら夫人が戀人と戯れてゐるかと思はれて、異樣な感激が胸を塞いだからであつた。博士の拳は振へた。飛び掛つて此の小犬を撲ち殺ろさうとした。併し博士の冷やかな頭腦は先づ炎え立つやうな胸を抑へてだん〳〵激昂を鎭めて呉れた。博士は再び目を見開いた。

「ほんとに可愛いくなつた……」

と博士が御世辭を並べたとき、胸の苦悶は如何ばかりであつたらう。敵を愛する苦痛であつた。そして柔い毛並まで撫ぜてやられない譯には往かなかつた。博士は飽くまで人間の假面を脫ぐ事の出來ない悲痛を泌々と味つてゐた。ふと變態性欲の實例が博士の頭を掠めた。

「何處へ寢かすんだい。」

「ちやんと小舍が出來てをりますの。御目に掛けませうか。茶目や、此方へ御出で……お前の小舍を御覽に入れるんだよ。」

夫人が枝折戶をあけて、萩の枯枝を押し除けると、西洋造の犬小舍が出てきた。そして藁の上には〆

リンスの蒲團さへ温さうに敷いてあつた。博士は「一贅澤だなあ。」と我知らず叫んだ。そして自身よりも「茶目」の方が遙かに夫人の歡待を受けてると思つた、自身に言ひ掛ける言葉よりも、犬に對する言葉の方が遙かに妻らしい親しさと、媚びとを含んでゐた。博士は嚇つとした。併し犬の寢所さへ聞き咎めた淺猿しさが、我ながら胸に浮んで、俯向かずには居られなかつた、その夜博士は悄然と歸つていつた。

その翌朝であつた。小間使が慌しく夫人の居間に駈け込んできた。

「奧さま大變で御座りますよ。お隣のペスが犬殺しに連れて往かれました。そりや可愛さうで御座りましたよ。口と手足を荒繩で、ごしごし縛つて、いきなり箱車に投げ込みました。いくら御内儀さんが飼犬だと言つても警察へ届けてないから駄目だつて、そりや犬殺しの不人情たら御座いません。だから早く警察へ御届け遊ばせ……」

「そりや大變だね。それぢやすぐ警察へ届けに往つてお呉れな……御氣の毒だけれど……」

夫人は小間使を警察へだした時には、ほつと胸を撫ぜ下ろした。その日の午後、夫人自から淺草へ往つて頸輪を買ひ求め、「某家飼犬、茶目」と名前さへ刻ましてやつた。二三日立つて戸籍調べに來た巡査が、

「御宅には茶目君が御居でゞすな。」と冗談を言つた時、愛犬茶目が人並の取扱ひを受けた事に、夫人は如何ほど滿足を表したらう。

夫人の顏は益々、晴れやかになつてきた。それに引かへ博士の顏は益々曇つてきた。博士は誤診をして大切な患家を失つた事もあつたし、藥劑を取り違へて病勢を募らした事もあつた。その都度博士は無

念さうに齒軋りをして、夫人を叱り飛ばしたり、看護婦などに當り散らしてゐた、ある時、茶目が椽側に上がつてゐたとて激しく蹴飛ばすと、茶目はクン〳〵言ひながら、痛さうに片足引摺つてゐた。

「何をなさるんです。可愛さうに……茶目に何の咎があるんです。」

夫人は物狂はしく博士に呶鳴つた。博士は凝つと夫人の顏を見詰めてゐたが、力まかせに平手で夫人の頰を毆つた。そして何んとも言はずに往診に出掛けた。

その夜、博士は三年振りで家に泊つた。そして博士は魂が締めつけられるやうに、身體を藻搔いて蒲團の上を轉々してゐた。それから男泣きの涙を流して、切なさうに胸許を搔き挘つた。博士はやつと心を裸體にして見せた、人間の假面を脫いたのであつた。夫人は博士の嫉妬深い事に驚いた。そして侮辱されたかと思つた。併し多少の理解と同情とを博士の裸かに魂の中に見出さない譯には往かなかつた。そして夫人の啜泣きが夜明け頃まで聞えてゐた。

その翌る晩も博士は泊つた。博士は只管、嘆願してゐた。その翌日、「茶目」を人の許に預けたが夕方鎖を切つて歸つてきた。

その次の夜も博士は泊つた。それが夫人には堪へられなかつた。

とう〳〵茶目は棄てられる事に極まつた。家庭の破壞者は追ひ出されるより他はなかつた。その朝から夫人は出來るだけ茶目を劬はつて、いろ〳〵御馳走をしたり、膝の上に抱いて額や頤を頻りなしに撫ぜ廻はしてゐた。その日に限つて博士は何事も默認してゐた。その內に日が暮れてしまつた。夫人は茶目の大好きなカツレツを二皿ほど取つてやつた、そして棄てるためには、頸輪を取り去る事が必要であ

つた。頸輪を取ると茶目は嬉しさうに頸を振つて、頸の廻りが輕くなつたのを樂しんでゐるらしかつた。共處だけは毛並が變つて、何處か淋しかつた。そして零落したやうにも思はれた。

「茶目や、ほんとに可哀さうだね。」と夫人は斯う繰り返すより他はなかつた。心の中では新しい御主人を見つけて今より幸福な一生を送るやうに願つてゐたが、併し廣い世界に夫人自身より可愛つてやる主人は有るまいと思ふと、夫人は思はず涙ぐんでゐた。併し茶目は頸環が取れて自由になつたのを、歡ぶやうに頸を振り立てゝ何故、夫人が泣いてゐるのか怪しみ顏に、凝と見詰めてゐた。頸輪のないのが茶目の昔を思ひ出さした。茶目は元と棄犬であつた、そしてまた棄てられやうとしてゐた。犬でも宿命は免れる事が出來ないかと夫人は考へた。そして一としほと可哀さうであつた。

その時、出入の俥屋がやつてきた。兼て此の俥屋とは大の仲好しであつたから、棄てる役目を言ひ付けたのであつた。

「茶目や、克く御氣をつけよ。犬殺に用心しなきや往けないよ。好いかい。さうして好い御主人を見付けて可愛がつて御貰らひ……」

初めて夫人は言ふ事が出來た。そして何時までも〳〵額を撫でたり、頤をさすつてやつた。

「さあ、奥さん。もう宜しいでせう。」と催促した。ちやうど刑場の入口で、最後の別れを惜しましても程を過ぎれば用捨はしないといふ風であつた。そして夫人の方も佃島の遠見船から、そつと近づいて別れを惜しむやうに泣きながら、やつと茶目を膝から下ろした。

茶目は夜の散歩を歡ぶやうに、俥屋の後から蹤いていつた。夫人は襦袢の袖で涙を拭ひながら、茶目

の白い姿が、坂を降りて町角を曲がるまで、二階の窓から見送つてゐた。

その夜、夫人は泣きながら床に就いた。それは肌寒い淋しさであつた。そして寢付く譯には往かなかつた。棄る先は大川端と聞いてゐた。川風の寒いこと、人通りの淋しいこと、河端柳の怖いことも想像されて、さぞ茶目は棄てられて濱町河岸をさ迷ひながら、慄えてゐるかと、思ふと居ても立つても堪らなくなつて、直ぐ大川端へ探しに往きたかつた。または夜ふけて歸へる姐さん達の裾に、ぢやれつくと、容色は好いし、灰汁脱けがしてゐるし、人なつこいから、直ぐ拾はれて、幸福な月日を過すに違ひないとも思はれた。または他目の宿無し犬に意地目られる様子も目に浮んだ。いつぞや小間使から聞いた犬殺しの話も胸に浮んだ。ふと茶目の死骸が目を掠めた。あゝ可哀さうな事をしたと思ふと、脊骨が冷え渡つて夫人は歯の根の合はないほど身振ひをしてゐた。そして犬殺しに殺された愛犬の革が太鼓に張られて、坊ちやんに買はれること、夜な〳〵太鼓が鳴りだして、ジョンの幽靈が枕許り立つてゐたといふ御伽噺も十餘年ぶりで思ひ出された。

「私が悪かつた。勘忍してお呉れ」と夫人は心の中で手を合はしてゐた。夫人の胸には種々の追懐が甦つてきた。初めて茶目が迷ひ込んできたこと、頸輪を拵へてやつたこと、御湯をつかはしてやつたことなどを思ひ出すと、柔い毛並の感觸と體温とが掌に甦つて、夫人は深い孤獨の情に襲はれた。そして明日からは、あの犬小舍も主なき淋しさを喞ちながら、嘸かし茶目の可愛らしい様子、たとへば圓い入口の外に片足ばかりが出てゐたり、または假寢の可愛らしい横顔などを思ひ起さして、萬事涙の種に違ひないと夫人は考へてゐた、そして茶目が居なくなつたら何を樂しみに月日を送らうか、昔のやうに淋し

い生活を續けてゆくのか。夫人は生存の目的を失つたやうに考へてゐた。

二時ごろ遠吠が聞えだした。茶目ではないかと思つて、夫人は思はず枕を擡げて聞きすますと、遠吠は巷から巷へと消えていつた、そして再び眞夜中の沈默に返つた。

夫人は啜泣いてゐた。

やがて庭口が、がさ〳〵して草木の搖れる音がしてきた。盗人の近いたやうな氣がして夫人は思はず耳を澄ました。そして深い沈默の中から、小さい足音が飛石に響いてゐた。そしてクンと云ひながら、雨戸に、がさりと當つた。茶目だ。茶目が歸つてきたのだ。夫人は寢床から起き上ると、駈けだして雨戸を一枚あけた途端に、茶目が嬉しげに飛びついた。そして體溫を貪るやうに、夫人の內壞に冷めたい身體をすりつけた。夫人は、はつと胸を撫ぜ下ろした

「私が惡かつた。勘忍してお呉れ。もう斯んな事はしないから……」

夫人はもう言葉が出なかつた。そして茶目の冷え切つた身體(からだ)を、ぢつと抱き締めてやつた。毛並が、ぴつしより夜露に濡れてゐた。

七

折角、棄てに往つた茶目の歸つてきた事は、翌日、夫人の口から、博士に報告された。流石の博士も我を折つて諦める事と夫人は考へてゐた。併し博士が無言のまゝ眉を顰めた事は充分、不滿と憎惡とを現はしてゐた。夫人は此の表徵を見ると、不吉な豫感からぞつと身振ひをしてゐた。博士は長年人間の生理機關許りを取扱つてきたから、死といふ事實を極めて自然だと考へてゐた。そして學問のために人

間の死體さへ解剖して、頭蓋を鋸で引いたり、四肢をばら〳〵に解いてゐた。そのせゐで總てに情愛が薄かつた。況して下等動物の犬などは石塊と見做してゐた。

併し茶目のみに對しては家庭生活の破壞物としての憎惡と嫉妬とを懷いてゐた。殆んど Coco に對する反感を示してゐた。それゆゑ夫人と愛犬の同棲を許すことが出來なかつた。そして一方では復讐の快感を味ひたひ欲望が募つてゐた。博士は極めて暴戾になつた。全く常軌を逸してゐた。

ある朝、博士は夫人を呼び寄せて、「最中」を手の平に載せながら斯ういつた。

「今日は俺の手で「茶目」を毒殺するよ、その積りでゐて貰ひたい、この「最中」にモルヒネが這入つてゐるんだ。」

夫人は狂氣のやうに、博士の腕を捉へて手の平から、毒殺用の「最中」を奪つた。

「殺すなら、私が殺します。」

「屹度だなあ。嘘を言ふと承知しないよ。」

「大丈夫です。」と夫人の脣は青ざめて振へてゐた。

日暮れに博士は妾宅へ歸つた。夫人は色々考へてゐた。怒りに任かせて毒殺の事を引受けたのが落度らしかつた。いつそ茶目を人手に渡さうかとも考へたが、人の所有に任かす事が出來ないほど夫人は愛着を持つてゐた。そして暴虐な博士の心は、茶目の死骸を見なければ滿足しない事も夫人は克く知つてゐた。そして此の毒劑は永い魔睡に陥れて遂に生命を奪ひ去る事も夫人は聞いてゐた。唯だ茶目を永い眠りに就けるのに過ぎなかつた。暴戾な執拗な博士の手に罹つて慘死を遂げるよりは、夫人の手に毒殺

される方が夫人に取つても、茶目に取つても遙かに幸福だと夫人は考へた。そして何時もの通り御馳走を喰べさせて最後の幸福を惜しませてやつた。夫人は茶目を抱へて毛並を撫ぜながら斯ういつた。

「茶目や、お前は仕合者だよ。他の犬が幾千年生きてゐたつて、お前ほど可愛がつては貰へないよ、だから今夜はね……」

夫人は涙に咽んで是以上、言へなかつた。茶目は心配さうに夫人の泣顔を覗きながら、あとの言葉を聞かうとして耳を聳てゝゐた。それが意地らしかつた。

その夜、遅く犬小舍を應接室に運ばした。そして皆んなの寢鎮るまで夫人は茶目のそばに殘つて毛並を撫ぜたり、頭をさ擦つてやると、茶目は尻尾を振りながら頰邊を擦け付けたり夫人の手を甞めたりして頻りに歡心を求めてゐた。

夫人は目を潰つた。そして手の平に「最中」を載せてやると、茶目は一口に喰べてしまつた。

夫人は重荷を下ろした。大罪を行つた心持がした。また人間としての義務を行つたやうな氣もした、俄かに立ち上つて應接室を出ようと、すると、茶目は追ひ縋つて夫人の裾を咬へた。

「茶目や放してお呉れ。」と夫人の言葉を聞き分けたのか茶目は素直に放して前足を揃へながら、凝つと目を見張つてゐた。夫人は應接室の扉を締めた。併し最後の別を惜まうとして細目に扉をあけて覗くと茶目は諦めて小舍に這入らうとしてゐた。

夫人は暗い廊下を歩きだした。四邊は森として、暗闇の底から、何處とも知れず、夜風が吹き渡つてそつと身にしみた。ふと淋しい吠聲が耳に響いた。夫人は立ち止つた。そして暗闇から私語を聞くやう

に耳を聳てた。それは夫人の後を慕ふやうな、冷酷を怨むやうな泣聲であつた。そして頸輪の音と一緒に前足を扉に當てる音が響いた。夫人はもう一遍、抱き締めてやりたかつた。併し心を鬼にする方が人間の義務だと夫人は考へた。そして靜かに歩きだした。夫人は目を潰つて耳を塞いだ。冷い夜更けの沈默中に悲しい鳴聲が聞えて、夫人の後髪を引戻さうとしてゐた。

夫人が床に就いた時には、もう淋しい鳴聲が聞えなかつた。萬事終つた心持がしてゐた。大罪を行つた呵責が夫人の心を捉へてゐた。

そして一時間立ずに毒劑が利きだして、茶目が極樂往生を遂げる事も夫人は知つてゐた。翌日菩提寺の坊さんを呼んで、御經を上げて貰らひ、庭園の片隅に立派な墓を立てゝ愛犬の暝福を祈らうと夫人は考へた。それが夫人の罪亡しらしかつた。俄かにに夫人の心は變つた。

「罪亡し……さうだ。私が茶目を殺したのだ。何の罪もない小犬を毒殺してしまつた。あゝ惡かつた。濟まなかつた。」

夫人は深い溜息を漏らした、すると絶望と悔恨と呵責とが胸に漲つて、重苦しい胸許を搔き裂きたいほど、息苦しくなつてきた。夫人は力まかせに束髪を搔き挘つた。そして寢返を打つてゐた。

何故、茶目を毒殺しなければならなかつたか。茶目に何の罪があつたらう。何故茶目を殺す前に離婚を要求して、茶目と一緒に實家へ歸らなかつたが。また茶目を殺す前に、何故、自身を殺さなかつた。人間に貴重な生命は犬に取つても同じく貴重な筈であつた。

「私は惡かつた。我儘だ。得手勝手だね。どうぞ勘忍してお吳れ……」

夫人が初めて人間の利己主義に悟つた時、自分に對して深い〳〵嫌惡を感じた。

その途端に異樣な呻吟が聞えた。それは苦悶の聲であつた。夫人は髮を振り亂して、暗い廊下を、ひた走りに走つた。そして應接室の戸をあけた。すると茶目は苦しい中にも、尻尾を振りながら、曇つた目を見開いて夫人の膝に凭れた。

「茶目や、苦しいだらう。私が惡かつた。」と夫人が膝に抱き上げてやると、切ない呼吸をしながら。夥しい生血を夫人の手に吐き掛けた。

「茶目や、氣を確かにおし……」と言つて夫人は脊中を撫でようとしたが、忙しい呼吸の度毎に、毛並の下から、あり〳〵と脊骨が現はれてゐた。夫人は目を潰つて泣に咽んでゐた。

應接室には電燈が點いてゐた。餘ほど苦しんだのか、犬小舍にも血痕が生々しく附着して、苦悶しながら、ぐる〳〵廻はつてゐたせゐで、敷物の上に夥しい生血が圓形を描いてゐた。これほど苦しまうとは思はなかつた。茶目の呼吸が弱ると、四肢がぴく〳〵動きだした。强い痙攣であつた。それは十餘年前、自殺した父親の死體を抱へてるかと思はれたそれほど懷しかつた。そして茶目の顏が亡父の死顏に似通つてきた。

「茶目や、苦しいだらう。私が惡かつた。私も一緒に死ぬよ。」

死の要求が、むら〳〵と夫人の胸に起つた。死にたかつた。茶目のために死にたかつた。利己主義の自身を殺したかつた。夫人のミザントロピーは最後にまた自身を嫌らはしてしまつた。そして戀しい父親に逢ひたかつた。何時か痙攣が終ると、手足は硬張つて、茶目は死骸になつてしまつた。夫人は此の

死骸を羽蒲團(クッション)の上に臥かした。そして物狂はしく藥室に這入つて、赤い硝子の戸をあげて、小量のモルヒネを口にした。

夫人は床に就いて死を待つてゐた。茶目と同じやうな苦悶の死を待つてゐた。夫人は出來る限り苦しんで、茶目のために死にたかつた。利己的な自身を一刻も早く殺したかつた。それが唯一の樂しみであつた。

併し適量の毒劑は夫人を快い魔睡に引き入れた。そして黎明(しののめ)の匂ふころ、愛犬の生命と一緒に、夫人の魂を天國に運んでいつた・・・・

(完)

愛着の名殘り

近松秋江

今日は不思議な日だ。長く會はなかつた、先の、私の妻であつた女に、一日に二度も出會つた。

――別に不思議といふわけもないだらうが、東京が廣いといふことを、私はしみ〴〵と感ずるのは、自分もその女も同じやうに東京に住んでゐながら、滅多に出會つたことがないのでもわかる。

それが、今日は不思議に二度も偶然外で出會つた。その前偶然出會つたのは、去年の二月時分だつたから、あれから丁度一年半ばかり會はなかつた。その時は夜であつた。私はある一人の友達と寄席にゆくつもりで、街を歩きながらとある電車の通りで、友達が夕刊を買つてゐるのを、ちよつと佇立つて待つてゐると、そこの西洋の食料品を賣つてゐる角店の前の明みへ薄暗い横丁から、つと姿を現はして來たのがまぎれもない私の先の妻であつた。

それを見ると、私の胸は、はつと苦痛を感じた。

その時からまた溯つて考へて見ると、間に滿二年置いて一昨々年の九月時分に途中で出會つたきり足掛け四年見なかつたのだ。自分もその間には一昨年の夏の終から去年の秋の半まで一年あまり東京にはゐなかつた。

それで、その時は夜目にも兩方で殆ど同時に私であり、彼女であることを認めた。けれども聲は此方から掛けた。

「おい！」

と、いふと、

「え？」

と、平氣さうに答へながら、此方は立ちとまつてゐるのに、向では少し歩を緩めたまゝ、私の方を頸だけ曲げて見ながら、やつぱり歩いてゐた。

「この頃は東京にゐるのかい。何處？姉さんの家にゐるの？」

と、訊くと、

「えゝ。あなたは？」

と、少し笑みを面に浮べるやうにして訊き返へした。

「私は、すぐ其處の松林館にゐる。……相變らず獨身者だから。」

さういつて答へながら、一分間ほどの間に私は一昨々年の九月から見なかつた彼女の容貌や身裝を見守つた。以前に比べていくらか顏に肉のついたやうで、白い襟卷に藍つぽい立縞の羽織を着てゐる。その羽織は私と一緒にゐた時分こしらへた、あの安物のお召だなと思ひながら、「でも、お前相變らず壯健

で結構だな。」

と、私は哀れむやうな、傷はるやうな氣持ちになりながら、さういつた。

けれども、女の方では

「えゝ。」

と、いつたきり、早く行きたさうにしてゐたので、こちらが、まだ未練でもあつて話で引留めやうとでもしてゐると思はれるのが厭さに、私はそのまゝ振顧つて友達の方によつて行つた。友達は夕刊を手にして立つてゐた。

私は友達と並んで歩きながら、去年も一昨年もまるきり見ず、一昨々年の九月に見た時から今まで見なかつた間の時日の經過やら、その間に起つてゐるべき彼女の身の上のことなど種々想像に描いた。

「君、今、僕が話してゐた女が、あれが僕の先の妻さ。」

私の友達は、私の話で私達の舊いことを知つてゐた。

「あゝ、さうですか。さうして今どうしてゐるんです？」

「さあ、どうしてゐるか。何處かへ嫁いてゐるんだらう。……あんなことがあつて、仕舞には心持ち惡く別れたけれど、一緒にゐる時分に隨分苦勞もさしたから、あんまり詰らなくならないやうに無事に暮してゐれば、僕も安心な氣がする。」

さういつて、私は、心の中で彼女のために、幸福を祈るやうな氣持ちになつた。けれどもその時私の胸が、どきッと苦痛を感じたことによつて察すると、不斷は彼女のことを思ひ出しもせず、全く忘れはてゝゐるやうでも、まだ胸のどん底に古い記憶が殘つてゐると思はれて、執着に伴ふ不快を感じたので

あつた。

やがて寄席に入つて女義太夫を聽いてゐる間に、先刻見た彼女のことは、ふと念頭から霧のやうに消えてしまつた。

けれどもその夜寄席を出て、自分の獨居の部室に歸つて來て、夜更けて心が澄んで來ると、私は、またふと先刻見た彼女のことが意識の表に浮んで來た。自分では少しも思ひ起さうとしてゐないのに、獨り手に先刻の印象が思ひ出されるのである。白い駱駝の襟卷と藍つぽい羽織が眼の先に浮んで來る。それで私もつい、此度は自分から「この頃はどうしてゐるのだらう。誰れかの妻になつてゐるにちがひない。」と、思つては見たが、それが以前のやうに私の胸を蝕(むしば)まなかつた。

丁度その時分から私は、獨りでゐることの安易さを染々と味つてゐた。私は、どんなに、平常思つてゐる女を待たないことに平靜なる悅びを感じてゐるか知れぬ。――妻も子もなくして――

去年の夏であつた。私は三ヶ年ばかり日光の奥の中禪寺や湯元にいつて暮してゐた。私はその間全く童貞の如き生活をしてゐた。私の頭から女といふものが全然拭ひ去られてゐた。私の眼は毎日々々高い山と白い雲と深い水の色とばかり見てゐた。

すると、中禪寺湖からまだ二里も山深く入つた湯元の溫泉にいつてゐる時であつた。それは八月の中旬であつた。東京から畫家のO氏夫妻が私をたづねてやつて來た。その晩O氏の部室で夕飯を共にした。

その時妻君は次のやうなことを話した。

昨夜中禪寺に泊つた時、そこの宿で、よく淺海さんをたづねて來る方(かた)があります。此の間も夫婦の客

で淺海さんのことを訊いたお方がありました。と宿の女中が御飯の給侍をしながら話してゐた。さういはれると、誰れしも好奇心の起るもので、

「へえ！だれだらう？」私は御飯を食べながら考へた。

「何でも淺草の小島町とかの人だとかいつてゐました。」O氏の妻君はいつた。

「うむ、そんなことをいつてゐたねえ。」寡默なO氏は靜にそれに應じた。

「へえ!?淺草の小島町！私はそんな處にゐる人間に知つた者はない。小島町といふ處すら知らない。一體何處の邊だらう。小島町といふのは。」

三人とも小島町の處在を明確に知つてゐなかつた。そして中禪寺湖の宿に來て泊つて、私のことを訊いた夫婦者の何人なるかの推測の興味は、その時きり忘られてしまつた。それから十日ばかりして私達は三人づれで湯元から中禪寺湖まで戻つて來た。私は、もとの三階の九番の部室に入つた。そこに戻ると、私は、先達つてO氏夫妻に、ある夫婦の客が私のことを訊ねてゐたといふ話をした女中を呼んで、その小島町の客のことを訊ねた。

「お政さんかい。此の間、此處に來て泊つた夫婦づれの客で、私のことを訊いてゐた者があつたといふ話をOさんにしたのは？」

「えゝ、さうです。そのお客さまに出ましたのは、私です。あなたのことを訊いておいでになりました。」

「淺草の小島町とかいつたさうだねえ。」

「えゝ、さうです。小島町と仰有いました。」

「さうか。ぢや、濟みませんがつて、一寸お帳場から宿帳をかりて來ておくれ。」

お政は、直ぐ宿帳を以つて來た。

『いつ頃だつたい？私が湯元に行つてからだから八月の十四日から後のことだな。そして〇さん達が來たのが、二十日だつたから、五六日の間のことだな。』

さういひながら、私は、宿帳を繰つて見た。

すると、どういふわけか二帖ある宿帳の一つの方に、しかも私が晝過ぎにその宿を立つて湯元に行つた八月十四日の日附の處に果して東京淺草區小島町と住處を記した夫婦づれの泊り客の名を發見した。

材木商岩田鐵太郎　三十六

同　すま　三十六

それを見ると、私は、おや〳〵と思つた。すまといふのは彼女の名である。それとも同名異人であらうか。しかし他にはすまといふ名前の女で、私を知つてゐる女はない筈だ。彼女に相違ない。さう思ふと私は覺えず五體に輕い痙攣を感じた。そして何だか焦々した渴きを覺えながら

『ある〳〵。お政さん、これだらう。男も女も三十六歳と書いてあるが、そのくらゐの年格好であつたかい。』

『えゝ、旦那の方は四十くらゐの方でした。奧さんの方はそこに書いてあるとほりに三十五六くらゐに見えました。』

『さうか。先月の十四日に來て泊つてゐるよ。十四日といへば丁ど、私が此處を立つて湯元の方にいつた、その日だ。その日の何時ごろ來て泊つたらう。』

『それは、よく覺えませんが、たしか二た晩お泊りになりました。』

「さうか。私、もう一日湯元に行くのを延せばよかつた。」

「さうでしたねえ。淺海さん御存じの方ですか。」宇都宮から夏場だけ雇はれて來てゐるお政は溫順しい口の利き方をして、さういつた。

「うむ知つてゐるんだ。………そして何處の部屋に泊つたの。」

「そのお客さまも、やつぱり此のお部屋でした。……丁どその時このお部屋が明いてゐましたから、此處へおとほし申しました。」

「そら明いてゐたらう。私が晝過ぎに立つていつた後だもの。」

私の係りの女中はお政ではなかつた。

「あゝ、さうでしたか。私よく覺えませんでした。そのお客さまも、私がお給侍に出ましたら、姐さん此宿に淺海さんといふ方が來てゐるでせうと、お訊きになりましたから、えゝ、七月からずつと來てゐらつしやいますけれど、只今お山開きで登拜の客が雜沓するからと仰有いまして、湯元の方においでになつてゐます。と申しましたら、その方何處の部室にゐて。と、おきゝになりましたから、やつぱり此のお部屋にゐらつしやるんです。と、申しました。」

「あゝ、さうか」

と、いつたが、私は心の中で、何か變な因緣に付き纒はれてゐるやうで、不快な興味を刺激された。

「さうか。その人達も此の部屋に來て泊るとは不思議だねえ。旦那の方は、私のことは何も訊きやしないだらう。」

「えゝ、旦那さまはあなたのことは何もおきゝになりませんでした。御酒をよく召上る方で獨りで面白

いことばかり仰有つて。」
「そしておかみさんの方が私のことを訊いたの？」
「えゝ。」
「此の部屋で酒を飲んだんだな。」私は一寸の間凝乎と默つた。「奥さん、樂しさうにお酒の相手をしてゐたらう。」私は輕い戯談らしくいつた。
「いゝえ、別にそんなこともありませんでした。」
「奥さん酒が好きな筈だが飲まなかつたかい？」
「いゝえ。そんなに召上りませんでした。」
「ぢや、旦那だけ面白いことをいつて、お酒を飲んで。奥さんはその間お政さんを相手に私のことなんか訊ねたの？」
「えゝ、さうでした。奥さんだけがお訊ねになりました。」
「そしてどんな風をしてゐた。丸髷に結つてゐたかい？」
「えゝ、丸髷にお結ひになつて、意氣な身裝でした。」
　お政が宿帳を以つて下りて去つてから私は獨りで思つた。材木商に嫁いでゐるやうだと、彼女もまあ仕合せは好いのだらう。さう思ふと、私は心が輕くなつたやうで、そして彼女と別れた時分の、私の怨みの創も三四年の時日がいつとは知れず癒してくれたやうに思へた。それにしても眞島とは、いつ切れたのであらう。眞島と切れてから、今度の男に嫁くまでに、他の男の處にいつてはゐなかつたのだらうか。私は、もう彼女に對して未練も執着も感ぜぬが、彼女が私と別れてから辿つた運命については考へ

ずにはゐられない。

二月に途中で偶然出會つた時には、碌々口もきかぬやうにして去つてしまつたが、私が此處に來てゐることを知つたのは、どうして知つたのだらう。新聞の消息か何かで見たのだな。さうすると彼女は、やつぱり私の動靜を、機會のあるごとに氣をつけてゐるのだ。私は、そんな心持ちが、別れてから何年の後までも尙ほ續いて殘つてゐるのに不氣味を感じた。

私はO氏の部室にいつて、私をたづねた夫婦づれの誰れであつたかゞ分つたことを話した。

「へえ、不思議なものですねえ。」

O氏と妻君とはさういつて同じやうに私の顏を見守つた。

「いつかも、あなたはその方のことで日光に來て宿帳を調べたことがあつたのでせう。」

妻君は不思議さうな顏をしてさういつた。

「えゝ、先にもそんなことがあつた。私は、もう何にも思つてはゐないけれど、まつたく奇妙です。」

「それで先に來て一緖に泊つた人と此度の人と違ふのですか。」

「そりや違ふのです。先の男はまだ若い。そして商買が違ふ。やつぱり國の方にゐるでせう。しかし更に不思議なのは、名が同じ名だ。」

「不思議ですねえ。その先の人に別れて、また違つた人へ嫁いたんでせうか。」

「さうでせう、さうらしい。」

O氏の部室で暫くそんな話をしてゐたが、私は、もう彼女について話をする衝動も昂奮も感じなかつた。けれども彼女が先の男と一緖に、その男の鄕里にまで行つてゐた時分のことは、今でこそ私に何等

の刺激をも與へないが、その當時のことを思へば何ともいへない不快な興味が私の精神を惱亂せしめ、身體を頽廢せしめた。私は今その憤恨や苦痛から解脫したことに非常な幸福を感ずる。

今度も宿帳を見て彼女の動靜や住處も分つてゐるが、私は最早それを何うして見やうとも思はない。けれども四年前彼女が私の家に同居してゐた學生と日光に來て泊つたことを發見した時には、私は探偵の興味にもそゝられてゐた。私は、その時から數へてその前々年の九月に彼女が私の眼界から逸して、その時に至るまで中滿一年をおいて、足掛け三年の間、東京にゐるといふことは分つてゐながらも彼女とその學生と關係があるといふことは疑惑の雲に鎖されてゐた。初めの間は疑つても見たが、その疑ひはたゞ一時の疑ひとして、私の心の中に不問に付せられてゐた。然るに彼等が日光に來て同宿したことを發見するとゝもに、嘗て疑つてゐたことが全然事實として私の眼の前に開展して來た。凡ての疑ひが凡て事實であつたことが分つた。私はその時苦痛な興味に刺激された。そしてその宿帳に表はれた事實を發見するとゝもに、私はかういふことを推定した。

去年の夏から秋にかけて私は鹽原に二ヶ月あまり滯在してゐた。その時その學生は岡山の郷里から手紙を寄越して東京在學中世話になつたことを謝し、此度一家の事情で學校を退いて郷里に歸つたことを報じた。その手紙は東京の私の寄寓してゐる家にあてゝ寄越したもので、その家から鹽原に回送して來たのであつた。その時私は、その學生が郷里に歸つたことを知つたのであつた。

避暑客は疾に散じ、十月の紅葉の客も絕え、深い鹽原の溪は一日々々と木々の色が褪めていつた。山を揺り動かすやうな寒い風が吹いて來た。私はその山の中から十一月の初にやつと東京に出て戻つた。東京には彼女がゐると思つてゐた。それで歸つて來て、何よりも先にかねての知邊を訊ねて様子を聞く

と彼女は遠方にいつたといふことである。その内の婆さんはかういつた。
『おスマさん、先月の初めか先々月の末かにまた一寸、私の處に來ました。何でも此度は遠方に行くとかいつてゐました。來年の今時分までお目にかゝりません。といつてゐました。』
遠方といつて何處だらうと思つたが、その時は、その學生の歸郷といふことゝ關聯して考へることに氣が付かなかつた。遠方にいつてしまつて、彼女のゐない東京が、私には恰も親しみのない他郷の如く感じられた。私は無興味な日を徒消してゐた。
それが一度び宿帳に記された事實を發見するに及んで彼女が去年の九月ごろ遠方に行くといつたといふことゝ、學生が郷里に歸つたといふこととを聯想せしめた。彼等は郷里へ發向する一と月ばかり前に日光に行つたのである。
私は、それと察すると、すぐ彼等の行つてゐる岡山にゆくことを考へた。一昨年の九月にぷいと私の家を出ていつたきり、東京の中に住んでゐると知りながら、何處にゐるか分らなかつたのが、此度はさらに遠國にいつてゐる。東京では何うしてゐるか分らなかつたが、あの若い男と一處にゐると分つて見れば、もう手がゝりがついた。私は東京の二十分の一にも足りない土地に行つて彼女の居處を發見してやらう。さう思つて日光から歸つて來て、かねて私達のことについて口を利いた彼女の姉の處にいつて日光でこれ〳〵のことを調べて來たといふ話をすると、姉夫婦は、なるほどその學生は、彼女が老母と一處にゐる時に同居に置いて世話はしてゐたが、去年の九月に國に歸つてしまつた。妹は今でも東京にゐる。遠方にいつてゐない。と、いひ張つた。人のいふことを信じ易い私は、さういへばさうかも知れないと思つた。けれども今は假ひ男は國にかへり、女は東京にゐても、私の内にゐる時に良からぬ行ひ

そして私を欺いて口術を設けて家を去り、別に二人で一家を持つて同居してゐたことが分つて見れば、過ぎてしまつたことであつても一應彼等に會つて話をせねば心が治らぬ。愚かなことには違ひないが、自分の激昂した感情が穩かにならぬ。

「とにかく二人を私の前につれて來てもらはねばならぬ。それがあなた方の責任ぢやないか。一昨年私が、あれ等の間に可怪な素振りがあつた時そのことをいひ出したら、もしそんなことがあつたら、私があなたに代つて成敗すると、あなたはいつたぢやないか。」

さういつて、私は姉の夫を詰責した。

喧嘩腰になつて不貞腐れをいつてゐた彼は、私がどうあつてもさうせねば承知せぬ。といふので、困つた顏をしてゐたが、ぢや今後三日間猶豫してくれ、そしたら二人を連れて來るからといふ。

私は、その三日の間を熱を病むよりもまだ苦しい昂奮の狀態で待つてゐた。いや私の昂奮の狀態はその三日間に止らない。一昨年の春私達の間が段々不和になつて、それから別れるともなく別れた時から繼續してゐるのであつた。私は今日になつて、かゝる種類の昂奮を最も恐れてゐる。私は男女間の問題から起る斯る神經の昂奮をば今後死ぬまで經驗せざらんことを欲する。

殆ど全く不眠の狀態でその三日間を過した四日目になつて、私はまた姉の家にいつた。

「今、内が歸つて來ました。」姉は、もの〳〵しい顏にわざと微笑を表はすやうにしていつた。

姉の聲を聞いて奥から顏を出した主人は險相な顏を一層險相にして、そは〳〵しながら、

「おいでなさい、上つて下さい。」

と、いつたが、私に詰めて來られるのが、厭な物に心を襲はれてゐるやうに見えた。

私は、それを看てせめても遣る瀬のない欝憤を晴すことが出來るやうに思つた。

二階に上つてゆくと、そこには眞島がクリーム色の洋服姿で座つてゐた。

「やあ、暫くでしたなあ。」

落着いた口調で彼は挨拶をした。

彼女の兄もそこに來てゐた。

姉の夫も上つて來て膝を並べながら

「淺海さん、君、一と口くらゐ挨拶をしても可いだらう。わざ〳〵岡山まで行つて來たのだから。」

主人は神經の亢奮した、落着かない調子でいつた。彼は三日間猶豫をしてくれといつて置いて、自分で岡山までいつて眞島を伴ふて歸つて來たのであつた。いくらか取逆せてゐるやうになつてゐる彼は、それをいふのを忘れて私が、それについて挨拶をせぬのを不服さうにつぶやいた。

「あゝ、さうですか。あなたが。わざ〳〵岡山まで眞島君を迎へにいつたのですか。」

私は、初めて聽いてさういつたが、彼が自身岡山まで眞島を迎へにゆかうとも、また書面で呼び寄せやうとも、それは彼等の責任の範圍内のことであるから私の方からその勞を謝する必要はないと思つた。そしてむしろ、私が日光で宿帳を調べて事實を發見した結果、物の道理の解らない、いけ好かない奴だが根が正直な氣の小い姉の夫が、急がしい職人稼業の手間を三日も潰して自身でわざ〳〵岡山までも眞島を迎へにいつた馬鹿正直を、心で憐れみもしたり、可笑しくも思つた。

「さうですか、岡山までいつて來たのですか。」私は重ねていつて、顏で少しく笑ひ乍ら眞島の方を見た。

「初め來られた時に吃驚しました。私家にゐると、店の者が此の方の名刺を持つて、東京から淺海さん

といふ人の親類の人が來てゐます。と、いつて私の處に來たので、どなたかと思ひました。」

眞島は、さういつて主人が訪ねていつた時の模樣などを靜に話した。

「あんな遠方に今度、淺海さんお前のお蔭で初めていつて見たが、その代り變つた土地を見て來た。」

主人は、私のために彼等の秘密にしてゐた事實を嗅き出された上にそんな暇潰しをさせられたのが、さも口惜しくつて〳〵堪らないかのやうに私をお前呼ばりさして刺々しい物のいひ振りをしながら、眞島に向つては打つて變つた優しい調子で

「眞島さん、あれは何處でしたかな、奇麗なお城のあつたところは。汽車の中から眞白に見える。」

「姫路でせう。」

「あゝ、さう〳〵姫路か。それから須磨舞子。好い處が澤山ある。……時に淺海さん、さあ、かうして眞島さんにわざ〳〵來てもらつたのだから、君の意見をいつてもらひたい。」

鋸や鉋を持ちつけた彼は指端をブル〳〵顫はせながら卷煙草を吹かしてゐた。

「さあ早く君の思つてゐることをいつてもらひたい。私達はお前さん方のやうに遊んでゐられない身體だ。階下には受負ひ仕事が、もう日が切れてゐるのを延ばしてもらつてゐる。」急がしさうにした。

「どうもあなたには濟みませんでした。お急がしいところを。」

お人好しの女の兄はそんなことよりいへなかつた。

「さあ、淺海さん、何でも君の思つてゐることをいつたら可いぢやないか。」

主人は焦々していつた。

「そんなに焦々しなくつたつて、いふさ。いふけれど、眞島君一人ぢや仕方がない。女はどうしたので

す。女も此處に出してもらひたい。」
　三人は暫らく默つてゐた。
「女はどうしたのです？。」
「女には關係がない。」主人はやけ糞らしい口調でいつた。
「そんな馬鹿なことがあるものか。」私は、嘲笑つたきり默つてゐた。
「奥さんに來ておもらひになつたら、どうです。」
　眞島は兄達に對つてすゝめた。
　けれども彼等はそれには不承知であつた。なるほど眞島がまだ東京にゐる間は同居にゐてもらつて所帶の足りにもしてゐたが、彼が故郷に歸つてから、間もなく神田邊に嫁いでいつてゐるから、今いつてゐる先から、そんな過ぎ去つたことで暇をもらつて寄越してもらふことはむづかしい。といひ張つた。
　私は、しばらく默り込んでゐた。それが眞個であらうか。私の家にゐる間に此の眞島と私の眼を忍んで、體よく別々に私の家を出ていつて、それから去年の八月日光に行つて一緒に泊つたころは一緒に家を持つてゐて、九月に眞島が故郷に歸つたきり、彼等は別れてしまつたのであらうか。私は疑ひ惑ふた。
「神田邊は何處に嫁いでゐるんです？」私は、溫順しく默つてゐる實の兄の方に訊ねた。
「何處へ嫁いで居らうとも、それは關係のないことだ。」
　姉の夫は横から引取つて喧嘩口調でいつた。彼の險惡な顔付と物のいひ振りが倍々私の神經を刺激した。
「それは關係ないさ。しかし眞島君一人を對手に話は出來ぬ。女を連れて來るまで待つてゐるから、ぜひ連れて來てもらはう。」

私は、道理の分らぬ奴等だとは思ひながらも、對手の出やうが癪に障つてゐるのでいつまでもそこに居据つてゐる氣勢を見せて、また默つた。
『來てもらひになつたら、どうです。』眞島は時々彼等に、女に顏を出さすやうにすることをすゝめた。
『さあ……どうだらう？好い鹽梅に家にゐるか知らん。』
彼等は顏を見合はした。
私は、正直にいへばその時少しも眞島に會ひたいとは思はなかつた。たゞ彼女が見たかつたのである。彼女と眞島とを私の前に置いて私の欝憤を晴らしたかつたのである。
兄達が相談してゐる風につけ入つて私は
『ぜひつれて來て下さい。』と迫つた。
『さあ、先方で承知して寄越してくれるか知らん。』
『此間一寸來た時にも、裁縫が大變で急がしさうにいつてゐたから、どうか。』
そこへ階下から上つて來た姉はさういつて應へてゐた。
『おや、やつぱり彼女は眞個に東京にゐるのだな。』私は、心の中でさう信じて來た。
『とにかく先方へさういつて連れて來て下さい。』私は姉の方に向いて鄭寧にいつた。『どんな處に嫁いでゐやうとも、その方には、私は文句はないのだから。』
『えゝ。』姉は資え切らぬ返辭をしてゐた。
逆上していくらか氣の狂つたやうになつてゐる主人は突如に兩手の指で小供がするやうに赤んべえをしながら

「どうぞ連れて來て下さい。」

私のいつたとほりのことをいつて、厭らしい聲を出した。他の者は、はゝと笑つた。

「何をいつてゐるんだい、五十男の癖に。」

私は、馬鹿々々しくなつて來た。

「お前こそ何をいつてゐるだい。疾の昔に濟んでしまつただらしのないことをいつて來るない。」

今度は嚙み付くやうな聲を出した。

「濟んでしまつたことぢやない。よくないことをして、今まで隱してゐたのぢやないか。その埒を明けてもらふのだ。」

「羽織ごろつき！二年も三年もかゝつて、そのことばかり探してゐたんだから。新聞記者や辯護士に友達があるんだから。」

私に向つていつてゐるかと思ふと、あとは慴えたやうに獨語をいつてゐた。さうかと思ふと、聲を出して泣きながら

「眞島さん、さういつて置きます。私は今度のことについて、夫婦別れをしなければならないことになるかも知れません。あなた方同じ國同志で味方になつて、私達のために惡いことをいはないやうに賴みます。」さういつて主人はおい〳〵泣き顫ひをした。

私はその醜さと可笑さに思はず眼を閉ぢた。

眞島も呆氣にとられたやうな顏をして

「そんなことがあるものですか、私が淺海さんと同じ國だからといつて、それであなた方の爲にならぬ

やうなことをいふなんて。そんなことがあるものですか。」

そんな風で座がだらしのないことになつてしまつたので、その日は話をするのをやめて私は眞島とは國の中學校時代から友達であつた甥をして處を變へて打明けた話をさした。けれども眞島は何處までも彼女とは關係のなかつたことをいひとほした。私も直接に眞島に、ありのまゝをいつてくれるやうに、なんども話をして見たが同じことを繰返へすに過ぎなかつた。

翌日は神田から彼女をつれて來ることになつてゐたので、私は、彼女とよく知つてゐる私の友達に賴んで甥と二人で、やつぱり姉の家で眞島と二人ゐる處で話すことにした。

私の方の話といふのはかうである。彼等に良くない行跡があつたに相違ない。それが假ひ過ぎ去つたことであつたとしても、私の家にゐる間にさういふことをしておきながら、私が手證を抑へぬのを幸に生活難を口術に不貞腐れの喧嘩を吹きかけて、別ればなしを持出し體よく私の家を出てゆきその後長い間彼女は眞島と同居をしてゐた。しかも同じ目と鼻の牛込區內にゐながらそれに私の氣が付かなかつたのは、此方が何處までも愚鈍ではあるが、四十二年の九月にふつと家を出ていつたきり、翌四十三年を一年置いて、今四十四年の五月になつて、漸くさういふ行跡のあつた手がゝりを得た。此方の愚かさとはいひながら、欺されてゐたといふのがどうあつても堪えられぬ。近い處にゐて、足掛け三年分らずにゐたと思へば向ほのこと殘念だ。しかし此處まで彼等の行跡を探つた以上は、まさかそんなことがなかつたとはいへまい。

此方の憤怒の情からいつたら、向の身を八つ裂きにしてやつてもまだ腹が癒えぬのであるが、まさかそんなことをして法律上の罪人になるやうなことも自分としては出來かねる。たゞ此の上は、さういふ

ことがあつたと、一と口素直に謝罪をしさへすれば、私の腹は癒える。さういふ私の心持ちを飲込んで友達は中に立つて話したのであるが、容易に話の埒は明きさうになかつた。私は他にゐて、話の結果を待つてゐたが、朝が晝過になつても、そこから何とかいつて來る筈になつてゐるのに、使ひは來なかつた。私は待ちあぐねて姉の家を覗いて見た。

するると丁度彼女が階下で動いてゐるのが店頭からちらりと見えた。互に一昨年の九月から見なかつたのだ。向も此方を見たと思はれて、はつと神經質らしい笑顔をしたが、そのまゝ姿は見えなくなつてしまつた。

私は、凝乎と見詰めるやうに笑ひもせずそれと見てゐたが、今彼女の見せた痙攣したやうな笑顔には私に對する懐かしみも流石にまだ殘つてゐるのであらうと思ふと少しも早く會つて見たかつた。

「とにかくこれから君のところへ眞島君と妻君とを連れてゆくことになつたから、君からよく話して見たまへ。」

丁度そこへ出て來た友達はさういつた。

「それからよく君にいつて置くが、妻君を君の處につれて行くのもいゝけれど、妻君に負傷でもさすやうなことがあつてはならぬといつて、それを此處の家で一同心配してゐるんだから、それは僕が預つて行く以上は、君にそんなことはさせぬといつてあるのだから、君もそのつもりでゐてくれたまへ。……おや君は先へ歸つてゐる方が可いだらう。」

友達がさういふので、私は朝から待ち合はしてゐる處へ歸つた。

その後からすぐ眞島がやつて來た。友達と甥とにつれられて彼女も來た。

十八

私は別室で眞島と二人差向ひで靜に話を持出して見たが、殆ど私が一人口をきくばかりで、彼は「そんなことはありませんです。」と同じことを繰返へすに過ぎなかつた。

今度は彼女と差向ひになつて話した。一昨年の九月に私の家を出ていつたきり見なかつたのである。その間知邊の婆さんの處で噂ばかり聞いて、いつも行きちがひになつてゐた。

「昨日か一昨日おすまさんが來ました。」といふ處へよく私は行き合はした。

今見ると、婆さんが噂さしてゐたとほりに前齒の缺けてゐたのを、二枚義齒をしてゐる。それが妙に以前の相好を變へてゐる。眞島にこしらへてもらつたのであらう、田舍染みた柄のお召の袷衣に、帶は昨年まだ私の家にゐる時分に私の好みでこしらへてやつた水色繻子にやつぱり同じ水色の羽二重に白く笹の葉の絞りを染め出したのを晝夜にしたものであつた。私は何だか「おさん茂兵衛」のおさんが處刑の際に着てゐた着物の色を聯想した。けれども怨みと執着とに滿ちた心で三年がけ行くゑを探して、やつと今面と向つて會つて見ると、さうなくてさへよく顏變りする彼女の顏は三年だけ老いて見えた。

私の怨みと執着との底には情欲があつた。然るに今久しぶりで會つて見ると、その情欲は自然に霧散してゐるのが、自分ながら感じられた。けれども尚ほ私に殘つてゐる執着の念は、いろんなことを問ひ糺さしめずには置かなかつた。

「お前は神田の方に嫁いでゐるといふのは何處に嫁いでゐるんだ。」

日光で宿帳を發見したときには、彼等が二人で岡山に遠隱れしてゐることを見え透くやうに判斷したが、此の間から兄姉の話で、私は、ぢや神田邊に嫁いでゐるのだなと思ひ込んだのである。

すると彼女は少しく考へるやうにしてゐたが

『嫁いでゐるといふのは、齋藤の世話になつてゐることでせう。』といつた。
『齋藤といふのは、姉の家と同じ西洋家具商で、三十人も手代や職人を使つて手廣く商賣をしてゐるといふことを私は以前彼女からよく噂には聞いてゐた。初めは思ひ出せなかつたが、やつと思ひ出せて來た。
『あゝ、あの齋藤の世話になつてゐるのか。』
『えゝ。』
私は。それを聞いて、かう思つた。なるほど、さういへば、此の間兄達が、彼女が神田邊に嫁いでゐるといふのを口ごもりながら言つたやうであつたが、あれは妾になつてゐるので、それで言ひにくさうにしてゐたのだな。さう思ひ込むと、私は、もうすつかり彼女は齋藤の世話になつてゐるといふことに少しの疑ひを挾まなかつた。
『いつからさうなつたのだ？』
彼女のいふのでは、去年の九月に眞島が東京を引拂つて郷里に歸つたあと、それまでゐた若松町の家を疊んで彼女は老母と二人で津久士前の姉の家のすぐ裏の二間ばかりの小さい處に越して來た。そのうち一度齋藤が姉の家に來た時いつものとほり酒が出たので、自分がその手傳をして、二階で齋藤と二人きり差向ひになつてゐるとき、ついそんなやうな話になつてしまつたといふのである。
『あなたまた、こんなことを齋藤の內へ行つていはないやうにして下さい。あなたのやうな人だからまた齋藤の內輪をもむやうなことをするかも知れない。』
彼女は懇請するやうにさういつた。
私は、心の中で、これは好いことを聞いた。都合によつては一つ齋藤の家の內儀さんに會つて焚きつ

けてやらうと考へた。

「それでお前は齋藤から月々どうかしてもらつてゐるのか。」

「えゝ」

「いくらぐらゐもらつてゐるんだ。」

「私の方へ月々三十圓。それから老母(おばあ)さんの小使ひにといつて十圓づゝ出してくれます。」

彼女は考へ〳〵いつた。

「私もどうせこんな運の惡い人間ですから、まあ一二年さうして辛抱してゐて、多少でもお金が殘つたら、また齋藤の方で品物を分けてくれるなりして、姉の家から寄越してくれるしあんな物の店を出さしてもらふ筈になつてゐます。そして小供を一人もらつて私はもう何處へも嫁かないつもりです。」

まことしやかにいつた。

「それでお前、齋藤とそんなことになつて、よく内儀さんが知らずにゐるねえ。いつかも齋藤が戸塚の方へ妾を隱してゐたのが分つたといつて、喧しかつたぢやないか。」

「ですから、今度も私とそんなことになつたのを姉さんの處でも初めは私にひどく喧しくいひましたさ。此の前妾を置いてゐた時には此方が仲に入つて話をつけたりしたのに、現在家内の妹とそんなことがあるのを默つて見てゐられないつて、さういつたけれども私にしても齋藤にしてももう若い者ぢやないしするから、無分別なこともすまいし、さうなつたものなら今更ら仕方がない。たゞ内儀さんに隱して置きさへすれば可いからつて、姉達もそのまゝに知らぬ風をしてゐることになつてゐるんです。ですから、あなたもお願ひですから、默つておいて下さいよ。」

彼女はさも〳〵まことしやかにいつた。

私も、それでは眞島とは去年の九月に別れたきりその後齋藤の世話になつてゐるのが眞個だなと思ひつゝ「だけど眞島と關係のなかつた筈はないがなあ。」

と、私は齋藤とのことを聞く前にも繰返へして聞き糺したことを、また繰返へして訊ねた。まだ眞島などが私の家に一緒にゐる時分に私の目に留つた二人の間の可怪な樣子を一々細かに思ひ出して訊ねた。

「今は齋藤の世話になつてゐるとしても以前私の家にゐる間に眞島とそんな關係があつたのだから、それを訊くのだ。あつたら、あつた。と、いひさへすればそれで可いのだ。」

私は何處までも穩かに訊ねた。

「そんなことはありませんといつてゐるぢやありませんか。何度いつたつて同じことです。第一そんなことがあつたとしたら、眞島さんが國に歸りやしません。」

彼女は、きつぱりといつた。

さういはれて見れば私もさうかと思つた。それで稍々しばらく默つてゐた。けれども眞島に關する疑念はまたしてもすぐ盛り返へして來た。

「十四も歲の若い男とよくそんな態が出來たものだ。」

私は嘲るやうに放言した。すると彼女はしばらく默つてゐたが、何か複雜な情に堪りかねたと思はれて、

「眞島さんと關係があつたら、あつたで可いから、そんならあなたの思ふ存分にして下さい。」と、きつぱり言ひ放つたが、段々ヒステリーな口調になつて、「さあ、思ふ存分にして下さい。さあ私を突くなり殺すなりして下さい。……」

終に唸るやうな泣き聲を立てつゝ私の肩先に乘りかゝつて嚙みつかうとした。その物音を聞きつけて襖の彼方に控へてゐた友達と甥とが驅込んで來て彼女を取押へた。

私は、今その時のことを思ひ出して見ても慄然とするほど淺間しい不快な心地に堪へられない。

「さあ、もう歸りませう。」友達は彼女を宥めた。「君、もう話すだけのことは話したのだらう。一寸といつて、僕が此の女(ひと)を預ることにして來てもらつたのだから。」

「えゝ、もう歸ります。」女は平靜になつた。

「私が送つてゆきませう。」友達がさういふのを、

「なに一人で歸ります。ぢや眞島さん、私一人でお先きにかへります。」さういつて彼女は歸つて行つた。

それで私の感情は少しも滿足出來なかつた。一應仲に入つて口をきいてくれた友達も手を引いてしまつた。一昨年私の家にゐる時分に私が認めた彼等の可怪(おかし)い素振りを今思ひ出して、あゝいふこともあつた、かういふこともあつた。それだからお前達は私の眼を忍んでゐたのだといつても、

「そんなことはありませんでした。」

と、いひ切つてしまへば、それ以上にどうすることも出來なかつた。けれどもそれでは私の感情がどうあつても滿足しなかつた。私は最早それ以上他人に向つて私の痛ましい心情を打明かすのは無駄なことだと思つた。さうして唯獨りの心に閉ぢ籠つて、人間といふものゝ決して信愛すべからざるものだといふことを思ひつゞけてゐた。人間は到底獨りきりのものであるといふことを痛切に思ひ知つた。

その頃までの私は、自分ながら心持ちの好いほど溫かな人間であると思つてゐた。それが溫かであることはつまらぬことであるとさへ思ふやうになつた。何にしても私は彼等を疑はなかつたことを悔ひた。

さうして彼等の行つたことをいろ〳〵に妄想に描いて、吾れとわが心を腐らしてゐた。それのみならず姉の夫などを對手にしてさういふことを繰返へして話をすることに名狀しがたい嫌惡を感じた。

けれども私の感情はどうあつても滿足出來なかつた。抑へてもおさへても抑へ切れぬ憤怒の情と執着の念がまたしても頭を擡げて私の精神を腐蝕せしめた。私は自分で自分の心持ちをどうすることも出來なかつた。さうして同じことを晝夜の別なく心の中に繰返へして描いては怨んだり悔んだりしてゐた。私は自身の想ひに疲れて生き効ひのない日を消してゐた。

すると三四日經つてから四十あまりの知らぬ男が訪ねて來た。彼は彼女の一族の者に賴まれて來た。此度の話について自分が代理人として和解をしたい。そのつもりで今後は一切自分に話をしてくれといつて、勿體ぶつた委任狀のやうなものを取出して見せた。

「あゝさうですか。」と、いつたが、私は自分の精神上の問題に、そんな男が立入つて來ることを最も好まなかつた。それよりもこの三四日來つゞけてゐたやうに晝間も寢床に橫つて、到底他人に啓示することの出來ぬ心の奧のおくの痛ましい感情に思ひ耽つてゐる方が好ましかつた。

「それは折角のお骨折りで痛み入りますが、私はもうその事については、どうもしないつもりでゐるのです。」

「しかし私もよく譯をきいて全くあなたがお氣の毒だと思つてゐるのです。とにかく二三年といふもの、あなたは殆ど何もしないで、そのために貴重な時日を無駄に費してゐたのだから、彼等にさういふ行ひがあつたことが明になつた以上は相當の話を付けたら可いぢやありませんか。」怪しい漢語交りで話した。

「相當な話とは。」

「つまり先方では、あなたがお氣の毒だから、もとより御不自由はないとは思ふが、お見舞として失禮ながら何程か差上げたいといつてゐるのです。お收めになつてはいかゞです。」

「私に金をくれやうといふのですか。」

「その金といつては失禮ですが、金といはずにお見舞として……あなたも隨分この事については心も痛め、それがために身體も害しておいでになるさうだから、多分のことは出來なくつても一と月か二た月何處か溫泉場へでもいつて養生の出來るくらゐのものを見舞として差上げたいといつてゐるのです。さうしてこれは私がいふんだがもうあなたもこのことさつぱりとこれ限り諦めてしまつて、養生でもして身體を直して、あんな不貞腐れの女でなく好い奥さんでもおもらひになることを考へた方が好いぢやないか。」

彼は鄕導な口上をきいてゐながらそれを裏切るいけぞんざいな言葉でいつた。

「難有うござんすが、いや、私はそれは諦めないつもりです。」

「それはいけない。諦めないといつたところが、どうすることも出來ない。あなたは女を元に戻すといつても、どうあつても戻らないといへば仕方がないぢやないか。」

「私も最初はも一度元へ戻したいと思つたが、今では眞島とは違ふ、他の男の世話になつてもゐるさうですし、もうさういふ考は私にはありません。たゞ私はひどい目に欺されたことを一生怨んで居らうと思つてゐるばかりです。どんなことがあつたつてこの怨みを忘れやしない」私は言葉を强めてさういつた。

「はゝゝ怨むなんて、そんなことを思つてゐるのは、畢竟あなたの損だ。つまらない。」

こんな押問答をしたが、話は果てしがなかつた。

「とにかくこの話のつくまで、おすまは私があづかつてゐるのです。あなた何處がよくつて、あんな女が忘れられないのだ。」彼はさういつて私に思ひ切らして、先方の申出を納得させやうとした。

「向が出さうといふのだからいくらでも金を取つておいた方が、あなたの得だ。君が一生怨んでゐて忘れないといつたところが、この話はもう二年三年も前の黴の生えた事だもの。今日になつてそんな話を持ち出したつて、向が惡い人間だつたら、そんな下らぬことを取上げやしない。馬鹿だといつて笑つてゐらあ。君の災難と思つて諦めるより他はない。」

「それは馬鹿といはうと、何といはうと勝手だが、あつたことは古いことでも、それをいよ〳〵さうと知つたのは新らしいことだ。……それよりも女はあなたが預つてゐるのですか。」

私は、その時道理もなにもなかつた。やつぱり彼女に會つて三年越しの怨みを思ふ存分にいひたいが腹一ぱいであつた。

「とにかく私は金は入らないんですから。あなたが預つてゐるなら、彼女に會つて私の思つてゐることを話しませう。」

「逢つて見やうと思ふなら、あつて見ても可いが、とても戻る氣はないんだから駄目だよ。」

けれども私はその翌日その男の澁谷の家まで出掛けていつて、そこでまた彼女に逢つた。私はこの間もいつたとほりのことをまた靜かな口調で嘲るやうに繰返へした。

「ですから、あなたがさう思つてゐるなら、私を斬るなり殺すなりしたら可いぢやありませんか。」

「………………」

「あなたはよく手紙でそんなことを書いて寄越したぢやありませんか。臆病者が。」女はさういひながら

せゝら笑つた。

「ぢや思ふやうにしてやる。」私は起ち上つた。

「こら、何する。」傍についてゐた彼の男は靜に手を上げて私を支へるやうにした。「お前はもう彼方へいけ……。」さういつて彼女を去らしめた。

「君駄目だよ。あれだからとても駄目だよ。君が切れ物を揮り廻はしたつて、此方は恐れはしない。とてもそんなことは君に出來やしない。刀を揮り廻はすんなら此方も隨分やつた方だ。こゝにちやんとかうしてある。」

かれはさういつて押入れから刀を取出して拔いて翳して見たりした。

「茨城縣で自由黨の壯士をしてゐた時分にやられたんだ。これ。」

と、いつて彼はくるりと着物を捲つて太股を貫通した、見るから氣味の惡い大きな創痕を見せたりした。

「とても戻る氣はないんだもの。」彼は語勢を强めていつた。

けれども私は、自分でも彼女の心が全然私から離れてしまつてゐることを知れば知るほど、どうあつてももう一度彼女の心を私に近づけて見ねば感情が滿足しなかつた。さうでなければ私の推定してゐる事實を明白に告白するかしなければ三年の間痛めつけられてゐる私の感情が摅へられなかつた。

「だから此處でいくらでも向が出さうといふ金を取つておいた方がいゝんだよ。」

傍で何といつて說いても慰めても私が凝乎と陰氣に思ひ沈んでゐるのを見て彼の男は頻りに金のことを繰返へした。

その日はそのまゝにして私は家に歸つた。

「まあ、よく考へて見るさ。女は話のつくまで私が預つてゐるから。」彼はさういつてゐた。

私は、やつぱり家にゐて晝夜の別なく自分の堪(こら)へられない感情に吾れと苦んでゐた。

翌々日になつて彼男はも一人(ひとり)知らぬ男とつれ立つてまた私の下宿に訪ねて來た。

「どうです。決心が付いたですか。」

彼は強ゐるやうにいつて、私が金を受入れることを執拗に勸めた。

「君、いくら思つても駄目だよ。おすまは君が思つてゐるやうに齋藤の妾になつてゐるといふのは嘘なんだよ。やつぱり君が最初思つてゐたとほり眞島とこれなんだよ。」

彼は母指と人さし指とをくつ着ける眞似をしていつた。「君がいくら思つても、二人(ふたり)はとても離れやしないよ。」

「いや、そんなことはない。それは君がよく知らないんだ。」私は、今は彼女が眞島と一緒でゐることを強く否定した。

「あれ、それだから君は駄目だといふんだ。」彼は笑ひながら連れの男と顔を見合はした。

「やつぱり眞島と一緒ですよ。」も一人の男も笑ひながらいつた。

私は彼等の笑ふ顔を見守りながら稍々心に疑ひを萠した。けれども彼等よりも私自身の方が、事實の眞相をよく知つてゐるのだといふ自信があつた。

「いや、そんなことはない。眞島とは關係があつたには、あつたと思ふが、去年の九月に別れて、今は神田の方にゐるんだ。」

私は、この間彼女から、今の境遇を聞いた翌日「あなた、また齋藤の家を搆まないやうにして下さい。」と、彼女が顏を顰めながら眞實をこめたやうにして言つたのを、そのとほり神田の齋藤の家まで出掛けていつて、そこの內儀さんに言ひ告げたのであつた。

「齋藤さんには、私は少しも怨みのあるわけはありませんが、彼女が自分でさういつたのですから、それに相違ありません。」

私はさういつて、この間本人から聞いた彼等の間の後〻の口約束やら、彼女と眞島との間にあつたことなど細かに內儀さんに話した。

「さうですか。おすまさんには姉さんの家でちよい〳〵會つてよく知つております。あなたが淺海さんですか。あなたのお名もよく聞いて知つて居りました。……あの方、そんなことをなさるんですか。」

內儀さんは呆れたやうにいつた。

「けれど良人がそんなことをしてゐますかなあ。私は、ちつとも存じませんよ。」小首を傾けながら、容易に信じられなさゝうにした。

「ほんとに違ひありませんよ。こんなことを申しては、私が齋藤さんとあなたに濟みませんけれど、さういふ理由で齋藤さんには私は少しも怨みはありませんのですから。しかし眞個ですよ。」

「さうですか、そんな約束してゐることまで、あの方が自分でお話しになつたのですか。」

さういふ內儀さんの顏は、私の話しの急處〻〻で、さつと顏から血の色が青く變じた。それを見るたびに私の感情はいくらか滿足した。

「それは君が、おすまに甘く騙されてゐるんだよ。何で神田なんかにゐるものか……これだから、全くこの人が氣の毒なんだよ。」

彼は、いた〱し氣に眉根に輕く皺をよせながら、またつれの男を顧みながらいつた。

「うむ、あなたが間違つてゐるんですよ。やつぱりおすまは眞島と一處だ。……あんまり君が正直だから。……おすまといふ女は余程いけない奴と思はれるな。」

連れの男は肯きつゝさういつた。

「いけない奴にも。莫蓮者さ。君はいけないよ。君はおすまの頭の突先から足の爪先まで惚れ込んでゐるから騙されるんだよ。」彼は焦れつたさうに言つた。

「さうかなあ……さうぢやないと思ふがなあ。」私は、どうしても二人のいふことを眞實と思はなかつた

「はゝゝゝゝ」と、二人は笑つた。

「まあ君がさう思ふならそれでいゝから。おすまに會ひたければ、家にあづかつてあるから、とにかく明日もう一遍家に來て下さい。」

二人はさういつて歸つていつた。

私は、それがために假ひ恨んだり苦んだりするにしても、自分の胸の底で一人で思ふまゝに苦んだり恨んだりしてゐやうと思つてゐるものを、自分とは何等の關係のない彼等のために私の心の奥のおくの虛僞もいつはりもない大切な感情が街頭の風塵に曝されるやうで、その事について彼と話しを交へるのが厭でいやで耐らなかつたけれど、やつぱり彼女に會つて見たくつて、それに引かされて翌日また澁谷まで出かけて行つた。

「今、久しぶりに頭髪を結ふとか言つてゐたから、直ぐ歸つて來るよ。」と、いつて私を何時までも待たしておいてやつぱり金を受入れることを強ゐるやうに勸めた。

神經に疲れた私は、五月の末の惱ましい日を晩まで待つたけれど女は顏を見せなかつた。

「どうしたんだらう。いつて見て來い。……ナニ家が狹いから、一寸此の先の方に間を借りて置いてあるんだ。」

そこの女房はいゝ加減經つて階段から顏を覗けながら

「今日頭髪が出來ると、久しぶりに牛込に行くといつて出たさうですよ。きつと姉さんの家にでも行つたのでせう。」

「さうか。ぢや今に歸つて來るだらう。君は今晩自家に泊るさ。」

彼はさういつて、またしても金を受取るやうにすゝめた。後には脅かすやうな氣勢を見せて來た。

「おすまに話があるなら、また後で話すとして、とにかく金を取つたらどうだ。さうして甘い物でも食べた方がいゝよ。」

「さうしようか。」私は主人と夕飯を食べながら、さういつた。

「さうなさいよ。」女房も口を添えた。「おすまさん、昨日一處に洗湯にいつたとき剃刀を持つてゐました。」

「へえ、そんなものを持つてゐて。あなたよく分つたなあっ」

「そりや分りますさ。人を見つけてゐますもの」

澁谷のその邊には曖昧な料理屋が軒並にあつた。首を眞白に塗つた女がそこら中にゐた。そこの家にも二人ばかりそんな者がゐた。

『あなた持つてゐるんですねえ。といつたら、えゝ私覺悟してゐるんです。これさへあれば淺海がどんなことをして來たつて大丈夫です。と、そんなことを言つてゐましたよ。』

私は、それを恐れもしなかつたが、いろんな手で、そこの家で私を囚へて置くやうにするので、それを逃れるために、いつそ百圓の金を受取らうかと思つた。

『さうしたら、君今後一切此の事について何にもいはぬといふ證文を書いてもらはねばならぬ。』

『それは書くのは厭だ。』

『そんなら君、金は出されないよ。』

『私は別に金は欲しかあないんだ。たゞあなたが受取れとすゝめるから受取らうかと思つたんだ。そんなら百圓くらゐの金は取らないで、やつぱり此の事をいつまでも恨みに思つて一生おすまに祟つてやる方が私にはいゝんだもの。』

『何だ。いはしておけば勝手なことをいつてゐらあ。さあ金を取つて今後一切文句をいはぬといふ證文を書け。』彼は突如怒鳴りながら持つてゐた長煙管を振り上げて餉臺をがちやりと叩きつけた。

私は吃驚したが、『何だ百圓なぞの目腐れ金が。……一生祟つてやるんだ。』靜にいつた。

『何も斯も分つてゐるんだから困る。』

彼はさういひながら、先刻入つて來て、そこにゐた昨日一緒につれて來た男の方を見た。

彼等は最初から、私を自分等より遙に學問のある人として遠慮して取扱つてゐる風があつた。

『ふゝん千圓も出せば、證文を書いてもいゝが。』

彼等を飲んでゐるのが私には好い氣持ちでもあつたが、事實私はこの三年の長い間の感情の債務を思

へば、千圓はさておき一萬圓にも換へることが出來なかつたのである。つまりどうあつても金に換へることが出來ぬのである。

千圓といふ聲を聞いて、彼は靜になつて暫らく默つてゐた。

その夜は私は仕方なくそこに泊められた。

翌日も午過ぎまで彼女の歸つて來るのを待つた。

あるじは昨日のやうに金のことで私に壓迫を加へやうとしなかつた。彼は庭を掃いたりそこらを形付けたりしながら、偶に思ひ出したやうに

『もう歸つて來さうなものだ。』と獨語のやうにいつてゐたが、何となく心はそこになさゝうで、顏に何か思案してゐるらしい色が見えた。私はそのわけを知らなかつた。

『いつそ、言つちまはうか。』

そこに來て煙管を取上げながら舌持ちをしていつた。

『そんなことをしても可いんですか。』女房は强く窘めるやうにいつた。

『うむ。』と、やゝ久しく考へ込んでゐたが、彼は『構はない。言つちまへ。君、眞實をいふがねえ。おすまを預つてゐたといふのは噓だよ。』語勢をつよめて言つた。

私は、それを聞いてはつとなつた。

『噓なの。もう神田へ歸つたの。』

『神田ぢやないよ。もう疾に眞島と一緒に岡山に歸つたよ。君が馬鹿正直だから甘くあれ等に騙されてゐるんだ。』彼は感慨に滿ちたやうな聲でいつた。

私はそれをきいて、全身に毒がまはつたやうな胸苦しさを感じた。

『ぢや神田の齋藤の世話になつてゐるのといつたのは嘘ですか。』

『君は騙されてばかりゐるんだ。此の間も新吉が迎へに行つて眞島と一緒に東京に出て來たんだ。もう今時分は岡山に歸つてゐらあ。君が何と思つても、大熱々だもの。とても離れやしないよ。』彼は燃き付けるやうにいつた。

『さうか。』私は獨語のやうにいひながらいつまで彼等に欺かれてゐるのであらうか。八つ裂きにしても尚ほ飽き足らぬ奴等だと思つた。

『此家にあづかつてゐたといふのはそんなら嘘だつたのか。』私は、あまりに自分の愚かさを思つて、その愚かさの耻を押し隱すやうに、わざと笑ひを作つていつた。

『嘘だよ。……先達つて此處で君が會つたあの翌日眞島と一緒に急行で岡山に歸つてしまつたんだ。』

『あの翌日もう歸つてゐたのか。』

私は飽くまでも愚かな自分の身體を掻きむしつて叩きつけたいやうに思つた。

『ぢや一昨々日だな。』

『さあ一昨々日になるか。……とにかく歸つてからもう三四日になるよ。』

『さうか……おのれ畜生め。仇を打つてやるぞ。これから明日の最大急行で直ぐ岡山に行く。』

私は腹の底から搾り出すやうな痛ましい聲を出して憤慨した。

『そら御覧なさいな。』

そこにゐた女房は、私がそれをきいてさながら怨み骨髓に徹するとでもいふやうに俄に煩悶し出した

のを、默つてあてがつた毒藥の利くのを見てゞもゐるかのやうに、物々しい顏で亭主にいつた。

「一體あの新吉が惡いんだよ。彼奴が惡黨だ。彼奴が岡山に行つて三人で相談して來たんだ。……君が看す〻彼奴等に騙されてゐることを此方は知つてゐながら、それを甘く隱してゐる切なさといふものはなかつたよ。」

「私の方まで一緒になつてあなたを騙すつもりはないんですけれど、話の順序でついさういふことになつたんです。」女房はさういつて取り做した。

「いえ、眞實のことを言つてもらつて、私はどんなに嬉しいか知れない。あなた方にさういつてもらはねば、また何時までも騙されてゐるんだ。」

「日光で宿帳を調べたやうに、岡山にゐるとは知らずに此度は神田中を探してゐたんだ。いくら探したつて東京には居りやしない。』亭主はさういつた。

「でもおすまさんといふ女は、つく〴〵私、恐ろしい女だと思ひましたねえ。……またあなたが、あの女のいふとほりに、さう思つてしまつたんですつてねえ。此の間此處で自分でさういつてゐましたよ。なに大丈夫だ。私が齋藤の世話になつて神田の方にゐるといつたら、淺海がそのとほりに思ひ込んでゐるから、岡山までやつて來る氣使ひはないつて。』

女房はそんなことをも話した。

「そんなことをもいつてゐましたか。おのれ畜生め、私を甘く騙して置いたから岡山に來る氣使ひはないつて。……見ておれ。私は明日岡山に行く。」

その亭主が何故仕舞になつて、私に秘密を告げたかといふに、彼は昨夜私が『千圓もくれゝば證文を書く。』といつたときから、心が變つて來たのであつた。最初向の連中は、腹心を明かして、私との仲に立つて和解するやうに彼に依賴した。眞島の手から金を百圓出して、八拾圓は姉の夫が預つてゐて、彼はあとの貳拾圓を周旋料として貰つた。そして私に今後一切文句をいはせぬといふ證文を書かしたならば八拾圓の金を姉の夫の手から受取つて私に渡さうといふことになつてゐたのである。

それはずつと後になつて私に分つた。とにかく彼等はその男を味方に使つて、私を騙しておいて話をつけやうとしたのであつた。それ故彼等の秘密は凡て彼には明しておいた。然るに彼は中途で私の方に寢返へりを打つた。

『こいつは一つ、淺海の方にぐるになつて、眞島を請强つた方が甘い仕事がある。』

と、思つた。それで彼は一切の秘密を私に明してしまつた。

『好いかね。私から聽いたと言つてはいけないよ。岡山では一戶を構へてゐると市稅がかゝるから、市役所に行けば直ぐ分るんださうだ。日光で調べられたやうに岡山に來て市役所を調べられるとすぐ分る。と、いつてゐたから、君が行つたら眞先に市役所に行くんだ。』

私達は、それから岡山に行つて眞島を請强る相談をした。私が先發して彼地の都合で彼は後からつゞいて來ることになつた。

しかし私は眞島を請强るなどの考は少しもなかつた。彼が千圓といふ夢を夢み、さういふ惡計を企んで私に寢返へりを打つて眞島等の秘密を明かしたのだから、私もその同類になつた風を裝はねば彼の口から凡ての秘密を探ることが出來なかつた。

『大丈夫甘くやるから。とにかく彼地についたら手紙を出します。』

私はその夜一旦自分の宿に戻つて俄に旅支度をとゝのへ、また出直してそこの家に來て泊り、翌朝俥に乗りながら景氣よくそんな言葉を殘して新橋に向つた。

岡山についたのはその翌日の午前二時ごろであつた。停車場に近い旅館に泊つて、寢床をとらすと直ぐ横になつて、努めて疲れた心を落着けて熟睡を得やうとした。一と寢入りして目を覺すと、とくに明い朝になつてゐて頭が晴々したやうに元氣づいてゐる。

私は子供の時に讀んだ仇討ちに、今日こそは多年苦心の効ありて宿願成就して父の仇を報ずることが出來るといふ、その朝の心持ちのやうな感じが頻に湧いて起るので、「おさゐ權三」の夫市之助のことなどを思ひ出して女敵うちに出てゆくやうな心をそゝられながら旅館の俥を飛ばして市役所にいつた。

果して市役所の課税掛りの處にいつて帳簿を調べてもらふと、すぐ分つた。

『深江すまといふ御婦人ですな。あります。……去年の九月ごろから一戸を構へておいでゝす。もう三度めです、此度の家で。私も調査で行て一度會ふたことがあります。三十前後のお人でせう。』と、いつて老人の市吏は帳簿から目を放して眼鏡ごしに私の方を見た。

『えゝ、さうです、さうです。そのくらゐの年配です。』私は町名番地を聞き取つて、雀躍する心地で、禮を述べながら其處から出た。そしてまた待たしてゐた俥に飛び乘つて件の町名番地へ走らした。

その番地は見付かつた。私は自分の足音を盜むやうにして門の內に入つていつた。が、門の內には二階建ての長屋作りの家が二棟も立つてゐて、私はそれを一つづゝ見てあるいたが、深江すまと誌した

名札はなかつた。はて、僞名をしてゐるのかな。それとも何處かで聞いて見やうかと、思案をしたが、それがためにもし洩れ聞いて、風を食らつて遁げては一大事と思ひながら、そこにあつた一軒の家に入つて借家の持主を訊ねた。家主はそこから遠くない大川端に沿ふた材木問屋であつた。私はまた俥に飛び乘つてその材木屋に急いだ。

材木屋の店頭には聾の婆さんがゐた。何町何番地のあなたのところの借家に深江すまといふ婦人がゐるのを聞くのですが。と、いふことが、どうしてもその婆さんに聞き取れなかつた。私は氣ばかり急いて顏を顰めて焦つた。すると奥から十六七の奇麗な娘が出て來て。

「お婆さん、深江すまさんといふのは、あの隱居所にゐる人のことでせう。」娘は婆さんの耳に口をすり寄せていつた。

私は「はゝ、おや一寸小意氣な家だな。」と思つた。

お婆さんは、娘のいつたことにうなづいた。娘は私の方に向つて、

「あそこの門をお入りになつて、すぐ左側にあります。」

「そんな家がありましたかなあ。」と、いひつゝ私は娘に委しく敎へられて、その材木屋を出ると、また俥でそこへ戻つて來た。ちやうど寢鳥を抑へるやうな心持ちで私は再び以前の門を入つて行つた。なるほど氣をつけて見るとすぐ左側に開戸がある。それを明けると、細い露路のやうな中庭になつてゐて、つき當つて右に折れてゐる。そこまで入つて行くと、また一枚の開戸があつて、そこに深江壽滿としるした新しい木札を打ッつけてある。私はそれを見ると、獨りで心に肯づきながら、また外に出てその家だけを取廻はした板塀について別に出口はないかと見てまはつた。そして再び入つていつて開戸を押明

けると、細い中庭のつき當りの板の間のやうな處に唐棧の袷衣を着た彼女は手拭を姐さん冠りにして、横楊枝をつかひながら團扇をばた〳〵いはせて七輪に火を熾してゐた。

ごとりと開戸を押明けてそこへ不意と私が姿を現はしたので、彼女は一目こちらを見ると同時にさつと顏から血の色を退いて、

「あッ！」と、いひさま呆然となつてゐた。

私は、つか〳〵と二三歩前に進んだが、そのまゝそこに突立つて、やゝしばらく凝乎と彼女を見た。

「おい、神田の齋藤の妾宅が二百里も離れた處にあるのはさぞ不便だらう。」

私は睨みながら笑つていつた。

「えゝ。」と、女は仕方なさゝうに笑ひながら、「さあまあお上んなさい。」と、いつて座敷の方に入つた。

「あなたよく分つてねえ。坂田がさういつたんでせう。彼奴は惡黨なんです。あいつが言ふだらうと思つた。さあ此方にゐらつしやい。」さういひつゝ座をすゝめた。

「坂田が惡黨なんぢやない。その惡黨を使つた方がまだ惡黨だ。惡いことをすりや、どうせいつかは分らずにやゐない。」

そこへ眞島がもう朝からやつて來た。眞島の家はすぐ隣町にあつた。

しかし彼等はそこまで突き留められてもなほ白ばくれて實をいはなかつた。私は往生際の惡い奴等だと思つたが、それ以上事實を糺す必要を認めなかつた。

それから三四日押問答をしたあと、さも私に追ひまくられでもしたやうに、愚痴を溢し〳〵ばた〳〵にまたそこを疊んで簞笥やお釜のやうなものまで荷物に仕舞ひこんで東京に舞ひ戻つた。

それが四十四年の五月であつたから、去年の二月に夜途中で行き會ふまで中まる二年を置いて足掛け四年見なかつた。その間にまた岡山に戻つてゐたことは私も聞いてゐた。田舎からいつ歸つて、そしていつ淺草の方に身を寄せたか知らぬ。

私は今歳の春の初から五ケ月ばかり京阪にいつてゐた。そして東京に歸つて來て二日めか三日めに、今日途中で二度も彼女を見た。一度は若い男と話しながら歩いてゐた。しかしそれは何でもない、たゞ知つた男であつたらしい。

『おい、この頃はどうしてゐる?』と、後ろから私が聲をかけると、

『えゝ、今、一寸榎町までいつて來た。』と、見向きもしないで言ひながら、その連れの男と何か話しながら、颯々と向へ行つた。私は、輕跳なその物のいひつぷりに反感を起した。

『どうしてあんな女に前後十年も心を苦めたらう。どうして自分の大事な生命をそのために凋らしたらう。』と、さへ思つた。

そしてその日の午後また外を歩いてゐたら、また行き會つた。此度は私にも連れがあつた。彼女は默つて私をジロ〳〵見ていつた。私も此度は默つてゐた。

その後ある夜、電車に乘ると、すぐ傍に彼女の姉が腰を掛けてゐた。

『えゝ、淺草も內儀さんがないと思つたら、あつたとかいつて直き戻つて來ましたよ。あれも仕方がありませんよ。』さういつてゐた。

そのうち乘換へ場が來たので私は降りた。(おはり)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

史壇の權威
福本日南先生著

忽再版

栗山大膳

▽▽▽▽▽▽▽▽▽

福本日南先生豊麗遒勁の筆を提げ塵端も且之を苟くせざる典據に據り德川時代に於ける一大御家騷動を描き其の中心人物たる栗山大膳の心事を解剖せるもの本書にして武士道の精髓を捕へて活如たり。大膳の忠烈は克く鬼神を泣かしめて其の善謀善斷死に勝るの忍從を以て初志を貫徹せんとする大志は又克く隋夫をして起たしむるに足る。事實の妙！波瀾重疊起伏縱橫先生獨自の絢爛の文と共に無限の興趣を煥起し秋宵燈下俗塵を洗ひて餘りあらん。敢て江湖に薦む。

定價壹圓六拾錢

郵税十二錢

菊版總布

裝幀優美

黑田騷動の眞相

▲小說に非ず講談にも非ず然もそれ以上!!

▲有益にして趣味津々本書の如き他にあるからず!!

▲斯くの如き好評を博せし著書果して他にありや!!

▲教養ある紳士學生必讀の名著!!

▽▽▽▽▽▽▽▽▽

萬朝報評

日南の快筆例に依つて快男兒を活寫せり。

東京南紺屋町

實業之日本社出版部

振替口座三二六番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告は揭載謝絶す

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮内立誠堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢）
但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄及臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、秀逸堂、信賴社

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むへし
一郵税替爲　にて御送金の場合は指定を本郷區片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一受領證請求　は必す返信料を要す

（禁轉載）

大正四年十月廿九日印刷納本
大正四年十一月一日發行

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話局下谷九一一九
振替東京三十三番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



SANATOGEN
急げ！急げ！而してサナトーゲンを服用せよ！
貴下若し虛弱なるか或は神經衰弱せば
現代生活の過勞のため肉體の衰弱、神經の疲勞を來せるときこれを短時日に恢復せしむべき或物の發見せられんことは、萬人の熱望するところなりき、果然！ 科學の手は、サナトーゲンてふ眞に有力なる武器を發見し、この熱烈なる要望を滿足せしめ得るに至れり。サナトーゲンは精密なる科學的研究の結果牛乳蛋白質より製出せる最も純粹の一自然的フードに外ならず、然かも如何なる強壯劑も企及し得ざる卓出せる効驗を有し、衰弱せる神經系はこれにより生命と活力とを振起し、羸弱せる肉體はこれにより新血液と新筋肉とを增殖する、眞に不可思議なる作用あり。而して今日に至るまで世界萬國を通じ無慮一萬八千餘名の醫家は專門雜誌上に或は直接製造者に賞讚的報告を寄せて其效驗の偉大なることを感謝せり。
サナトーゲンは、虛弱者神經衰弱者に對し、靈妙なる效驗を有するに止まらず、腦を過勞せる時、腦力を增進したき時これを用ゐなば活動能率を最強最善ならしむるを得べし、何れの時何れの場合にも每日三回規則正しくサナトーゲンを用ゐ給はば數日乃至數週間にして健康狀態は驚くべく一變すべし、食慾は進み筋力は加はり、神經は旺盛なる活動を促し、生活上凡ての快樂は恢復すべし。
到る處高等の藥店にて販賣せり
サナトーゲン會社日本總代理店
タムソン商會
神戶市海岸通一ノ三

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.95; Single copy 35 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.